

連載専門誌

対人援助学マガジン

何を話すかは
あなたが
決められる」



「人生に何が起こるかは
決められないけれど」



vol. 16 No. 2

第62号

September 2025

対人援助学会

No.62 *M O K U J I*

目次		2 - 3
ハチドリの器	見野 大介	4
執筆者@短信	執筆者全員	5 - 15
付け加えることができる価値は何か？ (8)	千葉 晃央	16 - 20
臨床社会学の方法 (49)	中村 正	21 - 31
カウンセリングのお作法 (44)	中島 弘美	32 - 34
晩年DAN通信+木陰の物語を詳説する	団 士郎	35 - 58
幼稚園の現場から (62)	鶴谷 主一	59 - 66
福祉系対人援助職養成の現場から (62)	西川 友理	67 - 72
ああ、相談業務 (22)	河岸 由里子	73 - 75
帰ってきた心理学の縦横無尽 (3)	サトウタツヤ	76 - 86
きもちは言葉をさがしている (57)	水野 スウ	87 - 90
生殖医療と家族援助	荒木 晃子	91 - 93
路上生活者の個人史 (16)	竹中 尚文	94 - 95
スポーツおじいさんになりたい！ (6)	國友 万裕	96 - 103
発表！役場の対人援助論的、要注意ワードランキング(1)	岡崎 正明	104 - 107
臨床のきれはし (30)	浅田 英輔	108 - 109
発達検査と対人援助学 (21)	大谷 多加志	110 - 113
講演会&ライブな日々 (44)	古川 秀明	114 - 118
療育手帳の向こう側 (4)	坂口 伊都	119 - 123
周辺からの記憶 - 東日本大震災家族応援プロジェクト - (48)	村本 邦子	124 - 135
精神科医の思うこと (38)	松村 奈奈子	136 - 138
馬渡の眼 (18)	馬渡 徳子	139 - 141
蜘蛛の糸(5)	柳 たかを	142 - 150
心理コーディネーターになるために (19)	山下 桂永子	151 - 153
そうだ、猫に聞いてみよう (36)	小池 英梨子	154 - 158
先人の知恵から (49)	河岸 由里子	159 - 164
うたとかたりの対人援助学 (33)	鵜野 祐介	165 - 168
ああ結婚 (35)	黒田 長宏	169 - 172
PBLの風と土 (34)	山口 洋典	173 - 178
接骨院に心理学を入れてみた (33)	寺田 弘志	179 - 194
現代社会を『関係性』という観点から考える (34)	三浦 恵子	195 - 200
保育と社会福祉を漫画で学ぶ (29)	迫 共	201 - 203

「余地」―相談業務を楽しむ方法― (31)	杉江 太朗	204 - 207
統合失調症を患う母とともに生きる子ども (12)	松岡 園子	208 - 211
原田牧場Note (20)	原田 希	212 - 214
私の頭の中のまだエンピツ (4)	川畑 隆	215 - 219
応援、母ちゃん (22)	玉村 文	220 - 225
HITOKOMART (21)	篠原ユキオ	226 - 229
川下の風景 (18)	米津 達也	230 - 231
こころ日記『ぼちぼち』	脇野 千恵	232 - 233
スクールソーシャルワーカーの仕事 (3)	高名 祐美	234 - 236
一語一絵 (19)	畑中 美穂	237 - 239
対人援助をリブートするこの一冊 (32)	高山 かおり	240 - 242
新・島根の中山間地からWork as Life (5)	野中 浩一	243 - 251
ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！ (13)	高木 久美子	252 - 257
理事長のひとりごと (2)	鳴海 明敏	258 - 259
現象学としての書道(12)	櫻井 育子	260 - 262
コソダテノシンリ (10)	中谷 陽輔	263 - 275
教室の窓から	來須 真紀	276 - 277
社会科の授業を対人援助学の視点から (10)	内田 一樹	278 - 284
ある看護科教員のアタマの中 (9)	山岸 若菜	285 - 287
人生は対応のバリエーション (10)	宮井 研治	288 - 293
けふばあちゃんからの手紙	乾 京子	294 - 296
心理臨床における多重関係を考える(4)	本林 友梨	297 - 300
森で出会えば (3)	田中 千晶	301 - 302
地球と宇宙の文化心理学 (2)	土元 哲平	303 - 304
編集後記	編集長&編集員	305 - 306
対人援助学会第17回大会のご案内	大会事務局	307



ハチドリの器 45

見野 大介

Mino Daisuke



右上：個展 in 草々（奈良）

右下：蒼天釉7寸鉢

左下：蒼天釉菓子皿、鳥ノ子釉珈琲碗

左上：蒼天釉菓子皿



田中 千晶

7月18日からの3日間、京都国際福祉センターにて家族療法講座を受講しました。興味をもったきっかけは大学院での集中講義。子どもを対象とした対人援助職を経験してから心理専門職を目指すにあたり、クライアント個人ではなくクライアントを取り巻く家族全体を包括して支援していく必要性、重要性を感じたことです。

講座では様々な年代、職種の方と合同チームで活動しました。初日はなかなか距離が縮まらずにメンバー全員がソワソワ、ドキドキしていましたが、対話やディスカッションを中心とした講義内容、グループワークやお昼休憩を通して仕事の話、暑さの話、それぞれの出身地の話などを話す中で、3日目にはボケてつっこんで、ワイワイ話すことができる仲になっていました。

大学院生活も2年目を迎え、同じ環境、同じ人間関係、同じことを学ぶ同期付き合いが続いていた中、さまざまなバックグラウンドをもつ人々と仲良くなったことが講座の内容と同じくらい収穫でした。「次の研修もこのメンバーで受けよう！」と仲良くなった勢いで3日目の帰り道にSTEP2に申し込んだことも良い思い出です。

森で出会えば・・・
P301～

本林 友梨

毎日が一瞬で過ぎていく毎日を送っています。6月頃に体調を崩し、仕事も一定期間お休みを頂くことになってしまい、身体もしんどかったですし、周囲に迷惑をおかけすることになって申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。今は1日、1週間、1か月と経つのが本当に早く感じられるくらい充実した毎日ですが、いつも「ああ、今日もあれできなかったな・・・」と悔やまれる日々でもあります。でも、こうやって過ごして行けることは当たり前ではないことだと思いますので、悔やんでばかりいないで日々感謝して過ごして行かなくてはいいかなと思います。

心理臨床における多重関係を考える
P297～

土元 哲平

予告していた通り、今回はページ数が圧倒的に少なくなりました(笑)詩を発想し、ことばを選び、考えるプロセスからは学んだことも多かったですし、意外と長い時間がかかりました。色々伝えたい「作者の思い」はありますが、意味づけは読者の皆様にゆだねたいと思います。そして、ついに、『オートエスノグラフィー・マッピング』(土元・桂・サトウ編、新曜社)が刊行されました!! オートエスノグラフィーと出会ったのが修士課程のころ、2015年です。10年間このアプローチと付き合いようやく出したいものが出せた、と思うと感慨深いです。



地球と宇宙の文化心理学
P303～

高名 祐美

「暑いですね～」が挨拶代わりの今日この

ごろ。梅雨らしい時期もなく、6月から暑い日が続く。暑さに弱い私は、毎日半端ない汗をかき、一日の終りにはだっくりくる。毎日「熱中症警戒アラート」が出され、外に出ることが苦痛になる。そんな暑さの中、私の住む七尾市では地震で破損した道路の修復工事や家屋の解体が進んでいる。

能登半島地震から1年半。あちこちに空き地が目立ち、「ここは何があったところだろう」と思う場所が増えてきている。我が家も先日車庫を解体した。もう少ししたら、土蔵も近々公費解体する予定だ。隣の家も納屋を解体している。暑い中で作業。屋外で仕事をする人々に頭が下がる。自分には絶対にできない仕事だと心から思う。

スクールソーシャルワーカーの仕事
P234～

水野 スウ

暑い夏でした。って、まだ過去形じゃないけども。それでも一年前の夏よりはすこやかに過ごせてる気がします。我が家は涼しい、という思い込みがあって水分をしっかりとらなかつた去年、家で熱中症になってしまった。夏をなめたらいかん、の猛反省から、うんと慎重に過ごした今年の夏です。

暑いと陽も元気になるので、今年は野菜をたくさん取れる、具沢山のデトックススープをしょっちゅう作りました。キャベツ多めにし、トマト、にんじん、セロリ、たまねぎ、あればピーマン、いずれも細かく切って、塩を鍋の底にパラパラ振ってから野菜を敷き詰め、その上に塩をパラパラふって、蓋して弱火でコトコト。水分が上がってきたら水を足し、さらにコトコト。味付けはコンソメの素か醤油で。一度作っておくと4、5回食べれます。味が薄くなったらトマトを追加してまたコトコト。おかげで腸の調子もいい感じ。食べたらしっかり出さないことには元気が出ないものね。

今年は参院選挙も暑かった、熱かった。一気に議席数を増やした党のことが気になって、私なりに思ったことを今号マガジンに書きました。締めめのキーワードは、ぼろぼろの民主主義を繕う、です。ちくちくちく、と。

きもちは言葉をさがしている
P87～

馬渡 徳子

8月、石川県全域に停滞型の線状降水帯が発生し、奥能登地域の一部にも三度目の甚大な被害をもたらした。

夏休みに N-ASCAT(能登半島地震子どもの放課後支援チーム)で継続的にお付き合いを重ねてきた認定こども園併設の学童保育所からは、幹線道路から生活圏につながる道路が複数箇所寸断のため復旧見込みが立たず、訪問日延期の申し入れをいただき、鉄道が復旧する月末にリベンジとなった。

この夏休みを機に、ようやく入居可能となった仮設住宅に移り、新学期を迎える準備をしていた子育て世帯は故郷に帰れることをとても喜んでいただけ、胸が痛い。自然には抗えないが、お見舞いの言葉に詰まってしまった。

さて、8月末に輪島高校の文化祭にて団士郎さんの漫画展を。9月には珠洲市総合病院とわくわく広場にて漫画展とトークショーを行う。この一年半のいしかわ家族面接を学ぶ会でつながった被災地の支援者仲間との共催企画だ。

今回の短信にて、ご報告させていただきたいと思う。



馬渡の眼
P139～

乾 京子

毎日の猛暑に、もう、よれよれ。一日、庭の植物にお水をあげるのを忘れると、くた～とみじめな姿に自分を重ねる。つつい、出かけるのも億劫になって、寝っ転がって本を読む。取りためたビデオを見る。何ともだらしな夏を過ごしている。今年の夏は、戦後80年。

昭和16年、私の父は、金沢で高校生活を送っていたところ、太平洋戦争勃発の為、繰り上げ卒業、航空技術部隊へと配属されて、飛行機の設計の仕事をしていた。昭和20年8月、「後一日、終戦が遅れていたら、南方に行っていて、お父ちゃんはこの世にいなかっただろうな」と、大尉の軍服を着て、祖父がかろうじてそろえた振り袖を着た母との結婚写真を眺めながら話してくれたことがあった。「戦後80年特集番組」は、とても見ごたえのある番組が多かった。一人ひとりにとっての戦争と、その後の80年と、今、現在進行形の戦争とその戦火の元にある子どもたち、(現在、この時が戦前だったんだなあ)とならないようにしなければならない...いろんなことを考えている。そんな2025年の夏。

じゃりんこ文庫
P294～

中谷 陽輔

今回でようやく連載10回目です。休載した号(第59&60号)もありましたが、なんとか二桁に到達しました。前回の著者短信で述べたように、父の介護・逝去というやんごとなき事情があったとはいえ、休載がなければ第60号でちょうど10回目とわかりやすかったりしたのに、と思う野暮ったい自分は、そつと神棚にしまっておきます。ところで、万博があと1か月ほどで終了しますね。実は父が定年まで勤めあげた企業のパビリオンが開催されており、抽選も運よく当たったので家族で万博に馳せ参じていました。父も55年前の万博に行ったと聞いていたので、二世代での万博参加となりました。

偶然にも、前回の対人援助マガジン(61号)が発刊された、2025年6月15日に行ってきました。さらに縁深いことに、いわゆ

る「父の日」でもあり、父の満中陰(四十九日)の法要を終えた翌日でもありました。...抽選に当たったのも、仏に成った父があので、ちょいとばかし細工をしてくれたんだと、割と本気で思っています。というのも、いくらその日に万博に行く予定をして、抽選を狙った自分はいたにせよ、「父が成仏した翌日の6/15父の日に、父にとっても縁深い万博に、父が勤め上げた会社のパビリオンに当選し、父として参加する」って、なんだかできすぎていませんか。そりゃあもう、万博会場中のあちこちにいるミャクミャクを眺めながら、脈々とした繋がりを感じざるを得ない...ってなものです。万博開催中に、もう1回は家族で、亡き父との繋がりを感じにしようと思います。合掌。

コソダテノシンリ
P263～

山岸 若菜

前回の短信で夫が仕事を辞めたことを書きました。

3ヶ月経ち、失業保険を受け取れるようになり、ますます家事力に磨きがかかっています。

それでも健康保険、年金、市税に府税と、容赦なく送られてくる送付書にビビり、ようやく自分の店を出すという目的に向けて動き出しました。

新しいことを始めるのは不安もあるけど楽しいですね。

横で口を出してるだけなのでそんな悠長なことを言っていられるだけかもしれません...

とにかく頑張ってくださいと思います。

ある訪問看護師のあたまの中
P285～

内田 一樹

今年は戦後80年となる年です。様々な場所で戦後80年に関係する企画展や催

しがされています。本来、平和は戦後 80 年だろうが、79 年目だろうが、81 年目だろうが大切です。しかし節目というものがあるのもつ力もやはりあるのかもしれないと思います。「節目」が後押しをして、語り始められる人がある、「節目」が後押しをして、聴き始められる人がある…。震災も同じです。10 年という節目が持つ力は確かにあったけれど、しかし 11 年目も 12 年目も大事だと思ふからこそ授業を始めました。災害と戦争、そして平和は全てつながっています。高校生が震災学習や宮城県石巻市・福島県浜通りスタディツアーを通して得る学び（講座名「東北と復興」）が、どのように対人援助学への発展の可能性を持つのかをようやく言語化することができるようになってきたと思っています。これから数回に分けて書いていきます。大学での教育や対人援助職者の皆様からのご意見をいただけると嬉しいです。

社会科の授業を対人援助学の 視点から P278～

宮井 研治

一応、わたくし現役の大学の先生です。大学教授に一番似つかわしくないと自負しながら、授業ではそんなマイナスな自負はせず、教鞭などを取っておりますと、たまに学生さんから質問を受けたりします。大箱の授業後、一人の女子学生がつつーと、私のところまで来るではありませんか。“あれ、授業でおかしなこと言っちゃったかな？”、このあたりが教授としての自信のなさの表れでしょうか、あるいは謙虚さか！その女子学生は質問のためでした。女子学生がなぜその質問を発したのかは、ホントのところよくわからなかったのですが、質問の内容はこうでした。「先生、児童相談所って、子どもを勝手に連れて行って、トラブルになってるってネットなんかで出てますが、（自分にとっても今後）こわいなーって思うんですが、どうなんでしょう？」こんなんでした。私がショックだったのは、子どもを勝手にさらっていく事実があるということをその女学生は、前提としてしゃべっていたということです。私が授業で児童相談所について説明していたわけですから、「話聞いとったんか〜い！」と

ツッコミを入れたくなところですが、SNS の力は恐るべしという気持ちも起こりました。意に添わぬ一時保護をされた親御さんからの発信だけを聞いていたらそういうストーリーもできるかなと思った次第です。質問してくれてありがとうございます。

加えて、児童相談所が月 9 の舞台に取り上げられるというのも、時代なのか、他にないのか？いずれにしても児相OBとしてはうまい方に作用してくれたらと願っています。



人生は対応のヴァリエーション P288～

櫻井 育子

夏になるとなんとなく寂しさ、侘しさ、命について考える機会が増えるのはとても当たり前で、広島、長崎、終戦の日があり、お盆があり、短い命の蝉がひたすら鳴き続ける日本という国にいて、これっぽっちも心が動かないなんていうことがあろうか、と思う。繊細で傷つきやすい子どもだったわたしは、大人になってもそれはそのまま、学生のとくに信頼していた大人に、「夏は悲しい気持ちになることが多い」というような話をしたら、正確にはなんて言われたか覚えていないが、その回答でさらに傷ついたことが思い出される。平べったい言葉で言えば、「感傷に浸るな」的な発言だったと思う。小さなことだけれど、わたしはそれ以来、その人には感情を話さなくなりました。

大人になりかける時期に、わたしは大人に対して理想と幻滅を感じ、ひどい言葉で言えば「生きるために」大人を見下して生きてきたことすらある、と思う。そんなわたしが感情を解放していいと思えるようになり、複雑に見える家族について肯定し、堂々と今に至るようになったのは、やはりこうしてたくさんの「大人」に出会えたからでもある。あらためて、ここでの出会いに

感謝の気持ちでいっぱいになった夏だった。

生涯発達支援塾 TANE 代表

shukou0122@gmail.com
<https://ikuko-sakurai.com>

わたしはここにいる P260～

鳴海 明敏

備忘録～理事長の独り言～

県庁職員を定年退職した翌月、2010 年平成 22 年 4 月に新規開設された児童心理治療施設青森おおぞら学園の園長を引き受けて、15 年間勤めました。

2024 年令和 6 年秋に脳梗塞になりましたが、2 週間の入院・リハビリの後無事に職場復帰することが出来ました。主治医は、本当に幸運な人だと驚いていました。この幸運は、「まだまだ園長を続ける！」ということかと思いましたが、しばらく時間が経過したら、元気なうちに園長職を次に引き継ぐために与えられた幸運だ、と思うようになり、2025 年令和 7 年 3 月で園長職を退き、後任にバトンを託しました。現在は、法人の理事長として、週に 3 日学園に顔を出すという生活をしています。

そんな生活をしながら、思い出したことや気が付いたこと、整理しておきたいことなどのあれやこれやについて、思いつくままに書き残していこうかと思います。学園のこどもたちと触れ合う機会もあるので、こどもたちのことを紹介することもあるかと思いますが、こどもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

理事長として、週三日 5 時間ずつ出勤する生活も 5 か月目になりました。「三日出かけて四日在宅」というペースに少しずつ慣れてきたかなあというところですよ。大変なのは四日連続の在宅の方で、奥さんの生活ペースとの折り合いをつけることに苦戦しています。炊事や洗濯などの家事にも参加したいのですが、なかなか奥さんのお許しが出ません。今のところなんとか役割を果たしているのは、メモを持ちながらの買い出しです。

新しい生活に慣れてくるにつれて、それまでの週 40 時間フルタイムの勤務はやっぱり高齢の身にはハードだったんだなあ

ということが、少しずつ理解できるようになってきました。今の生活で嬉しいのは、関心のある事柄への関りが、「仕事」で中断させられることがないということです。今関心のあるのは、日本に「カウンセリング」を紹介した友田不二男氏です。参加したワークショップや講演などの資料を、楽しみながら掘っくり返しています。

理事長の独り言
P258～

高木 久美子

飼い猫のアレサが死にました。

アレサは 2011 年に地域猫の TNR 活動をしている人から譲り受けました。ピンクがかったグレイの柔らかい毛色の大層な美人さんでした。そしてすごく頭が良くしてしっかり者でした。我が家の洗濯機は乾燥機は付いておらず、すすぎ・脱水までで完了。止まったことに気が付かないでいると、ニャーと鳴いて洗濯機のところまで私をいざない教えてくれたことがありました。

またアレサに続いて数か月後に緊急保護した茶トラのペコが、すりガラスの重い扉が開いていた部屋に知らぬ間に入ってしまった、中にいることに気が付かず私が戸を閉めて閉じ込めてしまった時も、アレサが教えに来てくれて、ついて行ってみると、すりガラスの向こうで出られずウロウロしているペコの影を発見ということもありました。具体的なお助けのエピソードだけでなく、なんとなくいつも見てくれているような、そして相槌上手。こちらの話しかけが途切れるタイミングで、にや、にやと絶妙の合いの手。猫ですが、私はアレサをかなり頼りにしていました。

うちに譲渡してくれた猫のボランティアさんが公園で最初にアレサを見かけた時は子猫を連れていたそうで、保護された時は2、3歳にはなっていたのではと。その後2度ほどトライアルがあったものの先住猫との折り合いが悪く戻されたりして、保護主さんのところに数年。そしてうちに来てくれるから14年だったので、しっかりおばあさん猫になっていて大往生だったと思います。最期の半月ぐらいはほとんど動けなくて、夜は私と枕を半分こして眠りました。最後まで美人さんでした。死んで数日はトンと小さな物音がしたり、

気配を感じたりしました。今はしません。ありがとうアレちゃん。とても大切な存在。

ヨミトリとヨミトリ君で
一緒にしましょ！
P252～

畑中 美穂

プールで泳ぐのが好きだ。子どもの頃は水泳の授業が嫌いで、苦痛でたまらなかった。唯一楽しかったのは、授業の最後に全員がプールの端に寄って輪になり、同じ方向に回って大きな渦を作る、通称「洗濯機」という遊びだった。泳ぐことが楽しいと思うようになったのは大人になってからのこと。最近もふらっと出かけては、“何泳ぎ”というのか名は付け難い泳ぎ方で水のなかを漂っている。”水のなかの生き物になる練習”、みたいな感じ。

先日もしのようにして、夕方、陽の光が水底にゆらゆらと模様を描いているのを見た時にふと、子どものころにした碁石拾いを思い出した。碁石といってもきれいな半透明の色ガラスのようなものだったと思う。潜って手で取るのだが、足の指でつまんで拾ってもよかった。長い時を経て、記憶のなかからの思いがけない“贈りもの”。ちゃんと、みつけられた。「よかったなあ、みほちゃん。泳ぐのが好きになって」



一語一絵
P273～

山下 桂永子

先日車を買って替えました。先代車とはこの19年半、たぶん家族よりも一緒に時間を過ごしました。最後の1か月ほどの間にエアコンは壊れるわエンジンは壊れるわで、もうわが身の最期を悟ったかのような走りに怯えつつも愛おしく、たくさん写真を撮って涙のお別れをしました。総走行距離33万6千キロでした。ありがとうミドジーノ（緑のミラジーノなのでそう呼んでいまし

た）。

というわけで、新しい子（車）をお迎えしたのですが、鍵はささなくていいし、サイドブレーキはおろかフットブレーキすらないんです。新しい機能が多すぎて空でも飛ぶんか？って思っています。内容とは関係ないのですが、読んで頂ければ幸いです。

心理コーディネーターに
なるために
P151～

渡辺 修宏

「今回は、友人である高山かおり先生にご執筆頂いた。文面にある通り、彼女は2児の母なわけだが、

彼女の初めて出会った頃（当時、彼女は大学生）のイメージがまだまだ鮮明であるため、どうもビント来ない。

とはいいつつも、よくよく考えたら私もいつの間にか中年・壮年であり、髪形にいたっては立派な翁なわけだから時の流れを認めざるを得ない。まさに長い友…。

対人援助実践をリブートする
この一冊
P240～

米津 達也

二人の子どもが実家を卒業し、残されたのは夫婦二人と犬と亀がそれぞれ一匹。十年を経過した家電製品が次々と調子を崩している。これまで家族の生活を十数年、よく支えてくれた。しかし、子どもの引っ越し準備等で随分お金も掛かった。当面は機械を休ませ、食洗器の代わりにゴシゴシ食器を手洗する日々です。

川下の風景
P230～

玉村 文

今年の夏は、夫の実家・北海道へ一週間ほど帰省してきました。子ども3人を連れて飛行機に乗るだけで、すでにひと仕事終えた気分です。

「今年の北海道は暑いらしい」とニュースで見て、出発前から少々げんなり…。ところが行ってみると、京都より10度近く低い日もあり、外で遊べるくらいの“ちょうどいい暑さ”。…とはいえ、エアコンはしっかり稼働させていました。

そんな中、早朝に外へ出た息子が一言。「あ、冬だ」確かに夜や朝は寒いくらいの気候で、子どもならではの素直な感想に笑ってしまいました。

公園遊びに虫取り、野菜の収穫——夏休みらしいことを思い切り楽しめた子どもたちは大満足。

一方で、未就学児3人を連れての大移動はなかなか大変で、「次は母子旅も…」なんて密かな野望も芽生えました。

ただ、京都に戻ってきた途端、気温差にやられたのか子どもたちが次々に体調不良に…。

おかげで我が家の夏休みは、思わぬ延長戦に突入することになりました。



応援 母ちゃん！
P220～

川畑 隆

孫を連れて家族4人で長崎に行きました。稲佐山のホテルと近くのレストランから長崎港の夜景を眺め、翌日はレンタカーで平戸まで。佐世保のハウステンボスには午後3時から入場して夜のショーと花火まで満喫。次の日は定番の大浦天主堂とグラバーガーデン、そして出島と新地中華街。夕方にはホテル近くの屋内プールと大浴場へ。最終日は諫早のじゃぶじゃぶ池に足を浸けながら木陰で4日間の仕上げの休息。

ホテルの3回の朝食ブッフェでお腹は

満ち満ちて、ほとんど昼食抜きの毎日。平戸が遠すぎたこともあって九十九島を間近から眺める時間がなく、それが少し心残り。小4の孫娘は12歳のキリシタンが処刑された事実を大浦天主堂で知り、それが強く胸に響いたみたいでした。

京都より温度は少し低めなものの、やはり暑さは半端じゃなかったけど、行きたいところがいっぱい。観光都市、長崎。オランダやポルトガルとの歴史を強く思い浮かべた4日間でした。

私の頭の中のまだエンピツ
P215～

杉江 太郎

家庭福祉領域で働く杉江と言います。今年度、私の属する組織では、全国規模の大きなイベントを催すことが決まっています。私の職場に面する道路でも工事が続いており、今までは1車線ずつの普通の道だったのが、どうやら2車線ずつの計4車線の道になるようです。私の職場に面する道を進むと、少し前に新しく出来たピカピカの体育館があります。その体育館に来館する人たちへの見栄でしょうか、それとも皇族でも通るのでしょうか、歩道まで整備されてピカピカになっています。そもそも2車線ずつ作ったとしても、イベントが終わればそれだけの交通量は到底ないでしょう。そんな、見栄と無駄を前面に押し出した工事が各地で行われており、組織の力の入れようを感じています。同じ組織が管理する我が社ですが、夏場には、クーラーからは水漏れがし、1年を通してトイレは詰まる始末。そういえば門も壊れて開閉できなくなっています。相談援助を行う場として、悲しい限りですね。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-
P204～

浅田 英輔

メガネを新調した。だいぶ見えにくい気がするな—と思って眼鏡屋さんに行ったのだが、「よくこれで免許更新通りましたね！」と驚かれた。だいぶ視力が下がっていたらしい。ついでに、遠近両用にすることにした。ついに。でも、メガネかけてる人はわ

かと思うのだけど、見えにくいときって顎を出すような姿勢で、レンズを傾けると少し見えるようになることがあるよね？それができなくなったのがどうも慣れない。一緒に作った度付きサングラスは、ピンクのやつにした。かわいいのだ。

臨床のきれはし
P108～

三浦 恵子

「高齢者」について、統一的な定義は実はありません。世界保健機関の定義では、65歳以上の人のことを高齢者としていますが、法令や行政により年齢を定められています。そのため、労働法令や社会保険関係については留意が必要であり、私も注意を払って対応してきました。しかし私自身にとっては、高齢者の諸制度はまだまだ他人事という意識がありました。

ところが昨今、自分自身が「高齢者」の枠に入るとは思ってもみなかったという出来事がありました。

今年5月末に带状疱疹を再発しました。痛みその他が酷く、折悪しく発表を行う予定であった某学会は、遠方の会場への移動が困難であるため欠席するという為でした。

周囲からはお見舞いの言葉とともに、「带状疱疹ヘルペスワクチンの接種を受けておけばよかったのにね」とも声掛けをいただきました。実はこの直前にもワクチン接種に関するポスターを眼にしていました。ただ、当時のポスターの文言やイラストが「高齢者の方向け」であったため、「私はまだその対象ではない」と思い込んでしまっていました。

実はワクチン接種に関しては「50歳以上」の方に接種が勧められていたのです。

「50歳で高齢者？いやいやサザエさんの時代か！」(子どもも孫もいる波平さんはマスオさんと同じ会社に勤務しており、50代という設定と思われます)と憤ったり、自分が高齢者のくりにハマっていることに愕然としたりで、今回の带状疱疹ヘルペス再発は、身体の痛み以上に魂の痛みとなったのです。

皆さん御自愛くださいませ。

更生保護官署職員
(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という
観点から考える
P195～

迫 共

7 月に国際学会でタイに行ってきました。医療系の学会で、AYA 世代の難病患者を対象とした妊娠前カウンセリングの体制づくりについて提言しました。

仕事のかたわらでアユタヤの仏教遺跡を見たり、グルメを楽しむこともできて、コロナ後久しぶりの海外滞在となりました。

タイ人は関西ノリに近く、「まあええやん」と柔軟に多様なものを取り込み、貪欲に発展している様子。反面で、日本の経済的後退を強く感じました。

日本では暑さのせいか排外主義が盛り上がる、異様な参議院選挙が行われましたが、本当に外国人がいなくなったら、経済力の低下はさらに酷くなると思います。

戦後 80 年。今ほど多様性や寛容さが求められる時代はないかもしれません。

なお、タイの方がまだ涼しかったです。



保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P201～

黒田 長宏

YouTube番組『マーサとクッピーのチャレンジャー』の、男性のほうは私です。

Google検索でもYouTubeからの検索でも出てきます。よろしくお願いします。

あぁ結婚
P169～

松村 奈奈子

ふらっと時々、自分の専門分野ではない

けど精神科に関わる学会に参加してみ事にしています。初夏に緩和ケア関連の学会に行ってきました。なるほどー、そんな感じなのか勉強になるなーと講演を聞いていたのですが、一番印象に残ったのは、オランダでは安楽死が全死者数の約 5%を占めるという話でした。世界で1番安楽死が進んだ国では、20人に1人が安楽死で亡くなるのか!!と驚きました。オランダは2001年に法律で安楽死について定められ、安楽死の数は毎年増えていきます。そして、世界全体でも安楽死の数は増え続けています。

私は個人的にオランダの文化や考え方が好きで、何度も訪れたことがあります。安楽死の動向も時々チェックしていたのですが、ここまで増えているとは思いませんでした。

神科医の思うこと

P136～

村本 邦子

相変わらず、落ち着きなく駆け巡っている。抱えている仕事もいろいろあるので、出張先でもコツコツやっていて、年を取って記憶力が怪しくなってきたのに対し、同時並行的に仕事をする能力は格段にアップしたと自負していたが、ついにボロが出てきた。飛行機の予約をしたつもりが、支払いをしていなかったようでできていなかった。これは容量オーバーだなと反省している。還暦過ぎて、いつまで元気に動けるかと考えた時、つい動ける時に動いておこうと思ってしまうのだ。すでに年内ほぼ予定が埋まってしまっているが、来年度は用心しよう。

周辺からの記憶

—東日本大震災家族応援プロジェクト—

P124～

國友 万裕

不二出版からメンズセンターが出していたミニコミ誌『メンズネット』の復刻版が出ます。

メンズセンターはとっくに閉鎖されてしまいましたが、大阪の天満にかつて存在した小さな雑居ビルの一角、メンズリブ団体の発祥の地です。僕がここに入出入りしていたのは 35 歳から 36 歳にかけてだから、今から 25、26 年前でした。

ここは中村正さんと伊藤公雄さんも含めて男性学の草分け的な人たちが集うところでした。僕はここで、『男性雑誌とジェンダー』というプロジェクトに関わり、2 年くらいべったり出入りしたのですが、その後、大きな確執が起きて、ここから破門にされることになりました。と言っても、それはメンバーの 1 人が僕を嫌っていたからに過ぎないのですが、依頼されて書いた原稿が出なかったりで、大変なトラブルでした。

しかし、その幻の原稿がついに出るのです。と言っても、復刻本なので、一巻が何万円もします。一巻目はこの 9 月に出る予定ですが、僕が書いているのは二巻か三巻になりそうな気配なので、まだ日の目を見るのには時間がかかりそうですが、これで長年に渡るわだかまりが溶けることになるのかも知れません。

あの当時のメンズリブのメンバーは、今はもう 70 代くらい。若い人でも 60 歳近くになっています。もうみんなおじいちゃんです。

月日の経つのは早い。感慨無量です。

スポーツおじいさんになりたい！
P96～

竹中 尚文

対人援助学会の研究会にゲスト講師としてお話をさせていただく縁をいただいた。私は普通の坊さんで、見識や知識を持った方々に何を話すのか、心細かった。教わることも多いと思って、お話しさせていただいた。聞いてくださった方から、とても優しい気持ちが伝わってきた。Zoom なのに不思議な感じだった。◆話の中で、私は「路上生活者」と呼ばずに「ホームレス」と呼んでいた。このマガジンのタイトルは「路上生活者の個人史」である。この連載を始めたのは、2020 年からだった。その頃、私は「路上生活者」という言葉を使っていた。コロナ禍が始まった頃で、ずいぶん公園やバス停で眠る人がいた。今、屋根の下

で眠る人が増えた。しかし、屋根があるからといって、それぞれの問題が解決したのではない。喘ぐようにして生きている人たちが私たちお支援の前に並ぶ。人は支え合って生きている。その濃密な関係が家族である。家族を持たない人たちが生きるのは苦しい。私に特に援助ができるわけではない。何もできていないようにも思う。食べ物を渡して、挨拶をして、顔を覚えて、名前を覚えようとするだけである。たまたま、チョット生活を尋ねたり、人生を尋ねたりしている。◆食べ物は姫路にあるお寺でボランティアの人たちが作ってくれる。調理ボランティアは多くいるが、配布してくれるボランティアの人たちが少なく困っている。ほとんどが勤め人であるので、勤務が終わってから駆けつけてくれる。男性だけでなく女性ボランティアが参加してくれるのも助かっている。ホームレスの方の中には女性もいるので、話しやすい。冬に粕汁が食べたいと言われて、粕汁を作って配った。「ほんとうにおいしい」といってもらった。以来、何かご馳走を作ってくるのが定番になった。◆繰り返しになるが、配布ボランティアが不足している。たまためでいいから「手伝いに来たよ」と声をかけてくれると、嬉しい。私たちは毎月第4火曜日に支援活動をしている。今月は第4火曜日が彼岸の中日なので、支援日は9月30日(火)になる。時間は18時30分ごろより準備をはじめ、19時30分から支援活動を開始する。20時30分ごろに撤収する。終了後、時間の許す人たちが簡単な食事をしている。初めから最後まで時間でなくてもいいので、覗いてほしい。場所は大阪市北区にある扇町公園である。天気によって、公園内の場所が変わるので注意してほしい。



路上生活者の個人史
P94～

坂口 伊都

里子と離れて暮らすことになってから6年。それまで里子との交流は、どこかに出かけることで続けてきました。離れることになった日は正直、思い出したくありません。そして今まで誰も「家に行こう」と言い出さなかった私たちがいて、暗黙のルールのようになっていました。よくわからないけど、家に集うことを恐れていました。

里子も成人をして、己の暮らしを働いて成り立たせて、自信が芽生えてきたように見えてきて、我が家にある様々なモノが里子を刺激しないのかなと思い始めていました。その時、家で待ち合わせしたら上手く回る出来事があり、思い切って里子に「家に来る？晩御飯食べていく？」と誘うと「うん」と即答してくれました。「駅まで迎えに来て」と不安気にしていましたが、我が家に里子が帰ってくるとすぐに懐かしい雰囲気になりました。やっと帰ってきたねと家が言っているようです。今年のお盆は里子、息子、娘が次々と訪れて賑やかでした。猫は、「また違うの来た」と迷惑そうにしていましたけど(笑)

療育手帳の向こう側
P119～

河岸 由里子

年齢には勝てない。やはり年のせいと思えることが増えた。先ず同時処理がへたくそになって来た。記憶力が落ちた、忘れ物が増えた、漢字が出てこない、人の名前や物の名前が出てこない。身体的にはそこまで衰えていないが、脳は確実に衰えている。脳トレのつもりで中学の数学を解いてみたり、ナンプレをやってみたり、イチヨウ葉エキスが良いと聞けば飲んでみたり(騙されているとは思うが)、ピアノを弾いてみたり、オーディブルを聴いたり、あれこれ試す。先日母方のいとこ会があった。母親は三姉妹で三人ともボケて亡くなった。遺伝要素があるということだ。いとこの一人が脳神経外科医で、ボケを心配して脳ドックを定期的に受けているという。私も二年に一度くらい受けている。結果はどちらも年齢相応の委縮。年齢相応の委縮って良いのか悪いのか？？わかりづらいじゃないか！ピンピンコロリという言葉

がはやった時期があった。やはり何とかボケないで最後を迎えたい。そのためにできることはやる、一日一日を楽しむ、これっじゃない！

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

ああ、相談業務
P 73～
先人の知恵から
P 159～

大谷 多加志

4年前から我が家で暮らしている元保護猫が今年で推定9歳になりました。ネットで調べた情報では、人間に換算すると50歳過ぎにあたるとのことで、そろそろ初老の域に入りつつあります。老いもあるのか、今年になってから出てきた変化として、やたらベタベタと甘えるようになったのと、吐き戻しの頻度が増えたのと、ちょっと困るのが旅行の間留守番してもらおうとソファなどで失禁するようになったことがあります。失禁は、今年3月の台湾旅行の後にやられたのが最初で、今月の旅行は1泊だったので何とかいけるかと思ったのですが、結果しっかりとやられていました。万一に備え、ペット用のソファカバーをかけ、間にペットシートを挟んでことが幸いし、ソファの中綿はかろうじて救われていたのですが、帰宅早々ソファカバーを全洗いするハメになりました。当たり前のことながら、年を重ねるってこういうことも含まれるよね…と思いつつ、またマガジン執筆＆編集の時期を迎えました。

発達検査と対人援助学
P 110～

鶴谷 圭一

「今日は猛暑です、熱中症対策のため外出は控えて…」とテレビやラジオで繰り返しアナウンスされると、それでなくても部屋から出たくないのに、それが良しとされたような気持ちになってしまいます。ところが、心身を現在進行形で発達させている子どもたちにとって、部屋の中に籠もることは望ましいことではありません。あそぶもの、あそぶ方法が乏しいと、勢いテレビやデバイスのスクリーンタイムは伸びて

いくでしょう。猛暑の与える悪影響とジレンマはコロナ禍の時と同じように感じます。

救いは、猛暑にめげずに夏休みにあちこち出かけていってあそんでくれた家庭も結構あるということが「夏休みの記録の報告」でわかりました。

そして子どもたちは、ぐーんと発達して2学期の園に戻ってきてくれました…ちょっと安心。子育て中の親御さんたちも良く考えてがんばっているんです。園も環境を整えて応援しなければ、と思います。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から

P 59～

中村 正

テニスひじ・ゴルフひじのような痛み(といってもやったことがないので分からない)があり、近くの整骨院に通う。スポーツリハビリ・整体がメインのようなところだ。保険でリハビリなので賑やかだ。スポーツリハをメインにしているので患者が若い。中学生、高校生、大学生で体育会部員らしい男子が多い。整体師に女性が少ないからかもしれない。スタッフも若い。夏なのでみんな真っ黒に日焼けしている。実に健康的だ。聞こえてくる会話も意味の分からない内容が多い。スポーツの話題であることは確かだ。長く通っているのか名前呼び合っている。そう男子部活のノリなのだ。さながら「おう！タダシ！」という感じ。高齢者は少なく、すごい違和感！丁寧に苗字で呼ばれるのでよけいによそ者感がある。だから高齢者感が際立つ。だからだろうか、患者もスタッフもみなさんやけに優しい。待合室でも若者は席を譲ってくれて怪我しているのに立って待つというかジベタリアンだ。やはり全体として男臭い。健康よりも勝負の勝ち負けにこだわる身体づくりなのだ。つまり、マッチョなりハビリ！だ。こうしたなかではこちらの男性性も賦活される。治そうという意識に駆り立てられる。克己、頑張れ、勝利、レギュラー獲得と壁に貼ってある。部活していたのはもう半世紀も前になるが身体が記憶してい

るのだろう。当時の部室の匂いまで思い出す。マガジンに連載している論調からすると健康的な男性性ジェンダー？となろうか。不思議な体験5日目だが、でもまだ痛い。

臨床社会学の方法

P21～

団 士郎

新連載を考えた。しかし既に二年以上連載中の「晩年 DAN 通信」がある。誰が読んでいるかは分からないが、その愛読者への仁義もある(…かどうかは分からないが)。

そこでしばらく前に試して中止した、付録連載のようにしてみた。DAN通信の付録である。内容は五月に出した新刊「家族理解の教科書/graphics」の続きである。

今秋11月には家族理解自主勉強会用DVDの第四弾を収録予定である。全国のあちこちで、自主的に小さな家族理解勉強会をして貰える素材として毎年一枚制作してきた。いろんなところでかなりの回数、活用していただいているようだ。

何事によらず、継続できる仕組みをこの世界に置いていくのが今の私の使命だと想着、楽しくやっている。

晩年 D・A・N 通信

&

付録『木陰の物語』を

家族の構造理論で詳説する①

P 35～

中島 弘美

この秋、開催される第17回対人援助学会大阪大会の現地運営に関わらせていただいています。初日10月11日(土)最終枠の時間に「対人援助学マガジンの執筆者と読者の交流会」を現在、企画中です。日頃、読んでいるあのマガジン執筆者と直接お会いすることができる機会です！当日は、「ライブ版執筆者短信」ができるよう準備をすすめています。ぜひ、大阪大会にお越しください。そして交流会へのご参加もお待ちしております！

カウンセリングのお作法

P 32～

篠原 ユキオ

夢は正夢？

車を運転していて細い道に入り込んだ。横道にそれようとしたら建物の外壁にフロントバンパーをこすってしまい不注意を悔やみながらバックして車から降りた。

ところが傷を確めて後ろを見るとすぐそこに2台の外車が止まっており、その1台に自分の車の後部が当たって大きく凹んでいた。持ち主と思われる一人の外国人が近づいて来るのを見て焦りながら「これは夢に違いない！」思い、反射的に思いっきり目を開けようとしたら瞬時に目が覚めた。たいていが夢の中から抜け出せないで、暫くはもがく時間があるものだがこんな事は初めてだった。

翌日、それを思い出しながら車を走らせていると対向車とすれ違いざまにドアミラーが接触して根元から破損してしまうという事故になった。

またか！と思いながら「これも夢だったりして…」とまた目を大きく開いたがこの時は何も変わらず、ちぎれてしまったドアミラーを片手に某然としている自分がいた。「昨夜の夢はこれを知らせる予知夢だったのだ。今日はいつもとより慎重に運転しなくてはならなかったのだ」とひどく落ち込んだ。

そりゃあそうだ2日続けて夢だったって事はないわナア…と諦めた途端、目が覚めた。

「今日も助かったア～」と2日続きの幸運(?)に胸を撫で下ろしながら「もう3度目は無いぞ」とあらためて自分に言い聞かせた。



HITOKOMART

P 226～

松岡 園子

母から電話。「スマホで@って、どうやって出すの？」と切羽詰まった声。画面を見ないで教えるのは難しい。「キーボードを英

語にして…」と言うと、「え、スマホに英語しゃべるの?」と返ってきて、思わず笑った。ようやく「できた!」という声に、私もホッとする。こういうやりとり、ちょっと面倒で、でもなんだかうれしい。

統合失調症を患う母と ともに生きる子ども P208~

サウタツヤ

帰って来た__対人援助学縦横無尽、今回から年 2 回の投稿にしました。海外からのゲストの活動、学会、総合心理学部の交流活動、ゼミ、その他の活動の備忘録みたいなものです。2025 年 4 月から、学校法人立命館副総長(研究・入試・DEI)に就任しましたがナカナカ大変です。

母校である東京都立大学の集中講義は、その一週間前に咳などで体調を崩してしまっただけで勝負でやりましたが(コロナ検査は受けていきました)、少人数だったこともあり、そこそこうまくいったような気がします。録音録画もありますが、全く聞く気にはなれないし、ましてや文字化などしたくない。ライブからライブ盤を作るようなことは今の私にはできません。

帰って来た__対人援助学縦横無尽 P 76

脇野 千恵

8月初め、研修を兼ねて沖縄に行った。沖縄の方が涼しいと、友人たちは大騒ぎ。日差しは強いが、確かに風は湿気もなく爽やかだった。沖縄と一口に言っても、南北に長く多くの島々の集まりだ。島めぐりが好きなので色々旅しているが、数年前には最西端の島、与那国にも訪れたことがある。隣の国台湾をすぐ近くに眺望できる島だ。歴史を聞くと、昔から中国大陆との物流が盛んであったとのことだ。

沖縄本島的那覇市街は最近、目覚ましく発展している。高級ホテル、ショッピングモールがあちこちに。高層マンションも立ち並び、ここは外国かと思わせる風景が広がっている。インパウンドで外国人観光客も多い。

今回は、丸木夫妻による「沖縄戦の図」の展示を観たいと、久しぶりに宜野湾市に

ある「佐喜真美術館」を訪れた。美術館の隣は、アメリカ軍の普天間飛行場。フェンスの向こう側には、元住人の立派なお墓がみえる。住民の墓参は許可されていると聞く。帰り際、たまたま館長の佐喜真道夫さんから話を聞くことができた。



丸木さんが当時、沖縄戦体験者から実際に話を聞きながら描いた様子などを知ることができた。今も続く基地との共存。館の展望台への階段は、沖縄戦終結の日6月23日に併せて、6段と23段の作りになっている。その先には、基地と広い海が広がっていた。

こころ日記「ぼちぼち」 P 232~

岡崎 正明

参院選が終わり、その結果がなかなか話題になっている。

「〇〇ファースト」とか「外国人問題」というワードがなんだか急にクローズアップされたが、別に新しくやれないようなものではなく、「〇〇ファースト」なんか 1 期目のトランプ政権の頃からだし、「外国人問題」も、歴史をみれば幾度となく人の世は、不満や怒りのぶつけどころを、少数の未知の相手を対象にしがちという、「あるある」話だ。

以前からツツコミたかったのだが、「自国第一主義」なんて新しい風のネーミングで盛り上がっているが、いつの時代もアメリカに限らず、すべての国は「自国第一」でやってきたじゃないか。植民地時代も、朝貢貿易も大航海時代も古代文明の頃も。当たり前だ。みんな国益と自国民が大切。それがはるか昔からの国際社会だ。だから今のは「自国第一主義」ではなく、正しくは「今さえよければいい主義」。格好良く言わせてあげるなら「刹那第一主義」だと思う。温暖化も、関税も、効率化省も、とにかく即結果が出る＝すぐに得することがすべて！未来の世界のことは言うに及ばず、

なんならアメリカの子や孫世代のことなんて知らん！それが正しい表現じゃないだろうか。

昔読んだマンガで、南の島のリゾート開発に賛成反対で地元が揉める話があって。主人公が「簡単な話です。この島にあるものを 100 年で使い切るか、1 万年かけて使うか。それだけのことです」という場面が印象に残っている。別に先人が偉かったのではなく、ただ 100 年で使い切る方法を知らなかっただけかもしれないが、生き物の生存戦略としてどっちが良いかは考えた方がいい気がする。生きてる意味なんか分からないけど、とりあえず命を次になぐことを続けてきたのが、私たちである。

ヒトは使う道具の変化と共に生活や思考を変化させてきたと言うが、インターネットやスマホがほぼ人類にいき渡ってきて、いよいよ大変化の波がやってきたのだろうか。すぐに答え(結果)が出る道具を得た我々は、視力だけでなく思考も近視眼になってしまった。進化の袋小路でなければいいが。

役場の対人援助論 P 104~

千葉 晃央

社会福祉の分野では自然環境との循環も含めて、支援を考えることが必要とされている。10 数年前、屋久島で当時対人援助学マガジンで連載をしていたネイチャーガイドの大野睦氏([ネイティブビジョン | 屋久島縄文杉ツアー・白谷雲水峡ガイド | 世界遺産エコツアー専門会社](#))のウミガメ保護活動に同行させてもらった。パケツいっぱいの子ガメがかわいかった。ハワイのハナウマ湾ではパンデミックを期にウミガメも暮らす自然環境を残すために大幅な整備回収が行われた。入場料を取り、入場前にサンゴや魚など生き物に触らない、エサをあげない、ハナウマ湾の希少性など環境教育を受けて、初めて入ることができる。ビーチでは海水浴、シュノーケリングなどが楽しまれていた。実際にウミガメと泳ぐこともでき、パンデミックの影響がなくなった現在、整備後初のピークが 2025 年夏にあったようだ。そのため駐車場は満車。そもそも、たどり着くのも渋滞で、空港の周辺も大渋滞。「観光関連従事者の多

忙」が地元のトップニュースであった。ハワイの産業構造は、軍事基地関連がトップで次に観光で、大きく離れて農業。関西よりは下手すると 10 度も涼しく、湿度も低く「南国のハワイ」は今や「避暑地」である。単純なことは言えないが、赤道直下に比べると、日本の酷暑の背景を考えてしまう。何を優先すべきか、発展なのか、環境なのかなどもよぎる。こうした異常気象による大きな影響は結局苦しい人々にさらに重ねられる、と思った 2025 年夏。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論 P16～

見野 大介

今年の夏は格別暑く、窯の部屋は窯の放熱もあって室温45℃くらいに。急ぎの時なんかは、窯の中が80℃くらいの状況で上半身をつっ込み入れ、焼きたてホヤホヤの器たちを取り出す。それが終わると、次に焼く器たちをまた設置して焼成開始の繰り返し。サウナ要らずな日々。早く秋になってほしい。

ハチドリの器 P4

柳 たかを

マンガ「蜘蛛の糸」(原作・芥川龍之介 漫画・柳たかを)は、今回の第4話で終わります。この作品は2004年頃に自分のネットサイトに掲載したものでした。

描きながら自分の仙術に思い上がった孫悟空が、お釈迦様の手の平から結局飛び出せなかったという話を思い出しました。

当時は、東京に活動拠点を借りており、あれこれ模索していた時期です。

すると昔大阪でマンガ編集でお世話になった先生から「宝塚の大学(芸大)でマンガコースを作ることになったんだが、手伝ってくれない？」と声をかけていただき、迷いましたが、お受けしました。そのとき50代

半ばでもあり、「これは貴重なチャンスかも」と思い直したのです。

そこから10年間、宝塚造形芸術大学(現・宝塚大学)にお世話になりました。

さて、次号からは新作に挑戦して行こうと思います。一応、原作のある話を少しアレンジした作品をと計画しています、、、また次回作でお会いできれば幸いです。

蜘蛛の糸 P142～

荒木 晃子

これがHPにUPされる頃には、10月開催の対人援助学会第17回年次大会まで一カ月を切っている筈だ。大会実行委員としてはたいしてお役に立たずじまい。今も大会長にはご負担をおかけしたままである(反省しきり)。代わりに大会初日、いの一番組に開催予定の理事会企画のコーディネーター、また進行役としては、しっかり力を注ぐつもりで準備している(のでお許しを...)。さて、今年の猛暑は規格外の暑さで、8月も終わりというのに連日体力の消耗が著しい。ぐったりしているのは愛犬も同じで、何度、人間の病院と動物病院へ駆け込もうとしたことか。自分の体調を維持するのも、2匹の愛犬の健康を維持するのも大変だが背に腹は代えられない。電気代を気にしつつ外出時を含め24時間エアコンを消すことなく無事に夏を越せそうである(来月の請求金額が怖い)。

今一番の課題は、法学系学術誌に分担執筆の依頼を受けた論文締め切りが9月末なので、そろそろ暑さでのぼせた頭脳を目覚めさせなければならないことだ。原稿にはぼちぼち手を付けていたのだが、思い切って本気モードに切り替えなければ。今年度はこの勢いで走り抜ける予定である(途中でへばりそうな予感も)。

生殖医療と家族援助 P91～

古川 秀明

この夏、般若心経に導かれるように、奈良と和歌山の県境にあるパワースポット『玉

置神社』を訪れました。訪れた人々が口を揃えて『何か不思議な体験をした』と語るのを聞き、その言葉に引き寄せられるように、私も期待に胸を膨らませながら足を運びました。

実際に訪れたことがある人ならお分かりでしょうが、この地への道のりは、思わず息を呑むような陰しい交通の難所が続きます。そして私の不思議体験はデジャヴでした。神社の奥に静かに佇む池、その姿を夢の中で見ていた記憶が鮮明に蘇りました。この体験が何か特別な意味を持つのか、それともただの思い込みなのか、確証はありません。しかし、その感覚の不思議さだけは、心に深く刻まれています。

講演&ライブな日々 P114～

原田 希



猛暑という言葉にもう飽き飽きですね！北海道も35度を超え、牛さん危うし！どうなることか…の日は続きました。牛舎のファンの台数を増やして霧吹きをつけて、餌は栄養価の高い食べやすいものを、少しでも涼しい早朝から食べられるように準備。やれるだけのことはぜんぶやって、あとは応援するしかない。私たちがができることが少なくてがっかりした夏でしたが、牛さんたち持ち堪えてくれました！熱中症予防、炎天下の外出や運動直後に一杯の牛乳が良いとの話もあります。牛さんには助けてもらってばかりですね。

原田牧場Note P212～

野中 浩一

この夏は初体験と久しぶりの体験がたくさんありました。

子どもの帰省を家で迎える経験、輪島での訪問支援ボランティア、関東にいる中学時代の友人達との飲み会、高校時代の友人達との旅行。

仕事を離れてみて、寄る辺ない気持ちもあり、色々な人に会うことが増え、なんだかんだでやることはなくなるらないものと、有り難く思う今日この頃です。

coconollp@gmail.com

島根の中山間地から

Work as Life

P243～

西川 友理

大阪キリスト教短期大学で保育幼児教育者養成に、またそれ以外の場所でも福祉系対人援助職養成に携わっています。そして嬉しいことに、本文にも書きましたが、昨年あたりからおやこ対話のファシリテーターとしていろんなところに顔を出させていただく機会がぼちぼちと出てきました。

この対人援助学マガジン 62 号が出るころには、対人援助学会第 17 回年次大会の参加申し込みが迫っています。西川も実行委員として活動しています。この原稿を書いている 2025 年夏現在、実行委員会のメンバーははあっちへこっちへ声をかけ、みながそれぞれ自分の出来ることを頑張っている真っ最中。今年は「地に足付けて、皆と生きる。」をテーマに、土地と地域の人々の力をぎゅっと感じる内容で企画しております。どうぞ皆さんお楽しみに。お申込み待ってます。最寄り駅は JR 天王寺とか地下鉄阿倍野とか、基本的にアクセスいいですよ。あべのハルカスも近いし。ぜひいらして下さい。会場でお会いしましょう！

福祉系対人援助職養成の

現場から

P 67～

山口 洋典

2025 年、50 歳になって人生で初めてアフリカ大陸に足を運びました。8 月 13 日から 15 日まで、南アフリカのダーバンという

まちで開催された国際サービスラーニング・地域貢献学会 (IARSLCE) の年次大会に参加し、令和 6 年能登半島地震での学生ボランティアの活動記録の分析と、日本サービス・ラーニングネットワークによる活動を共同で発表して参りました。ダーバンは南アフリカの中でもヨハネスブルグの次に人口が多く、港町としてインドとのつながりが深いことも重なって、インド系の南アフリカ人が 4 分の 1 程度を占めると言います。そのため、魚介類が豊富に入ったダーバンカレーで、到着初日に味わうことができました。



今回、初の南アフリカに訪問で小さなカルチャーショックを受けました。それは日本サービスラーニングネットワークの活動を共同で発表した際、具体的にはアメリカのメリーランド大学で長くサービス・ラーニングの教育・研究を牽引されたバーバラ・ジャコビー先生の著作を翻訳するプロジェクトを報告した際、ある南アフリカの大学から先生から「なぜ翻訳することにしたのか」と問われたからです。言い換えれば「日本には日本に合った実践の仕方があるだろうから、それを追求していけばいいのではないか」という問いでした。発表の後、共同発表者たちと、南アフリカの方々が「自文化への誇りを持っていること」を確認したと共に、折しも国政選挙を経て排外主義などが話題となっていたことも重なって、果たして私たちはどれだけ自文化への誇りを持っているかについて日本から 23,000km 離れた地で語り合いました。

P B L の風と土

P 173～

来須 真紀

今年の夏は、こどもたちの推し活をしました。長女は部活で中国大会に出場。長男も人生初の遠征を経験。次女もソフトボールを始める。という超ハードな推し活。日

焼けが気になお年頃の母ですが、わが子の推し活ができるのは、元気な体と推し活しても嫌がらず付き合わせてくれる子どもたちのおかげです。せっかく夢中になれるものを見つけることができたわが子たち。これから夢中力をつけていってほしいと思っています。

教室の窓から

P276～

寺田 弘志

くすぐったがりの患者さんがいらっやいます。

触られるのに抵抗のある患者さんに施術させていただくヒント、数値化、無症状の問題、ベルトやテープを使った施術・・・

そんな材料を使って、今回も本文では、パラキシカルストレッチング & パラキシカルコントラクティングを説明していきます。

接骨院に心理学を入れて

P 179～

鵜野 祐介

我が家の畑のミニトマトがこの夏は大豊作でした。6 株しか植えていないのに、毎日 30 個ぐらいが 2～3 週間収穫できて、家族 2 人では食べきれないほどでした。大自然の恵みに感謝です！

うたとかたりの対人援助学

P 165～

団 遊

みんなが、みんなを、みる会社
休載

付け加えることができる価値は何か？

～ 日系移民が暮らすホノルル ～

8

千葉 晃央

「〇〇人お断り」でいいのか？！

ハワイ日本文化センターを訪問した。現地に行く前から、同団体の YOUTUBE も視聴し、現地での活動に触れたいと思ったのが動機である。昨今、選挙において「〇〇ファースト」という言い方が当たり前に使われている。1970 年代に生まれ、50 代になった私が生きてきた人生において、初めての言い方である。

子ども時代に出会った教師の方々は、絶対こういう言い方をしない人達だった。こういう言い方の時代に、絶対に！戻してはいけない！という信念を子どもながらに感じてきた先生たちだった。古い写真で店先に「〇〇人、〇〇人、〇〇人はお断り」こんな張り紙があったのをよく見た。そんな頃には戻させない。そのためには、こういうことをみんなで話し合っていこうという授業や企画を複数享受してきた。それなのに、今こんなことが起こっているのは自分たちの努力不足な気がしてならない。

多くの日本人が今、日本で経験しているのは多数者側で、自国にいる側の立場である。だから「〇〇人ファースト」という言葉の危うさが「関心領域」には入ってきていないのではないか。しかし、日本人が移民する側になってきた歴史は複数あった。そして、日本人移民が異国で、どういう経験をしてきたかは調べたり、動いたりすれば、わかることもあるだろう。日本人が日本列島から出ていかななくてはならない状況が起こる可能性はゼロではない。そして、「歴史は韻を踏む」という言葉があるように、似たことは起こることはあるわけで、わかっていれば予防ができること、すべきことも明確になるはずだと考えた。

初めてきかれました…

「ハワイ日本文化センターに行きたい」というと「観光客はいかない」「初めてきかれた」と現地の方々も話す。そして、そこま

でのルートは普段ホノルルのツーリストが使う交通手段はない立地である。当然日系の方々が 많이 地域であり、そこには住民の暮らしがある。

ハワイに来てはじめに感じたことは、私の雰囲気似ている人が多いということである。ハワイ州はアジア人の割合が最も高い州である。50州で構成されるアメリカ合衆国で、1959年に50番目にできたのがハワイ州で、最も新しい州である。州になるた



めに住民による投票も行われ、圧倒的多数で賛成。当時の冷戦下ではこの民主的プロセスに価値がとてもあるとされた。

ハワイの主要産業は現在、軍需基地関連がトップで、次いで観光。少し空いて農業という。その観光地区(ワイキキ)は多くの旅行者も行く。しかし、今回のハワイ日本文化センターはそうした地区から離れている。ワイキキなどからも公共のバスしかない。ちなみに「スカイライン」というハワイにと



っての久々の鉄道は現在一部開通し、今後観光エリアまでの延伸を計画している。ハワイは車、バスがメインの移動手段で、基地方面の朝の交通集中も一定発生している。

結局、30分程度歩いてハワイ日本文化センターに行くことにした。道中は、アパートメントや一軒家、地元の方向けのレストラン、スーパー等もあり日常を感じる。川を覗けば透明で熱帯魚が泳ぎ、ごみも浮かぶ。公園ではホームレスの方の姿をよく見る。有名なショッピングセンターの前のパークも現在はテントが複数ある。家族も子どももいる。それらがホームレス状況という現状が報告されている。大型ショッピングモールのカートに荷物を載せて移動する姿もよく出会った。ハワイのインフレは特にひどく(安全保障上安定的で富豪の投機対象に不動産等がなっているとも)、賃貸価格も月に日本円で約30万円台が平均とも。もちろん、被災も原因の1つになっている。また、温かいので他の州からワンウェイチケット

で送り込まれているという話もある。寒くないので冬でも凍死しないのが魅力といわれる。ハワイ州も抗議をするが状況は改善されず、ハワイ州もその州に送り返す策を…とも聞いた。そこに薬物、アルコールの問題も入り、治安の問題も存在している。そんな中を歩いて進む。



ハワイの物価上昇、被災の影響

観光地の歩道でも電動車いすを止めて、道行く人に大きな声で話かけている方、拡声器とマイクを使い、ラップ調で主張を訴えている方もいる。ハワイには高級住宅地、高級別荘地もあり世界的映画スター、某 O 谷選手もハワイに家を…ときく。

そうした地域とは異なるダウンタウンといわれるところを歩くとハワイ日本文化センターに到着。「おかげさまで」と題された日本からの移民の歴史の資料や展示、映像があった。お会いした方の中に、おひとり、京都の大学に留学経験がある方と話す。「ぜひゆっくり見て欲しい」とのことであった。



明治新政府の事業としての移民

日系移民は明治元年から始まる。山口、広島からの移民が多く、ハワイの労働力不足を補うことが目的で、明治新政府による事業でもある（なので長州藩が多いそう）。他にも中国、フィリピン等からも移民があった。過去にはハワイの人口の40%以上が日系のことも一時期あった。そのため、おにぎりも、かき氷（シェイプアイス）も、スパム結びも、お寺も、神社もある。

移民後の環境は厳しく、はじめは奴隷のようなものだったと振り返っている。そのため、地位の向上のためにストライキも。当時、明治新政府で王政復古の時代、移民たちは部屋に天皇陛下の肖像も飾っていた。そして、自分たちのルーツである日本の文化を大切にしてきた。日本でも外国籍の方々が自分たちのルーツの文化を大切にしながらも日本に適応もしていくことがある。ハワイの日本人はアメリカにも適応していくことが求められた。

その中で自分たちの社会的地位も改善し



ながら、暮らしも継続できるよう交渉し、懸命に働き、何とか共に暮らしていく。

ハワイ日本文化センターの展示の入り口には日系移民が持っていた日本人の価値観が一つずつ石柱に掘られて並べられていた。

1. 犠牲
2. 名誉
3. 恥と誇り
4. 責任
5. 忠義
6. 感謝
7. 仕方がない
8. 頑張り
9. 我慢
10. 恩
11. 孝行

これらを見るといかにも日本人らしい。日系の方の話を聞くとこうした価値で生き延びてきて、こうした価値の大切さを自負

している様子が感じられる。

2025 年の日本人も表面化しているか、していないかはあっても、世界的に見れば先述の価値をもって行動している傾向はあるだろう。

1868～1941 年入植から 73 年後

1941 年、日本軍による真珠湾攻撃。日系移民は「忠誠心」が問われる状況となった。日本的なもの、例えば天皇陛下のもの、着物などを処分する人も多かった。まずは有識者から、強制収容所に送られた。こうした状況を改善し、日本人のアメリカへの忠誠を証明するために、多くの若者がアメリカ軍に志願した。日系人部隊も作られて、実際に各地で戦禍を挙げた。当然多くの犠牲もあった。活躍から勲章ももらう軍人もいて、それが戦後の日系人の立場の確立に寄与した事実もある。

日本からの移民は 1868 年からである。アメリカはハワイ併合を 1898 年に行った。太平洋地域戦略の要として真珠湾を重視して 1908 年に基地がおかれた。

振り返ると、日本人が入植当時ハワイはアメリカではなかった。途中からアメリカになった。そして基地も置かれた。もちろん、責めてきた母国も憎い。基地を置いた方が…、という声も漏れ聞こえたそうである。入植 73 年後に起こったのが真珠湾攻撃であった。

ホノルル空港ではなく「井上」空港

日系人のダニエル・イノウエはホノルル空港の正式名称になっている。彼は戦地で捨て身で活躍。その戦闘の中で右腕も失う。戦争後は、日系アメリカ人として初めて米国下院議員、そして日系アメリカ人として初めて米国上院議員を務める。ハワイの発展、そして日系人の活躍も支える。2013年には、アメリカ海軍の駆逐艦の艦名に、大統領からも勲章を贈られる。2017年にはホノルル国際空港の正式名称が「ダニエル・K・イノウエ国際空港」になった。ハワイ州の知事にも日系移民ルーツにもつ方が複数就任している。



ハワイ日本文化センターには日系の方々の写真が掲示されていた。一世の顔写真複数。二世の顔写真複数と4世までの写真が掲示されていた。ハワイはニューヨーク同様、「人種のるつぼ」ともいわれる。出会いは当然、ルーツを超える。そのため、日本人のいわゆる外見的特徴は薄くなっていく。この4世代の変化と同様の資料を見たことがある。オーストラリアのアボリジニの方々に対する白豪政策で特徴をなくすイギリスによる例としてみたことがある。

様々ハワイナイズ、アメリカナイズと適応は進む。それでも日系の方々に触れて感じたのは、先人の努力のお陰で今があるという気持ちは共通として根底に持っている姿である。今回ハワイ日本文化センターに「日系アメリカ人 ―ハワイの―」(岩波写真文庫 1955)を持って行き、プレゼントした。京都の古書店で買ったものである。資料として、保管されているかもしれないが、もし価値があるなら、どうぞ！とプレゼントをした。喜んでくださった。また古書店で同じものを私は探したいと思う。

付け加える価値は、自分たち日本人が過去に強く持っていた価値なのかもしれない。



臨床社会学の方法(50)

Z世代の可能性-男性性ジェンダー、脱暴力、アンラーンが交差するところ

1. 若年とDV・虐待-Z世代への関心

Z世代は2000年前後に生まれた世代で、2025年現在、10歳から28歳くらいまでの年齢層を意味する言葉だ。デジタルネイティブ、SNSネイティブのコホート(世代)として使われることが多く、個人やプライベートを重視、ネットつながり志向が強い、多様性を重視するなどの価値観を持つとされる。

しかしここではこれらを論じたいのではなく、たまたま年代的に重なるのでここでもZ世代としておくが、筆者の意味づけはこうである。

2000年のストーカー行為規制法にはじまり、DV、子ども虐待、高齢者虐待、いじめ・いじめ自殺、各種ハラスメント、LGBTQ差別、学校の部活動での体罰などの対人暴力をなくそうとする法律が矢継ぎ早に制定された。この2000年以降生まれの世代のことである。Z世代とほぼ重なるので便宜的に借用した。あるいはZ世代の別の顔ともいえる。

つまり、生まれたときから法が家庭に入り始め、身近な人間関係における暴力があぶり出され、事件も多発し、こうした暴力に敏感になって生きてきた世代という意味である。被害は自分たちに覆い被さってきたともいえる。社会が対人暴力に敏感になった時期を幼少期、思春期、青年期として過ごしてきたということになる。それは親の世代の子ども時代体験とはまったく異なるものだ。親たちは昭和の世代、子どもたちは平成の世代、家族体

験が異なる。世代として取り出し、暴力への感受性について研究すべき顕著な変化と言える。さらに、低成長、少子高齢化社会、コロナ禍体験、世界の戦争も体験し、温暖化の影響を生涯にわたって受ける、つまり社会課題を重く自分の人生と重ねて意識することになる世代でもある。その社会問題・社会病理の大きな領域をなすのがこうした対人暴力問題である。

本連載の関心からすると、Z世代対応は、若者向けの恋人間暴力、予防・防止、暴力の連鎖を止めることが主眼となる。さらに、家族中心主義的な社会のバイアスの除去、家族システムへの介入等が交差する課題を引き受けていく世代として脱暴力が人生の課題になるということでもある。

また、Z世代対応は、暴力と男性性ジェンダーの脱学習にとって、善き隣人、第三者介入、認識的不正義など社会啓発や社会教育の既成の概念を超える取り組みの一環と位置付けている。本連載においても部分的には論じてきたこうした概念群の大切さはさらに今後、本格的に論じていくことになる。対人暴力の被害と加害の二軸だけではない広い取り組みが可能になると想定している。本稿の末尾で指摘する。

2. Z世代の息子との対話

こうした話を授業や講演会でしていると、Z世代にある息子たちは敏感に反応する。20代前半のある男性からの質問である。「暴力や虐

待を受けた子どもに対する支援プログラムはあるのか」と。幼少の頃、父親から暴力を受けた経験があるという。将来自分が家族をつくっていく時、子どもに対して同じように暴力や虐待をしてしまわないか怖く感じていると告白してくれた。幼児期・学童期をとおしてしつけと称して殴られたことがあったという。父親は優しい時がある一方で、暴力を振るってくる時もあった。そうすると普段から怒らせないように、ビクビクしていたことを覚えているという。「小学1年生か2年生のときのこと。朝学校に行く準備をしていて父親も仕事に行く直前だったとき、何か言い合いをしたんだと思いますが、父親がキレて私に暴力をふるったことがありました。その時どのように暴力を振るわれたか覚えていませんが（正確にはその瞬間の記憶だけがない感じです）、非常に憎らしく感じ父親をにらみつけたのを覚えています。」と語る。「その瞬間の記憶がないということに関して大学生になって心理学を学ぶ中で、もしかしたら解離しているのではないかと考えた」という。

また、「もうひとつ強く記憶に残っていることは、私が父親から暴力を振るわれているときに母親が『顔だけはやめて！』と言っていたことです。」と語る。「大学生になってから母親にこのことを話すと母親は『覚えていない』と言っていました。父親に暴力を振るわれたことよりも母親が『顔だけはやめて！』と言ったことの方が衝撃的（「顔じゃなかったら俺は暴力振るわれていいん？」みたいな感じです）で、それを覚えていないことに強くショックを受けました。これまでに何度か家族の中でこうした行為について話す機会がありました。両親の考えは『しつけ』の要素が強く、『必要だった』という認識を持っているようでした。

また、そのような子育てをしてきたが、実際子どもたちがしっかり育ったことを踏まえると、自分たちの子育ての方針は間違っていなかった、正解だったと感じているようでした。私自身も多少の暴力はしつけの一環で効果的に作用するだろうと肯定的に考えていました。」と家族生活を振り返っている。

しかし、現在の家族関係は安定しているが、心理的暴力や関係コントロール型暴力についての話を聞くことで、「暴力を振るわれてつらかった経験を合理化するために無理やり肯定的にとらえているんじゃないかと感じ、また、暴力や虐待を肯定的に捉えてしまう自分を恐ろしく感じました。」とも話す。「現在も父親は酒を飲みすぎることがあります。機嫌が悪くなると黙り込んでイライラしている様子を行動で示したりします。そういった行動に対して注意したい気持ちがありますができません。おそらく、幼いころの経験、恐怖の影響だと思います。また、嫌だと感じる父親の行動を同じように自分が取ってしまったことがよくあり、本当に自分自身が嫌になることがあります。父親を反面教師にして絶対に同じようにならないと強く思うのに、同じような行動をしている現状が許せないです。上記のような背景があり、私のように大きくなってからも過去の暴力や虐待の経験に苦しむ子どもがもっと早い段階から救われるための支援は何かないのかと気になったため質問させていただいた」と話してくれた（本人の許可をもらい引用した）。

筆者はきちんと言語化できていることについて感銘を受け、即座に返信した。思考の過程も論理的で的確な問題意識を形成・保持していて、男性性ジェンダーのアンラーン志向もある。しかし、もやもやした関係性は両親

との関係で残っている。行動上の再生産のおそれがあると自己理解をしている。

こうしたことを何とかしたいという若者は多く、専門的なプログラムを開発しようとしているので知恵を貸して欲しいと彼に話した。親世代のように生きてしまうのではないかと、いう不安や恐怖はこれからの彼の家族形成や恋愛の過程で自ら実践して無くしていくことができる。親の世代のようにには生きないという判断は的確なので当事者参加風の専門家として活躍できると考えた。

こうした課題を意識しておくことは大切なので、一般社団法人 UNLEARN の「Z 世代プロジェクト」に参加して欲しいと誘った。これは脱暴力へのアンラーンそのものの取り組みとなり、暴力の再生産ではない人生への選択肢を協働して開発し、同じような苦悩や不安を持つ Z 世代に届けるプロジェクトである。

まずは再生産しない男性たちはいかにして選択肢を保持できたのかについての研究に取り組む。どうしてこのような自覚が可能となったのか、何がこの脱暴力の選択やアンラーンをもたらしたのか、ライフストーリーワークをとおしたヒアリングを行い、調査に着手する予定だ。

また、50 代くらいのグループワーク参加男性たちは息子との関係を意識し、直接の子ども虐待がなかったとしても「面前 DV」を与えてしまったことをよく語る。暴力の直接の被害者である妻とは別の傷つきに苦悩する子どもたちの様子が見えてくる。

3. 少年や男性の引き起こす事件として

全国の児童相談所が 2023 年度に児童虐待の相談を受けて対応した件数が過去最多の 22 万 5509 件であった（厚生労働省とこども

家庭庁のまとめ）。暴言などで心を傷つける心理的虐待が 59.8%を占め、うち、子どもの前で家族に暴力を振るう「面前 DV」が多かった。虐待相談は、心理的虐待が 13 万 4948 件で、うち面前 DV が 7 万 8914 件だった。他には、身体的虐待が 5 万 1623 件（22.9%）、ネグレクト（育児放棄）が 3 万 6465 件（16.2%）、性的虐待が 2473 件（1.1%）となっている。相談経路は、警察 11 万 6649 件（51.7%）、近隣・知人 2 万 2112 件（9.8%）、家族・親戚 1 万 9196 件（8.5%）、学校 1 万 6583 件（7.4%）の順だった。

こうしたデータはよく報じられるが、虐待被害の子どもたちの心理的問題の理解については補強すべき争点がある。それは男性性ジェンダー問題をそこに交差させるべきという点である。こうしたことを意識させる事件が散見される。非行問題の背後に虐待の被害があることはかねてより指摘されているが、暴力行動や反社会的行動に作用するのも男性性ジェンダーだと考えている。象徴的にはこんな事案があった。

父親＝当時（49）＝をナイフで刺殺したとして、殺人罪に問われた仙台市泉区の元少年の被告（21）＝事件当時（19）＝の裁判員裁判論告求刑公判が仙台地裁であり、検察側は懲役 14 年を求刑した。検察側は、被告が逃げようとした無抵抗の父親の背中をナイフで刺し、動かなくなった後も一方的に刺し続けたと指摘。「肋骨が折れる程の強い力で刺しており、犯行態様は残忍で極めて悪質」と述べた。弁護側は「被告は思春期に（父親から）子育てを放棄すると言われるなど、不健全な家庭環境で育った。父親にも落ち度がある」などとして、執行猶予付きの判決を求めた。起訴状によると、被告は 2015 年 12 月 1 日夜、自宅 2

階の自室前で父親の胸や背中をナイフで刺し、殺害したとされる(『毎日新聞』2017.12.13)。

仙台地裁は元少年に懲役 11 年(求刑・懲役 14 年)を言い渡した。この事件は、夫婦げんかを目撃する心理的虐待である「面前DV」にさらされ続けた元少年の成育歴をいかに斟酌するかも争点になったと報道された。「石油ストーブを投げ、跳び蹴りする親の姿を物陰からじっと見続けて育った元少年の心はゆがんだ。自傷行為を繰り返し、自分自身を傷つけることで怒りや不安を晴らし『生き延びてきた』と専門家はいう。元少年は事件前に自殺未遂をして入院している。だが、入院先の医師も学校の担任も少年の心の SOS を見逃した」と報じられた(「元少年に必要なのは...重い刑罰か治療か－父刺殺の元少年に懲役 14 年を求刑 仙台地裁」『河北新報』デジタル 2017.12.12)。この指摘に加えて、男性性ジェンダー作用も見逃したと考えるべきだろう。

4. 発達におけるトラウマ体験とそれを生き抜く戦略

「面前DV」は正確な言葉ではない。面前でなくとも家族関係に暴力が存在する場合、それは家族文化のようにして影響を与える。関係性の生態が暴力性を中心に構成されているからだ。見えない影響となる。また、「面前でなければよい」という意識が生まれやすいので変更が必要な言葉だと考えている。そして短期的な、現在の子どもへ影響だけではなく、長期的予後として大人になる過程での影響も指摘されている。「面前DV」であれ直接の虐待であれ、関係性の特性を形成するからだ。その特性をみてみる。

1)「闘争か逃走か」と「思いやりと絆」反応－虐待が身体に及ぼす影響

人間は危機的な状況に置かれると「3つのF」とよばれる防衛反応を起こす。これは「Fight(闘争する)、Flight(逃走する)、Freeze(固まる)」の頭文字をとったものだ。これをDVや虐待という環境のもとで暮らすことになる子どもたちに置き換えて考えてみる。家族は安心・安全の場であるという感覚を持ちやすいが、関係コントロール型暴力の視点からすると、コミュニケーションをとおしてコントロールという面が生じやすいという特性をもっているともいえる。家族という日常生活においてもこの「3つのF」が上昇してくると考えられる。身近な環境に存在する不安や恐怖が存在しているので、いつも警戒モードになる。過覚醒(ピリピリしている)と不安の状態のなかを生き抜くことになる。警戒する必要のない日常の出来事に対しても「闘うか、逃げるか、固まるか」といった緊張が起こり、ストレス反応が生じる。たとえば、父親が髪をかきあげようと手を挙げる何気ない動作が怖いという女性にあったことがある。

この「闘争か逃走反応」を指摘したのはウォルター・B・キャノン(ハーバード大学医学部の生理学者、1915年)である(この点については中村正『ドメスティック・バイオレンスと家族の病理』作品社、2001年に書いた)。

さらにこれには批判的な想定を追加実験がある。「闘争か逃走反応」の実験は、動物実験ではオス、人間を対象にした研究では男性を被験者にしていたので、動物実験ではメスを、人間を被験者にした実験では女性を混ぜた。その結果、「思いやりと絆反応 Tend-and-Befriend response」を検出した。危機に対して女性は、①tend:子どもと母(自分)の生存率を最大化して子どもを守り、②befriend:他者と社会的絆を形成して助け合い、被害を最

小化しようとするものだ。これはシェリー・タイラーの研究による。敵が圧倒的に強く「闘争も逃走」も困難な場合、従順に振る舞って生存率を高め、懐柔して被害を最小化する、「思いやりと絆反応」が合理的選択肢としてありうると定式化されている（「思いやりと絆」反応の原著論文は、

S E Taylor, L C Klein, B P Lewis, T L Gruenewald, R A Gurung, J A Updegraff .(2000) Biobehavioral Responses to Stress in Females: Tend-and-Befriend, Not Fight-or-Flight. *Psychological Review*, Vo.107-No3, 411-429., S E Taylor S (2006) Tend and Befriend: Biobehavioral Bases of Affiliation Under Stress, *Current Directions in Psychological Science*, Vo.15-No.6,273-277)。

子どもたちはこうしたなかを生き抜いている。この二つの反応を両極として生存のスペクトラムがある。苦しい環境を生き抜く戦略となっている。家族は、関係性もしくはシステムとしての生態となっており、子どもや妻はそこを生きるストラテジーをつくりだす。家族は被害者にとっては環境として組織され、そこでの行動は習慣となっていく。

2) 発達性トラウマ

こうした虐待が心の発達に与える影響は「発達性トラウマ障害 Developmental Trauma Disorder」として研究されてきた。ヴァン・デア・コーク (van der Kolk BA) により 2005 年に提唱された概念である。診断基準が整序されてきた。小児期の子ども虐待により反応性愛着障害を呈した後、情動制御（恐怖や怒りが極端で調整できない）、生理的制御（生活リズムの調整ができない、感覚過敏など）、注意と行動の制御（危険認識の低下）、

自己と関係性の制御（自暴自棄、自責感、大人への極端な不信感、反射的な他者への暴力など）が障害され、生活に支障をきたしてしまう。脳科学者の友田さんの研究から整理して紹介しておこう（友田明美『新版 いやされない脳-児童虐待と傷ついていく脳』診断と治療社、2012年、末尾に氏が整理した表をかがけてある）。

第1は、情動や衝動の調節不全である。虐待やネグレクトの環境下で育つ子どもは自分の状態を言葉に置き換えてもらう体験が少ないため、自分の中に生じる衝動や不快な気分が何に由来するのか、どう扱ったらいいのかがわからず、人に助けを求めることも叶わず（「お腹がすいた」という状態を認識できなければ、それを人に伝えること、その状態から回復させてもらうことができない）、なかなか落ち着けなかったり、衝動統制が困難であったりするわけである。

第2は、注意と集中の問題である。目の前のことに注意を向けて集中し続けるためには、心身ともに安全な状態でなければならない。過覚醒の状態が続いている子どもは常に警戒のアンテナが張り巡らされているために注意が逸れやすく、生存に関係のない言語処理や学習に集中し続けることは困難になる。また、身体虐待や性的虐待などに晒され続けると、辛さから意識を逸らすために注意や集中のスイッチを切ることが習慣になってしまうこともある。

第3は、自分や他人と仲良くやっていけないことである。社会の中で人と関わっていくにはまず、相手が自分に危害を加えないという信頼感が基本となり、自分もそこにいて良いのだという自己価値が育まれている必要がある。虐待環境下に置かれた子どもたち

は、人一倍愛情に飢えている一方で、相手をとことん警戒しなければならないという引き裂かれた心のまま他人と関わらなければならない。

友田さんは実証的な研究でわかりやすく根拠を示して、「面前DV」、ネグレクト、心理的暴力などの子どもへの影響を確かめた。

発達性トラウマは、適切なケアが提供されなければその後の成人期の行動様式や対人関係、精神状態に否定的な役割を果たす。大人のアタッチメント障害として指摘されてきた。虐待してしまう保護者が幼少期に虐げられ、そして誰からも助けてもらえなかった経験がある。怒りを表現し、暴力的で、勉強もできない、人を怒らせるようなことばかり言う。こうした子どもたちは、躰としての叱責の対象となる。その叱責の手段として暴力が選択される。支援を要請できる力も育たないどころか、さしのべられた支援を拒絶するかもしれない。

こうして、「トラウマが引き起こす問題である」と考える「トラウマインフォームドケア」の視点が重視されるようになってきた。「子ども虐待は家族内機能不全の結果として起こってくる。虐待者もまた病んでいるという考え方が必要である。」と『子ども虐待診療の手引き-第3版-(2022)』（日本小児科学会）は指摘している。これらをもとに養育者支援という視点が重視されるようになってきた。

とはいえ、これは母親支援の文脈であり、父親問題に対しては男性性ジェンダーからの考察と別の対応が要請される。これは関係コントロール型暴力という環境で育つ子ども研究や母子支援へのジェンダー視点の挿入ということになる。

5. モラルハラスメント

心理的暴力は、フランスではモラル・ハラスメントとして定式化されてきた。このモラル・ハラスメントという言葉は暴力加害者には届きやすい。グループワークや男性相談に来る男性たちはネット検索を行う。事前学習をしている。その検索語にはモラル・ハラスメントという言葉はよく用いられる。

フランスの精神科医マリー＝フランス・イルゴイエヌによるモラル・ハラスメント論は物理的暴力に前後した幅広い行為を描いている（『モラル・ハラスメント：人を傷つけずにはいられない』紀伊國屋書店、1999年）、彼女は臨床から、モラル・ハラスメントの加害者は自己愛的人格であり、相手に罪悪感をもたせる暴力を用いることに長けていると指摘している。自らには責任がないように仕向ける操作を行う。たとえば、親の「冷たい愛情」がその典型である。これは単なるネグレクトとしての愛情の欠如とは異なる。その元で子どもはその暴力を誘発するような行為を余儀なくされる。外見上は自己破壊的行動となる。「お前はダメな子だ」と言い続けることでそのダメさを実践させて親の欲望を満たす。転倒した親の行動である。放置するネグレクトとは異なる。

操作性はコントロールそのものである。手法は心理的束縛である。アイデンティティを失わせる、相手を服従させ、依存させる、言うことを聞かせる、相手に自分の刻印を残す（同じ意見や好みをもたせる）などがある。

そして、侮辱、嘲笑、中傷、悪口、悪意をほめかす。この操作性は巧みで、相手が従順すぎると加害者は物足りないので適度な抵抗を欲することもあるという。そうした被害者の行動と心理をつくりだす。被害者は加害者を

察知する作業に入ることを余儀なくさせられる。加害者が何を考えているのだろうかとかマインド・リーディング(読心)をさせられる。そうすると被害者が勝手にコンテキストをつくるようになり、「自分は何をしたのだろうか」と自問自答をはじめめる。

モラル・ハラスメント加害者の会話には偏りがある。加害者は冷静で、被害者が感情的になるようなモードで話す。冷たい、そっけない、愛情がない、不安に陥るような会話が見られる。また、曖昧ないい方をする、論理がない、途中で会話を止める、「じゃあ、考えてごらんさい」で終わる会話となる。相手が誤解するように仕向け、相手を軽蔑し、嘲笑し、おまえが挑発したのだと責任を相手に転嫁するような言い方をすると指摘されている。

モラル・ハラスメントの加害行為は、生き方になっているという。また彼は成功幻想を持っている。その幻想には限度がない。しかし他方では他人の賞賛を必要としている。人間関係のなかで相手を利用することしか考えていない。共感できずに他人を羨望することが多い。これは自己愛の病理である。

本連載が目にするのは、モラル・ハラスメントのある関係では独特な被害者特性がつくられていく過程である。被害者はなんらかの過ちを犯したと言われるが、しかしそれが何かは不明であり、自問自答しながら考え続けるはめになる。モラル・ハラスメントをとおして「理想の被害者」ができていく。

これまで言葉や感情の暴力と指摘されてきた事柄を整序してみると、身体的暴力と前後してそれを正当化する加害者の意味づけや文脈としてモラル・ハラスメントが機能していることがよくわかる。

6. トラウマ的な絆

対人援助は、親密な関係、家族関係、対の関係、二者関係の特性を視野に入れる。「共生体」という視点からそれらのシステムと関係性の特性をみることができる。本連載で、関係性の病理を把握する言葉をずいぶんと紹介してきた。発達性トラウマ、モラルハラスメント、ガスライティング、ストックホルムシンドローム、モラルマゾヒズムなどである。その総括的な言い方が関係コントロール型暴力である。そのなかにドナルド・ダットンらが主張してきたトラウマティック・ボンディング(Traumatic bonding、トラウマ的な絆)がある。

暴力的な関係にあり、暴力の加害者との絆を感じる事態を説明する。加害者は被害者となる人を優しくかつ厳しく扱う。無意識のうちに被害者と加害者の間に強い心理的な絆ができることがあり、それを「トラウマ的な絆」と名づけた(Dutton, Donald G.; Painter, Susan (January 1981). "Traumatic Bonding: The development of emotional attachments in battered women and other relationships of intermittent abuse". *Victimology* (Thousand Oaks, California: SAGE Publishing).

その特性が以下の6点に整理されている。

- ①暴力の加害者の行動を正当化または擁護する、②傷つけた人のことを常に考える、③加害者を助けたいと思う、④関係を離れたくない、⑤暴力の加害者の行動を隠そうとする、⑥真の感情や意見を表明しない、と。

これは周期的かつ長期的に繰り返され、継続する虐待から生じるもので、二者関係をもとにした個人間に生じる、感情的な絆のことである。部活動の先輩・後輩、上司・部下など

のお互いに訴求し合う関係にも生じる。報酬と罰の繰り返しによって強化される。トラウマ的な絆は、非対称的な関係性が前提である。被害者は加害者との間に感情的な絆を形成していくが、虐待、体罰、強制など何らかのトラウマ的体験が起きている関係性の中で生じるので、それは健康的ではない。被害者の加害者に対する強い依存、愛着を強める行動などとして現出する。

トラウマ的な絆には、①力の不均衡、②優しさと厳しさ、緊張と緩和、罰と報酬による強化が主に関与している。幼年期の不適切な養育、恋愛関係・夫婦関係、親子関係、友人関係、カルト集団、人質になる出来事、上司（管理職）と部下の関係で起こる。また、組織文化も関与しており、逃れにくい環境をつくる。軍隊、反社会的組織などである。家族に塀はないが見えない関係性が強く存在し、類似の共生体となっている。

分かりやすい点は、DV 被害者が自分自身や子どもの命が危険にさらされていても加害者から離れないことがある。パートナーに経済的に依存しているという理由もあるが関係依存がある。また、トラウマ的な絆は、恐怖と支配、そして予測不可能性があることに基づいている。加害者と被害者としての絆が強まり、深まるにつれて、被害者には恐怖、感覚の麻痺、悲しみの感情が生じる。

また、暴力は周期的なパターンで現れる。トラウマ的な絆の渦中にいる被害者は、主体性や自律性の感覚が阻害されていく。その自己像は、加害者が概念化したものを内面化したものとなりがちである。加害者の視点で自己と環境を見つめるように強いられる。「加害者との同一化」という。こうしたことは生き延びる戦略でもあり、固定化されやすい。

さらに、長期的な影響がある。トラウマ的な絆は、関係が終わった後も被害者に深刻な悪影響を及ぼす。それは、虐待的な関係を続けてしまうこと、低い自尊心、否定的な自己イメージ、うつ病や双極性障害になる可能性の増大、児童虐待の次世代への連鎖、精神衛生上好ましくない結果をもたらすことが含まれる。加害者とトラウマ的な絆で結ばれている被害者は、しばしばこうした関係から離れることができず、相当なプレッシャーや困難によってようやく離脱できる。何とか離脱できても、学習したトラウマ的な絆が身に沁み付いており、虐待関係に戻ってしまう人もいる。「再犠牲者化」という。

さらに、周囲のトラウマ的な絆への無理解は被害者を孤立させる。これは被害者をさらに脆弱にする。例えば、DV 被害者が加害者との離別を決断するまでには時間がかかることが多く、最終的に別れるまでに、別れては元に戻ることを繰り返すこともあり、支援者を落胆させることもある（ダットンの主著は翻訳して紹介してきた。ドナルド G. ダットン 著中村正監訳、『虐待的パーソナリティー親密な関係性における暴力とコントロールについての心理学』明石書店、2011 年、ドナルド G. ダットン、スーザン・K.ゴブランド 著中村正訳『なぜ夫は、愛する妻を殴るのか？バタラーの心理学』作品社、2001 年）。

7. 男性問題として考えてみる－男性性ジェンダー作用を交差させて

男性問題相談で語られる息子との関係の修復は、妻やパートナーへの対応とは異なる面がある。50 代くらいの参加男性たちは、成人し、20 歳代になった息子たちとの関係修復にも関心を持つ。難しい面もあるが、男性性ジ

ジェンダーを介して考え方を整理する。そのことも視野に入れた謝罪、内省と省察になるように相談を続ける。息子の長期的予後に関わり、父の息子へのメッセージをグループワークで考える。こうした相談に来て脱暴力の学習をしているということそれ自体を息子たちに伝えることになる。さらに暴力を振るった妻への謝罪、家族関係全体への影響の理解など課題は山積しているが、言語化をすすめていく。

先述したようにZ世代の子どもたちは確実に変化している。父親が男性相談に来ることになったのは自力ではない。相談やグループワークの情報を探し、伝え、参加を促す被害女性がいる。さらに子どもたちもいる。娘からの指示は多い。息子からの指示で来談した男性もいる。本連載の中心においている関係コントロール型暴力や男性性ジェンダーは関係性の病理なので次の世代へと伝播していくこともグループワークや相談では話題にする。介在しているのは男性性ジェンダー作用であることを学習する。なかでも有害な男性性、不安定な男性性があることを学習する。加害も含めて「悩み」として吐露できる、つまり言語化できる男性相談の窓口が有益だと考え実践してきた。問題を問題として認識させず暴力の方へと行動化させる男性性ジェンダーを転換する選択肢があまりにも少なすぎると考えてきたからだ。まずは相談に来ること、暴力と加害を「悩み」として言語化することだ。

男性性ジェンダー作用が関係していることの背景についてまとめておこう。息子と父親と暴力の関係を巡っての整理である。

第1に、娘には暴力を振るわないという騎士道的な男性性ジェンダー意識を父親が持っていることが多い。一応は暴力抑止的に機能

するかもしれない。しかしジェンダー意識そのものである。女性を守るべき存在とし、庇護する立ち位置にある男らしい意識でもある。逆に、そこには、息子には暴力を用いても良いという思考の偏りがあり、暴力のダブルスタンダードとして克服の対象にする。

第2に、息子の男性性ジェンダーが喚起され、それを賦活させるように機能している場合がある。そのことを意識してもらう。息子は父親への苛立ちがあり、復讐的な心理をもつことがある。DVで被害を受ける母を守ることができなかったという後悔の念を息子に抱かせる。暴力性を喚起させることになる。

第3に、自らが息子だった子ども時代、父親からの暴力があったことを思いだしてもらう。相談に来る男性は一様に暴力が連鎖している。そうでない男性はそもそも来談する必要はないからだ。さらに自分の息子へと、三世代に渡り暴力が続くことになるので、自分の代で脱暴力の試みをすることは必要だと話題にする。

第4に、そうした育ちのなかの男性性ジェンダーが父親への対抗的アイデンティティとして機能し、暴力に耐え、今の自分があるという男らしさ意識をつくりだしてきたのではないかと省察を深めていく。男らしく暴力を乗り越えたという克己の精神は暴力の肯定につながる。

第5に、沈黙である。男性性ジェンダーは、相談しない、できない、したくないという意識をもたらすことがある。そうした物語化に気づいていく。

こうして、息子と父親と男性性ジェンダーの交差をとおして、親子三世代にわたり暴力が続くことに気づいていく。暴力を介在させて男性性ジェンダー意識が再生産されていく

過程がここにある。

8. 被害と加害の二軸を超えて

こうして Z 世代との対話が始まる。脱暴力へのアンラーンの取り組みは、恋人間暴力の予防や防止という直接的な課題だけではなく、世代間連鎖の解消と脱暴力への男性性ジェンダー視点の導入をとおして、次世代の家族形成や親密な関係性の構築の仕方という課題を視野に入れることになる。こうすると被害性の理解が深くなる。なかでも暴力を体験してきたけれども再生産していない男性の人生に学ぶことは大きい。脱暴力へのライフストーリーワークを実践してきたと言えるからである。家族の外部の役割が大きかったのではないかと想定している。

さらに、脱暴力にむけた第三者役割も抽出できるので、この要素も体系化したい。また、学校で学ぶことの役割や社会が Z 世代の価値形成に役立つような法化社会の途上であったこと、事件報道に際して的確で正確な認知を拡大させていくことで、認識的不正義の解消に役立つことも想定できる。これらは社会啓発や社会教育の既成の概念を超える取り組みのもとになる概念群だ。

こうして親密な関係性における暴力の被害と加害の二軸だけではない広い取り組みが可能になると考えている。「善き隣人」は「最初の援助者」を配置することに他ならないし、第 3 者介入は身近な日常に暴力防止の網の目をつくる初発の機能をもつことになる。メディアやネットの役割として認識的不正義の解消は大きい。

男性たちが加害行為を言葉にできることは責任を語る語彙と文脈が社会的にも共有され、個人としての行為責任を取り、親密な関係性

の再構築に向かうための場においてはじめて可能となる。自己のなかに脱暴力への責任と意思を語る言葉を持つことと、社会的な価値としての脱暴力や倫理、人権という社会の責務と課題が応答しあうことは共振する。社会は身近な集団であり、その組織文化が脱暴力に向けて動くこと、社会全体が脱暴力という価値を共有することが層を成して脱暴力へのアンラーンとなる。

この課題を、UNLEARN では「第 3 者介入」として定式化してきた。「自助・共助・公助」に加え、「近助(きんじょ)」とよく似た言い方である(山村武彦『近助の精神-近くの人が近くの人を助ける防災隣組』きんぎい、2012 年。氏は防災・危機管理のシンクタンク「防災システム研究所」を運営する)。

第 3 者介入は「善き隣人モデル」と重ねて「最初の支援者になる」ことを意味している。身近な第 3 者にできることはたくさんあるという考え方に基づいている(西井開 2022 年 7 月「恐怖するマジョリティ、揺れるバイスタンダー：性差別的なふるまいをした男性にどう関わるか」『現代思想』2022 年 7 月号)。

男性相談に特化した場も開設され、社会システムが脱暴力へのアンラーンをしなければならぬ時代となっている。暴力行為者個人の自責・引責と脱暴力の取り組みのなかに取り込むためにも、男性性ジェンダーというジェンダーバイアスを視野に入れた脱暴力実践の体系化を展望している。Z 世代として位置付けていくことが脱暴力社会の構想にとって極めて重要となる。

友田明美『新版いやされない脳-児童虐待と傷ついていく脳』(診断と治療社、2012年)

表 発達性トラウマ障害の診断基準

A 曝露	
小児期もしくは思春期早期に始まり1年以上続く複数回または持続的な有害体験	
1. 対人暴力をくり返し経験、目撃	
2. 保護的養育の破綻(反復的な養育者の交代、分離、情緒的虐待)	
B 情動制御困難、生理的制御の困難	
発達相応の覚醒制御能力がなく、以下の2つ以上に該当	
1. 極度な情動(恐怖、怒り、恥など)の調整や、堪えることの困難	
2. 身体機能の制御困難(睡眠、接触、排泄面における問題; 接触や音への過敏、鈍感; 日常における切り替え困難)	
3. 感覚、感情、体調への気づきの低下、解離	
4. 感情や体調についての表現力低下	
C 注意および行動制御の困難	
発達相応の注意持続、学習、ストレス対処の能力がなく、以下の3つ以上該当	
1. 脅威へのとらわれ、認識能力低下(安全や危険のサインを誤認するなど)	
2. 自己防衛能力低下(自暴自棄、スリル探求)	
3. 自己慰撫を目的とした不適応な企図(身体を揺するなどの律動的動き、強迫的自慰)	
4. 習慣性(故意または無意識)あるいは反射的自傷	
5. 目的をもって行動を開始、持続することの困難	
D 自己および関係性の制御困難	
発達相応の自意識や対人的かかわりの能力がなく、以下の3つ以上該当	
1. 養育者その他の大切な人の安全について拘泥(早熟な世話焼きなど)したり、それらの人物と分離した後の再会が我慢できない	
2. 自責感、無力感、無価値感、無能感、欠陥があるという感覚など、否定的自己感が継続	
3. 大人や仲間との親しい関係のなかで、極端な不信感や反抗が続く、あるいは相互交流を欠く	
4. 仲間、養育者、その他の大人への反応的な身体的暴力、言葉の暴力	
5. 親密な接触(性的あるいは肉体的親密さに限定しない)をもととする不適切な(過剰、あるいは見境のない)意図、または安全や保証を求めて仲間や大人に頼りすぎ	
6. 共感の気遣いを制御する能力のないことが以下で証拠づけられる。他者の苦痛の表現に対して共感しなかったり、堪えられなかったり、過剰反応を起こす	
E トラウマ後症状スペクトラム	
PTSDの3症状群(B, C, D)のうち少なくとも2つ以上の各群において、一つ以上の項目に該当する症状を呈する	
F 障害の期間	
上記基準のB~Eが6ヵ月以上持続	
G 機能的障害	
上記は、臨床的に有意な苦痛、あるいは以下の領域(学習、家族関係、仲間関係、法的領域、身体的健康面、就労面)の2つ以上にわたる機能的な支障の原因となっている	

*お詫び:「臨床社会学の方法」の連載ナンバリングが間違っていました。今号の「臨床社会学の方法(50)」が正しく、前回からとんでいます。内容は連続しております。

なかむら ただし
立命館大学特任教授・名誉教授／
一般社団法人 UNLEARN 代表理事
社会病理学・臨床社会学

2025年8月30日受理

カウンセリングのお作法 第44回

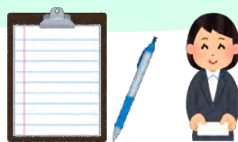
CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島 中島(水鳥)弘美

～ 支援の記録について(2) ～

初回面接



前回に続き、記録についてです。

支援を順調に効果的にすすめるために、面接の何に関して、どのように記録を残すか、初回面接当日、家族面接の社会的段階を中心に話します。

初回面接は情報の宝庫

面接の予約日時になると、ご家族が来所され、次々と記録すべきことがあります。

約90分のカウンセリングが始まる前に、担当者は、それまでに得られている記録、家族構成、紹介者、主訴等を再度確かめ、面接に臨みます。

初回面接の大きな目標は、家族との信頼関係の構築、ジョイニングです。

ご家族が到着すると、まずは受付、面接受付表の記入を依頼し、紹介状等を受け取ります。事務的な手続きをしているみなさんを見守ります。

これまではメールや電話でのかかわりでしたが、初めて直接お会いし、コミュニケーションをかわすなかで、「子どもさん、身長高いなあ」と、自然に得る情報も多々あります。もちろん、あらさがしをするのではなく、特徴に注目します。

また、ご家族同士の会話や行動からそれぞれのご家族の雰囲気把握します。

例えば、父母子ども(本人)の来所の場合を挙げてそのポイントを見てみましょう。

面接室に誰が最初に入室したか、どの椅子に座るのか場所を決めるとき、荷物をどうするかなど、家族がどのようなやりとりをしているのか、その様子を受けとめます。初めての場所でキョロキョロしておられる場合もあり、その場になじむまで、ご家族のペースにあわせて待ちます。

入室 父→母→本人 座席順番 父 本人 母

社交的段階あいさつ

面接が始まり、担当者はあいさつ自己紹介をします。

そのとき、名刺を手に「どなたにお渡ししましょうか」と伝えながら、お渡しします。紹介状を持参された場合は、紹介者からの情報提供についても触れ、紹介礼状を送ることも伝えます。

特に慎重が必要なのは、子どもさん本人への最初の話しかけです。子どもさんと信頼関係を作ることが初対面時の核となるからです。

子どもさんが話しても大丈夫そうであれば、こんにちとは話しかけます。しかし、不安そうな様子や、落ち着きなく座っているようなこともあります。来所することが負担になっていることも考えられるため、子どもさんがどのような心境にあるのかを想像します。学校からの指示で来所しているような場合には、家族そろっての参加をねぎらいます。

子どもさん本人の参加モチベーションに関する記録は、詳細に残します。

のちに、この様子がどのように変化するのかにも注目していきます。子どもさんの変化は急激に起こる場合もあるからです。

来所時に無表情で、全く話すことができない子どもさんも、面接の後半、徐々に表情がやわらぐようになることがあります。このような変化は、貴重なデータとなります。

家族構成図ジェノグラム

次に記録することは、家族構成と家族それぞれの呼び方です。

面接受付表には家族全員の名前が記されているので、表を見ながら、それぞれの名前、呼び方を確かめます。何かお名前に特徴がある場合は、名付けの由来をたずねることもあります。

家族の話題は、デリケートな内容を含む可能性があります。担当者にはわからない事情、オープンになっていない話があるかもしれません。そのため、家族の反応を確かめながら取り扱い、違和感がない場合は、おじいさん、おばあさんなど、特に親しくしている家族、親族や関係者についてうかがいます。

「どちら側のおばあさまですか」

と、家族構成図ジェノグラムに書き加えます。

「お近くにお住まいですか」

居住地などの情報も集め、関係者や協力者の全体像を把握をします。

どのような人々や環境の中でご家族が生活されているのかをつかむのですが、初回だけでなくのちの面接でもこの話題がでてくることがあります。

家族の行動パターン

話された内容そのものとともに、面接中におきていいることも記録します。

たとえば、誰かが話しているときのほかの家族の様子です。

担当者が何かを質問をして、子どもさんが話すとき、母の顔を見ながら話し、母もよく子どもを見てうなずく、そのとき父は、母子の様子をよくみている

この家族のよくある行動パターンなど、その場面の様子を記録に残すことが大切です。

初回面接では、全員が初めてのできごとの連続になります。

カウンセラーは、ご家族それぞれの行動、表情、しぐさなどに関心を向け、心境を推測し、バランスよく問いかけ、話を聴き、記録をします。

晩年

D・A・N 通信

No.13

2025. 05. 21 (78 歳 0 ヶ月) ～ 2025. 08. 20 (78 歳 3 ヶ月)

団 士郎

5/21

先週行った zoom による出版記念座談会のアーカイブを見た。二時間となかなか長い。しかしあっという間に見終えてしまった。自分が登場している時には、気が付いていないことが少なくないのに驚く。普段も渦中で話している時はそうなのかなあ。



5/22

ここ数日、気になっていた症状を片付けに、午前、午後と二ヶ所のクリニックに。共に私が案じた程のことはなく、お薬と予後の来院を指示された。一安心したところで、届いた無駄な買い物がかわいい。壁掛けのティッシュボックス。仕事場キッチンの彩り。



5/23

ストレッチの帰り道、おっ初日か！と観ることに。イントロの展開、難しいなあと思ったりしていた。三分の二くらいのところで、女性の二人連れが退席していった。トム・クルーズの映画でなかなかない事だと思ったが、分からなくもない。長尺なので私はトイレばかりが気になって..



5/24

札幌での仕事に前乗り。飛行機遅れのため、空港デスクで6月からの zoom 講座準備の続き。飛んだ時には荒天だったが、北の空は好天で大地がきれい。最近、チョコミントフェアに行ったら聞かされたが、さっぱり分からなかったの、見つけたこれを購入。ふーん、これが人気なのか。



5/26

この時期の北海道の美しさは、多様なミドリの濃淡。昨日無事にWSを終えて、楽しく会食した今日は、また近郊の未知のところを案内してもらった。ドライブの道中も、とにかくミドリにつきる感じだ。

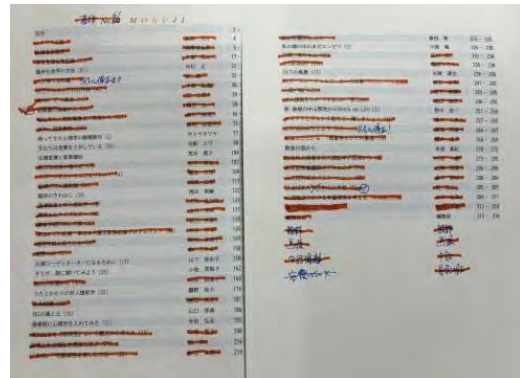


QP の頭文字の買い物記録がずらっと並んだカード明細が送られてきた。コンビニが多いが、クイックペイなんて使わないから心当たりがない。盗まれている。面倒だがカード会社に連絡、変更手続。医療機関でマイナ保険証にできますと言われ手続したら期限切れ。表記有効期間なのに役所に。時間泥棒め。

5/30

明日が対人援助学マガジン第61号の締め

切りだから、まだ大丈夫なのだが、こんなにたくさん原稿、執筆者短信が届いている。



5/31

サンダーバードは湖西線強風のため、琵琶湖線経由で敦賀へのアナウンス。20分以上遅れるので北陸新幹線への乗り換えは、後刻、車内放送で知らせると。京都の次の停車駅は敦賀なのだ。金沢に行くのに、何故こんなに面倒になってしまったのかと乗る度に思う。

6/1

七尾市での漫画展と講演会。駅前の展示を見てから広々としたきれいな会場に。思いがけず多くの人が集まってくださって、「故郷は要らないのか」のサブタイトルの話を一時間 40 分話してしまう。伝わったものがある感触。



6/3

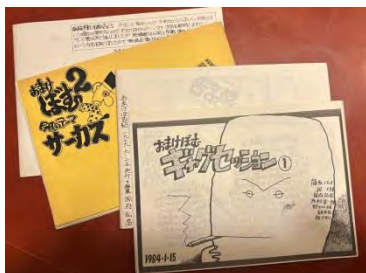
夕刻からは対人援助学マガジン第61号の編集会議に千葉、大谷がくる。それまでに届いた原稿の整理や、執筆者短信の編集を着々。しかし、その前に今月号の木陰の物語、新作第304話を仕上げておかねばならない。

日曜の夜、能登・七尾市からの帰路、そのまま仕事場に戻って着手。無事、納得の一話が完成。



6/4

漫画グループぼむ月例会。「おまけぼむ」とは、1970年代から80年頃に、印刷版の同人誌「ぼむ」とは別に作っていたコピー漫画誌。ここに名前の並ぶメンバーと今日も美味しいランチ、そして四方山話を夕刻まで。50年付き合いて、長いにも程がある。お互い成長はしてないよ、ほんま。



6/5

歳のノルマだと思っているから諦めて対応。今朝目覚めたら、気にはなっていた左足ふくらはぎが歩行を妨げる痛みがある。ストレッチの予約をキャンセルして整形外科に。仕事場か

ら100メートル以内のところにあるので、早々に出向いて待合室。16時には歯科の予約もある。やれやれ。



6/7 こんなところを通過して亀岡の学びの森へ。北村さん夫妻のところでもう11回目の家族トーク。快調に二時間話してしまった。終了後、参加していた大学院初期のクラスター院生Oさんが挨拶に来てくれた。久しぶりに話が聞きたいとHPで探して来たという。嬉しいことだ。



6/11

午後、LINE電話で大昔の院生との面談。時間はあるのだから、お役に立つならの気分だ。夕刻からは定例の草津家族勉強会。時間まで駅中のパン屋でベーコンポテトドッグを食べながら読書。「ケアと編集」はこれまで見聞きしてきた記憶が、あれこれ浮かび上がってくる本だ。



6/12

高校時代の友人女子とイノダコーヒーでランチしながら四方山話。60年以上の付き合いになるが、今日は若冲の話題に。その後、歯科の予約が入っているので待合室。暇だから来ているわけではないが、暇がなければ来ることもしない。高齢者のメンテナンス活動。



レイトショーで「ガール ウィズ ニードル」を観る。どこかで記憶に引っかかっていたタイトル。モノクロの四角い画面に展開する物語の最初から最後まで、ずっと不安と恐れが。しかもそれらは、スクリーンに漂っているだけでなく、こちらの内面にあるそれが引き出される感じなのだ。モノクロ映像、強いなあ。



6/13

楽しみにしていた鴨居玲展を「えき」美術館に。企画として発表されていたものがコロナ禍で延期になっていたもの。以前、石川県立美術館で見た絵がとても印象的だった。今日の

感想は、自分のことが好きな絵描きだなあというもの。悪口ではない。鴨居羊子の弟だと初めて知る。

6/14

午後から大阪のここでお話。終了後は週末の人の多さにうんざりして、さっさと帰路に。私の話はいつものようなものだが、ここが肝ですよ、猫のプロが言っているのに、利用者の少ない制度を思いついたりする役人の話が面白かった。



6/17

15年目になるのか、立命館大学東日本家族応援プロジェクト。今年参加のメンバーたちがこれまでの足跡をレビュー。報告を聞きながら時間の流れの中で変化して来たことを実感。風化するのではなく、時の記憶として変容し続ける大災害の記録だ。昨今の世界のきな臭さも、歴史の中にある記憶ではないか？繰り返すのはよそうよ。



6/20

膳所駅は金曜の朝なのに混雑。JRはまたどこかで何かあったようだ。そのまま京都駅でも混雑が著しい。インバウンドもあるが、今日のように暑いとウンザリ。弘前WSのために前日入りだが、伊丹空港のゲートまで来たら空

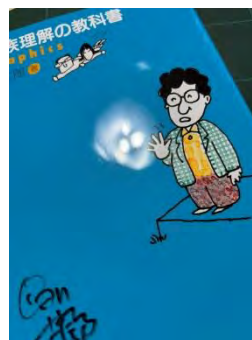
いていてホッとする。同じ地球上なのにここにはドローン攻撃も、ミサイル着弾の不安もない。



津軽半島龍飛岬付近をドライブに。函館に向けて新幹線が走って、在来線は災害後、復旧の目処なく廃線とか。海はどういうわけだか霧。義経寺から港町を見下ろす。二度目になる鶴の舞橋で岩木山をバックに。長く来ているのに弘前、五所川原、つがる市など、位置関係がピンときていない。吉幾三「津軽平野」が頭の中で響く。

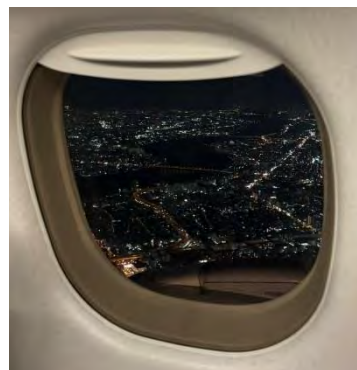
6/21

最終告知。「家族理解の教科書 graphics」の zoom 講座がいよいよ6月27日開講です。教科書を作ったのだから授業もという流れですが、楽しく聞いていただけるものにしたいと思います。アーカイブもあるので、平日昼間の視聴勉強も可能です。ぜひ、ご参加ください。



6/21

海外旅行からの帰路、戦争の影響で迂回路をとったなどと知人の物騒な sns が。昨日、青森からの帰路、穏やかな伊丹上空の機窓。そんな時に、相変わらず連載漫画の下書きをしたり、zoom 家族講座の準備をしている。こうしていられる平和を確保し続けなければならぬのだが、そのために直接出来ることが少ないのが残念。



6/24 今週はいろんな人が訪ねてくるので、早めの対応を心がけていたら、もう今月の新作、第 305 話「誰が決める」が仕上がってしまった。何を決めるか、誰と決めるか、その混乱の話だ。



6/26

溜まっていく古新聞の山に弱りきって、長年購読し続けてきた新聞を止めた。デジタル版の契約をして記事は読んでいるが、やはり新聞の感じがしない。何度か配達版を再開しようかとも思ったが踏み切れなかった。そんな時にこれを知った。新聞がそのまま見られる紙面ビューア版。何かが復活する感じがした。



6/28

昨夜は zoom 講座の 1 回目だった。大勢に参加していただいて、「家族理解の教科書 graphics」をテキストに、できるだけ授業風にすすめた。そして今日、その資料と録画が配信されたので、次回準備のために見た。ところがその間に、居眠りをしてしまった。これはいかん！と思ったが、イヤイヤ、まさしく授業ではないかと得心した。



6/29

今週は火曜、木曜、土曜と長い付き合いの人達が訪ねてきてくれた。28 年前、京都市内にワンルームの仕事場を設定したのは、こんな風に知人が気安く会いに来られるようにとの目論見だった。そしていい歳になった今も、手土産片手にいろんな年代の来客がある。嬉しいことだし、少しは先見の明があったと思う。



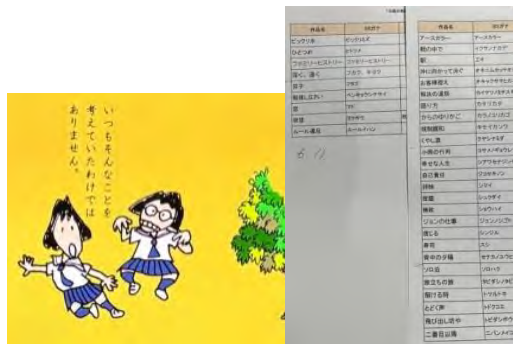
7/1

週末の浜松 WS の準備ができたので、20 時からのレイトショーで「国宝」を観た。三時間なのでトイレが気になったが、大丈夫だった。でもそれより、平日夜の回が満席で、23 時過ぎにこんなにゾロゾロ帰路に着く人たち。あちこちで話題にしているのを耳にする。



7/3

現在、掛け軸版木陰の物語は 35 作品ある。その中から今、11 作品と 6 作品が能登半島と福島県巡回展に動いている。作品が働いているのだから、私も仕事しなくちゃと、新掛け軸制作を始めた。これは三十六作目「成人の日」の一コマ。気に入った絵は対人援助学マガジンの表紙に使ったりもする。



7/4

仕事場を 5 時半頃に出て、早めの夕飯を済ませ、カフェでこの雑誌を楽しんでいる。70、80、90 年代の映画の話がいっぱい。好きなイラストレーターの表紙も、登場する映画タイトルも、活発に観ていた頃のものばかり。再見リストが出来そうだ。思い出したことがいくつもあった。



7/5

大混雑の京都駅をぬけ、新幹線名古屋乗り換えで浜松市へ。H くんが世話人で浜松 WS 五時間。13 回目だとか。そして夜はこれ。旨い！浜松の鰻屋は相当あちこち行ったなあ。



7/6

H 君のガイドで浜松近郊の興味深いところを二箇所。木下恵介記念館では山田太一さんの若かりし頃の写真を数枚見た。天龍地区の秋野不矩美術館は藤森照信建築の建物から面白い。最近、良いなと思う日本画家の作品はそれぞれ個性的。小森均は知らなかったが力強く面白い。



7/7

七夕。誰にも会わず、この先のプログラムの準備スケジュール作り。あれこれあるので点検しつつ直近のものから勤しむ。草津 ws、zoom 家族講座の二回目。京都国際社会福祉センター家族療法三日間 WS、zoom トークライブ 2025、盛岡(岩手)ws、立命館大学院二日間 6 コマ集中講座。そんな合間に聴き終えたのはこれ。



7/9

午後、遠方から友人が来訪。ランチして夕刻からの草津 WS に出向くまでの時間、仕事場であれこれ楽しい雑談に花が咲く。移動中に今聴いているのはこれ。発売時になんとなく手を出さなかった記憶が残っていた。かなり面白い。NHK大河ドラマ「べらぼう」は観ていないのだが、ちょっと気になる。草津プログラムは今期最終回。次は 10 月からスタート。1999 年から継続中だ。



7/13

昨夕刊にこんな記事を見かけた。「この史代マンガ展」、京都で開催中とある。知らないなあと思って調べると福知山だった。昔、家族と 11 年も住んでいた街。今、この史代さんが住んでいるという。観に行こうと思ったが、漫画の原画展って、あまり充実感がないことも多いしなあ・・・と懸念も。

暑い日曜だが、行くなら今日しかなかったので、泊まり込んだ仕事場を出て久々に福知山に。

JR 二条駅前には立憲民主党の演説会に野田代表が間もなく到着だとスピーカー音がうるさい。そうだと参院選、若者の関心が高いのだ聞くが、良き選択をと願う。



7/14

楽しみにしていたものが 2 ヶ月ほどかかって届いた。60 年近いファン歴のカッサンドル。10 年程前に埼玉で観た大ポスター展には感激した。中でも好きで、仕事場玄関にポストカードをピンナップしている作品をネット販売で見つけたので注文してあった。自宅ギャラリーゾーンが充実。





7/15

面白いことを発見。今年五月二〇日、同じ日に発行された二冊が、共に本の途中で用紙をグレーに変更してアクセントを。



7/16

期日前投票にいつもとは違うここに来てみた。結構な人が来ている感じがする。私のように車に乗らない人間は、移動ルートをいつもプランして動かねばならない。その間に、にわか雨もあり、なかなかである。投票後、湖西線ルートで京都に来てストレッチに。そして馴染みの店でランチ。このあとは仕事場で週末、来週のあれこれを準備。



7/18

本日から三日間のプログラム。京都国際社会福祉センターの家族療法ワークショップ 2025step1。全国各地から 36 名参加は会場からすると満杯。H、C、S と私がスタッフ。30 年以上、いい意味で変わり映えのしない講座ができている確信。



7/20

WS 三日目。最後の相互フィードバックの時間を俯瞰で。終始、みんな活発で意欲的だった。毎回のところもあるが、ちょっとしたことで今回、なんか面白かったなあと感じたりする。何故かはわからないが、ライブでやっている、そういう瞬間があるよねえ。みなさん、ご苦労様。



7/21

俳優座劇場がなくなった記事を見て思い出した。大昔、いつ頃だろう。NHK のドラマ「事件記者」で滝田祐介という役者が大好きになった。俳優座に所属とかで、東京に行く機会を見つけて劇場に足を運んだ。演目が何だっ

たか忘れたが、サーベルを腰にした役だった。それに足を引っ掛けて彼が転倒した。ドキドキしてしまって客席でうろたえた。それ以外は何も覚えていない。



7/23

今夜のトークライブ、準備にいろいろ考えた割に出来はまあまあだった。そう感じた理由は最近、話すのが下手になってきた気がするということと関わっている。軽やかさが減った気がしたので、意識してみたのだがバラバラな感じになってしまった。聞いてくれた人がどう感じたかは分からないが。



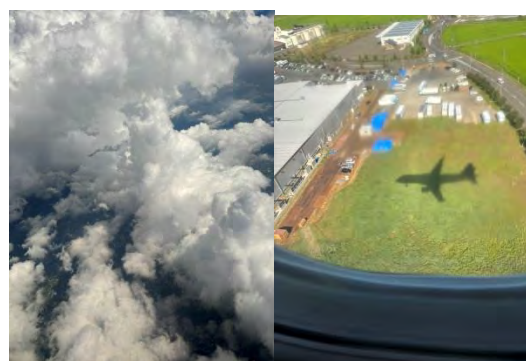
7/24

マンション管理組合とか、地域の自治会活動などに関心がある。積極的なわけではないが、役員とかニュース発行にも関わった。大規模マンションの長期的管理など関係なかったが、これを読んでみていろいろ考えた。管理費の不正流用とかの話だろうと思っていたが、かなり違って面白かった。



7/25

雲が湧く大阪から機影がくっきり日差しの盛岡へ。年に一度来るようになって3年。青森、山形、そして岩手も定例化している。しかし暑い。北海道で四十度かもとか言っていたから、東北は涼しいなんて昔話。



7/26

盛岡WS開催。初参加が半分以上で若い年代が多い。家族理解の教科書 graphics を手にしてくれている人がたくさん。児童相談所の人たちが多勢来てくれた。盛岡市勤労福祉会館の大ホールを22人で使用。他の適当なサイズの会議室は空いているが冷房がないのだそう。東北の古い建物のアルアルだ。



7/27

盛岡まで来ているのだから、知らないところ
にと思ったが、観光名所は結構みている。そこ
で県立美術館に。まず建物が素敵だった。常
設展示が船越桂の新収蔵品のお披露目。な
かなかいい。企画展も見たが、Perfume コス
チューム展なんて名前くらいしか知らない爺様
にはデパートの婦人服売り場と同じだった。ア
チャー



7/29

昨日、今日の二日間 6 コマ、立命館大学茨
木キャンパスで家族療法の集中講座。8 人(7
人)の学生さん相手に、家族理解について、で
きるだけ具体化の技術をエクササイズ。だが、
つつい話してしまう。木陰の物語も含めて、
家族について、まだ子供時代しかない多くの
学生に届くものは何だろうか。



7/30

audible でこんなに楽しい読書？いや聴書
も珍しい。「僕には鳥の言葉がわかる」だって
鳥の鳴き声が本文中の解説に含まれていて
聞けるのだから。書店で見たら巻末の QR コ
ードで聞ける工夫がしてあったが、これは
audible の勝利だなあ。平易な文章なのだが
若い研究者のワクワクがそのまま伝わってき
て楽しい！



7/31

勝手に届く写真アプリに記憶を呼び覚まされ
る。そうか 5 年前になるのか。抗がん剤点滴
投与を受けながら自宅で末期がん療養中だっ
た妻が吐血、下血で倒れた。驚いたが、シャ
ワーと着替えをさせてから救急車を呼んだ。そ
の刻々を撮っているのだからパニックってはい
なかった。本人にどうして欲しいかを聴いて対

応していた。あのコロナ渦中に病人を抱えているのは、制限も多く大変だった。そして妻はこの 12 日後に亡くなった



8/2

昨夜は家族理解 zoom 講座の三回目。調子が落ち着いてきたかな。今日は暑い中を京都、聖護院御殿荘に出向いて、日本生活教育連盟研究会で講演。程よい人数に熱心に聴いてもらえたので調子をあげすぎ。直らん癖だが、まあ良からう。新刊も家族の練習問題第 9 巻もたくさん買ってもらえて嬉しい。



8/4

昨晩は遠方からの来客あり。今日も午後から長い付き合いの旧友 2 人が来訪。四時間ほど話して、場所をかえて夕飯。よく利用するスペイン料理屋でおまかせメニュー。タパスを撮っただけで、後は食い終わるまで気づかず。楽しい三時間のディナータイム。お爺が 3 人、話の種も尽きずによく喋るもんだ。



8/5

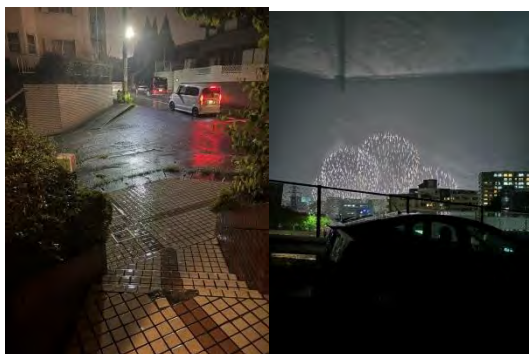
一つずつするべき事をして過ごす。連載のネタがだんだん煮詰まってくる。長らく経験したことのない感覚だ。やはり物を作り出す力は落ちてゆくのか。ならば、変化を考えることだろう。こういう時には、幅を広げた新規企画を自分に課すことかな。思ったようにいかないことがチョコチョコ出てくるなあ。



8/8

18 時頃、相当な雨音がしていた。今日は琵琶湖花火大会なので、人出を避けて自宅に引っ込んでいた。どうなるのか？と思いつつ、夕飯を食べていると花火の音が。雨は止んだのか？と外に出たら、ザアザア降っている。雨の花火大会なんて記憶にない。住宅地内の見

えるところまで傘をさして行ってみたが、傘の雨音が激しい。



8/9

今日は東京神田で定例のワークショップ。16人の参加で賑やかに楽しく学んでもらう。本日の会場セッティングには演台があって、立って講義する流れになった。最近を着席で進めることが多かったんだが、まあこれでやってみるかと思った。その結果、えらくピッチが上がった。夏休みの新幹線は満席だった。



8/10

バス停には誰もいない JR 外房線土気駅前。噂に聞く写実画ばかりのホキ美術館に来た。



思いがけず入場者が多い。人物画が主でまるで写真みたい、なら写真でいいわけだから。

作家によって超リアルティストが異なる。撮影禁止だが、昆虫の絵が素晴らしかった。

千葉から京葉線経由で東京駅に戻ったら、ステーションギャラリーでこれをやっていた。覗いてみたら、これまで知っている藤田嗣治とは違った様々な姿を知ることになった。

大昔、秋田の平野美術館に展示されていた二十メートル超えの「秋田の行事」をみて以来、いろんなところで作品を目にしてきたが、今回の写真はなかなか面白い。



8/11

明日は妻の命日なので竹中師がお参りに来てくれる。お花をと思ったが、あまり法事っぽく白いのもなあと思って、花屋さんと相談してこんなのにした。

家にいるので久々にスロークッカー調理。貰い物の美味しそうな秋刀魚の佃煮があったので、白だしで大根を煮込んで、合わせて二時間コトコト。大根がメチャ美味しい。



最近、Netflix で楽しめたのはこれ。顔の見えない相手を声だけで選び合って、ボーカルバンドを作っていく米国のオーディション物だ。でもどうして、世界配信の「ビルディング ザ バンド」を「ブラインド・バンド」なんてタイトルに変えるかなあ。



8/15

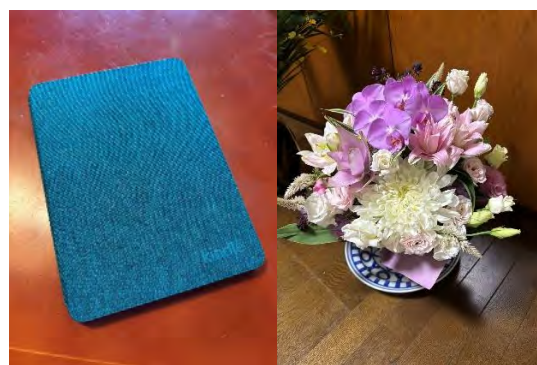
たまにはこんなものにも手を出してみるかと思った。一部を読んだだけだが、今へのきっかけをもらったところに重なる、とても興味深いインタビューが。そして、そんなことには関心がないから距離をおいた認識も。私はやはり現実場面の中程を歩く人々に目が向いた、実用性 1 番の人間だ。



8/16

お盆の人出と暑さから逃れながら。これは Kindle で読もうと思った本があったので、久々に本体再購入。対人援助学マガジンにもう一本連載をしようと思い立って着手、快調。

で、仕事場に籠っていたら、自宅にお花を届けていただいたのを受け取り遅れ。大文字の混雑時間帯を避けて夕刻までに帰宅して、クール便受け取り、大丈夫だった、ホッ。



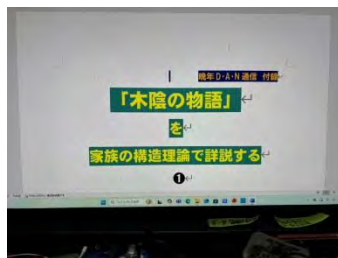
8/18

昨年ハマっているブドウ、藤稰(ふじみのり)。美味しさなんて好みだからゴタクを言うこともないのだが。大粒を口に入れて噛むと果汁が広がる。皮と実の間が本当に美味しい。一度に食べないで、冷蔵庫に入れておいて、前を通るたびに一粒口に。すると1日に何回も何回も美味しい。



8/19

孫と帰省の予定だった娘が発熱でコロナが判明。残念ながら中止になった。一週間空けてあったので、文字通りスケジュール空白の夏休みになった。なので月末から月初めにかけての予定を前倒し作業。マガジンの新連載も仕上げた。次号 62 号から連載します。ご覧ください。



8/20

予定がなくなったので、ならばと「ジュラシック・ワールド」に。スカーレット・ヨハンソンが素敵だった。お昼を食べて、新作原稿に取り掛かろうと、いつものタリーズに入ったら、久々の中村正さん。なかなか会う機会がなかったが、京都はこんな偶然があるくらいに狭い街。しばし歓談。



「木陰の物語」

を

家族の構造理論で詳説する

1

団士郎

こんな事を今更ここで述べるまでもないことかもしれないが、書いておく。

物事の判断において、右が成功で左が失敗という分岐点があり、そこで有効に機能できる専門家がいるのなら、誰もがその人に頼りたくなるのは分かる。しかし実際は、右を選んでも、左を選んでも茨の道であることが珍しくない。だからといってどちらも選ばず、モラトリアムなどと言ってすむ時間がそうあるわけではない。選ばないままという選択がもたらすその後の人生への影響が結構厳しいことも人は気づいている。

正解があるものなら、教えて貰いたいと思う気持ちは理解できる。しかし、人生にそんなものはないことが明らかである時点で、私達は右を選ぼうと、左を選ぼうと、苦労も楽しみもある道を歩み続けるのだということは分かっている。

どちらが良いかという選択は、どちらが正解かの選択ではなく、どちらがその後の己の歩みににとって有益かの課題のようである。無論、この有益さもその時点でどうかと言うことなのだが。十年、二十年後に初めて分かる選択の正しさも存在するのだから。そう考えられたら、誰かに答を教えて貰いたがる自分を吹っ切ることが出来るのではないだろうか。つまりそれは、細分化された専門性の話ではなく、人生の選択という、とても普遍的で、脈々と繰り返されてきた人の生の個々人の課題だからである。

何も起こらない人生などないことを噛みしめ、「何故、自分だけ…」と思ってしまった時には、「そう語るほどに自分は、他者の人生を理解しているだろうか？」と問いかけてみると良い。そうすれば、上手くやっている人を「運のいい人…」「そんなやり方を知っている人…」などと簡単に考えてしまっている自分の浅はかさに思いが及ぶだろう。何も起きなかった人など希なのだ。

自分のことしか考えられないから、自分が一番大変だと思うのである。生きてゆくとは…が考えられたら結論は、人はそれぞれみんな大変だ。そんな中で皆、よくやっているなあということになるだろう。

では人が選択を迫られたときに、持ち合わせていたい力とは何だろう。それを私は、家族の構造的特徴を踏まえた自己理解力と家族理解力だと考えてきた。

自分(達)はこれまで何をしてきたのだろう。その結果、どういう状況を形成しているのだろう。これを普遍化して定義づけられると、対応策にも類型化が可能になる。

しばしば人は、「私のことを、他人に分かるはずがない」などと呟く。しかし、そう思っている人が、自分のことだけは分かっていると考えるのは思い上がりか誤解だ。自分の思うようには他人は分かってくれないが、自分のことも上手くやれないあなたよりは、分かっているかもしれない。こう考えるのが合理的思考というものである。

右か左か、歩み始めたら又、右か左か、これを繰り返していると、いつまで経っても左右の分岐点である。丁半博打で永遠に勝ち続けたいと願うような荒唐無稽さを人生に持ち込むことになってしまう。私達はそんなことをしているのではない。

右を選ぼうと左を選ぼうと、そこには意図と意味が発生する。それは新たな展開への扉である。期待したものになるか、思いがけないものになるかはやってみなければ分からない。分かるのは、自分はどのような選択をする人間であるかだけである。そして結果(本当は、途中経過に過ぎないのだが)は出る。

そこに個性(癖、パターン)があることが分かったら、問題の困難さや複雑さではなく、立ち向かう側(自分)の癖、傾向を読み取ることは可能だ。繰り返される失敗があるのなら、根本的原因など考える必要はない。明らかにになった失敗のパターンを変えればいい。

一番分かりやすい変更は、何とかしようと繰り返してきた努力を止めることだろうか？ 頑張って何とかしようとするから失敗に落胆するのであるとしたら、何もしなければ落胆もない。さらに、十分考えて下した結論に基づく行動であったが故に、失敗のダメージも大きくなる。だったら、よく考えない思いつきで行動してしまえばよい。結果が駄目でも、「まあ、よく考えもしないで思いつきで動いたのだから、仕方がないか」と思えばダメージはない。サイコロの目で決めていれば、深く反省する必要もない。あらゆる事態は流転する。

「下手な考え休むに似たり」と昔の人は言っているにもかかわらず、日頃あまり考える習慣のない者ほど、困った時だけ真剣に考えている気になりやすい。そんな考えにいかほどの値打ちもないことは誰もが分かっているが、本人だけは気がつけない。そして悩むのである。

軽はずみな行動変化は、よく考えた末の行動が起こす失敗と比較して、罪は軽い。ダメモトと思える軽さは、変化のチャンスたり得る。

と、まあ、こんなことをクドクド述べておいて、ぼつぼつ始めるのがこれだ。 **家族理解入門—家族の構造理論を活かす—**(中央法規出版)の「続編」として、『**家族理解の教科書/Graphics**』を今年、2025年5月に発行した。一冊目は家族の構造について、例を挙げながら細かく述べた。実際の家族を提示して、この何処に構造的特徴が見られるかを解説した。「構造理論」の理解のために多くの家族に登場して貰った。

二冊目では、マンガ『木陰の物語』の中に発見できる構造的特徴を読みとれるよう、「境界」「サブシステム」「パワー」のキーワード順に選んだ物語を見て貰って解説をした。

そして対人援助学マガジンの連載企画として第三弾にこれを持ってきた。二冊目同様に『木陰の物語』を見て貰って、そこに含まれた家族の構造的課題や論点をあれこれ考える。私はこの家族の課題は何であると考えたのか。そして、どんな取り組みをプランしたのかななどを述べる。

家族は千差万別で、同じケースなど一つもない。だから処方箋もみんな異なるのが筋である。しかし同時に家族は結構似通っているとも言える。その辺の所を明らかにしていけたらと考えている。



古い友人からメールが届いて、
ちよつと時間を
取って
くれないか
という

珍しいことがあるものだ、
約束をした



「聞きたいことが二つあって、
一つはまあ
良いこと
なんだけど……」
と話し始めた。



三十三歳になる次男が突然、
「赤ん坊が生まれることに
なったから結婚する。
ついては相手の親に
会って欲しい」
と言った。



告げる時

in the shade of family tree

木陰の物語



団 士郎

十八歳で職人に弟子入りし、
今は独立して二人ほど人も
使って仕事をしている。



「目出度いじゃないか」

「まあそうなんだけど、
順序が違う……」

と古めかしいことを言う



先方に会ったところ、
奥さんを早くに
亡くした、
父と姉妹
三人家族の
長女だった。



東北出身の彼女は、
まだ先のことだが
出産は、自分の
身内のいる
故郷で
したいと言っている。





「じつは最近知り合いで、
初産に実家に戻って、
そのまま帰って
こなくて離婚した
者がある。
そういう事って、
あるのか？」

そういえば私も最近、相談室で
三十代前半の男性から受けたの
が、まったく同じ中味だったこと
を思い出した。

多くはないけど
ない話でもないなあ

うちも
そうなのたり
しないかな...

そんなとまで
考えなくて
いいよ!

それより
ふたっ目は
なに?

「三十六歳の兄貴が独身で一緒に
住んで居るんだけどね...」

「まじめな奴なんだが、
転職歴が三回あって、
今の仕事は四つ目なんだ」

その彼が、
「弟の嬉しい話の続きで
悪いんだけど...」
と話し始めたという。

そもそも、そんな風に
家族四人が揃って話をしたことな
ど二十年以上、記憶にないという。

父親である彼は
大学卒業後、
大手繊維関係
の会社に勤めた。

しかし長いあいだ、
地方の子会社に
出向を命じられ、
息子達の十代半ばから
二十代前半は
単身赴任だった。

本社に戻れたと思ったのもつかの
間、レストランにあう。

そして再就職した会社の定年退職
が六十歳の誕生日だったそうだ。



その家族会議が行われたのは、彼が無職となり、雇用保険の短期給付を受けながら、実際は在宅していることが多くなり始めた矢先だった。



長男は新しく働くことになった会社の新人研修で忙しくしていたらしい。



ところがそんな業務中に、時々頭痛がして注意が飛んでしまうことがあり、ミスを重ねて不安になった。



街中で「心療内科」の看板を見つけて受診し、「軽い鬱病」との診断書をもらって、退職を決心し、既にそれを郵送し、電話で退職の意も伝えたという。



体調の異変を感じた息子なりに、受診も含めて行動しているのだが、何か適切ではない気がしてならないという



診断結果について今ここで何も言えないが、確かに、不安からの受診、そして退職願と、少々違和感を感じさせる。



多くの場合、こういう経過には、親身になってくれる相談相手や意見が登場するものだ。



間違っているとは言えないかもしれないが、大人の用心深さというか、周到さに欠けている気がした。



父親としてのお前の姿が見えないのよなー





長男も高校卒業後、
進学は希望せず、
自分の意思で
就職を決めた。



両親は共に
大卒だから、
兄弟二人とも
この選択も
めずらしい。



最初の会社は倒産、二つめ退職は
不況の折、人員整理の対象を高卒
に絞られてのことだという。



話を聞きながら、
十八歳から一人で
頑張ってきた
息子の疲れは
もつともだと
思えてきた。



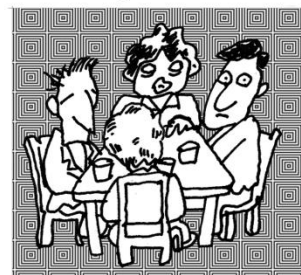
思春期ずっと、
不在の父と
多忙な母の下で、
誰にも迷惑をかけず、
一人で頑張っている
青年が目に見えんだ。



そんな彼が、
父親が定年退職を
迎えたと同時に、
自分も退職して
自宅にいる。



そして初めて、
自分のことを
家族の前で
打ち明けている。



20年ずいぶんだ
かもしれないが、今なら
家族に話せると長男は
思えたんじゃないかな。
知恵を出して父親を
してやれよ



そう言う、彼は笑いながら
涙を拭いた。



家族の構造理論で詳説する

境界崩し

思春期から付き合いのある友人の家族の話である。一つの課題、出来事で知る事になった家族ではない。



里帰り出産は一般名詞的に耳にする。私の妻も初産の時は、早めに実家に戻って近くの病院で出産した。

誕生の知らせを受けて病院に駆けつけ、その後もしばらく妻の実家で過ごす母子を訪ね

た。そういうことは一般的だろうと思っていた。

あれから半世紀近く経っているので、時代の常識も変わったかとも思う。しかし子どもの誕生や、それにまつわる新米ママのてんやわんやに、それほどの変化があるとは思えない。

登場した話題を時代の特徴と言って良いかどうかは分からなかったが、事象としては私も知らないことではなかった。

家族の構造的にこの問題を考えると、実家と夫婦の家族の「境界」問題である。昨今、いつまで経っても実家との繋がりが、不必要に強い人たちがいることが気になっていた。「内外の境界」という言い方をするが、ここがルーズだといつまで経っても独立した家族になれない。困りごとがあると直ぐ実家なのは、生家の親子関係がいつまでも強すぎるのである。

そしてどのような心情なのか、実家に里帰り出産で世話になった娘が、その後も結婚生活よりも、実家での子育て継続を望むという。その結果、離婚という結果になったとしても止むなしと、娘も両親も思っている。この心性は子ども側よりも、実家の両親の特徴として見られやすいと聞く。新しい人間関係を築いてゆくのは骨の折れる仕事だ。そこで慣れ親しんだところに戻ってしまうのはあるタイプの家族のクセのようなモノだ。

出身家族のジェノグラムを描かせて貰ったら、子ども達が成人して就職、結婚等いろいろ在りながら、結局皆、実家に戻っていたりする人達がある。「凝集性」が強い家族特徴だと説明したりするが、この反対のバラバラな家族もある。思春期には、前者は心身症系の課題を、後者は非行系課題を持ちやすいと認識されている。

とはいえ共に、それで上手くいっているなら、口を挟む必要はない。上手くいっていないの

なら、その特徴の反対を実行してみることだ。
そこに意味のある変化が生まれる可能性は高い。

そもそも、そんな風に
家族四人が揃って話をしたことな
ど二十年以上、記憶にないという。



合同家族面接

家族療法を学び始めた頃、全家族面接をするのがとても魅力的だった。家族療法＝家族全員との面接ではないが、それまでの長い歴史で「個別面接」しか想定されていなかったカウンセリング世界に、『皆さんでいらして下さい』はどうなるのだろうと、とても興味深かった。

その連想が友人の話から浮かんできた。ことさら親子の対話などという必要もないが、息子二人が成人する経過に、一家四人で話し合った記憶が一度もないというのはやはり特徴的だ。

長期間の単身赴任という、当時の会社人間の宿命のような所もあった。だが、それほど尽くした会社でも、景気の先行き不透明さにリストラを敢行する。友人はそこに巻き込まれ、それまでは考えたこともなかった選択をする。

結婚が早く、同僚達の家庭と比較して、子ども達も大きくなっているというので、自主退職を申し出ずにはおられなかったと言う。

まさに個人(家族)の生活が、社会(システ

ム)の動向に翻弄されてきた。こんな歴史を辿った父子関係を、パーソナルな要因だけで解釈してしまうのはピント外れだろう。

長男の今回の退職は父と同じ、不景気による人員削減で、高卒男子従業員の一律退職という乱暴な結果だった。

大卒だったら運命は違っていた。友人夫婦は大学時代に知り合って結婚しているから、二人の息子が共に高卒で仕事に就いているのは、当時の時代背景からすると友人達の間にも違和感を感じていた者はあった。

そして今、仮採用の会社で、調子を崩して、悩んだ結果、一人で心療内科を受診し、退職届を郵送している。どうして誰にも相談しなかったのだろう。出来なかったのだろうか？

診断結果について今ここで何も言えないが、確かに、不安からの受診、そして退職願と、少々違和感を感じさせる。



私達の多くは、誰にも言えないと思うような事態に遭遇することがある。そして、他の誰にも言えないけれど、この人にだけはと思える人や場所も持っていたりする。

36歳で職を失った独身の息子。高校卒業後、18年も頑張って働いてきた彼が、誰にも言えずに失職しているのを、個人の判断・選択だとは言えないだろう。身近なところに、リストラに遭い、再就職して、そこを定年退職した父親が居たのにである。

こういう経過を聞くと、ずっとそんな風に生きてきたのだろうなあと思う。父もいるし母もいる。自営職人である弟もいる。しかし、このような結果に至ってしまうまで、誰にも言わなかった。

言えなかったのは長男かもしれないが、それより、こんな状態にあっても言わなかった息子のイメージする家族を考えると胸が痛んだ。

長男が初めて、「弟のめでたい話の後で悪いけど…」と語り出したと聞かされたこの事態に私は、「何が何でも、おまえが力になってやらなきゃ、駄目だろう！」と思わず大声が出てしまった。

36歳になって初めて、家族に苦しい胸の内を吐露している長男に、友人が父親として果たしてやらなければならないことがあるだろう。

私は会ったこともない彼の息子に、カウンセラー稼業の人間として、それらしいアドバイスをする気にはなれなかった。

決心

誰に何を話すか？親には何を話すか？子どもに何を話すか？兄弟姉妹には何を話すか？

そんなことに一般的な答えがあるわけではない。それは家族それぞれ、親子それぞれだと言える。

しかしそのそれぞれさは、それぞれだから良いとだけ言っているのではない。それぞれだから、上手くいっているのならそれで良いと言っている。上手くいっていないのなら、それは習慣だったとしても変えた方が良い。

この底流にあるテーマが「決定」である。個人にも、家族にも、組織にも「決定」には癖が

ある。繰り返されているパターンといった方が良いかもしれない。それはなかなか変えがたい。

彼の息子は、上手くいっていないと分かっている、家族に相談する決断は出来なかった。相談したからと言って、結果がどうなったか分からないというのは「結果」に引きずられすぎている。

どうしよう・・・と途方に暮れたとき、一緒にさまよってくれる家族は、決して無意味ではない。連れだってさまようのと、一人さまようのは違う。息子は両親と一緒にさまよってくれるとは思えなかった。

あるいは、親に負担をかけるようなことが出来なかった。親がそれを負担に思うだろうなどと、いつから思うようになったのか。親に迷惑をかけず、自己責任で生きてきた息子。このような思春期の事例に少なからず出会ってきた。それを私は親子ともどものパワー不足だと思う。

ないパワーを指摘されたところで、出ては来はしない。どうすればいいかを専門家としてアドバイスが欲しいなどと言っていないで、おまえが息子の力になって一緒にさまよってやれと言った。

その真意が友人には届いたのだと思う。「頑張ってみるわ！」と涙を拭った彼が、グランビア京都のティールームで立ち上がった。

＊

そしてその後のことは、何も聞かなかった。ずっと後になって、私達の仲間内では彼が一番早く亡くなった。

その告別式で、喪主である長男の挨拶を受けた。元気でやっているんだ・・・と思いながら焼香をした。

2025／8／25

62・夏の暑さ対策

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

夏の暑さが尋常じゃなくなってきました

今年の夏は、室内から出られなかった方も多いと思います。労働者の熱中症対策も義務化され、園でもWBGT値（暑さ指数）を気にして数値の高い時間帯は園庭で遊ばないように、遊んでも時間を短くするように配慮することになりました。日々のプール活動は必須で、9月も延長しています。

弊園は樹木が多いため木陰で暑さをしのげるため、夏でも外あそびは実施しています。子どもたちも先生も顔を赤くしつつ、セミ捕りや砂場、乗り物などで楽しく遊んでいます。少しでも気温を下げるために日除けを毎年張っています。猛暑でも日陰は過ごしやすいため、これがあるとかかなり暑さが違います。

マガジン13号（2013年6月号）「紫外線から子どもたちを守る！」と題して、安価で日除けを作る方法を紹介しました。あれから12年、日本の夏は異常なほどの高温になり、夏は外で遊ばない園もある中、乳幼児の発達の要となる外あそびを保証し継続するためには、日除けの必要性はますます高まっています。

日除け改良版

マガジン13号紹介した日除けは、両側からロープを結んで引っ張っていましたが収納が非常に面倒でした。改良版は翌年にはできていたのですが、紹介は今年になってしまいました。改良点は簡単です、両サイドにスライド用のロープを設けて、スルスルと出したり引っ込めたりが容易になったことです。



<https://youtu.be/aNFat9Jh860>



<https://youtu.be/poukGxrfgXU>

動画をご覧になって「これいいな!」と思った方、

施設の庭の両側に1.8～2mぐらいの幅でロープを結ぶことができれば設置は可能です。遮光ネットの長さは自由に設定出来ますが、ロープの耐久性から7mぐらいが限界かもしれません。今年は直径3ミリのナイロンロープを使っていたのですが、風速4m程度の風で切れてしまいました。改良して4ミリのロープに代えたらしっかり保っています。

農業用の遮光ネットを利用するメリットは 安価はもちろんですが、軽さと安全性です

業務用のサンシェードは小さいスペースで1枚ずつ使用するには適していますが、園庭となると、製品が重くきめが細かいため風をもろに受け止めます、そのためロープの代わりにワイヤーを使ったり、専用の柱を立てたりしなければ持たないので**施工業者に依頼**することになり、**コストも相当かかります**。園庭にワイヤーを引っ張るのは、万が一切れたときに子どもに当たったりしたら重大な事故につながるので、自分はしたくありません。

軽いネットとロープ、竹で構成されているので、万が一強風で切れても、下にいる園児の被害は最小限に抑えられるます。いままでに何度か風でロープが切れて補修していますが、園児や職員がケガをしたことはありません。

基本設計は変わりませんので材料や詳しい手順は、対人援助学マガジン13号（2013年6月号）「幼稚園の現場から」<https://humanservices.jp/magazine/number13>も参考にしてみてください。（この号だけ読んでも作成は可能です）

材料をそろえましょう

材料はいずれもホームセンターや通販で手に入ります。主に農業用の道具売り場にあります。



材料①遮光ネットロール（幅2m×50m）

農業用の一般的な黒ネットでも良いですが、白とシルバーも発売されています。

幼稚園の庭なので雰囲気良く白（遮光率65%）を使っています。

遮光率によって値段が変わります。（65～70%で、¥25,000～）

製品名「ダイオクールホワイト」

【参考サイト/メーカー】 https://www.innovex-w.co.jp/products/kinds/agriculture/shade/cool_white.html

【参考サイト/楽天】 <https://item.rakuten.co.jp/otentosan/10007113/>

材料②蝶型パンチ

ホームセンターでは遮光ネットと一緒に売られています。

ネットをスライダのロープに通すために必ず必要なものです。

●ネットのサイドに80～100cm間隔で1個ずつ付けます。

（100個入り/¥2,680）

【参考サイト/楽天】

<https://item.rakuten.co.jp/nou-nou/0101138800002/>

材料③結束バンド

電気工事コーナーによく置いてあります。

15cm以上のものが良いでしょう。

蝶型パンチと竹棒をつなぐために使います。

●ネット1枚に12本以上必要です。

（100本入り/¥300～300）

材料④さらし竹（8分×2m）

ネットは2メートル幅ですが多少伸びるので、ピンと張るために3メートルのさらし竹を準備します。

竹を切るのにのこぎりを使いますが、最近は長い竹を運ぶのが厄介なので、ネットが少したるみですが1.8mを使っています。太さは8分以上が良いです。

●ネット1枚に前後の端に各1本ずつ必要です。

自分で運べるならホームセンターが断然安くてオススメです。

竹を運ぶために園の軽バン車にキャリアを付けました。

【参考サイト/楽天】 <https://item.rakuten.co.jp/hcvalor-eshop/trusco-2563220/>



材料⑤ロープ

日除けの長さ5m程度なら、ポリエチレンロープ3mm程度でOKでシーズン終了したら廃棄してました。ですが強度を上げるなら4mmをオススメします。

【注意】作業中に絡まるとたいへんなことになるので、真ん中の穴にペットボトルなどを入れて、ロープごと洗面器やバケツに入れて徐々に引き出すようにしましょう。

結び方もコツがいります（あとで説明します）

今年使ったのは、**パラコード4ミリ9芯**というタイプで、強度は申し分なく価格もポリロープと同じくらいで、結びやすくオススメでした。毎年破棄しなくても良いかもしれません。

【参考サイト/楽天】<https://item.rakuten.co.jp/ssn/10018740/>



4mm



材料⑥Dリング&カラビナ

両方とも必須ではなくあると便利的な材料です。

Dリングは遮光ネットを収納するときにスムーズに滑るために竹の両端に付けます。

カラビナはネットを前後に引っ張るために、園舎や木にワンタッチで結び付ける時に使いますが、無くても結べばOKです。

材料は以上です。

使う道具は、

メジャー、ハサミ、脚立、ペンチ（蝶番パンチを挟むとき力が必要なら）

作業用手袋（ロープを張るときの滑り止め）

竹を切るならのこぎりが必要

ロープを結ぶところが無いときは、ポールを設置したりと工事が必要になります。



Dリングは竹に固定し
スライダーロープが滑りやすくします。
蝶番パンチは摩擦で切れることがあるので

カラビナは日除けを前後に引っ張るときに
使用します。
木に結び付けたロープとジョイント。

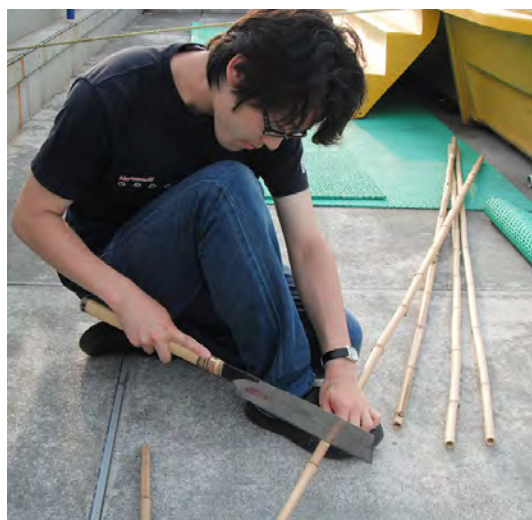




両サイドのロープがネットを支えていて、前後に張るために竹の両端にロープを結び園舎や樹木に結んでいます。

早速作りましょう！作業手順

- ①希望の長さに遮光ネットを切る。
- ②さらし竹を遮光ネットの幅2mに合わせて切る（チョイ長めでもOK、市販2m以下を使うときはこの作業は省かれます）



- ③日除けの端に蝶番パンチを10～20cm間隔で取り付け、結束バンドで竹に固定する。
このとき、両端にDリングを結束バンド2本で取り付けます。



④両サイドに間隔80cm～1mで蝶番パンチを付ける。

(地面にシートを敷いたまま作業します)



⑤メインのスライダーロープを準備する。

⑥スライダーロープを両サイドの蝶番パンチ・Dリングに通す。

途中に結び目や継ぎ目があると蝶番パンチに引っかけて通らなくなるので、結び付ける場所の形状も考慮して長めに、じゅうぶん余るぐらいの長さで切ってください。ポリ製なので、端はライターであぶってほけないようにしておくと良いです。

⑦ロープの端を所定の場所にくくりつけてテンションをかける。

この作業は2人以上でやったほうが無理なくできます。

できるだけ上の方に設置したいので、木の枝などは上の枝に引っかけて下で結んだりします。

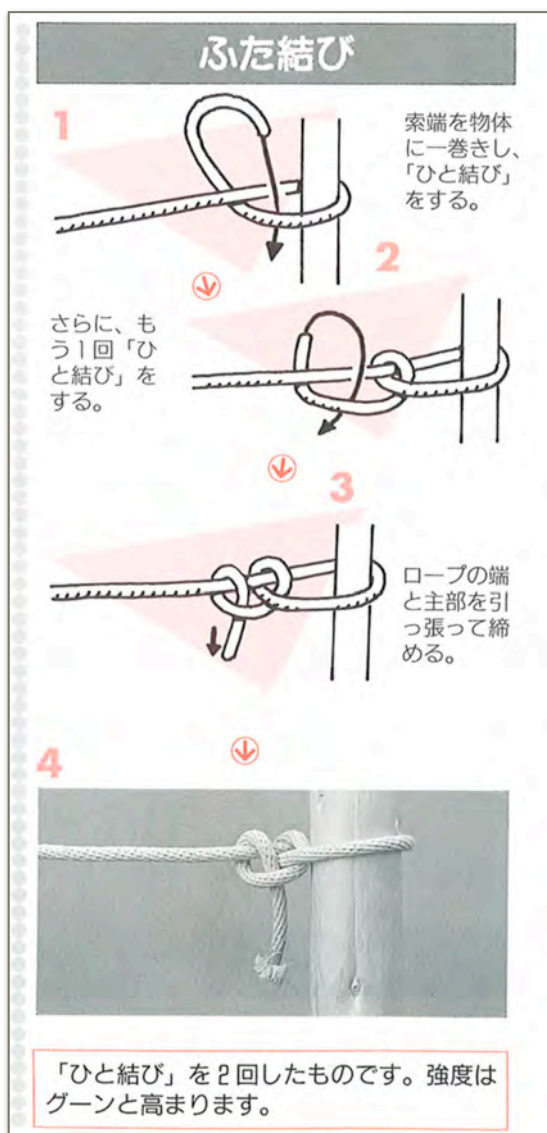
結び方は、ふた結び。ほぼこれだけでOK！

ネット検索するとたくさん出てくるので参考にして下さい。

ロープが短かったり切れて繋ぐときは

テグス結びです。

原町幼稚園では、6月の土日の休みに有志に出勤してもらって4人程度で作業しますが、慣れていることもあって、4時間ぐらいで4枚設置できます。



そのほか暑さ対策



ミストシャワー

門から園内へのエントランスに市販のミストを屋根に設置しました。入ってくる方がホッとして瞬間の涼を感じています。



散水機

市販の水撒き機も活躍します。
写真はカインズ製ですが、地面に直接置かずに台の上に置くことで距離も伸びて扱いが容易になります。
〔台の作り方〕
園芸用の植木鉢をのけるプランタースタンドに木製のジョイントすのこを丸く切り合わせて結束バンドで固定しています。
市販の散水機をすのこの隙間から結束バンドで固定。ホースの口が地面に付かないので砂が詰まったりしません。
工夫して暑さを乗り切りましょう！

「幼稚園の現場から」ラインナップ

- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1号 エピソード (2010.06) | 33号 (休載) |
| 2号 園児募集の時期 (2010.10) | 34号 働き方改革・一つの指針 (2018.09) |
| 3号 幼保一体化 (2010.12) | 35号 働き方改革って難しい (2018.12) |
| 4号 障害児の入園について (2011.03) | 36号 満3歳児保育について (2019.03) |
| 5号 幼稚園の求活 (2011.06) | 37号 満3歳児保育・その2 (2019.06) |
| 6号 幼稚園の夏休み (2011.09) | 38号 プールができなくなる！？ (2019.09) |
| 7号 怪我の対応 (2011.12) | 39号 跳び箱 (2019.12) |
| 8号 どうする保護者会？ (2012.03) | 40号 幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉 (2020.03) |
| 9号 おやこんぼ (2012.06) | 41号 コロナ休園 (2020.06) |
| 10号 これは、いじめ？ (2012.09) | 42号 コロナ休園から再開へ (2020.09) |
| 11号 イブニング保育 (2012.12) | 43号 ティーチャーチェンジ (2020.12) |
| 12号 ことばのカリキュラム (2013.03) | 44号 除菌あれこれやってみた (2021.03) |
| 13号 日除けの作り方 (2013.06) | 45号 マスクと表情 (2021.06) |
| 14号 避難訓練 (2013.09) | 46号 感染予防と情報発信 (2021.09) |
| 15号 子ども子育て支援新制度を考える | 47号 親子ソーラン節 (2021.12) |
| 16号 教育実習について (2014.03) | 48号 親子コンサート (2022.03) |
| 17号 自由参観 (2014.06) | 49号 うんちでたー！ (2022.06) |
| 18号 保護者アナログゲーム大会 (2014.09) | 50号 子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ (2022.09) |
| 19号 こんな誕生会はいかが？ (2014.12) | 51号 子どもが育つ園庭・その2 砂場 (2022.12) |
| 20号 I Tと幼児教育 (2015.03) | 52号 子どもが育つ園庭・その3 スライダーと Tonka (2023.03) |
| 21号 楽しく運動能力アップ (2015.06) | 53号 リスクと安全・園庭編 (2023.06) |
| 22号 (休載) | 54号 夏の音楽会・動画 (2023.09) |
| 23号 大量に焼き芋を焼く (2015.12) | 55号 クリスマス劇・動画 (2023.12) |
| 24号 お話あそび会その1 (発表会の意味) 2016.03 | 56号 こいのぼり製作 (2024.03) |
| 25号 お話あそび会その2 (取り組み実践) 2016.06 | 57号 この頃、気になること (2024.06) |
| 26号 お話あそび会その3 (保護者へ伝える) 2016.09 | 58号 お話あそび会動画解説《年少編》 (2024.09) |
| 27号 おもちゃのかえっこ (2016.12) | 59号 お話あそび会動画解説《年中編》 (2024.12) |
| 28号 月刊園便り「はらっぱ」 (2017.03) | 60号 お話あそび会動画紹介《年長編》 (2025.03) |
| 29号 石ころギャラリー (2017.06) | 61号 マルシェを開催しませんか (2025.06) |
| 30号 幼稚園の音楽教育 (その1・発表会) 2017.09 | 62号 夏の暑さ対策！日除け改良版 (2025.09) |
| 31号 幼稚園の音楽教育 (その2・こどものうた) 2017.12 | |
| 32号 幼稚園の音楽教育 (その3・コード奏法) 2018.03 | |

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.ed.jp



福祉系対人援助職養成の現場から

62

西川 友理

「かんがえるをあそぶじかん！」
について

私は昨年から、「かんがえるをあそぶじかん！」というイベントを不定期に開催しています。これはこどもも大人も参加できる哲学対話の場所です。

哲学対話というのは、普段の生活の中から生まれた疑問について、皆で対話をしながら考える場です。人の話をよく聞いて、自分の考えを確かめて、自分の意見を言う、という場です。哲学の知識は要りません。自分の生活の中で生まれてきた言葉で考えます。答えを出す必要はなく、正解があるわけでもなく、対話をするといいつつ、決して話をしなければならぬわけではなく、聞いているだけでもよいとする場です。多様な考えや価

値観に触れ、自分の考えに気付く場になります。

哲学対話は、アメリカの哲学者であるマシュー・リップマンが1970年代に始めた教育運動が始まりとされており、日本国内でも今様々な場所で開催されています。

数年間、いろんな場所に参加しましたが、上記のようなルールがある以外は、これといって決まったルールがあるわけではなく、場所によって進行のあり方が少しずつ違います。

私がおやこ哲学対話を実施する時には「喋っている人のお話を聞いてみる」「聞いているだけでもいい」「いつ出て行ってもいい、いつ戻ってきてもいい」等、場の安心を保つためのルールを3つほど提示します。それ以外は、どのように過

ごしていただいても OK, としており、大人も子どもも出来るだけ自分の居たい姿で居てもらいたいと思いながら実施しています。

ある日のおやこ哲学対話にて

「けんか」をテーマに哲学対話をした時のこと。会場には2、3才の子どもから、小学生、そしてその保護者の皆さん、大学生の参加者や、スタッフなど、総勢20名程の人がいました。

私は哲学対話を行う際、テーマについて、皆に問いを考えてもらうことが多いです。皆で沢山の問いを出した後に、どの問いについて考えるかを皆で話し合います。このプロセスにちょっと時間がかかるのですが、皆がメンバーの多様性を少しずつ知っていく、多様性に触れて心や頭が刺激される、とても面白い時間です。

この日はたくさん出た問いの中から「けんかって何をする事？」という問いについて皆で考えました。

「ボクシングとかのスポーツと何が違う？」「必ずしも蹴る殴るがあるわけじゃないよね？」…という問いから始まり、

「どんな理由でもケンカってしんどいって思うのはなんでだろう？」「え、私ケンカが出来るって素敵だと思うよ、しんどいってのはなにがしんどいと思うの？」…

皆がヒートアップして、様々に話が広

がります。

ふと、5歳の女の子 A ちゃんと目があいました。

「Aちゃんは、お友達とけんかしますか？」と聞くと、Aちゃんはパッと顔を輝かせ、「けんか、大好き！なぐりあいとか面白い！」

と言いました。あまりに嬉しそうでこちらも楽しくなってしまう、

「ほう！じゃあお友達とかもなぐるの？」と畳みかけると、Aちゃんは、「うんッ！」

と胸を張って頷きます。

「じゃあ…お母さんは？」

「お母さん、めっちゃなぐる！ボコボコになぐる！」

と言ってゲラゲラ笑っています。

「へえ、そうか！じゃあ園長先生は？」と聞くと、Aちゃんはぴたっと止まりました。

そして、真面目な顔で、「…なぐらへん（殴らない）。」と言いました。

「あれ、そうなんや。じゃあ…担任の先生は？」と聞くと、

「…なぐらへん。担任の先生とか、園長先生はなぐらへん。」

「へええ、なんでなんやろ、何が違うの？」と聞くと黙り込む A ちゃん。

そして1分ぐらいたって、ゆっくりと言いました。

「あのね、なぐり“あい”ができる相手

は、なぐれる。」

その場に居た子どもも大人も、それを聞いて

「……なるほど！」

と唸りました。

「じゃあ赤ちゃんとかは、なぐらへんのかあ…」

とつぶやくと、真面目な顔でうなずく A ちゃん。彼女の中の「対等」という概念の萌芽を見せていただいたような瞬間でした。

自分のおなかの中の声を把握する

「かんがえるをあそぶじかん」では、こんな宝物のような場面が、ゴロゴロころがっています。

議論に夢中になる子どもがいる一方、年齢の小さい子ども達はさすがに集中力が続かず、対話の輪から外れて遊びます（保育スタッフが遊び相手をします）。聞いていないようできて、ずっと外に行かずにお部屋にいて、耳だけこちらに向けている子どももいます。大人も同じように、ずっと聞いている人もいれば、何度も発言する人、ずっと黙っていて、おもむろに 1 度だけ話す人もいます。大学生は自分の身の置き所がよくわからないままに、やがて自分の振舞い方を気にしなくなっていき、いつのまにか話の中に入っていきます。

「大人の人に聞きたいんだけどさあ！」と大人に問いただす子どもも、

「子どもの人に教えてほしいんだけどさあ！」

と子どもに尋ねる大人もいます。

約 2 時間があっという間に過ぎます。

何度も参加してくださっている方から、「この場を重ねていくと、上手に言おうとか、うまくまとめようという気負いがなくなっていく」という感想をいただきました。何よりうれしい言葉です。「ただ自分であること、自分のお腹から生まれる言葉を、大事にすること」の経験が、自分の想いや感情を無視しないエクササイズになると考えます。

というのも、この日本社会で暮らしていると、自分の想いや考えよりも、周りの人の想いや自分の役割からくる“～せねばならない”“～すべきである”を優先させることがどうしても多くなってしまおうと思うためです。それによって、自分の想いや感情を口に出すことが難しくなるだけでなく、「あれ、私本当は何が好きなのかな」「どうしたいと思っているのかな」と人によってはそもそもの自分の想いや感情をきちんと把握すること自体が難しくなってしまう人もいるように感じています。そんな人は大人でも子どもでもいるのですが、特に大人には重症患者がいます。

“～すべき”“～せねば”を優先させる、カッコつけちゃう自分もすてき、だけど、カッコつけない自分も愛しい、と感じられる場だといいなと思いつつ、会を実施しています。

ある日の

「かんがえるをあそぶじかん！」

「え?! 今日の『かんがえるをあそぶ』、学生は私だけしかおらへんの? 私、勉強が嫌いやしテストの点数もいつも低いし、『かんがえる』なんて一番出来へんことやで?! それに子どもとのかかわりもほとんどしたことないし……ムリムリムリ!」

大学生になって約半年、保育を学ぶ学生 B さんです。

3 人で対応予定であった保育学生ボランティアが、諸々の事情で 2 名欠席になってしまい、よりによって一番「自信がないなあ、子どもの相手も上手く出来ないなあ」とブツブツ言っていた B さんだけの参加となってしまいました。

それまでの授業や授業内容で哲学対話がどんなものか、イマイチ把握できていなかった彼女は頭を抱えています。哲学対話の実践経験はなく、今回が初めて。

「難しく考えずに、ただ同じように参加をして、子どもが対話に飽きてきた様子を見たら、一緒に遊びに行ってくれたらいいんだよ。」

「え、そんなの、子どもが飽きてるかどうかなんて、どうやって判断するの、そんなんわからへん、ムリムリムリ……!」

と言ってもその時間は来てしまい、申込者である親子が来れば、関わりを始めざるを得ません。少々硬い表情で

「こんにちは…!」

と挨拶する B さん。幸い今日の参加者は

数組で、何とか対応できそうな人数です。

今日のテーマは「家族」。問いは「家族ってどういうひとのこと?」に決まりました。

「血が繋がっているひとのこと?」「でもおとうさんとおかあさんは血が繋がってないよ?」「一緒に住んでいるペットは家族?」「一緒に住んでいない、施設に入っているおばあちゃんは家族?」…

対話を進める中で、年齢が小さな子どもがなんとなく飽きてきて、お母さんにまとわりつきながら、

「お外、行きたい」

と、声に出してくれました。

その声を聞いた B さんは、こちらをちらっと見ます。私がうなずいたのを見て、子どもに「いっしょに行こうか」と声をかけ、子どもと共に外に遊びに出してくれました。

場に年齢が高い人たちばかりになった瞬間に、スッと一段深い話になります。B さんのおかげでお母さんたちが対話の場に居たままでいることができます。

暑い盛りの外遊びです。B さんは 15 分位で子ども達を連れて水分補給に戻ってきてくれました。またしばらく、子ども達はお部屋の中で過ごします。対話に関わったり関わらなかったり、思い思いの姿で過ごします。そしてまたもや「お外に行く」とのこと。

B さんは次はもうこちらに目配せをせず「ほないこか」と自分で声をかけて、子どもについていきました。

しばらくして、一番小さい子どもを抱っこして戻ってきた B さん。

「あの、ちょっとコケてしまって、泣いちゃったんです……」

とのこと。ざっと見たところ、キズもなく、頭を打ったわけでもないようです。

「すみません……」

とこどもの保護者に謝罪する B さん。

「大丈夫よ、よくあることよ」

と言ってくれる保護者の方。

やがて終了時間がきました。

終了後の片づけをしながら、B さんにどうだった？と聞きました。

「なんか、2 時間あっという間やった。」
とのこと。

「〇オの子ってあんなに色々考えて、ちゃんと言葉で言えるんやなって思って…」

「こっちで〇君はこんな遊びをするし、〇ちゃんはこうしてたし…」

と、子どもとのかかわりの話、さらには「親戚ってどこまで家族なのかな…私はこう思うんだけど…」

「うちの家族はさ…」

と、対話の内容についても話します。

もともとお喋りな B さんですが、それにしてもずっと話しています。片付けが終わり、帰路につき、帰り道が分かれる瞬間まで、ずっと話していました。

参加者はもちろん、スタッフにも、巨大なお土産が頭の中に発生するのが哲学対話です。

B さんは子どもと関われるか不安だったようですが、遊び相手をし、コケた子どもを抱きかかえ、対話にも参加し、そしていろいろと考えながら、この数時間を過ごすことが出来ました。

「専門職としてどうするか」と 「私自身としてどうあるか」

目を閉じていて周りが見えない時、手を伸ばして、誰かや何かに触れることで、自分の手のありかを実感的に理解する。対話とは、そのような場面に似ていると思います。同じような手に出会って安心したり、よい触り心地や悪い触り心地を感じてみたり、相手に合わせて自分の手の形や触り方を変えてみたり……時には何かに触れて初めて、自分の手が思わぬ形や温度になっていることに気付いて驚くこともあります。

保育士や社会福祉士等、福祉系対人援助職を目指す学生は、授業では「相手に何をしてあげるか」「何をどのように提供するか」つまり、「専門職としてどうするか」ということを中心に学びます。

しかし、それと同じくらい「私自身としてどうあるか」を知る機会が必要だと思うのです。

「自分自身としてどうあるか」には正解がありません。いわゆる倫理綱領とか職業倫理といった、専門職としてのあり方は「学ぶ」し、その姿勢と態度でサービスを「提供する」と思うのですが、「自

分自身としてどうあるのか」は、その人が今まで過ごしてきた人生と、人との付き合い方と、個性が直接反映されるものです。教科書に書いているわけではないし、教員がこれこれこうしなさいと指導する類のものでもありません。

しかし、「私自身としてどうあるか」は、「専門職としてどうするか」と同じ位、時にはそれ以上に支援のあり方に強い影響を及ぼします。

だったら、どう伝えるか。

保育士のタマゴと、おやこ哲学対話

新しい誰やか何かに出会って、自分の形を確かめる。私自身として、どうある

かを知る。しかもそれを、親子と関わる中で知ることが出来る。保育士を目指す学生にとって、おやこ哲学対話は「私自身としてどうあるか」を経験できる貴重な場所だと思うのです。実際にBさんのように、気づきを得る若者が沢山います。

今年に入って始めたばかりの「おやこ哲学対話×保育学生」の場。だいたい1～2か月に1度のペースで実施しています。今のところ、なかなか面白い化学反応が次々と起こっています。

これからどのように発展し、参加者と学生たちがそれぞれお互いにどんな影響を与え合っていくのか、わくわくしながら一緒に場を作っていきたいと思っています。

ああ、相談業務

～康弘くんの話～

かうんせりんぐるうむ かかし

22

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

益々増えている不登校やひきこもり。不登校がこれだけ多く成れば、誰でも不登校になりやすくなるだろう。そして学校に戻れぬまま、家庭内暴力やひきこもりになる子もいる。今回は、進路に悩んだ高校生の事例である。

家族

康弘くん（以下彼）の家族は、父母と彼、弟の四人家族。父親は公務員、母親は専業主婦だったが大学卒の知的な方だった。いずれも40代で、筆者が出会ったとき彼は高校3年生だった。

家族は一戸建てで、家庭としては比較的安定した家庭に思われた。父親とは会ったことは無いが、母親は穏やかな雰囲気の方だった。

相談経過

北海道の短い夏休みに入りお盆が過ぎて秋の気配が感じられる頃のこと、母親が相談室にいらした。主訴は、長男の不登校と、家の中で物を壊したり投げたりすることだった。高校3年生になって夏休み前くらいから学校に行かなくなってしまったそう。それまでは休まず登校していて、成績もそこまで悪くなかったのも、父母ともに国公立大学を目指せるのではと期待していたそう。学校からもそのように言われていたので猶更である。

母親の話では、小中高と特に問題なく過ごしてきたし、特段反抗期も無かったとのこと、今回の問題行動について大きなショックだったとのこと。

こんな行動は大体中学2年生くらいで起こるが、そういう行動が高3までなかったことが分かった。聞き分けの良い、おだやかな良い子が急に暴力的になって母親がショックを受けるのはわかるが、そういう日が来ることを考えていなかったとしたらそれも無知というか不用意というか・・・。

とにかく母親は「どうしてこんなことになったのだろう?」「私の育て方が間違っていたのだろうか?」と悩み、自分を責めていた。そして、「どうしたらよいのかわからない。」「いつか父母や弟に危害を加えるのではないかと不安。」と繰り返す。

そんな母親の不安を受け止め、理解するように努め、母親を支えるように話を進めていった。

そして、物を壊すのは良い行動ではないが、壁を殴ったり蹴ったりも含め、思春期の男の子にはありがちな行動なので、それが、自立に向けての一段階であること、母親の育て方の問題と考える必要がないことを伝えつつ、暴れているときは放っておくこと。落ち着いた話せるときは会話を楽しむこと、進路の話は今ほしくないことなど母親と相談して決めた。

また、今までの生育歴を聴きながら、彼に何かしらの特性や病気がないかをアセスメントして、彼の得意科目や好きなことなどを聴いて行った。進路についても行きたい大学や学びたい科目が決まっていなかった。目標が決まらず不安定になったのかもしれない。発達の偏りは今まで目立たない程度だったことを考えると、そこまではないか、そんなことを考えた。高校に戻れるかどうかはわからないので、できれば彼に高校卒業程度認定資格試験(高認)を受けさせてはどうか、そして彼自身との面談をしてみたいので聞いてみてほしい、すぐに変わることは無いかもしれないが、様子を見ていこうと伝え、母親の不安の払拭のための心理療法を伝えて2週間後に来てもらうことになった。

その間に巷では若者が関わる事件がいくつか報道された。覚せい剤がらみもあった。そして2週間後にいらした母親は更に不安そうになって

いた。

母親からは、高認試験は学校にも相談して一応申し込みをしたこと、最近彼が薬に興味を持ち始めて、あれこれ調べているとの話があった。物を投げたり壊したりということは少し収まって、ネットで調べては薬の効用について話しているという。薬に興味を持ったということ自体は悪くはない。しかし母親は悪いほうへ悪いほうへと考えてしまうようだった。爆弾作ったりしないだろうとか、覚せい剤を手に入れようと思わないだろうとか・・・。勿論可能性がゼロとは言わないが、心配しはじめたらきりが無い。薬の話だと、母親と普通にいくらかでも話せるようで、母親との会話の量が増えたそう。しかし学校には行きたがらない。そろそろ単位も危なくなってきたとのことで、高認試験を受けることについては彼も了解した。もともと進学校にいるし、高2まで単位を取っているのだから、高認試験で受けねばならない科目数は2つくらいだった。彼もそのくらいならと思ったようだ。将来について彼がどのように考えているか、進路について話せたらと思っていたら、母親から彼が相談に来てみたいと言っているとのことで、日程を調整することになった。一回母親が話したくらいで、カウンセリングに来るとするのは珍しい。どんな子なのか、興味津々でいろいろ想像をめぐらしながら面談の日を待った。

それから数日後、彼が来室した。なぜか私が想像していた彼のイメージとはずいぶん違っていた。私の中では「中肉中背、眼鏡をかけた、比較的口下手で、大人しいイメージ」だったのだ。何の根拠もないが・・・。ところが彼はスラッと背の高い、細身で中々のイケメンで、初対面でもあまり気にせず話す子だった。一応家族との関係については確認した。父親がやや厳しいこと以外関係性に問題は見られなかった。むしろ国公立大学に行けという期待感に負担を感じていて、父親からは工学部(父親も工学部を出ていた)を目指してはどうかとされていることなどが少し話された。あとは勿論薬の話ではある。まあ調べまくったのだろう、薬の話は止まらなかった。1時間

近くの面談時間の殆どが薬の話で終わったが、最後の方で、「そんなに薬に興味があるのなら、薬剤師になるとか薬の研究者になるとか考えたことないの?」と言ってみた。すると彼は「え?それは考えていなかった。理系かなとは思っていたけど、工学部を勧められていて、でもあまり興味のある学科が無くて・・・最近まで薬とかにもあまり興味が無かったから・・・。」「ちなみに理数系は得意?」と訊くと「得意です。特に化学は大好き。」とのこと。「しめた!」(これは心の声)。進路を決めかねていたので、「薬学や化学を学ぶ方向で考えてみたらどうだろうか?」と提案してみた。すると彼の顔がパッと明るくなった。

それから1週間後母親が来室された。彼は家で暴れることも無くなり、学校にも行き始めたという。高認試験は一応受けるつもりだそうだが、学校に行けているなら無理しなくても良いかなと伝えた。母親はたった数回の面談でここまで来られたことをとても喜んでいて。彼は人が変わったように勉強を始め、公立の大学で薬学部を目指す決めたそう。それに対し父親も認めてくれたそう。母親の努力、頑張りを認め、褒め、これからも彼を見守ってあげてほしいと伝え、相談は終了となった。

その半年後、母親から電話があり、某公立大学の薬学部に合格したとの報告があった。

まとめ

高校生の進路決定については、いろいろな問題が起こる。学校が一方的に進路先を押してくることもあるし、保護者が決めてくることもある。本人の意志や得意分野を考えなければ、無理やり進んでも上手くいかないだろう。本ケースでも、本人は引かれたレールに乗ることに抵抗を感じ、それを表現するのに物を壊すという行動に出た。父親の決めた方向に対し、面と向かって「嫌だ」と言えなかったからである。それでも彼の場合は、勉強もできたし理数系が得意で彼の興味関心と

マッチするものがあったから良いが、これが全く見つからないこともある。そんな時は、よくよく掘り下げて、本人の得意分野或いは興味がある分野を探さねばならない。成績とは関係のないところに本人の興味があることも多い。

大学や専門学校への進学は、私立の場合お金もかかるので保護者との相談が欠かせない。兄弟がいるために、公立に入れる力が無いと私立に行つて奨学金という借金を抱えねばならないということも多い。保護者が「公立以外は行かせない」と言い切ることもある。

日本は教育にお金をかけていない。先進国で比べれば一番低い。誰もが国公立に入れるわけではない。私立大学でも専門学校でも、彼らが学びたいものがあるのなら、学ばせてあげたいと思うのが一般的な保護者の思いだろう。それを金銭面であきらめざるを得ないとか、借金を背負わせるとするのは悲しい話である。少子化が進んでいるのだからこそ、誰もが学べる機会と借金ではなく給付型の教育資金が与えられるようになってほしい。そうすれば、もっと力のある、学ぶ意欲のある子が専門の勉強に入っていけると思う。

本ケースは幸い公立大学に入学できたが、薬学部は6年間で、私立大学だと数百万円から一千万円かかってしまう。医学部だともっとになる。お金の関係で子どもが行きたい方向に行かせてあげられないと嘆く保護者にも出会う。

大学、大学院までの教育の無償化が実現できるのはいつになるやら・・・。

帰って来た__対人援助学の縦横無尽(3)

2025 年度前半期の文化心理学ネットワーク、ちょっとだけその他

立命館大学総合心理学部 サトウタツヤ

学校法人立命館理事・副総長／立命館大学副学長

前口上

昨年、一昨年と『対人援助学マガジン』に寄稿した。コロナ後の文化心理学ネットワークの再始動の様子を記録したものである。年に1回の寄稿だとボリュームが大きくなりすぎるので、2025年度はその都度記録して、年に2回寄稿してみることにした。この4月には学校法人立命館理事・副総長／立命館大学副学長という職に任じられたこともあり、そうした関係の活動も記録してみることにした

まず、春学期にはオスロ大学のルカこと Luca Tateo 教授が立命館大学総合心理学部の客員教授として半期14コマの授業を行った(2回オンライン、8回対面、4回オンラインという形式である)。

ついで、5月初旬には研究担当副総長として、英国ダーラムで行われた RENKEI (日英大学間連携プログラム)の集い(研究交流)に出席し、時事通信社ロンドン・トップセミナーで講演し、立命館英国校友会でイギリスで活躍する校友の皆さんと歓談した。

5月中旬には、総合心理学部・人間科学研究科と交流のある海外4大学が計画としては別々に来日し、揃ってOICを訪問するということになり、21日の懇親会に出席した。2024年の12月に立命館大学の研究者を招待してくれたオクラホマ大学・Chie Noyori-Corbett 准教授と旧交を温めた。

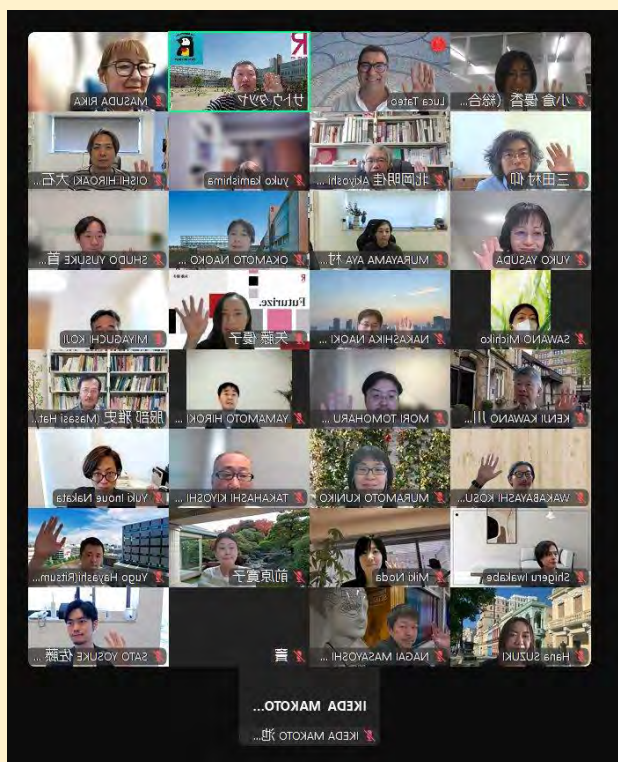
5月下旬には、大阪万博で英国ナショナルディが開催され、総長に代わって参加した。松山で TEA と質的探究学会が開催された。ルカなど海外からの参加者も多く会は盛会裡に終了した。

そして、8月19～22日は母校・東京都立大学で夏期集中講義(日本語教育学)を行った。東京都立大学は1991年4月には八王子市(南大沢)に移転したのだが、その時私は助手として、色々と働いていて、その後、3年間、新しいキャンパスで過ごした。そういう意味では建物自体に懐かしさは感じなかったが、久々でうれしかった。

1 ルカ in 立命館大学

ルカとの付き合いは長い。もう10数年くらいになるだろう。昨年、久しぶりに国際対話的自己学会@エストニアで再会し、日本で講義することをオファーしたところ快く引き受けてくれたのである。

教授会での挨拶は残念ながらオンライン越しとなったが、授業はもちろん、毎週月曜昼に行われている学生達のランチミーティングにも顔をだして学生達と交流してくれた。



2 2025 年 5 月 イギリス訪問

関西国際空港→ドバイ経由でニューキャッスルへ。その後、電車でダーラムに移動。

RENKEI（日英大学間連携プログラム）@ダーラム大学では、契約更改ということで5月8日には調印式のようなことをセレモニー的に行った。日本からは、東北大学・慶應義塾大学・上智大学・九州大学および立命館大学が参加した。このうち九州大学以外からは副学長が出席した。



RENKEI 日英大学間連携プログラム | ブリティッシュ・カウンシル

RENKEI the Japan-UK Research and Education Network for Knowledge Economy Initiatives | British Council

5月9日（金）、ニューキャッスルから特急に3時間乗りロンドンへ。

正午から、時事通信社ロンドン・トップセミナーで講演。

<https://www.jiji.co.jp/service/jijitopseminar/venue-london.html>

このロンドン・トップセミナーは、1977年（昭和52年）に発足して年9回の講演を45年以上にわたって活動しているそうである。私は大抵のことには動じないが、私の前の会の講演者が黒田東彦・第31代日本銀行総裁だと聞いた時はなんとなく気圧された（そう思う必要はないのだが・・）。タイトルは「文化と心理の関係からD&Iを考える；多様性から複線性へ」。最後にはワークショップとして北極星的展望ゲームをやって参加者の皆さんのコミュニケーションを促した。



5月9日の夜は、立命館英国校友会に参加。立命館ロンドン事務所の坂本事務員が音頭をとって、校友会を開催し、私が着任したときにサバティカル中の教員の代わりにゼミをもった学生さん（文学部心理学の卒業生）に20年ぶりくらいに会いました。英国留学中の国関のM2も元気にしていました。



1 オクラホマ大学他の皆さんが立命館大学総合心理学部を訪問

OUとRUの交流は長くまた密である。私も昨年、お招きいただいた。歓迎会にはルカもちょうかり参加。



4 TEAと質的探究学会@松山 2025年5月24日（土）-25日（日）

TEAと質的探究学会第4回大会は、初となる地方大会。松山の人間環境大学松山道後キャンパスで開催された。実行委員長は番田清美さん（人間環境大学総合心理学部）。「旅するTEA～俳句と心理学の街 松山」



特別講演(対面&オンライン)《講堂》 「TEA をもちいた交差混合研究法デザイン-MM-TEA の可能性」 登壇者
：廣瀬眞理子, John W. Creswell



大会記念講演(対面&オンライン)《講堂》

“How to study psychological atmospheres ?” 登壇者 :Jaan Valsiner(オンライン)



大会特別シンポジウム(対面&オンライン)《講堂》 『『ホーム』と『居場所』の文化心理学・発達主体による境界形成の探究』 登壇者 :土元哲平, Marc Antoine Campill, 神崎真美, 小澤伊久美, Luca Tateo, サトウタツヤ



懇親会には、人間環境大学総合心理学部長・佐藤隆夫サンも登場。楽しい一時を過ごしました。



2 ルカのフェアウェルパーティ

そうこうしているうちに、あっという間にルカが帰国（イタリアなのか、ノルウェーなのか？）。



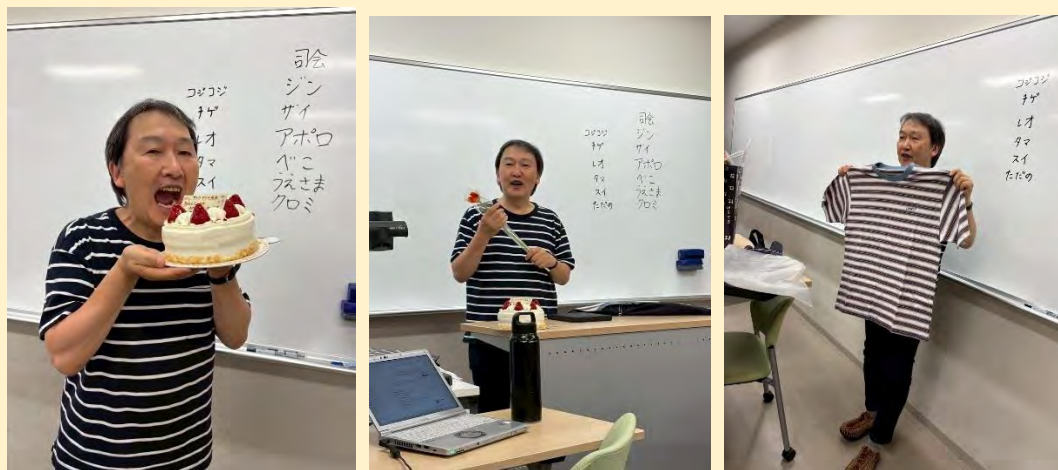
5 誕生日お祝いをいただきました。

ゼミは学士・修士は一体的に、博士はそれと別に行っている。

D院生の皆さんからは6/21のゼミのときに紅白のボーダーネクタイをいただきました。あまりにおめでたい配色でなかなか着用機会に恵まれない。。



B/Mの皆さんからは7月14日のゼミのときにケーキとボーダーシャツをいただきました。



6 東京都立大学で集中講義

母校である東京都立大学で集中講義をしてきました。日本語教育専攻。サークル棟に行ってみたら、フォークソング研究会が（まだ）あったので、部室を訪問して後輩にあたる部員たちと話をしました。私がいたときと変わらず「名ばかりフォーク研」であることがわかってうれしかった。





ある人の感想より（抜粋）

今回は、記号論的畏が自分の人生と重なる部分があるように感じ、衝撃を受けました。図を左に 90 度回転させることで「行為、記号、実現しなかったこと、目標」が縦に並び、行為から何も進んでいないことが可視化された時、はっとしました。実現しなかったことにこだわり続けるよりも、実現したことからいかに自分の目標に向かって新たに道を切り開いていくかで人生が変わっていくのだなと痛感しました。まずは、「実存を愛す」ところから始めていきたいです。

環世界という概念も大変興味深かったです。人の環世界は育った環境や経験によって変わってくるので、同じものを知覚していても、実際には同じものを享受しているとは限らないのだということが興味深かったです。知識や経験が豊かになれば、自身の環世界も広がっていくのだと思うと、もっといろいろなことを吸収して成長していきたいと思われました。

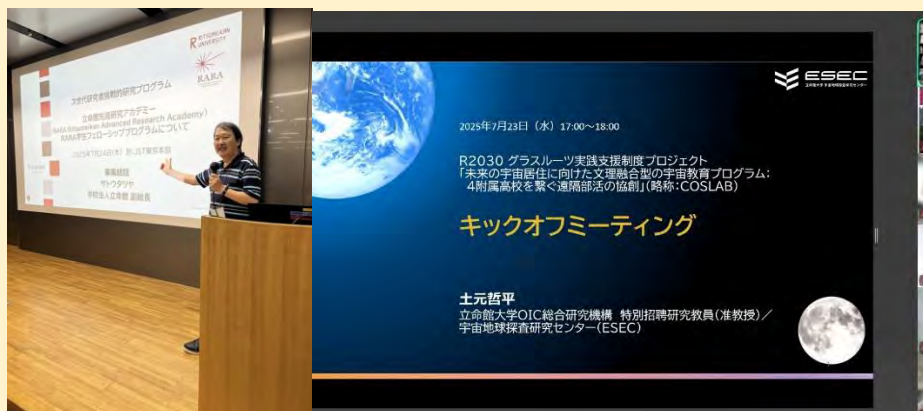
「文化」の対概念が「自然」だということも新たな発見でした。幼い頃、母親に「そんなに自分勝手な行動し

かできないなら山に行って1人で誰にも迷惑かけずに生きてけ」と叱られたことを思い出しました。これは、「文化」の中でうまく他者と共生できないのなら「自然」に帰れ、という意味だったのかなと再認識しました。

最後になりますが、4日間ありがとうございました。この4日間でTEAについてだけでなく、さまざまなものの捉え方や視点の転換、人生においても役立つ考え方をたくさん教えていただきました。私にとって、この集中講義が自身の研究の促進的記号となりました。本当に受講してよかったです。ありがとうございました。

7 その他

色々やっているうちの一部（説明なし）



8 まとめにかえて

以上、2025 年度春学期（2025 年 8 月 24 日まで）における文化心理学の仲間達との交流を中心に様々な活動を振り返ってみた。最後に衝撃の一枚。学部の某ゼミ生が、卒業論文に関する発表において、生成 AI に PPT を作らせていたことが発覚！しかし、著者である自分が一見では気づけなかったのが実情であった。

参考文献

佐藤達哉（2007）.『ナラティブと質的心理学』.新曜社.

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）. 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例. 質的心理学研究, 11, 95-107.

佐藤達哉・賀茂美則（2005）. 複線経路等至性アプローチによる質的研究の方法論的展開. 質的心理学研究, 4, 86-98.

1 つ目の文献を見ても気づかず（本のタイトル名が微妙に違ったが、こんな本出してたよな、、、と自分で納得してしまった）、2 つ目は良く引用される文献で名前順とタイトルが同じだったので雑誌名が違うことに気づけずに見過ごした。最後の論文を見たところで、共著者名が実在しないじゃないか！ということでやっとハルシネーションだと気づいた。生成 AI はありそうな文字列として出していると言われているが、著者だからこそダメされた、的なこともあって、複雑な気持ちになりましたとさ・・・。

参考到现在まで対人援助学マガジンで紡いできた文化心理学的交流について振り返っておく。

対人援助学マガジンの関連サイト

2012 年 1 月イタリア、3 月ブラジル <http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf>

2013 年 3 月イタリア、デンマーク、5 月イギリス <http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf>

2014 年 3 月ブラジル、4 月デンマーク、8 月オランダ、デンマーク

<http://humanservices.jp/magazine/vol18/17.pdf>

2016 年 7 月横浜 ICP、9 月ポーランド、10 月イタリア、11 月ノルウェー

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol28/16.pdf>

Jaan Valsiner 先生、2018 年 5 月の滞在記

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol33/16.pdf>

ヤーンの古希を言祝ぐ

日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(1) 2008 年まで

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/15.pdf>

日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(2) 2009 年から

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/16.pdf>

帰って来た__対人援助学の縦横無尽 (1) ; コロナ後の文化心理学ネットワーク、再始動

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol56/11.pdf>

帰って来た__対人援助学の縦横無尽 (2) ; 2024 年度の文化心理学ネットワーク、ちょっとだけその他

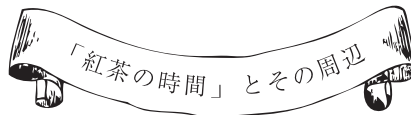
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol60/11.pdf>

文献等

TEA と質的探究学会第 4 回大会予稿集

https://jatq.jp/conf/JATQ04/assets/images/0514JATQ4program.pdf?fbclid=IwY2xjawLEpIB1eHRuA2F1bQIxMABicmlkETFxM2t6RfOxWTJSVG5VNU5XAR5dFuxTzZeUdqm8qLx96aWB1CYvD9421Ph_G0RQ5Y8GwiVtdC4mNQbirtPT5A_aem_XlVnm-JG9hVOHtXPX0nsNw

きもちは、 言葉を さがしている



第 57 話

水野 スウ

選挙の後に思うこと

7月の参院選でこれまでごく少数の議席しか持っていなかった党が、一気に国会の議席を増やしました。かわらない・わからない政治にうんざり or 政治に無関心 or 自分の一票で何かかわるわけがない、等々の理由で投票に行かなかった多くの人たちが、これまでと違う行動をとった結果、国会の構図を変えたのだから、それ自体はすごいことだと思います。だけでもそれを素直に喜べない私は、この胸のざわざわをなんと言葉にしたらいいのだろうか、と選挙後ずっと考えています。

じぶん大切にされてない、給料ちっとも上がらない、すぐ先の未来が不安。一体なんでだ、誰のせいだ。そういった気持ちにスコーンと刺さりそうな「日本人ファースト」というキャッチフレーズで、選挙の争点が一気に「外国人もんだい」にすり替えられてしまった。自民党裏金問題なんてあつという間に「もんだい」じゃなくなった。生活が苦しいのも物価高もみんなそのせい。本当はそうじゃないかも、とどっか思いながらも力強く言われ続けると、そうなんだ、あっちは自分たちより優遇されてる、いい思いしてる、って信じたくなる。あっち側とこっち側に

分断されて、ひとたびそのモードにはいったら、あっち側に対して、ずるい、許せない、の気持ちがふくらんでいく。人々の、言葉にならなかったモヤモヤや不満を吸い上げて憎悪が培養され、選挙中、差別の種が白昼堂々、全国で蒔かれていってるように感じました。

この党、参政党のいう「ファースト」の中に自分は含まれないと感じる人たちにとって、こんな状況、どれほど不安で、恐怖だろうか。熱狂の中で他者への想像力ってなかなか働かない。私の友人は「お母さん、私ってファーストじゃないの？」と小学生の娘から聞かれたそうです。その子のお父さんはメキシコ籍です。別の小学校で、「ファーストじゃないよね」とからかわれた子は、お母さんの国籍が日本ではない子でした。選挙期間中だけでも、数えきれないほどのいじめの種が蒔きちらされたと思います。

ファーストがいれば次は誰、その次は誰、といった「ひと」のランクづけがされていく社会。これってぜんぜん平らじゃないよ。違う国の人ともつながって一緒に生きていきたい私には、めっちゃ心地わるいです。そのランク付けは人種国籍性別年齢を超えて、やがて誰にも適用されていくんじゃないか、

とあやぶみます。その対象は私であり、あなたであり。そんな社会を私は望まないなあ。

「新日本憲法」案、読んでみた

この党が創憲と呼ぶ「新日本憲法」構想案、読んでみました。参政党の党員の人たちが意見を出しあって、国のかたちをこうしたいと願って自分たちで創りあげた憲法案だそうです。参政党という名前の由来は、参加する政治をつくるという、Do it yourselfの理念から来ていると聞いたことがあります。その名前もだし、憲法草案を自分たちで一からつくるというのもすごいことだな、と思って31条から成る憲法草案を読みはじめました。でも真っ先に、前文で引っかかった、違和感ありすぎて。

私は今の憲法下で生まれ、育ち、「民主主義」や「男女平等」、「表現の自由」を謳い、決して戦争をしないと世界に約束した今の日本国憲法が好きです。完璧ではないし、まだ実現されてないことがたくさんあるものの、今の憲法を大事に思っています。

14条の「法の下での平等」で人種に優劣をつけない、差別されない。21条の「表現の自由」で、国が間違ったことをした時はNOと言える。そして引きこもっていた時期に「個人の尊重」の13条と出逢った娘が、この条文を「わたしは、ほかの誰とともとりかえがきかない」と意識してくれたことで、いっそう憲法がわが身に近づきました。私も、あなたも、この国に住むルーツが日本でない人も、一人ひとり、とりかえることのできない存在なのだと。私にとって今の憲法はそういったものです。

私とマエソラ

2015年に安倍政権のもとで今の憲法が壊されそうになった時、その危機感を原動力に、憲法の専門家ではない一市民の私が、自分の理解できるふだん着の言葉で憲法の本を書きました。3年後の2018年にもう一冊。お声がかかって呼ばれれば、お話の出前にも全国あちこち行きました。出前先ではよく「マエソラ」と呼ぶ日本国憲法前文のそらんじをし、

今でも折にふれては一人でよくマエソラします。

そんな私なので、今の憲法前文にある「日本国民」「われら」という言葉がすっかりからだに染み込んでいます。それらの文言は、今の憲法の主語が国民の「私たち」であることの証拠です。でも、参政党の憲法案に「われら」は出てこない、それが大きな違和感の正体でした。

この草案では憲法の主語が「日本」です。主権は国家にあって、日本は天皇の治める君民一体の国家である、と。この憲法は主権在民ではないのだ。これって私にとってはとても大きなことです。

消えているもの

この憲法案では、今の憲法で保障されている国民の自由がいくつも消えています。14条の「法の下での平等」も、21条の「表現の自由」も、19条の「思想・良心の自由」も、32条の「裁判を受ける権利」も、ありません。「表現の自由」には、言論、出版の自由や私たちの知る権利も含まれますが、それがこの憲法下では制限されるということ。「報道は偏ることなく国の政策につき、公正に報道する義務を負う」とも書いてあるのを見て、これだと報道が権力を監視できなくなりそうだと感じました。

国民の権理として（この党の案では、「権利」を「権理」と書いています）、「自ら学び自ら考える力を基本とする教育を受ける」とあって、すごくいい条文だな、と思ったものの、読み進めると、神話、修身が必修で、教育勅語、愛国心を尊重しなければならない、とあります。いやいや、これだと歴史の逆走になっちゃうよ、と思いながら、そうか、この党はそういう国のかたちを望んでいるのだな、とわかりました。

この憲法草案のどこにも、「基本的人権」「個人の尊重」という言葉が見つからないことも、私には大問題。すでに当たり前にある権利は書かない、というのがその理由だそうだけど、書かれてないものは無いことにされるのが法というものの、と私は憲法や法律の専門家から学びました。また逆に、憲法をかえたいと思う人が、今ある条文のたった一文字をかえることにもそこになんらかの意図があるのだ、と

も。たとえば今の13条「すべて国民は、個人として尊重される」とあるところ、自民党の改正草案では「すべて国民は、人として尊重される」となっています。それは、「個」という一文字を削ることで、一人ひとりの個人として大切にされなくなってしまう可能性があるということですよ、と教わりました。

参政党憲法案には、日本人の要件として「日本を大切にすることを有すること」とありました。そんな内心のありようを誰がどう判定するのでしょうか。国の決めたこと、たとえば、集団的自衛権とか共謀罪とか特定秘密保護法とかに反対の私は、これに当てはまりそうにないなあ。

今の憲法が国・権力をしばるものとしてあるのの逆で、この憲法案は国民をしばるもの、と私には読めました。これだと国が間違った方向に暴走した時、誰にもそれを止められない、戦前がまさにそうであったように。主権在民の憲法ではなく、国家主権の憲法であれば、大事なことは国によって決められてしまいます。それもまた、歴史の逆走につながると危惧します。

国会の地図

この先、国会の地図がどうかわるのか、私には見えません。核武装をコスパで語る参政党の候補者が、びっくりするほどの得票数を得て新しい国会議員になりました。選挙演説の抗議に集まった市民を「非国民」と呼び、日本軍の南京大虐殺を否定していた同じ党の候補者も当選しています。また、この党の候補者ではないけれど、「自分たちの納得できる歴史をつくらないと」といい、沖縄のひめゆり平和祈念資料館の展示内容について否定していた自民党の政治家も、今回の参院選で再選されました。こういった顔ぶれの議員たちがこれから6年間、国会にいるのです。

今の憲法にはない緊急事態条項を書き込もうとする勢力は増えたと思います。災害を口実に、「議員の任期延長」を改憲項目として正式に出してくるかもしれません。それって権力の独裁を可能にする緊

急事態条項の一つです。

その例が去年12月、お隣の国であったばかり。韓国の元大統領が突然、自分に都合よく、今が緊急事態だ、と言って出した非常戒厳。戦時でもないのに発出されたその戒厳は、軍事独裁政権の時代に何度も出された戒厳令下の恐怖を、韓国市民にすぐさま思い起こさせました。大統領のとんでもない権力の濫用に対して、即、国会前に大勢が集まり、国会を開かせ、大統領の出した非常戒厳を止めさせた韓国のpeople's powerに、私は目を見張りました。

いま自分たちが手にしている自由と民主主義は、この国の先輩たちがたくさんの血を流して軍事政権から勝ち取ったものだ、という歴史を多くの市民が忘れていない。生々しく覚えている。この自由は決して手放しちゃいけないものだから、と即、行動した韓国の人たちのからだ意志の力、本当にすごいと思ったのです。

どうして投票したの？

つい先日、『父さんはどうしてヒトラーに投票したの？』（ディディエ・デニックス／解放出版社）という絵本を読みました。

物語の始まりは1933年3月5日、ミュンヘンに近いドイツのある都市。その日は国会選挙の日で、投票に行く前、5歳の「ぼく」は、両親がこんなふうに言い争うのを聞きます。

「よく考えるんだ、リズロット。彼だけがドイツを救える、これが最後のチャンスなんだ、彼はすべての人にもう一度、仕事を与えてくれる。われわれはやっと祖国ドイツを誇りに思えるようになるんだ」

「いいえ、エゴン。私は自分の考えで投票するわ、でもあなたに同じ選択を押し付けるつもりはないわ」

結果は、その前年の選挙から10%



も得票率を伸ばして、ナチ党が43.9%に躍進。ヒトラー政権が成立しました。ひと月も経たぬうちにミュンヘン郊外のダッハウには強制収容所が開設されて、ヒトラーの考えに従わない政治犯やユダヤ人、同性愛者、シンティ・ロマの人々がそこに収容されました。選挙からわずか2ヶ月後には、ナチの突撃隊がユダヤ人の経営する書店に入って中にあった本を道に放り投げ、夜にはその本たちに火をつけて燃やしました。

5歳だった「ぼく」は、それから1945年5月まで、わけもわからない中、ドイツで起きる出来事を見聞きし、体験して、連合軍がミュンヘンを解放した後で、捕虜収容所から釈放されてきた父親に問うのです。「父さんはどうしてヒトラーに投票したの？」。

ちなみに、私の書いた『たいわけんぼう BOOK+』では、「9条、だけじゃない、かいけん案」という章に、こんなことを書きました。(p.150)

——ナチス政権下のドイツには、とても民主的で優れたワイマール憲法がありましたが、国家緊急権を認める条文があったために、それを悪用したヒトラーにより、合法的に独裁政権がつくられてしまいました。

——1933年、国会議事堂の放火事件が起こると、ヒトラーは共産党の組織的犯行だと断定、国家の緊急事態としてワイマール憲法に規定のあった大統領緊急令を発布させました。これにより、憲法に認められていた基本的人権が一時停止し、ナチスと対立していた多くの共産党員や社会党員が拘束さ

れ、党員が議会に出席できない中で行われた採決により、議会を通すことなく政府が法律をつくれる「全権委任法」が成立し、独裁政権が誕生しました。



「たいわけんぼう BOOK+」に書かれている上記のことはみな、絵本で描かれた選挙のあった年、1933年にドイツで起きたことです。この夏の日本の選挙でたまたま一つの党が躍進したからといって、今回のマガジン原稿で、ドイツの選挙やヒトラー政権の話を持ち出すとは何とおおげさな、と言われるかもしれませんね。でも、参政党党首の愛読書が、ドイツで民主的に選ばれたヒトラーというリーダーが書いた「我が闘争」であると知ったので、参院選後の今、このことをここにも記しておこうと思ったのです。

『父さんはどうして——』の絵本には、翻訳者による「若い読者のみなさんへ」という詳しい解説が巻末についていて、それも併せて読むと、ドイツで起きたことがさらに系列的によくわかります。過去の未来を生きる私たちには、ドイツでかつてこういうことがあったと具体的に知ることのできるツールが、実はいっぱいある、ということ。歴史を学ぶ、から、歴史に学ぶ、という姿勢を忘れないでいようと思います。

私の日常レジスタンス

政治の言葉がどんどん軽くなって、私が当たり前だと思っているジョウシキが通用しなくなってきているのを感じます。力の行使が、セイギやヘイワ、なのですか？ トランプ大統領は、戦争をやめさせることで、ノーベル平和賞をもらおうと思っているのだとか？

新しい戦前と言われる今日、主権者数分の1の私に一体何ができるだろうか。「ぼろぼろの平和を繕え」と言ったのは、『火垂るの墓』の監督、高畑勲さんです。私は、ぼろぼろの民主主義を繕いつづけようと思う。手に持つ針と糸は、言葉です。一針ひと針、決して大きくはないけど、嘘でない、取り繕わない、私にとって本当と思う言葉を選んで繕い続ける、ちくちくちくちく。出会う誰かと平らに言葉を交わしていく、とつとつとつとつ。私の日常レジスタンス。

2025.8.29

生殖医療と家族援助

～LGBTQ 支援のための対人援助の一考察～

荒木晃子

医療現場の内と外

本マガジンで、これまでに何度か性と生殖に問題を抱える LGBTQ 当事者の実情と支援に関し、医療現場の心理士として、またフィールドワークを主とする研究者として記述してきた。医療現場では、当事者の社会的背景を医療者が知り、理解し、医療機関に必要な当事者対応のための知識と情報を会得する必要があることを実感し、勤務するクリニックで従事するスタッフに実践形式で伝え、2025 年 5 月には不妊関連の学会で報告した経緯がある。

医療現場を訪れる当事者は、治療を必要とする患者として何らかの医学的ニーズがあるが、それは対人援助のひとつの側面ではない。一般に、医療者ができる援助とは、患者の困りごとを医学的に解決することである。治療を終えた患者が日常に戻りその人なりの快適な生活ができているか否かは医療者が伺い知るところではないとの認識が長い期間浸透してきた内情がある。近年、患者の心理社会的背景に配慮した全人的医療を目指すと言われる「総合診療科」が少数ではあるが現れ、医療者の意識も変化の兆しが見えつつある。

一方、医療現場で働く心理士は、患者であるクライアントから、治療に関する不安や迷い、共に暮らす家族やパートナーとの関係、

職場で生じた人間関係の悪化や業務上の不具合など、心身の不調が原因と考える様々な困りごとを聴くことが多い。過去に筆者が勤務していた内科・精神科クリニックを訪れる大半の患者は、こころの病や悩みごと、心身の障がいによる困りごとを抱え来院していた。患者に対して、医学的アプローチがどれほど効果があり、痛みや困りごとの軽減につながったかは、限られた時間のなかで患者に接する医師や看護師には知る術がない。患者も、問題や困りごとが解決しても、そのことを医師や看護師に伝えるために来院する必要はなく、診察後に薬効がなければ転院する、別の手段を探すなど、いずれにしても再度来院する患者は稀であったろう。そのような医療現場で働く心理士としての役割は、患者と対話することにより、その方の日常生活が少しでも改善されるよう、また抱えている困りごとに何らかの解決の糸口を探すお手伝いをするのであった。例えそれが全ての困りごとの解決策とはならなくても、小さなヒントとなり、異なる視点から問題の見え方、感じ方または捉え方となったのではないだろうか。結果として、ご本人が望む方向に変化する動機づけになっていたと思う。患者との対話により、治療に頼るだけでなく、日常生活を含む困りごとに耳を傾け、本人が少しでも快適な日々を送るためのよろず相談役

だったかもしれない。従って、いくら医療現場に身を置いていても、筆者は自分自身を医療者とは捉えていない。片足を医療現場に置き、もう一方の足は医療の外で常に社会の変動を感じ続ける心理士であるとの自覚がある。

加えて、筆者は不妊当事者でもある。だった、と過去形にした方が正しいのかもしれない。30年ほど前、不妊患者として5年に及び生殖医療による解決を目指した結果、医療過誤にあい、やむなく治療を断念せざるを得なかった経験を持つ。その後、生殖医療施設を被告に、医療過誤裁判の原告となり、裁判終結後に人生をリスタートした。当事者性を活かし、20年近く心理士として勤務した内科・精神科および同時期以降兼務した生殖医療施設の勤務経験が、今では対人援助者としての基盤となっている。自説は主観的ではないかと問われれば否定できないが、数千回に及ぶ患者やクライアントとの対話から培った視点、そして筆者にある当事者性を活かし、改めてLGBTQ当事者の困りごとを社会的背景を前提に再考したい。医療の内と外での対人援助につながることを願ってのことである。

LGBTQ 当事者は何に困っているのか

子どもとの家族形成に問題を抱える当事者の生殖医療現場の実際を前回記述した。

子どもとの血縁を望む同性カップルのうち、女性カップルには妊娠のために精子が必要で、トランス男性と女性のカップルも同様である。また、男性カップルの選択肢は代理母に依頼する術しか残されておらず、トランス女性と男性カップルの場合も同様である。婚姻関係の有無、経済状況、年齢等の条

件をクリアできれば、いずれのカップルも里親、養親になることは可能である。事実、複数の女性カップル、男性カップルが、現在も里親認定を受けたうえで子どもを養育している。しかし、子どもの養育を望む当事者カップルの社会的背景に目を向けると、子どもの福祉にかかわっている行政や児相、民間団体や従事する担当者如何では、マニュアルにある基準条件以外に、性自認や性別変更の有無、同性カップルか否かで子どもの委託が難しいと判断される以下のようなケースが生じているのも事実である。

養子縁組を望み認定を受けた民間団体に出向いた（婚姻関係にあるトランス男性と女性の）カップルは、団体職員との面談の際、「過去に、あなたたちのようなご夫婦に子どもを委託した事例がない」という理由で「話も聞いてもらえなかった」と語った。

当事者とパートナーである二人が子どもを育てる決心をするまで、どれほど悩み、苦しみ、どれだけの時間をかけて団体にアクセスしたのか、おそらく担当者は想像する力を持ち合わせてなかったのだろう。対応した団体職員は、詳しい話を聞くまでもなく、「嫌な顔」をして面談を打ち切ったという。ふたりがトランス男性夫婦でなければ、若く、心身共に健康なカップルへの対応は違っていたのではないのか。以上が、彼らに残された「子どもとの家族形成の可能性」を阻む社会的背景の一例である。

医療の内と外での困りごと

当事者の困りごとは家族形成に限ったことではない。

以下は、医療と関係のある困りごとのケースである。

・他科の医療施設の受付で保険証を提示した際、外見と保険証の性別欄が一致していないと判断し、度惑いを覚えた受付係が周囲に聞こえる声で本人に性別を確認する、医師や看護師に相談するなど、アウティングになりかねない言動がある。

・精密検査や入院時に、同性パートナーが家族と認められず同席や入室を断られた。また入院時、外見とは異なる保険証の性別欄の大部屋に入院させられ、同室の方々とその見舞客からの視線がつかかった。

・同性カップルの一方が緊急に手術が必要となった際、「親族の同意書が必要」とされ、何も知らない両親にカミングアウトせざるを得なくなった。

以上、当事者の語りから、例え医療に関連する困りごとであっても、医療現場の対応如何では、当事者にとっての傷つき体験となり、心理社会的背景に及ぼす影響が生じることが明らかになっている。

次に、医療の外で起きている困りごとの一部を紹介する。

・学校では保健の授業や更衣室、トイレなど男女別にすることが多く、自分的には異性のなかで着替えをしなくてはならず、恥ずかしくて、目のやり場に困り、辛い。

・職場で性別に関する差別用語を頻繁に浴びせられる。

・両親にカミングアウトしたら、「そんな子はこちらの子ではない。出ていけ」と言われた。

・長年交際していた彼女と、戸籍上の性別変更を終えたので入籍したが、彼女の両親には自分がトランス男性であることを打ち明けられずにいる。実家の両親は「秘密にしていけない」といい、彼女は「言わないでほしい」という。職場では書類上必要な部署には

伝えたが、基本的にはクローズである(=カミングアウトしてしていない)

・同性カップルが理由で、共有名義で不動産を購入できなかった。賃貸住宅の入居を断られた。生命保険に入れなかった etc.

このように、LGBTQ 当事者の困りごとは、日常生活のあらゆる場面に及んでいた。

現在、日本には教育、福祉、医療など、国民が安心安全に暮らす事を支援する/援助するシステムが構築されている。各機関には、それぞれの領域に専門性を持つ職員や援助者がいて、国や地方自治体等から活動費等の支援金や補助金を得て運営していることは周知の事実である。では、先にあげたLGBTQ 当事者の語りに、教育、福祉、医療に絡む困りごとが多いのは何故だろう。

病でもなく、障がいでもない当事者が、教育現場や福祉現場、生命にかかわる医療現場で傷つき体験をする現実には、我々はどう向き合えばいいのだろうか。当事者の声を聴き、どのような援助や支援を求めているのかを知る必要がある。

2025 年 10 月 11 日(土) - 12 日(日)
(大阪国際キリスト教短期大学)にて開催される『対人援助学会第 17 回年次大会』第 1 日目午後「可視化する/されるを超えた LGBTQ+ 当事者の支援を考えるー「私たちは、ここにいる」の声を集めてー」では、本年度の対人援助学会理事会企画として、壇上の報告を聞き、会場の皆さんと共に「対人援助者である自分以前に、隣人として、当事者にどう向き合えばよいのだろうか」を見つめ直す機会になることを願っている。

[大会の内容 | 対人援助学会 ヒューマンサービスを科学する](#)

路上生活者の個人史

第 16 回

竹中尚文

長野 瞳 氏(仮名) 生まれ。

私は 1980 年に和歌山県で生まれました。現在 45 歳です。両親と兄の 4 人家族でした。父は自動車修理工場を経営していました。小学校、中学校を卒業して工業高校に進学しました。高校時代は学校に馴染めなくて、アトピー性皮膚炎になりました。医者から、ストレスの多い学生生活をしていると言われました。友だちとも馴染めなかったですが、先生とも合わなかったです。大学進学が希望だったのですが、学力的に無理だといわれました。就職を勧められて適性検査があったのですが、白紙で提出しました。

大学進学が無理だったので、大阪に出てきてデザインの専門学校に入学しました。そこでも何か陰口を言われているみたいで、学校に通う気持ちがなくなりました。それで田舎に帰りました。専門学校をやめて帰った事を両親がとても怒りました。私はどうしても大学進学をしたいと思っていたので、いくつか大学を受験しました。その一つに合格したのですが、親から学費を出すことを断られました。仕方なく地元でアルバイト生活をしていました。

私が 35 歳の頃に両親が相次いで病気で亡くなりました。父親の会社は兄が継ぎました。そ

の時に遺産分割があって、いくらかの財産を手に入れました。そのお金で私は大阪に出てきて暮らすことにしました。

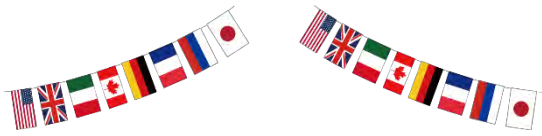
大阪に出てきてから私は女性として暮らすように手続きをしました。中学生の頃から、自分の性にたいして違和感がありました。そうした自分自身の性に対する認識のため、田舎でアルバイトをしている時にもずいぶんと嫌な思いをしました。かなりひどい言葉を投げかけられたこともありました。大阪で暮らすようになって、自分の気持ちに合う服装もできるようになりました。しかしワンピースやパンツスーツで仕事に行くと、服

装を改めるように言われたこともあります。ひどい差別的な言葉を投げかけられることも多いです。そうした差別のため、なかなか仕事に就けません。

今は、生活保護をもらっています。生活が厳しいので、西成でもここでも炊き出しに並ぶことが多いです。田舎の兄との連絡はほとんど取っていません。兄の奥さんと私の仲が悪いので、どうしようもありません。

この先の人生ですか？ 大学に行きたいですね。それは、法学部とか社会学部に行きたいです。

長野さんは、自分の性に対して女性であることが落ち着くという。法的手続きも済ませたそうだ。私たちの支援の列には、いつも男性の服装で並ぶ。支援を待つ間か、支援に来る前か、いつの間にかアルコール飲料を飲んで、大きな声で乱暴な言葉を発することがある。私たちは公園内で活動をしているので、全員に公園内の禁酒禁煙を何度も伝えている。長野さんに注意をすると、謝罪の言葉と共に次回からはそのようなことはしないと言ってくれる。多くの被援助者たちは、長野さんが来ないように私にいう。私から誰も排除したくないという重いがあるので、長野さんに繰り返し注意をすることになる。

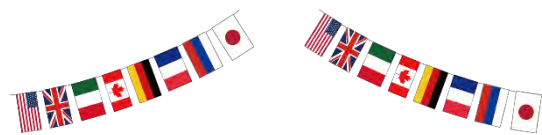


スポーツおじいさんにないたい！⑥



『レイジング・ブル』

國友万裕



1. 昔話に花が咲く

最近になって、控え室である女性の先生と昔話に花が咲いている。

その女の先生とはコロナの前から、控え室でお会いしていて、ちょっとした世間話はしていた。どうやら、西宮の K 大学の出身であることは話していて感づいていた。

俺も実は博士課程は K 大学に入っていたのだが、大学院の博士課程ということになると週に 1 回しか行かなくていい。だから、俺は京都から通っていて、K 大学にはただ在籍していただけのことで、たいして何もしていない。あそこの大学の学生だったという意識すらないのだ。

だから K 大学のことは触れたこともなかったのだが、つい先日話の流れで、いや、「実は僕も大学院は K 大学に行っていたんですよ」と話すことになってしまった。

「あ、そういえば、國友という名前どこかで聞いたことがあると思っていた」とその先生。

彼女は俺よりも 5 歳くらい年下みたいだった。そのため、共通の知り合いはいるのだ。全く重なるわけではないが、一部は彼女も知っているのである。

俺が S さんという俺と同期だった女性のことを口にしたところ、「ああ、彼女は、5 年くらい前に和歌山に帰られたんですよ。それまでは公団で猫を飼って暮らされていたんだけど、お母さんかなんかの介護があるみたいで」

「彼女はもう 30 歳くらいの頃から研究職を離れるとか言っていましたものね。」

「ええ、なんか大学院の間に失望するようなことがあったみたいで」と彼女。

Sさんは、博士課程の頃はバリバリに勉強しているという雰囲気の人で、絶対に専任になって、大学で勤め上げるタイプの人だと思っていたのだが、30くらいから非常勤でどうにか生活は続けるけども、もう研究職にはつかないと言っていると聞いていたのである。彼女とは大阪の近畿大学で非常勤していた頃、ちょっとだけ一緒だったけれど、もう30年も会っていない。

「僕が一番親しいのは、関東の大学に就職したYさんで、彼女の旦那さんにもお会いしたことあるんですよ。もう10年くらい前だけど、僕の本が出た時に、彼女の大学に講演に呼んでくれたこともあるんです」

他にも何人もの人の名前が上がった。

「Tくんなんかは、今でも非常勤はやっていますけど、彼は若い頃から、『俺はもう野垂れ死ぬ』とか言っていたみたいだから」

「大学院生はみんなそう言っていましたよね」と彼女。

そうなのだった。大学院なんて普通の人には行かない。しかも博士課程ということになれば、もうみんな30近くになってしまっている。そこまで来て、何も先が見えないということになると「野垂れ死しかねえか」という気持ちにもなるのだ。

実際、俺の同期だった人の中には、40歳になる前に統合失調症になってしまった人もいた。

俺は、これまで専任職には就けなかったけど、どうにか細々と非常勤でここまで来れた。非常勤とは言っても、俺の教えている大学は、条件のいい大学ばかりだ。本も4冊出せた。結構恵まれていたのかもしれない。

人生なんて、下駄を履くまでは本当にわからないのだ。順調に出世コースを歩んで

いるように見えた人が40代の若さで亡くなったり、大病で辞めていったりする姿をこれまで見てきた。

人生なんて、本当に悲しいのである。そして、今俺は人生の終活の時期に入ろうとしている。終活とは思いたくないけれど、もう気力も体力も相当落ちてきている。元気でいれるのはあと15年くらい。その後はボケ老人という可能性が高いのである。

2. AIに翻弄される日々

この3ヶ月間を振り返って何が起きただろうか。

これと言って、何も起きていないのだ。中村雅俊の歌で、何気ない毎日が風のように過ぎていく□という歌が大昔にあったけれど、俺の場合は何気ない毎日ではなく、老いての生き方を模索する毎日が延々と続いている。

7月に1日だけ、仕事を休んでしまった。あまりにも体がしんどいので、後で補講すれば1日くらいは許されるだろうと病院に行った。そこで血液検査を受けた。その後、検査の結果を聞くために再び病院に行くと身体は全く問題はない。

おそらく過労なのだ。俺は歳の割に仕事をし過ぎている。しかし、お金がない以上は仕方がない。これから老後のためのお金も貯めなくてはならないのだ。俺は国民年金の他に国民年金基金も払ってきたが、それでも上乗せ額はしれている。月に7万くらいしか入らないわけだから、それだと生活はできないのだ。

このところAIに翻弄される日々が続いている。先日、突然マンションのWi-Fiの

調子が悪くなったかと思ったら、次はプリンターの調子が悪くなった。そうかと思うとスマホの充電コードがまだ半年も経っていないのに調子が悪くなってきて、買い換えざるを得なくなった。本当にこの頃はデバイスに振り回される毎日である。

大学でも、何から何までAIでできちゃうため、もう教育も成り立たなくなっていくのではないかと懸念されている。レポートも翻訳も何もかもAIがやってくれる時代なのである。しかも今はAIの性能がいいので、先生に疑われないように「大学生のレポート」ふうのレポートを作成することも可能だし、もっと高度なレポートを作成することも選択できるようになってきているとのことである。

恐ろしいような時代である。昔からメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』など、自分の作った機械に破壊される人間を描く話はあったけれど、それが本当に現実になってきたのだ。毎日がSF映画の世界になってきたのである。

3. レンドルミン依存を乗り越えるために

このところ心の調子が悪い。忙しいのは忙しいで辛いのだが、夏休みや春休みなど、暇で何もすることがなくなるとそれはそれで気分が悪くなる。

一つには半年くらい前から、60代になったから自分史を書こうという気持ちになってしまった。これが原因のようである。自分史を書こうと思って、あれこれ過去のことを思い出していると、嫌なことが想起されてきて気分が悪くなっていくのだ。

自分史はしばらくお預けにしようかとい

う気持ちになってきた。過去のことは忘れた方がいい。思い出して都合のいいところだけ思い出せばいいのかも知れないのだ。自分にとって都合の悪い過去を思い出したって仕方がない。誰も幸せにはならないのである。

自分にとって都合のいいようなふうに過去を解釈する。それは悪いことではない。それくらいのご都合主義は許される。誰にも迷惑はかけないのだから。

先日、心療内科に行って、係つけの先生から眠剤は多めに飲むと後で保険がきかなくなるから」と釘をさされた。

俺のもらっている眠剤は、もう31年も飲み続けているレンドルミン（プロチゾラム）というやつである。俺はおそらくレンドルミン依存症になっているのだ。俺はレンドルミンがなくなると1日も眠れないのだ。30代の終わり頃は、寝る前1錠で済んでいた時期もあった。1錠を半分に割って、半錠で済んでいたことすらあった。しかし、今は上限の2錠はなかったら絶対に眠れない。

40代になって仕事が忙しくなり、50代になると仕事が忙しいのがデフォルトになってしまった。そして60になってくると仕事の忙しさは変わらないのに、体力が落ちているため、家に帰るとヘトヘトになってしまい、早くに寝ようと夕方にレンドルミンを飲んでしまう。しかし、早い時間に飲んでも眠れない。結局、朦朧と眠気が差したような状況で夜を過ごすことになる。そして就寝の時間になるとレンドルミンの効果が切れてしまっているのだ。レンドルミンは睡眠薬ではなく入眠剤であり、寝つきをよくするものだから、早めに飲み過ぎるのは問題なのである。

思い切って、薬を変えてみようかとも思った。レンドルミンは長くたくさん飲んでいるとそれが普通の状況になってしまい、抗体ができあがってしまうのだと聞いたことがあったからである。

とは言っても、30年以上もつきあってきたレンドルミンと一気におさらばするのは難しい。それから闘いが始まった。

8月8日（金曜日）

心療内科に行った後、映画を見に行った。アップリンク京都で見たのは『アイム・スエイル・ヒア』である。これは今年のアカデミー賞でフェルナンダ・トーレスが主演女優賞の候補になって、注目を浴びたブラジル映画である。

この女優さん、日本人には馴染みが薄いけど、『セントラル・ステーション』（1998）という映画で同賞にノミネートされたフェルナンダ・モンテネグロの娘さんなのである。あの映画は傑作だった。思えば、あれから30年近い月日が流れているのだ。俺はずっとその間、同じような生活を繰り返している。

その間に起きた出来事といえば、2度にわたる社会運動団体との確執。弟の死。4冊単著を出したということ。当時は専任教員になることを目指していたのが、もうそれは諦めて、非常勤を貫こうという気持ちになったこと。非常勤の仕事自体は恵まれるようになったこと。クリスチャンになったこと。アメリカ南部に行ったこと。ボクシングを始めたこと。ピアノを始めたこと。あれこれ起きてはいるのだ。しかし、振り返ったときに、さまざまな出来事が昨日のこのように思い出されるため、30年近い年月が

3年ぐらいのことにしか思えないのである。

この日の夜、初めてレンドルミンではない眠剤を飲んだ。エスゾピクロンというやつで、すぐに眠気が襲ってくるわけではないが、いつの間にか眠ってしまっていた。

これからはこれに変えていって、レンドルミン依存を減らしていかななくてはならない。

8月9日（土曜日）

この日は昼間、久しぶりにボクシングジムに行った。1か月半ぶりくらいである。俺の方が忙しかったのと、トレーナーの教え子も病気したりしていたので、なかなか合う時間がなかった。

その後、出町座に出て、『見える子ちゃん』を見た。これはいかにも若い子向けの映画だが、知り合いの先生が見てそれなりによかったとおっしゃっていたので、暇つぶしようである。

この日もどうにかエスゾピクロンのみで眠れた。

8月10日（日曜日）

日曜日なので、朝から同志社教会に礼拝に行った。また例によって体がだるい。聖歌隊の練習と礼拝が終わった後、烏丸今出川のコメダ珈琲店でランチ。その後一旦は家に帰った後、することがないので、またすぐに201番のバスで、出町柳に向かい、LION KITCHEN でバナナケーキを食べた。そして、その後同志社寒梅館で、グリークラブの交歓演奏会を聴きにいった。同立演奏会なので、同志社と立命館の演奏会と思う人もいるかもしれないが、同志社と立教である。

音楽系の学生のする演奏会というのは意外に長くて、最初から最後までいれないという気持ちになることがある。ところが、こ

れは2時間以内におさまるものだったので、疲れることなく、ゆっくりと聞けた。やはり、時間は程よい方がいいと思ったのだった。3日目のエスゾピクロンも大丈夫だった。

8月11日（月曜日）

朝起きてみると足が動かない。土曜日にボクシングのトレーニングでステップをしたため、その凝りが2日も経ってから出てきたのだ。前日の日曜日は別にどうもなかったのに。朝からリラクルでマッサージを受けた。その後、『近畿のとある場所で』という映画を見る。そして、『テルマ 93歳のやさしいリベンジ』をU-NEXTの高額レンタルで見た。これは面白い映画だった。主演の女優さんは、これまで舞台で活躍してきた人とのことで、映画では『アバウト・シュミット』のジャック・ニコルソンの奥さん役でチラッと出てきたことくらいしか覚えていない。しかし、彼女90代になって、おそらくこれが映画初主演で、立派に主演女優を務めている。俺もこんなふうになればいいけど、難しいだろうなあ。30年後の自分なんて想像もつかないのだ。

この日は、ついに耐えられず、レンドルミン半個、追加して飲んでしまった。1日1個くらいだったら飲んででもいいと頓服でもらっているのだから、これくらいはいいかと判断したのだ。

それにしても時間が潰れないなあ。

8月12日（火曜日）

まだ足が上手く動かない。行きつけのイタリアンレストラン MIZO で食事をした。その後、アップリンクで、アイルランドの映画『ニーキャップ』を見たが、乗れず。

この日もまたエクソピクロンで眠ること

はできたものの、早くに目が覚めてしまい、またレンドルミン半個追加で飲んでしまった。

8月13日（水曜日）

MOVIX 京都で『木の下の子』を観た。毎年8月になると戦争をテーマにした映画が公開になる。これもよくあるパターンの映画だ。ボーッとして観ていてもそれなりに頭に入ったので、きっと出来はいい映画なのだと思うが、何せ、この歳になるともう昔みたいな意欲的な見方はできなくなってくる。

終わった後、丸善で早矢仕ライスを食べた。ハヤシではなく早矢仕と書いているところが昭和レトロである。街はお盆休みで幸せそうな家族連ればかり。俺は気が滅入るのだった。

そして、また我慢できなくなって、レンドルミン半個を昼間に飲んでしまった。しかし、眠れず。これが俺の悪いところなのだ。

先にも書いたとおり、起きているとしんどういので、ちょっとだけ寝るかという気持ちになって半分だけ飲むのだが、実際には眠れない。体がボーッとなるだけである。それで生活のリズムが崩れていくのだ。

8月14日（木曜日）

今日はもう見たいと思う映画も尽きてしまった。

U-NEXTで『アンフィニッシュ・ライフ』（2005）という映画を見る。これまでこの映画の存在に気がついていなかった。もう20年も前の映画なのだが、日本では劇場公開されなかったみたいで、ほとんど話題にならなかったはずである。

ロバート・レッドフォードとモーガン・フリーマン、ジェニファー・ロペスとキャスト

イングは豪華である。アメリカの田舎で暮らすレッドフォードとフリーマンの関係が面白い。周りからゲイかと疑われるような関係であることが台詞で示唆されるのだが、そうではなく、ただの友達で、隣人という設定である。

とは言うものの、レッドフォードがフリーマンの体の介護をする場面が出てくる。これは新しい展開だと思ったものだった。これまでケアするのは女性、ケアされるのが男性という構図が映画の世界では染み渡っていたからである。しかも、白人と黒人の男のカップリング。これはひょっとすると同性愛に見せないための策略という言い方もできる。異人種の男同士の関係は肌の色の違いが強調されるため、白人同士・黒人同士の場合に比べて、同性愛的な匂いが消えるという説は前から存在するのだ。

ついこの頃になって、「ケア労働」の本をいくつか読んでいる。この頃は現実にもケア労働がクローズアップされるようになってきている。介護やマッサージなど、人のケアする労働はこれからは重要度を増していくからである。

確かにケア労働はまだまだ女性が多い。それは一つにはケア労働はお金にならないから、主収入を稼がなくてはという責任を背負った男性にとってはケア労働は付きたくても付けない職業なのである。

この映画から 20 年経っているのに、それをどうにかしなくてはという社会の意識は大して進歩しているようにも思えないのだった。

8 月 15 日（金曜日）

今日は未明に目が覚めた。

仕方がないからまたレンドルミン半錠、

しばらく寝るけどまた目が覚める。また半錠。そして、昼過ぎになってまだ眠気がおさまらないから、またもう一度寝ようかとまた半錠飲んで、また眠れない。

本当にレンドルミンとの闘いは難儀である。飲みたいけれど、飲んだらオーバードーズになってしまう。しかし、起きていると苦しい。この苦しみがある程度は乗り越えれば、普通になるのかも知れない。

母からは「ボーッとしていなさい」と言われるのだけど、そのボーッとするやり方を忘れてしまっている。

Amazon で注文しておいた『渾身』の DVD が届いた。これは前から気になっていた DVD。高かったのだが、スポーツ映画研究をしようと思っているので、これくらいの失費は仕方がない。島根を舞台にした相撲の話である。

そして、夜、またリラクルに行ってしまった。

見たい映画も残念ながら、あまりないのだ。終戦記念日だから仕方がないのだけど、映画もこの時期に封切られるやつは戦争がらみが多く、気が重くなりそうなものばかり。俺は自分の心と戦争していて、まだ戦争は終わっていないのだ。その上に戦争の話なんて食指が動かないのである。次に心療内科に行くのは 27 日。あと 12 日後だ。それまでどうにか今持っている薬で過ごせるだろうか。

4. 京都暮らし、43 年経って

先日、役所から葉書が来て、名前のフリカナを確認してくれという趣旨のものだった。俺は「万裕」と書いて「カズヒロ」と読

むのだが、まず、そう読んでくれる人はいない。むしろ「まゆ」と読まれてしまう。学生からも女の先生かと思っていたと言われることがしばしばある。

実は、これ、俺は前から悩んでいたのだ。

もう 25 年以上前だが、ジェンダーの活動をしていた頃は「まゆ」の方が今風でいいのじゃないと言われていた。男か女かわからないから、その方が時代に合っていると。実際、学生たちの名簿を見ていると着々と男か女かわからない名前が増えている。

名前の振り仮名は簡単に換えることができると思っていた。この際だから「まゆ」に換えてしまおうか。でも、そんな簡単に換えていいのか。一方で、この頃凹みモードなので、名前を変えれば心機一転できるかも知れないという気もする。新たに生まれ変わるにはいいかも知れないのだ。

夏休みで暇があるので、滋賀の國友村に行こうかと思ったこともあった。國友鉄砲は結構京都では有名である。実家のルーツであることは間違いないからなのだ。しかし、「國友」という名字は、俺はあまり好きじゃない。国の友達なんて右翼的な感じがするからなのである。名前の読み方は簡単に換えられるけど、どこかに養子にでもならない限りは、苗字は簡単には換えられない。

でも自分のルーツだから、一度は行ってみようかという気持ちもあって、FB で國友鉄砲ミュージアムにも繋がっていた。ただ、京都からだだと 2 時間半くらい電車にかかるみたいだ。おそらく、周りは何もないような小さな村みたいところだと思う。そんなところに、この暑い盛りに 2 時間半もかけていく必要があるのだろうか。過去は断捨

離したほうがいいのかも知れないとも思うのだ。

考えてみると俺の生活は学生の頃から 40 数年間、ほとんど変わっていない。前に弟から「一貫し過ぎだ」と言われたことある。他の人からも「味のしなくなったチューイングガムを噛み続けているような人生だ」と言われたこともあった。

考えてみると、色々な人が俺の人生にやってきては去っていった。東京に去っていったロースクールの学生さん、東京に移って行った鍼灸の先生、そしてかつての教え子たちも東京に去っていった。

もう永遠に会うこともないだろう。

それは仕方がないことでもあるのだ。俺だって、大学院の頃の鈴木重吉先生にはものすごく感謝していた。鈴木先生は元々北海道の人で、その後、東京の大学の先生になられて、毎週、東京から京都に来て、ホテルに泊まって、大学で教えられていたのだが、俺が 30 歳の時に退官になられた。その時、研究室の片付けの手伝いに行ったのが最後にお会いした日だった。

それから 8 年後、俺が 38 歳の時にその先生は亡くなった。その間、その先生のことを嫌いになった訳じゃない。ただ、一旦、住む世界が変わってしまうとそうそう会うことは無くなってくるのだ。

それにしても大抵の人は、東京に行ってしまうなあ。京都は就職先が少ないのが一つの原因だ。東京だったら仕事はいくらでもある。

都道府県イメージ調査が毎年発表になるが、いつだって、1 位は北海道、2 位は京都、3 位は沖縄になる。暮らしたいというよりも、観光で行きたいと思うようなところが、

ランキングの上に来る。やはり、京都は一時滞在の街なのである。そこに40年以上も住んでいる俺は、京都に住む変な爺さんなのかも知れないのだ。

しかし、故郷で深い傷を負わされた俺は故郷を自分の死に場所にはしたくない。東京に行きたい気もするけど、東京に出ても何も当てはない。東京だったら余計に物価が高くて、生活は苦しくなる。どうにか京都に自分の眠る場所を探さなくてはならないのだ。

5. 『レイジング・ブル』(マーティン・スコセッシ監督・1980)

本当に45年ぶりくらいで、再見した。

この映画が公開になった当時は、俺は不登校で苦しんでいた。まだ何も前が見えなくて、通信制の高校に移っても、希望は見えない。暗中模索の日々だった。そんな時、映画だけが支えだった。この映画を見たのは17歳の時である。ロバート・デ・ニーロがこの映画でアカデミー賞主演男優賞を獲得した。

この映画、今見直してみると主人公デ・ニーロと弟ジョー・ペシの関係が同性愛的なものになっていることがわかってきた。

「俺を殴ってくれ」というセリフがでてきて、ペシがデ・ニーロの横っ面に何回かパンチを食らわせる。それがデ・ニーロの方は快感なのである。この男が男から殴られるということが快感につながっていくことは『ファイトクラブ』などでも描かれてきたことである。

日本映画の『生きててよかった』というボクシング映画も見たが、この映画では主人

公が殴り合う場面と女性とのセックスの場面がモンタージュされる。すなわち、男は殴られるとセックスしているような快感を感じるもののメタファーなのである。

俺もボクシングジムに行くと自分の男性性を発散できる。俺はもっと若い時期にこういう経験をすべきだったのだ。

しかし、運動神経ゼロだった俺はそれができなかった。

思えば、昭和はバカの時代。人の心に対する理解が全くなかった時代なのだ。苦手な子がスポーツをするのが辛いと思うのは当たり前のこと。できない子を怒ったりしたら、余計に苦手意識を植え付けることも当たり前のこと。そういう当たり前のことを理解していない、バカな大人が多かったのである。

今だったら、昔の先生たちは首だろう。

今となってはどうすることもできないことばかりが、胸に去来していく。いつになったらこのループから抜けられるのだろうか。

今回はちょっと暗い話になってしまいました。。。(笑)

役場の対人援助論

(52)

岡崎 正明

(広島市)

発表！役場の対人援助論的、要注意ワードランキング

①

対人援助・福祉の業界に入って気がつけば 20 年以上になる。別に年数でマウント取りたいわけではなく、本当に気がつくとも年月が経ち、歳を重ねるのだなあ、昔の先輩たちが言っていたことは、本当だったんだなあ…という感じである（やれやれ）。

長く現場に身を置いていると、いわゆる業界用語とか、業務でよく使う言葉というものに出会うことになる。それは現場に入る前に勉強したり、ニュースで見たり普段使っていたりした時とは、また違った響きや意味を持ったりする。「受容」「自己決定」など、大切な言葉ほど、長く携わり、やればやるほど、その言葉の持つ意味の深さ、理想と現実、難しさに悩むことが多い。

これからここに記すのは、私が仕事で使う上で「この言葉は要注意だな～」と思っている、全く個人的なランキングである。誤解を恐れずに言えば「嫌い」とまでは言わないが、あまり使うのが好きではないというか、使い方に苦労すると言った方がいいかもしれない、そんな厄介な言葉たちである。

まあそれ以外の言葉なら問題ないかと言えば、そんなことはなく。どんな言葉であれ、時と場合、相手との関係性の中で、毒にも薬にもなるのだけれど。先日も「お母さんのその状況なら、しんどいですよね～」と伝えたら、「しんどいばかり言われたら、ツラくなります！」と怒られたし。よく使う「安心安全」とか「心配」だって、うまくハマる時があれば、逆効果になってしまうこともある。だから唯一無二の正解なんてのは、この業界にはないのだが。今から紹介するワードは、特に取り扱いに注意を要する言葉だな～と普段から感じているもので、裏を返せばそれだけ大切に、キーになる言葉なのだと思う。

第5位：共感

「相談者の話を共感して聴く」「共感的理解」一。

共感はとても大切で、基本的なことである。おそらく一般の人だって、大事にしている人が多い言葉だろう。そして対人援助職を目指す多くの人にとっては、勉強の場面で何度も教わったであろう言葉ではないだろうか。他にも近接のワードとして「受容」「傾聴」などがある。

もちろん相手の話を聴く際、「共感」が相手にとって話しやすい雰囲気を作り、信頼関係の基礎となることは多い。逆に否定的で批判的で、無愛想な支援者に相談に乗ってもらいたいと思う人は少数だろう。

ただ、現場を重ねて感じるのは、「共感」を使うには注意が必要で、より正しくスキルとして表現するなら、「共感」という言葉では少し足りない気がしている。

ありのままの一個人である私が、本気で相談者の話に共感しようとする、そこにはどうしても私の価値観が反映してしまう。例えば A さんの「こどもが万引きしたのでつい引っぱたいてしまったんです！」には共感できても、B さんの「こどもがテストで結果を出さないから殴ってしまったんです！」には共感できない、などという事態が発生する。私個人の価値観で対応がブレてしまうのはプロとして問題だし、そもそも素の自分のままで共感してしまうと、不適切な相談者の言動（この場合は引っぱたいたこと）を、肯定したり容認してしまうことにもつながりかねない。

だからあくまで支援者としては、相談者がそんな言動に至った思いや気持ちに対して、「そういうことがあれば、あなたの立場ならそんなふうになってしまうのも分かりますよ」と、共感的に受け止めていることを態度で示す、そういう姿勢が重要だと思う。極端に言えば、個人的に私が心から共感しているどうかは関係ない。相談者が「この人、私の気持ちを分かってくれてるな～」と思える態度を、私が見せられているか。その方が大切である。逆にいくら支援者が本当は心から共感していても、仏頂面で応答も乏しくて、相手にそれが伝わってないと意味をなさないので。

そんな言い方をすると「まあ、気持ちはどうでもよくて、大事なのは見え方だなんて、そんな演技みたいなものってどうなの？」「心が大事でしょ！じゃないと行動も伴わないわ！」と、私の中の「正論オバちゃま」みたいな人が脳内に出てきて、小言を言われそうになるのだが（ちなみに正論を言うてくるイメージは大抵おばちゃん、煽ったりイチャモン言うてくるイメージは大抵若い男なのだが、この辺は私の中のジェンダーバイアスなのかなあ？それとも日本の文化的なもの？）、それに対してはキッパリと、「演技で結構！本気で演技しようとしてたら、そのうち心がついてくるもんだ！」「行動から始めて、心が動いていくことだってあるのよ」と言い返すようにしている。

これは私が師と仰ぐ、児童精神科医の岡田隆介先生からの教えがベースになっている。赤ん坊は最初意味も分からず大人の言動を真似て「バイバイ」と手を振ったり、「おはよー」と言うが、それに対して相手からも笑顔で「あらかわいいねえ。バイバ～イ」とか「はい、おはよ～。えらいね～」と返ってくる経験を通し、そのやり取りの心地よさや意味を学習していき、またそれが次の行動を強化していくという。「だから心なんてあやふやなものを変えようとせず、まず行動をシンプルに変えたらええねん！」と。うん、実に分かりやすくて敷居が低くてよいではないか！

そんなわけで私は「共感して聴く」といった表現を現場ではあえてせず、「共感的態度を示す」「共感的姿勢で聴く」というようにしている。そして「共感してるかよりも、共感してるように見えることが大事！そしたらそのうちほんまに共感がついてくるわ！」みたいなことを、若い人にも伝えている。

なお、「受容」についても共感と同じように「心のあり方・姿勢」を意味する言葉であるため、同様の使い方を心がけている。「傾聴」についてはその2つよりも、行動や態度

に近い言葉であるため、「相手の話を傾聴する」と若い人が使っていても気にしないが、正直私自身はあまり使わない。それは傾聴という言葉の奥深さからのためらいもあるが、傾聴や受容だけでは、相手との関係構築はできて、事態の変化につながりにくい…という思いがあるからだ。その辺りは、私が個人的に解決志向アプローチや、システム論・家族療法を学んできたということ（もしくは真の達人ほどの受容や共感ができない未熟者だから）が関連しているのだと思う。

第4位：説得

説得の意味を調べると、「よく話聞かせて相手を納得させること」「合理的かつ象徴・記号的であり、時には論理的とは限らない手段を利用して、ある考えや態度、または行動を相手にさせる目的の行為」といった説明をみつけた。

「認知症の高齢者に後見人をつけるよう説得する」「障害児の親にサービス導入を説得する」「こどもに施設入所を説得する」などなど。そんな説得の場面に私自身何度も立ち会い、推進・協力してきた。その結果、客観的に見て当事者や家族に良い変化が生まれたことも確かにあったが、なかなか上手くいかないこともあった。それくらいの自覚はある。

それだけ繰り返し経験しているくせに、どうもあまりこの「説得」という言葉が好きになれないのはなぜだろう。それはおそらく、この説得という言葉が持つ、当事者の意見や気持ちよりも、こちら側の意向や主張を飲み込ませようとする、力技的な圧を感じる響きが、私の中で「支援者の独善性」や「当事者が置き去りにされていないか？」という警戒感を高めるからだと思う。

「説得とは『分からせること』で、納得とは『分かること』である」という言葉も聞いたことがある。確かに納得が、当事者自身に主体性がある言葉であるのに対し、説得は当事者よりも、それを行おうとする者が主体の言葉だ。

人が説得に応じるとき。その決定に対する納得感がいつも 100%あるとは限らない。もちろん誠意ある説得によって気持ちや考えが変わることもあるだろうが、場合によっては本心とは違っていたり、真の同意ではないが、相手との関係性や状況によって「諾」という結論を出してしまうことが起こり得る。それが説得の持つ危険性のような気がしている。

以前ここにも書いたかもしれないが、高齢者支援に関わる知人から、こんな話を聞いたことがある。Cさんという高齢男性の話だ。Cさんは長く1人で在宅生活をしてきた人だった。いわゆるちょっと「変わり者」と言われるタイプの人だったが、自立的な人で誰に迷惑をかけることもなく、地域でやってこれていた。しかしある時脳梗塞で倒れたCさんは病院に運ばれ、一命をとりとめたが、身体にマヒが残ってしまった。リハビリを経て介護があればなんとか在宅生活ができる程度まで回復したCさん。そこで知人が介護ヘルパーなどの導入で関わることになったのだが、このCさんの生活上のこだわりというのが、自宅で排泄する時は大便をトイレでせず、居間に敷いた新聞紙の上でするという習慣だった。

Cさんは片マヒが残ったことから、移動や排泄などでも介護が必要な状態だった。Cさんからは介護を受けた上で、これまで通りのスタイルでの排泄をしたいとの要望があったが、関わるヘルパーや訪問看護からは衛生面や清潔面での問題を指摘され、中には「そんな変な支援はしたくない」と拒否する関係者もいた。

困った知人は他の支援者と共にCさんに排泄方法を改めるよう、理を説いて繰り返し伝えた。確かにその排泄方法に、合理性や正当性はないと思った。泣くCさんをなだめ、

親族や医師にも協力を得て説得し、最終的に強く促すことで、Cさんはそれまでの主張を改め、通常のトイレでの排泄介護を受け入れた。

しかし在宅生活が始まって少しして、Cさんは極度の便秘に繰り返し悩むようになり、服薬が増えていった。食欲やADLもどんどん低下し、以前のような活力や意欲も見られなくなっていった。そのうち排泄も自立しなくなって再入院し、しばらくして亡くなったという。

知人は「あのとき無理に説得せず、Cさんの考えを尊重する支援をしていたら、何か違ってたんじゃないか…と、今でも思うんだ」と述べていた。

我々の生活というのは、小さなこだわりの集合体みたいなものである。入浴の仕方からリラックス方法、冷蔵庫の中身から歯みがきのタイミングまで人それぞれで、中には効率的でも合理的でもないものも多い。しかしそんな個人の不合理や非常識を、我々の社会はどこまで受け止める支援が用意できるのだろう。おそらく私も同じ立場なら、安全性とか現実をふりかざしてCさんを説得し、「正しい道」に導こうとしたかもしれない。そう思うと、知人やCさんに関わった支援者をむやみに批判することはできないと感じる。

説得という言葉をしてできるだけ用いない代わりに、使いたいと思っているのが「助言」とか「提案」である。そこにはこちら側の押しつけがましさはなく、あくまで1つの選択肢としての紹介・提示があり、決定権は当事者側にあるという姿勢が貫かれている。

もちろん現場がそんなに理想通りにいかないことは重々承知しているが、それでもやはり支援者というのは専門家として、当事者より優位性を持ちやすいものであり、それはときに「暴力」や「強制力」につながりかねないという自覚を忘れずにいたいと思っている（公的機関の支援者としては特に）。だからこそ相手の話に、想いに耳を傾け、想像し、対話を続けることをまずは全力でする。いきなりこちらが思う「正しさ」を押しつけない。そんな作法が「説得ではない、納得の自己決定」に近づく鍵だと思う。

意外と？盛り上がって文量も増えてきたので、今回はここまで。次回、ベスト3の発表に続く…。

臨床のきれはし

SHEET30

浅田 英輔

Hold off on solving

30Sheet を迎えた「臨床のきれはし」。心理臨床にはいろいろな技法があり、「型」が決まっているものも多い。でも、型を実行する上でも周辺にある細やかな技やちょっとした態度、考え方など、「あったほうがいいもの」はたくさんある。例えば、認知行動療法を行う場合でも、傾聴の技はとても大事になる、みたいな。そういう、あまり明確にされないものを「臨床のきれはし」として、大事なものとして、考えていることを書いていこうという思いから始めたものだ。

ここ 10 年ほどは本業として臨床業務にはついていないのだが、書きたいことはけっこう生まれてきている。日々是臨床である。

カウンセラーのもとには、問題・課題を抱えた方が相談に来る。

「コレコレで困っているのですが、どうしたらいいですか」「こんなことが起きてしまって、どうしたらいいかわからないのです」

その中には、「こうすればいいよ」と言える問題もあるし、解決が難しい問題もある。でも、多いのは「どうすることが解決なのか？」という問題である。

例えば、
「夫のお金の使い方がおかしくて、なにに使っているかわからないけど生活費にも手をつけている。オンナがいるのかも」

これはどうしますかね。

私が思う解決は「さっさと離婚しろ」ですね。じゃあ、そう言えば解決するのか。

「お金をあなたが管理しなさい」

それで解決する問題なのか。

「尾行して決定的な証拠をつかみなさい」

そういう問題なのか。

そういうとき、カウンセラーは、「あなたはどうしたいのですか」と聞く。「離婚したい」というかもしれない。この時点でカウンセラーは、この人の離婚したい気持ちは受け止めつつも、離婚したいと思っていない可能性も大いにありうると踏んでいる。今は離婚したいと思っているかもしれないが、話を聞くうちに変わる可能性もあることを知っている。

聞いていくと、「離婚したいわけではない。家族のことを考えて、ちゃんとしてほしい」となるかもしれない。

そうしたら、「あなたの思う、ちゃんとはどういうものですか」と聞かなければならない。

ちゃんとは、ちゃんとです。普通の父親みたいに。

「普通の父親とはどういう感じですか。」

ふつうはふつうです！

「私にもわかるように教えてください」

というふうに聞いていくと、そもそも、問題はなんなのか？となっていく。最初の時点で「じゃあ離婚しましょ。そのためには、これこれの手続きと～」といくと、おそらくクライアントのニーズとはかけ離れてしまう。だから、「ゆっくり考えてみるとしたら、本当にあなたが望むことはなんなんですか？」と問いかけていく。

クライアントが自分のことを考えていくのは、時に、いや大抵の場合、キツイ。自分の思いを掘り下げていくのって、結構大変な作業なのだ。見たくない感情にふれることもあるし、恥ずかしいと思うことだってある。よくわからないことだってある。がんばって言葉にして言ってみると、なんか違う、ってこともある。自分の気持ちをわかっているのは自分だ、ということはそんなにないのだ。そして、話したり、書いたりすると「ぴったり」きたり、「ちょっと違う」などに気付いたりする。

ふつうとは？ ちゃんとは？ あなたが思う、あなたの望ましい姿はどんなものなのか。夫にどうしてほしいと思っているのか。自分はどうありたいと思っているのか。そういうことを、ゆっくり一緒に考えていく。

はっきりした形ではなくとも、あー、自分って、こう考えてたのかーと腑に落ちることもある。そうなってくると、「なんか、考えがまとまってスッキリしました！ 夫にはガツンと言ってやります！」みたいな感じで終わることもある。もともとの問題は何も解決していないのに。

となると、最初にあった「解決」ってなに？ ？ となっちゃいますよね。離婚を進めていたら、望まない、大変なことになっていたかもしれない。そしてこういうことが起きることは珍しくない。最初に出された問題ばかりに目が行き、その解決だけに向かうことは、あまり勝ち目がない。だって、それを解決することが本当の目的ではない可能性が高いから。「最初に離婚したいっていったでしょ？」という言葉もあまり意味がない。言った、言わないではなくて、今どう思っているか、今後どう変わっていくことが考えられるか、ということが大事にされなければならない。

これって、カウンセリング場面によく起きることだけど、日常的なやりとりにもとても頻繁に起きている。職場で周りのやりとりをみていると、「最後まできけよ」とか「いやいま論点ズレてるだろ」とか「相手の言ってるポイントはそこじゃないだろ」と思うことが、本当に毎日みられる。職場研修では傾聴の話をされるけど、ほんと、傾聴って難しいのよ！ もちろん、日常の中で、ちゃんと傾聴しなくてもなんとなくうまくいくことだってたくさんある。毎回必ず傾聴しなければならないわけではない。「ヘーそうなんだー」のほうがいい場面だって多い。

あとは、多くの人は「困り事を相談されたら解決してあげたくなる」もの。ちょっと力になりたいし、私の助けでその人がいい感じになったらうれしい。

でも、多くの相談ごととは、解決が目的ではないことが多い。解決への助言が、かえって問題を悪化させてしまうことも稀ではない。

コスパ・タイパが求められ、スピーディーさ、簡潔さが求められる世の中。さっさと解決できるなら、したほうがいいことも多い。だけど、ゆっくりと、“ちゃんと”聞くことのほうが、相手の力になることはとても多いのだよなあとと思う。

困り事を解決することは大事だけれど、解決を急ぎすぎてもよくないということはたくさんあるのです。

すぐに解決しないでゆっくりと取り組むということは、結構難しいのだ。「待つ力」ってなかなか大変。

発達検査と対人援助学

② AI の問いから考える発達相談

大谷多加志

マガジンでの連載も 15 年目です。毎年 2 月、5 月、8 月、11 月に原稿の締め切りがやってきて、翌月は 15 日発行に向けて編集作業。なので、2 月、5 月、8 月、11 月に原稿執筆のことを考え、3 月、6 月、9 月、12 月には編集作業を進めるという生活を 15 年間続けてきたことになります。

今のところ特段に負担だとか大変だとかは無いのですが、連載の方は“さて今回は何を書こうか…”とネタ探しが必要な機会も増えてきました。さて、今回はどうしたものか…と思案しているところに、ふと Facebook に AI 関係のポストがあることに気づきました。私自身、AI は特に忌避しているわけではなく、Midjourney とかは 2021 年頃から触ったりもしていたのですが、実際に自分の仕事にどう落とし込めるかというところでうまいポイントを見つけられずにいました。最近は英文校閲なんかでは結

構お世話になっていましたが、これも論文執筆や正規の英文校閲サービスを利用することを前提とした、事前準備のひとつとして…というのが現在の利用状況です。ともかく、そのポストの中では「AI は“壁打ち”の相手として思索を深めるのが有効」「スケジュール管理やタスクの把握」など、使用者にパーソナライズして用いることが重要であるという指摘がされていました。

そこで思い付きで、Microsoft の AI ツールである Copilot に『現代の幼児期の発達障害のアセスメントに関する課題点を挙げ、それらに対する改善の方針を、①わずかな改善につながる水準、②具体的改善につながる水準、③中長期的、組織的に取り組むメタレベルの水準でそれぞれ提案してください。』とお願いしてみました。その結果、生成された回答が以下のものです。

● 軽微・実践的な問い(現場での運用に関する疑問)

- 検査項目の提示順や声かけが、子どもの反応に影響することはあるか？
→ 評価者の語りかけ方や雰囲気、子どもの集中や緊張に影響する可能性。
- 保護者が同席する場合としない場合で、子どもの得点に差が出るか？
→ 安心感や依存傾向が評価に影響する可能性。
- 同じ子どもに対して、異なる評価者が実施した場合、得点のばらつきはどの程度か？
→ 評価者間信頼性の実践的検証。

✎ 具体的・研究的な問い(検査の妥当性・活用方法に関する疑問)

- KSPD2020 の得点は、他の発達検査（例：WISC、MSEL）とどの程度相関するか？
→ 交差的妥当性の検証。
- KSPD2020 の領域別得点（姿勢・運動、認知・適応、言語・社会）から、支援ニーズの予測は可能か？
→ アセスメント結果と支援計画の接続可能性。
- KSPD2020 の得点変化は、療育・教育的介入の効果指標として有効か？
→ 介入研究におけるアウトカム指標としての妥当性。

㊦ 抽象的・理論的な問い(発達理論・制度設計に関する疑問)

- KSPD2020 の構成概念は、現代の発達理論（例：動的システム理論、文化歴史的発達理論）と整合的か？
→ 検査の理論的背景と発達観の一致性。
- KSPD2020 は、文化的・社会的背景の異なる子ども（例：外国籍児、多言語環境）に対してどのような限界を持つか？
→ アセスメントの文化的妥当性と限界。
- 発達検査という枠組み自体が、子どもの多様な発達のあり方を規定・制限してしまう可能性はないか？
→ アセスメントの倫理的・哲学的問い。

なぜか課題と改善の方針というお願いが、少しずつ「問い」という形で返されていたり、「発達アセスメント」と大きな枠組みで振ったのに「KSPD2020＝新版 K 式発達検査 2020」を前提とした回答になっていて、この辺りはユーザー情報を含めて最適化した回答になっているのかわかりませんが、なるほどそれなりに興味深い問いが生成されています。最後の「発達検査という枠組み自体が、子どもの多様な発達のあり方を規定・制限してしまう可能性はないか？」というのは意外と芯を喰った問いかもしれません。というわけで、今回からはしばらく AI が生成した問いについてそれぞれ考えてみる、という形で連載をしてみようと思います。

『検査項目の提示順や声かけが、子どもの反応に影響することはあるか？』

まずはひとつめの問いから考えます。項目の提示順や検査者の声かけが子どもの反応に影響することがあるか—という問いに対する答えはまず確実に『ある』と言えるでしょう。ではこの影響は消すことができるものなのでしょうか。さらに言えば、消すべきものなのでしょうか。

検査項目の提示順の影響を消そうと思えば、一番シンプルな対応は提示順を固定することになります。しかし、そのためには子どもの年齢（具体的には、発達年齢）に応じて提示順序を事前に決めておく必要があります（〇歳の子どもの場合はこのパターン、

みたい)。ですが、そもそも子どもの発達状態が明らかではないから検査を実施しようとしているわけなので、この前提条件を満たすことができません。また、新版K式発達検査の標準化自体が、“検査項目の提示順を決めていない”状態で集めたデータなので、検査手順を固定してしまうとむしろ標準的な方法から乖離してしまうことになります。

検査者の声かけの影響を排除しようと思えば、規定された以外の発言を一切禁じてしまえば、ある程度統一できるかもしれませんが、もともと教示の内容(子どもに対する説明)は、何を言う必要があって、何を言っ
てはいけないのか、などがきちんと決められています。ただ、難しいのは“子ども側からの言動”に対して、検査者が無反応でいるわけにもいけない、という点があります。例えば、検査中に子どもが「これで合ってる？」と確認してくる、という場合があります。原則的には直接的に成否を教えないように、『思ったようにやっ
てごらん』など中立的な声かけをすることになる場合が多いと思いますが、この時の声かけの内容やトーンなどは、検査者によって多少の違いはあるでしょう。また、ここまで統一するのは手間がかかりすぎますし、現実的ではないと思います。

上記の説明は、ともすれば『影響を消すのは無理！』と開き直っているようにも見え
るかもしれませんが、重要なのは“提示順や声かけ、下手をすれば雰囲気までもが子どもに影響することがある”ということを検査者が自覚しておくことだと思います。その上で、その子どもについては、提示順や声かけがどのように影響したと思われるのか

を考察しておくことではないかと思います。ほとんどの場合、提示順が違うことの影響は皆無ではありませんが、提示順が検査結果を全く異なるレベルで変えてしまうということもほぼありません。逆に言えばそのくらい大きな影響が出るケースがあれば、その子どもには「提示順」(つまり、活動の順序)が極めて重要であることがわかり、それは日常生活の中でも同じようなことが起こっている可能性があることを示唆していると言えるでしょう。この場合、“活動の順序が大事”という情報はその子どもの言動を理解する上でも、支援の方法を考えていく上でも、非常に重要な情報になるのではないのでしょうか。

保護者が同席する場合としない場合で、子どもの得点に差が出るか？

これもほぼ確実に『ある』でしょう。ただ、数値的な結果を左右するほどの影響があるかどうかは、ケースによると思います。また、一般的には子どもの年齢が低いうち、特に0歳や1歳の頃は保護者が同席するのが一般的ですし、年齢が高くなるにしたがって同席しないでも検査が実施できるようになります。

AIの視点で「安心感や依存傾向が評価に影響する可能性」が指摘されている通り、保護者がいることで安心して課題に向き合うことができ、結果的によいパフォーマンスを発揮できる可能性はあるでしょう。ただ、一方で、AIも指摘するように保護者がいることで依存的になり、やってみたらできるかもしれないような課題に対して、「やって！」と言って尻込みしてしまう可能性もあります。このように書いた通り、保護者が

いることはプラスに働く場合もあれば、マイナスに働く場合もあるわけで、これは保護者がいない場合でも同様です。

保護者がいないことで不安が高まり、十分に課題に取り組めないことも起こり得ますし、ひとりで検査者と向き合い、適度な緊張感があることが結果的にパフォーマンスを高めることもあります。

結論としては、ひとつめの問いと同じようなことになりますが、その子どもについては、保護者がいること（またはいないこと）がどのように影響したと思われるのかを考察しておくことだと思います。

同じ子どもに対して、異なる評価者が実施した場合、得点のばらつきはどの程度か？

では、最後の問いです。まず「異なる評価者」となっている点がポイントであるように思います。これが「異なる検査者」であれば、検査項目の実施順序も違えば、声かけのトーンも異なるわけで、スコアにどの程度表れるかはともかく影響はあるわけです。ただし、一人の子どもに同時期に異なる検査者が検査を実施することは不可能で、ばらつきを明らかにすることはできません。一方、評定者間一致度であれば、同じ検査場面の録画を視聴し、検査項目の通過・不通過の評価がどの程度一致するかを調べることは可能ではあります。この点は研究に使える検査場面の映像などがあれば調べることが可能なので、やってみる価値があるかもしれません。

以上、今回は AI が生成した問いのうち「軽微・実践的な問い(現場での運用に関する疑問)」について考えてみました。残りは

また次回以降で考えてみようと思います。

講演会 & ライブ な日々 ④④

古川 秀明

『般若心経とオープンダイログ 3』

祖父の遺体が火葬場で燃えたその日の夜から、私の眠りは途絶えました。

おじいちゃんは死んでどこへ行ってしまったのだろう・・・。

人間はいつか死ぬのになんで生きてるんだろう・・・。

死んだらどうなるのだろう・・・。

なんで僕はここにいるんだろう・・・。

僕もいつかは死んでしまうのだろうか・・・。

宇宙の果てに何があるんだろう。

もし果てがあるのなら、その果ての向こうにはなにがあるんだろう・・・。

そんな果てにたどり着く前に、僕は死ぬのだろうか・・・。

僕はいつ死ぬんだろう・・・。

こんなことを考え出すと、恐怖で息が荒くなり、動悸が激しくなり、冷や汗が出てきました。

そんな恐怖におびえる私のところに、柱時計の音が眠れなくなる追い打ちをかけます。

当時、商売が順調で高収入に恵まれていた父が柱時計を買ってきました。

何かの映画で、お金持ちの家に柱時計があり、優雅に時を刻んでいるシーンを見たいのです。

その柱時計はずっと休まず「コッチコッチコッチコッチ」と音を立てて時を刻みます。

昼間は他の生活音に紛れてさほど気になりません。

しかし、当たりが静まり返った夜、しかも眠れない私にとってはとてつもなく大きな音に聞こえました。

何で人は死ぬんだろう・・・コッチコッチコッチコッチ

僕もいつか死ぬのかな・・・コッチコッチコッチコッチ

宇宙の果てにはなにがあるのかな・・・コッチコッチコッチコッチ

なんでいつか死ぬのに生まれてくるんだろう・・・グオッチグオッチ
グオッチグオッチ

私は両手で両耳を押さえ、大声で「ぎゃ～、たすけて～」と叫びました。

私の隣で寝ていた両親は、私の声に驚いて跳び起きました。

父「なんや！どうしたんや！なんか怖い夢でもみたんか！」

母「ほんまや、びっくりしますがな。どないしゃりましたんや？」

私「死ぬのんが怖い・・・死ぬのんが怖い・・・死ぬのんが怖い・・・」

私の言葉に父も母もケラケラ笑いました。

父「心配すんな、もう戦争は終わった。爆弾は降ってきいひんわい」

母「大丈夫でおますで、米もたまごも肉もおますよつてに」

両親の愛情という温かく平和な布団の間に寝ながら考えている私の「死」と、戦争に志願兵として従軍した父や、戦中、戦後の食べ物のない時代を食うや食わずで生き抜いてきた母が考える「死」は、全く別物の「死」でした。
私は父に尋ねました。

私「僕、死なへんやんな？」

父は笑いながら答えてくれました。

父「心配するな、絶対死ぬ」

私「ひえ～、いつ死ぬん？」

父「それは誰にもわからん。10年後かもしれへん。ひょっとしたら明日の朝死んでるかもしれへんぞ」

私「ぎょえ～！死んだらどうなるんや～？」

父「じいさんの葬式で見たやろ。最後は焼き場で焼かれて、はいそれまでよ」

私「ひえ～、もし焼かれてる時に生き返ったらどうなんの？」

父「まあ、メチャクチャ熱いやろな。もう一回焼け死ぬしかない」

私「ぎゃ～～～！お母ちゃん、死にたない！死にたない！」

母「何を言うてますのや。あんさん、まだこないだ生まれたとこでっせ」

私「こないだて、8年も9年も前やん」

父「まあ、こればかりは順番に死ぬとは限らへんからな・・・」

私「え？ほんなら僕がお父ちゃんやらお母ちゃんよりかはよ死ぬかもしれへんの？」

父「まあ、そういうことやな」

私「ひ～、ほんならどこいくの？」

父「こないだ死んだじいさんが迎えに来てくれるやろし、心配すんな」

私はお通夜の時の祖父を思い出しました。

青白い顔をして、鼻や耳に綿を詰められていました。

その姿かたちの不気味なこと・・・。

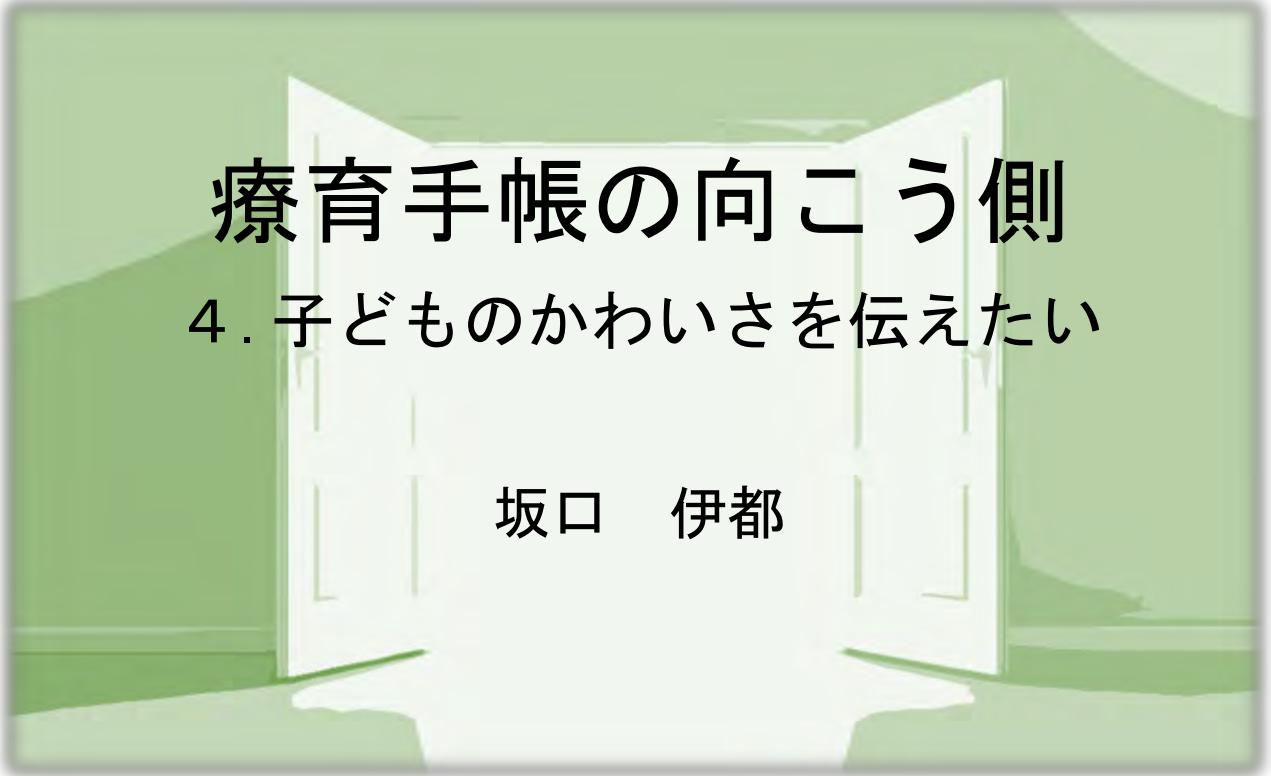
あのおじいちゃんがむくっと起き上がり、僕を迎えに来たら、きっと僕は怖くて悲鳴をあげながら逃げだしてしまうだろう・・・。

父も母も面倒くさそうに、明日も仕事があるからもう寝るように私を強く促しました。

しかし、両親の促す言葉は私の恐怖を増幅させ、終わることのない夜を生み出しました。

(次号に続きます)

シンガーソングライター
ふるかわひであき



療育手帳の向こう側

4. 子どものかわいさを伝えたい

坂口 伊都

はじめに

前は、子どもとの言葉のコミュニケーションについて書きました。大人は、子どもが怒ったり泣いたりしていたらその理由を話して欲しいと願い、できるはずだと信じて「何故？」を繰り返し、子どもから言葉が出てこないとガッカリしてしまう。コミュニケーションは言葉だけではなく、仕草や表情からも伝わってくるものですが、言葉で説明できることが全てのように考え、言ってくれないと焦ってしまい、大人自身も自分の状態を言うほど上手く表現できないことが多いものです。そこは棚に上げて、子どもの心配をするのが親心というもののようなのです。

療育手帳申請の聞き取りの際、一つの質問に対して何倍も話す方もいれば、淡々と返事をする方もいます。ご両親で来られると、どちらか一方が主に対応されることが多いですが、母親に語りを譲ると言っていた父が、途中から会話に入り込み子どもの様子を熱弁することもあります。また、質問に対して、母は「できます」と言い、父は「えっ、できないだろ」と意見が分かれる時もありますが、質問内容を具体的に補足すると、お二人の着地点をみつけれられます。意見が分かれたままというご両親には、お会いしたことがありません。どちらも子どもの発達検査に関心を持って来られ、子どもを思う気持ちが伝わってきます。

淡々と返事される方は、話が広がらずに終わりそうになるので、質問した側が困ってしまう時があります。例えば、「お友達関係は、どうですか？」と子どもの交友関係を尋ねると、

親 「友達は、いませんね」と一言。その後の言葉を待っても出てきそうにありません。

援助者 「えーっと、学校の様子とか何か聞いていますか？」

親 「トラブルがあったとかは聞いてないです」
援助者 「誰か、お友達の名前が出てくることはありますか？」
親 「そう言えば、最近一人の子の名前を言いますね」
援助者 「へえ、そうなのですね。いつ頃から？」
親 「この春頃からです。クラスが一緒になった子と好きなものの話をするようになってみたいで」
援助者 「何の話をしているのですか？」
親 「恐竜が好きで」
援助者 「そういえば、今日の服も恐竜柄でしたね」

その辺りから話が弾み始めます。今まで出てこなかった名前を言うようになっていく変化に気づくと、その子の成長が見えてくるようです。いつも先生の横にいて、先生とばかり話していた子が、周りにいる子を意識して、名前を覚えるまでに関心をしめしていることは、大きくて嬉しい変化です。

一緒に遊べ、お喋りをして過ごせるのが友達だと考えてしまいましたが、この子には名前を覚えた子が友達なのでしょう。「そう言えば」の辺りから、親御さんが纏っていた空気が軽やかになりました。無機質な話から感情がこもっている話に変わった印象です。淡々と答えていたのは、見知らぬ所で緊張していたのか、無口な方なのか、小さな出来事を言っても仕方がないと経験してこられたのかわかりませんが、かわいい子どもの話は楽しい気持ちにさせると教えてもらいました。今回は、親御さんから日頃の子どもの様子を聞かせてもらう中で、思わず話したくなる話題について書いていこうと思います。



困りごとから

最近のお子さんの様子を伺うと、困りごとを多く耳にします。その一つは、こだわりからくるものです。

援助者「支援学校まではスクールバスで通っているのですか？」
母 「はい、バスで」
援助者「バス停まで送っているのですか？」
母 「はい、歩いて送っています。最初にバスに乗れないと怒るので大変です」
援助者「バスが大好きなんですね」
母 「はい、バスに乗るために学校に行っているようなものです」

援助者「1番でバスに乗ったら、ご機嫌で行ってくれるのですか？」

母「1番にバスに乗れたら満足しています」

援助者「他に1番に乗らないとイヤという子はいないのですか？」

母「はい、皆さんに譲ってもらっています」

小さい子も押しのけて、最初にバスに乗ろうとすることに申し訳なさを感じていました。子どもよりも他の保護者にどう思われているかの方が気になっている様子です。この行動から苦情が出たり、嫌そうな表情をされたりもないそうです。きっと他の皆さんも「こだわり」への理解をお持ちで、温かく見守ってくれているのではないかと感じます。「こだわり」はその子の大切にしている部分で、そことどう折り合いをつけていくかを探していくことが大事になります。このお母さんには、周りの皆さんに「すみません」よりも多く「ありがとう」を伝えて欲しいと感じます。そして、1番でないと嫌という他の子が来たら、皆で知恵を絞ったらいいですし、その頃にはこの子の関心が別のところに向いているかも知れません。

次は、子どもが反抗的で困っている話です。

母「最近、家でイライラしていることが多くて、どうしたらいいものか」

援助者「いつ頃からイライラしていると感じるのですか？」

母「新学期になったぐらいからです。イライラしているから、何にイライラしているのと聞いても、自分の気持ちを上手く表現できないから、何も言わないし」

援助者「伝えたいのに伝えられなくてイーってなっている感じですかね？」

母「そうそう、そんな感じ。早くご飯食べてと言ってもグズグズして食べないし」

援助者「お父さんが言えば、動くのですか？」

母「そうですね。でも普段からいないから。そう言えば、リビングで寝るなと父が言っても、言うこと聞いてないですね」

援助者「リビングにずっといるのですか？」

母「はい、ベッドで寝てと何度も言うのですが、ソファで寝てしまっ」

援助者「自分の個室はあるのですか？」

母「はい、あります」

援助者「リビングでご家族も過ごしていますか？」

母「はい」

援助者「自分の部屋から出てこない話はよく聞きますが、〇〇さんはリビングにいたいのですね」

母「あっ、本当だ。言われてみればそうですね、気づかなかったです」

学校では反抗的ではないが両親の言う事をきかなくなった、反抗的になってと心配されていましたが、よく話を聞いていると自分の部屋があるにも関わらず、リビングに居続けているそうです。自分の部屋にはあまり行こうとしない理由を考えたくまりました。親に言われたことをすぐにしなくても、家族を感じていられる距離にいたいのかも知れません。反抗的が加速していったらどうな

るのか不安を感じていましたが、違う角度から見たら違って見えてきたようで、「押してダメなら引いてみてもいいかもしれませんね」と笑っていました。

周りからどう見られているのだろう、陰口を言われているのではないか、反抗に歯止めがきかなくなっていくのではないかと等、不安になると悪い方に考えてしまいがちです。親御さんは、子どもの困りごとを話していましたが、その中には子どもの好きなものがありました。最初の子はバスが大好きで、反抗的な子は人や家族です。子どもの様子を伺っている時、普段の子どもの様子が浮かばない時や困りごとの話ばかりになる時は、気分転換も兼ねて「お子さんが好きなことは何ですか？」とお聞きしています。

「そうですね、ブロックとか作ることが好きですかね」

「何を作っていることが多いのですか？」

「食卓の上にビルや家、駐車場を作るんです。ご飯だからどけてと言っても動かなくて」

「それは、大作ですね」

「ええ。親が片付けるのですが、また同じものを作っています」

「ブロック大好きなのですね」

子どもの好きなものの話が始めると、その子がワクワクしながらやっている姿が立ち上がってきます。楽しいエピソードは、親御さんの表情を穏やかにします。

子どものために

どの親御さんにとっても子どもの将来が気になります。できることなら、子どものためになるような働きかけをしたい。

「子どもの将来につながるようにできることをしてやりたいが、何をしてやればいいのか」

と聞かれることがあります。中には、

「できることが増えたら、療育手帳がなくなってくて普通級に入り、自分の足で稼げるようになるのが一番いいと思っている」

と語る方もいます。確かに、再交付の検査で「非該当」になる子もいます。その一方で、クラスの皆ができて自分だけできないと悩み、友達から馬鹿にされ、辛い思いをした子が支援級や支援学校に入り、わかりやすく丁寧に教えてくれるから、これから何をすればいいかがわかり、自分から進んで行動するようになり、表情も明るくなったという声も聞きます。

先のことは、誰にもわかりません。わからないから不安になり、答えはないと知りながら答えを求めたくなります。さらに、他者は自分の思い通りに動いてはくれません。子どもに良かれと思っ



て、忠告をしても、耳を貸さずに「うるさいなあ」と悪態をつかれることもあり、子育てに正しさや、これをすれば良い子に育つという方法はわかっていません。本当にあれば、誰も苦勞はしません。

数多くの子どもを見ていて、周りにいる人を信じられるようになることが力になると感じます。

そのために、その子の特性、よくわかっているところと苦手なところを知り、それに合わせた伝え方を周りにも理解してもらい、「できた」という経験を積める環境を整えていくことが大切です。療育手帳が非該当になった場合でも、できて当たり前ではなく、ケアを必要とすることは多々あります。子どもとして学校に通う期間は人生の中では短く、大人として生きていく時間の方がずっと長い。障がいのあるなしに関わらず、その人が自分なんて価値がない、ダメだ、役立たずだと思うのではなく、よく頑張っている自分を肯定して生きていたいと思っています。

私のよく知る子が、療育手帳を所持して成人になりました。その子は、グループホームに住み、障害者枠での求人応募を何度か受け、研修期間に無断欠勤をして採用されなかったということもありましたが、今は一般企業で働いています。家に着くのが20時になると愚痴を言いながらも頑張っていて通勤しています。障害年金の受給等を受け、大好きなあいみよんのファンクラブに入り、コンサートに出かけるようになりました。

この子も自分に自信がなくて、いろいろなトラブルを引き起こした経緯がありますが、今は自分の生活を成り立たせて、やわらかな雰囲気になりました。あいみよんのコンサートに行くたびに万単位でグッズを買って、商品の写真を嬉しそうに送ってきます。10年後もそれが宝物になっていればいいですが、期待薄のような気がします。危なっかしいところは幾つもありますが、同時に力強さも感じます。

障がいがあるから自分の足で立てないということはありません。周りの支えは必要ですが、社会の中で元気に生きていくことができます。周りにいる人が助けてくれると信じて生きられることが強さになるのではないのでしょうか。



親は子どもの将来のために少しでも有益なことをしてやりたいと思いますが、子どものゴールを先に決めるのではなく、子どもと一緒に試行錯誤することの方が役に立ちます。子どもが迷惑をかけているのではないかと心配する気持ちが拭えないこともわかりますが、視点を切りかえ子どもの好きな事を一緒に楽しみ、子どものかわいい部分をもっと周りに伝えていき知ってもらうことが子どもの力になるのではないのでしょうか。

ようか。

周辺からの記憶 48

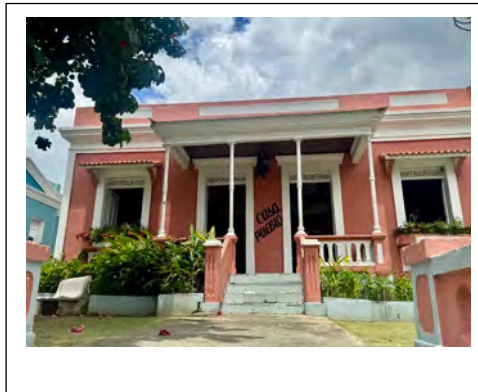
2023年3月 東日本・家族応援プロジェクト in ハワイ

村本邦子（立命館大学）

この夏は、昨年に引き続きプエルトリコに行ってきた。今回は、文化と自立したコミュニティがテーマとなった。アドフンタスという山岳地帯の小さな町に、カーサ・プエブロというコミュニティ拠点がある。ナオミ・クライン（2019）『楽園をめぐる闘い―災害資本主義に立ち向かうプエルトリコ』（堀之内出版）を読んでから、是非訪れたいと思っていた。滞在地であるサンファンから離れており、交通手段もないため、思い切ってレンタカーを借り、1泊2日のミニトリップをした。

1970年代、プエルトリコ政府がこの地で銅鉱山開発を計画した。住民は環境破壊に強く反対、鉱山開発を阻止した後、森の保護活動を展開し、1980年にカーサ・プエブロが設立された。1990年代には、文化・教育活動が活発化し、コミュニティ・ラジオ局もできる。音楽学校や美術館を運営し、子どもや若者への文化教育を推進、環境保護だけでなく、地域文化を育てる拠点へと拡大していった。2000年代には、プエルトリコの電力依存に疑問を呈し、太陽光発電による自立が提唱され、「エネルギー主権」を掲げて政策にも影響を与えた。2017年、プエルトリコを襲ったハリケーン・マリアで全島が停電するなか、太陽光で電力を確保していたカーサ・プエブロは、避難所・医療支援・情報発信の拠点となった。

現在も、環境教育、文化活動、太陽光エネルギー普及を三本柱に、コミュニティから社会を変える拠点として活動している。驚いたことに、プエルトリコにはこのような自立型コミュニティが次々に芽吹いており、地域ごとに特色あるアプローチで社会課題に挑んでいることだった。しかも、その中心を担っているのが若手アーティストたちだった。これをどうやって日本にもってこれるのだろう。



「東日本・家族応援プロジェクト in ハワイ」企画

2014 年、学外研究で 3 ヶ月ハワイに滞在した。そこで、息子が親しくしている人たちと知り合った。サンフランシスコやニューヨークに暮らす日本人たちと同じく、ハワイに暮らす日本人たちも、遠く離れた故郷への強い思いがあり、さまざまな形で支援活動をしていた。情報交換や交流をしたり、ボランティアをしたり、講演会も開いてもらった。

とくに、震災直後から大きな鉄板を JAL に積んでもらって、頻繁に現地に通い、焼きそばを焼いている MOVE4 Japan 代表の竹林篤さんは、東北以外の被災地にも通うようになり、熊本地震の時には、同時期に熊本にいたことがわかって合流し、急遽ボランティアに参加させてもらったこともあった。

そんな関係から、十周年の記念の時期には合同で何かしようと話していた。それがコロナ禍で流れ、2023 年 3 月にようやく実現したのだった。

竹林篤さんや巖谷奈々さんを始め、多くの方が実行委員会を作って企画を進めてくださった。コンベンションセンターで開かれる第 27 回ホノルル・フェスティバルに合わせて、2023 年 3 月 10 日（金）～12 日（日）「東日本・家族応援プロジェクト in ハワイ」をすることになった。

日本とハワイの交流は明治元年 1868 年 5 月に最初の日本人 149 人の渡航に始まり、1885 年の日本ハワイ両政府間の契約による移民（官約移民）以来、100 年以上の長い歴史を積み重ね、現在の四世、五世の人々にまで受け継がれている。今や、ハ

ワイの人口の 5 分の 1 を日系人が占め、年間 150 万人近くの日本人がハワイを訪れるといった、政治的にも経済的にも不可分の緊密な関係を築いている。

こうした歴史的な経緯において、日本とハワイ双方の人々が旅行を通じて相互往来するだけでなく、お互いの歴史と文化をさらに深く知り、心と心つながる草の根レベルでの真の交流を広げる事が求められてきた。そこで、日本各地のお祭りをはじめ文化・芸能並びに武道・スポーツ、手芸などの様々な交流を通じて日本とハワイの交流を更に深めるため、ホノルル フェスティバル委員会を組織し、1995 年 3 月に第 1 回ホノルル・フェスティバルを開催したのだという（公式 HP による

<https://www.honolulufestival.com/ja/festival/>）。

3 月 8 日（水）朝、団さんと一緒にホノルルに到着。竹林さんと巖谷さんと食事しながら打ち合わせをした。



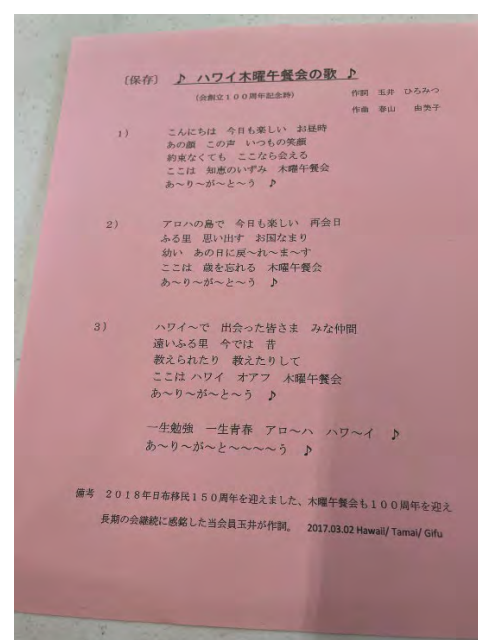
3月9日(木) マキキ教会午餐会

11時半ピックアップで、マキキ教会午餐会へ。ここで、講演と漫画展をすることになっていた。マキキ教会はお城の形をした不思議な教会である。



公式 HP によれば、マキキ教会はプロテスタント教会で、1894 年、ハワイに移民した日本人である奥村多喜衛（おくむらたきえ）牧師が開拓伝道を始め、1904 年に奥村牧師ら 24 人で組織され、1908 年からはハワイ最大の日系教会として重要な役割を果たしてきた。1932 年には、ハワイに美観を添え日系人を励ますために、「神はわが城なり、わが避けどころなり」の聖句から奥村牧師の故郷である高知城を模した教会堂を建てた。世界大戦の苦闘と戦後の復活と成長を見てきた。奥村牧師は、「教会だけでなく広く社会に出て働く」を信条に、生涯をハワイ日系人社会のために捧げた。 (<https://mccjp.org/>)

80 代、90 代の女性、男性が 50 人ほど集まってくれる。始まりは、「ありがとう」という午餐会の歌をみんなで歌うところから。歌詞を聞いていると、遠く故郷を離れて、つながり、学び合い、死ぬまで向上しようという内容の歌で、みなさんの思いが伝わってくる。



机の上に漫画を並び、私は「東北の復興と民話の力」のテーマに、東日本大震災による大きな被害から人々が立ち上がり復興するにあたって、土地に根差した民話を伝える活動が大きな力を発揮したことを話した。おもには山元町の民話の話だったが、みなさんそれこそ食いつくように前のめりに聞いてくださり、終わった後もたくさんの感動の言葉を伝えてくださった。

参加者それぞれにさまざまな背景があり、書道で看板を書いてくださった男性は、名古屋に暮らしていたが、60歳で妻を癌で亡くし、牧師になりたかったので、そこから学校に入って牧師になり、ハワイに赴任してきたという。また、ハワイで生まれ育った二世で、「日本語は下手です」という人たちもいた。



KZOO ラジオ

終了後、ホノルル・フェスティバルでの私たちの企画の宣伝のため、KZOO ラジオの生放送に出演する。パーソナリティのコーンさんがリードしてくれ、あきらめんのパイナップルラップでオープニングを飾る。あきらめんとは私の息子で、数年前ここに暮らしていた頃、コーンさんははじめ多くの人たちのお世話になっており、あちこちでラップをやっており、何度かラジオにも出演させてもらっていた。

4人で出演し、楽しいひとときとなった。



パロロ本願寺

それから、パロロ本願寺に行き、パンフレットのコピーをさせてもらう。なかなか思うようにいかず、篤さんが苦勞してようやく仕上げてくれた。藤森和尚にお世話になった。お寺の庭には大きなマンゴーの木があって、夏にはマンゴーがたわわになるらしい。13日月曜日にここでも漫画展をさせてもらうことになる。

こちら公式 HP によれば、パロロ本願寺の起源は、1922 年に建設されたモイリリ東本願寺である。高速道路の建設に伴い、現在のカймキの場所への移転が決定され、1962 年にパロロ本願寺が建設された。元の定款には「地域社会の一般福祉の向上」が目的として掲げられており、現在もその理念に沿って、3R（リデュース、リユース、リサイクル）を基にしたコミュニティ有機農園の運営など、環境問題への取り組みを通じて、パロロ本願寺が地域社会の一員として認識され、地元の人々と共に歩むことを目指している。

<https://www.palolohongwanji.org/>

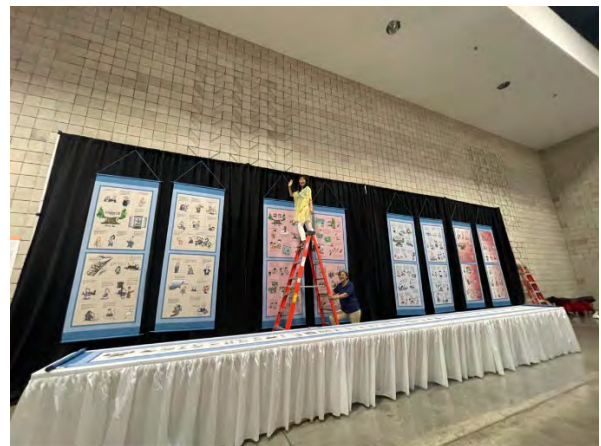


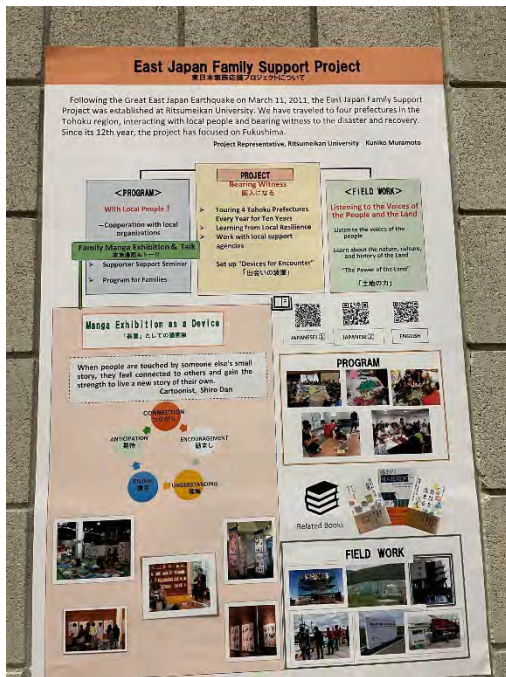


パロロには大きなマンゴーの木があり、ツリーハウスになっていた。夏に来たら素敵だろう。マキキ教会にしても、パロロ本願寺にしても、日系移民の拠り所、コミュニティとして位置づいているようだ。

3月10日（金） 準備

お昼、立命館の修了生と落ち合った後、コンベンションセンターで設営準備をする。ハレの会に方々や実行委員会のみなさんがとてもよくしてくださり、心配していた漫画展示もバッチリきれいにできた。





命灯会

19 時からは、ハワイ大神宮で命灯会。公式 HP を見ると、第二次世界大戦の勃発に伴い、ハワイ大神宮の土地と建物はアメリカ合衆国政府によって接收され、競売にかけられた。しかし、この組織は戦争中も宗教施設としての身分を維持し続け、1958 年 11 月 1 日、この場所に永久的な本拠地を確立した。ハワイ大神宮は、アマテラスオオミカミをはじめ、その随伴する神々、そしてハワイと世界に貢献した歴史的人物であるジョージ・ワシントン、アブラハム・リンカーン、カメハメハ王、カラカウア王など、多くの神々を祀っているのだそうだ。毎日朝と夕方に、人類の平和と幸福、調和ある世界の実現を祈る祈祷が行われている。

HP の文面のなかには、下記のような記述があり、興味深い。「第二次世界大戦前、日本の指導者たちは彼女を国家の神として崇めていました。この指導者たちの傲慢さが、日本の敗北を招いたのです。彼らはアマテラスオオミカミを自分たちだけのものとして独占しましたが、太陽のような普遍的な存在に対して独占権を主張する愚かさと無意味さに気づかなかったのです。」

<https://daijinguemple.org/>

ここハワイでは、毎月 10 日の 19 時 46 分、日本時間の 11 日 14 時 46 分に命灯会を行っているという聞いて驚いた。もともとは気仙沼の二人が始めたものをハワイで奈々さんが引き継ぎ、篤さんと二人で続けているのだという。今回は神社だったが、その時々で、お寺や ZOOM、仙台駅でもやったことがあるという。宗教を問わず、日系コミュニティが集まって東北に思いを寄せる日になっているようだ。

20 人ほどの小さな会であるが、持ち寄った食事をつまみ、神道のみそぎの儀式をして、キャンドルに灯りを点し、それぞれの思いを共有する。



祝詞には、「福島第一原発、第二原発が爆発し、怪しき煙が立ち上り・・・」といった文言や、津波に襲われた人々の生々しい描写も含んでいて興味深かった。

この様子は今も you tube で見ることができる。

<https://youtu.be/YYZhCPMifzE>

3月11・12日

ホノルル・フェスティバル

朝からコンベンションセンターに行き、「ふながだの海」を見る。これは新地町の漁師さんの話である。新地町と篤さんは深いつながりがある。小野春雄さんを主人公にした紙芝居をアニメーションにしたものである。実は、私たちも2019年にここを訪れ、小野さんにお話を伺ったことがある。また、紙芝居を作成した福本英伸さん（一般社団法人「まち物語制作委員会」代表理事）とも、いわきでご一緒したことがあった。このアニメには篤さん自ら英語の字幕を入れたという。被災から出会うまでの小野さんのが埋められ、理解が進んだ。

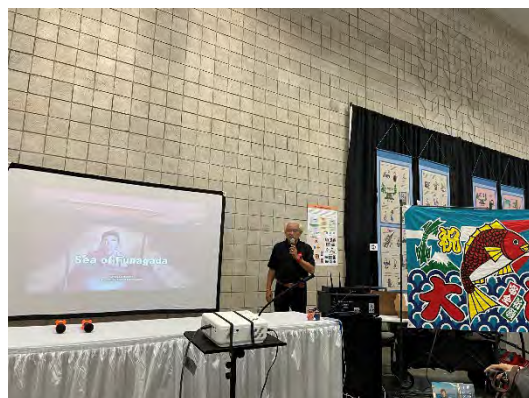
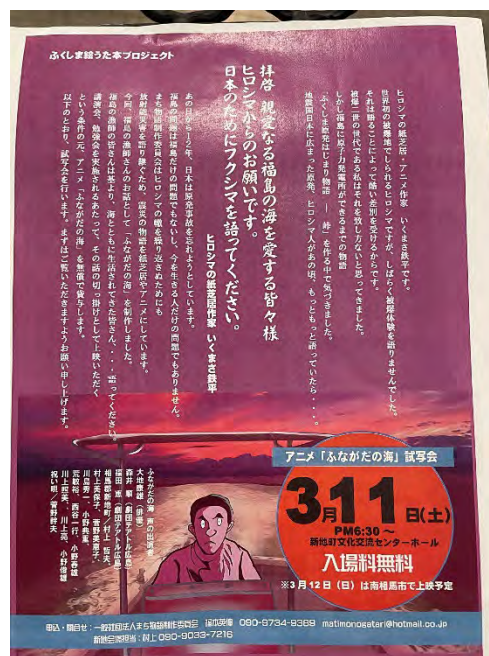
小野さんは十年前の津波で弟を亡くしている。自宅一帯は建物がごっそりなくなり、漁具もすべて流された。慣れない仮設住宅で暮らし始めたが、弟さんが行方不明になったショックと先行きへの不安が重なり、体調を崩した。4か月後に身元不明で見つかった遺体が DNA 鑑定で弟さんだとわかった。「生きている俺は弟の分まで漁師を続けないとだめだ」と感じたという。

新地町の漁業も少しずつ復活しているが、風評被害が立ちほだかり、取引価格は下がったまま。「福島の中の姿を正しく伝え、漁師仲間を元気づけたい」と聖火リレーに応募した。感染防止のため、大好きな店でのカラオケもやめてこの日に備えた。

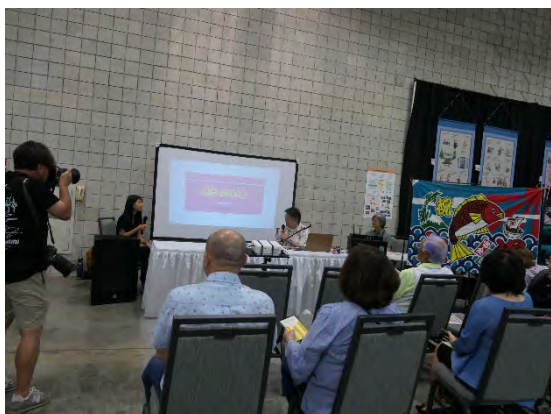
小野さんが走ったコースは釣師（つるし）防災緑地公園。かつて自宅があった地区だった。沿道に集まった友人たちは大漁旗をはためかせ、「福島海と生きる漁師」と書かれた横断幕を掲げて応援してくれた。「走りながら昔の風景を思い出していた。津波

で亡くなった弟も、親戚も、海から見守っていてくれたと思う。仏壇に線香をあげて、無事に走りきったと報告をしたい | 。

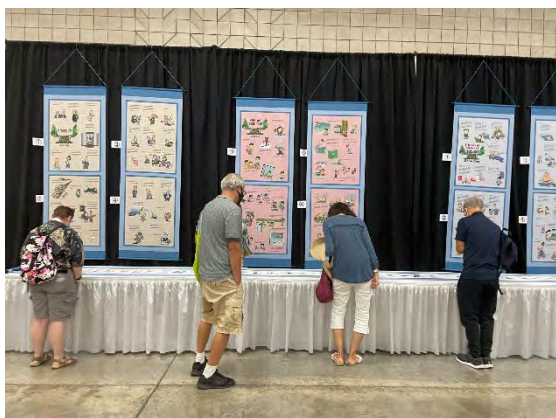
福島が多様な声が重ね合わされていて、良い内容だった。私を含む少なからぬ人にとって苦々しい思いを重ねていたオリンピックだったが、小野さんにとっては、「わくわくしながら走った。本当に楽しいひとときだった」のだ。



それから、団さんは「物語が支えるもの」、私は「福島のに思いを馳せる」というテーマで話をした。どちらもボランティアの方が通訳をしてくださったが、それぞれに深い背景を持っていた。

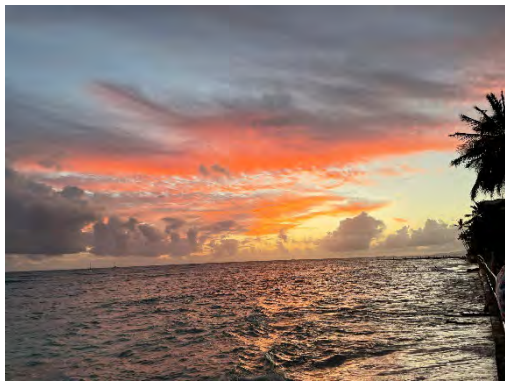


12日にはフリートークの時間を持った。福島出身の方などが思いを語ってくださった。ホノルル・フェスティバルは盛況で、各県人会がブースを出していた。県人会は県から助成を受けていることもあり、福島県人会は復興一色の展示となっていたのは少し残念だった。



長岡花火

ホノルル・フェスティバルの最後は、日本から贈られた長岡花火がワイキキビーチで打ち上げられることになっている。長岡花火には、戦争で亡くなった人々への追悼と平和への祈りが込められており、長岡市とホノルル市の姉妹都市交流のシンボルなのだそう。ハワイに来て、長岡花火が見られるなんて思ってもみなかった。平和を願いつつ、花火を楽しんだ。

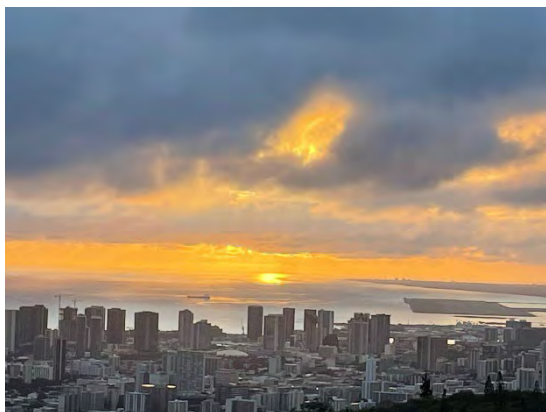


3月13日(月) パロロ本願寺での漫画展

パロロ本願寺での漫画展のため、朝から言って設営する。お堂いっぱい漫画を展示した光景は圧巻だった。ハワイに住む友人たちやその知り合いなどが口コミで来てくれた。際入れもあり、東北のボランティア活動をしている方たちとの情報交換もできた。

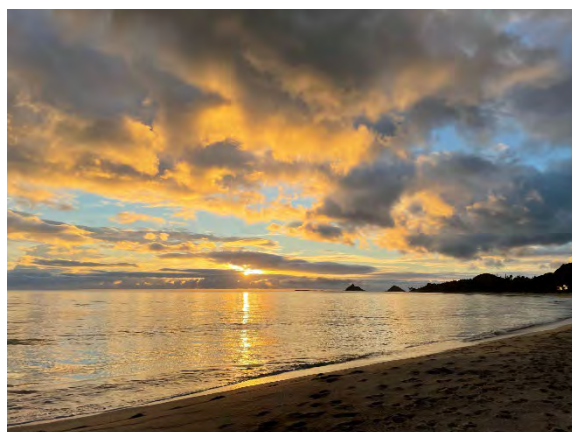


夜は、高台にある竹林さん宅に招いて頂き、美しい夜景を見ながら、バーベキューを楽しんだ。篤さんが被災地で焼き続けている焼きそばも頂いた。



3月14日(火) 帰国へ

日の出前、カイルアに住む友人宅にお邪魔し、日の出前のビーチを散歩し、美味しい朝ご飯を頂く。カイルアは素敵なビーチだ。



その後、めんどうにも PCR 検査を受け（この時期、3 回のワクチン接種がなければ日本はまだ PCR 接種を義務付けていた）、夜は別の友人を訪れ、素敵なコンドで夕飯をご馳走になり、翌日、帰路に着いた。

東日本大震災とハワイは私にとって強い結びつきがある。NY でも感じたことだが、故郷から遠く離れた所にいる日系人・日本人には、被災地への強い思いがある。ここには書けなかったことが多くあるが、日系移民やハワイに暮らす日本人の実情を知るにつけ、「土地の力」は人々とともに移動し、新たな土地の力と融合して変容しているのだと思った。

つづく

精神科医の思うこと③⑧

京都のおひと

松村 奈奈子

ちょっと前に、自宅マンション近くの老舗の扇子屋さんで何やら映画撮影をしていました。すごくコソコソとされていて、何の映画かさっぱりわかりません。近所のカフェの店長に聞いても「私も気になっているんです。映画関係の人がご飯を食べには来るけど、何の映画かは聞いても教えてくれないんですよ」と笑います。どんな映画なんだろうとワクワクしていたら、今年の6月公開となった「ぶが漬けどうどす」という、京都の老舗扇子屋に東京から嫁いだ嫁と、室井滋演じる義母や京都の人々とトラブルを・・・てな感じのコメディ映画でした。もちろん映画は見に行って「イヤ～まあ、なかなかの京都やね」という感じですが、私も「京都のおひと」には思う事があるので、今回のテーマは「京都のおひと」

大学に進学するまで大阪で生まれ育った私ですが、京都に就職して京都人と結婚して、人生の半分以上をずっと京都で生活しています。それでも自分が京都人という意識はなくて、物事ははっきり言う大阪人のままだなあと思っております。まだまだ「よそ者」でございます。

ただ、「京都」がスゴイなあと思う事はしばしばで、旅先で「どこから来たんですか？」と聞かれ「京都です」と答えたと「こんなところより、京都の方がみるものたくさんあるのに」「京都は好きで、よく旅行に行きます」「京都には行ってみたいです」と京都リスペクトなお返事を頂くことしきりで、なんだか恐縮してしまう事も多いです。

友人の勧めで「一澤信三郎帆布」という老舗かばん屋さんの手提げカバンを使い始めて、もう20年近く同じカバンを買い替えて使っています。丈夫でいいカバンなのですが、店舗は京都にしかありません。ときどき旅先で「京都からいらしたんですか？」と聞かれて「ええ、どうしてわかるんですか？」「京都のかばん屋さんのをお持ちなので・・・」と言われると、京都のブランド力すごーいと思ってしまいます。

ただ、一方で、京都人なかなかプライドが高い。

京都市内の病院に勤務している時、精神科の診察の場では患者さんのお仕事などもお聞きす

るのですが「お仕事は何をされていますか？」「〇〇寺に務めているので、自宅もその近所です」「〇〇寺？」「えっ、〇〇寺も知らないんですか!!」とか、「△△漬物を経営しているんです」「△△漬物？」「△△漬物を知らないんですか!!」などなど怒られたことがあります。いやいや、清水寺とか金閣寺とか超有名なお寺じゃないんですよー、漬物屋さんもいっぱいあるし、わかりませんよー。ただ、その後京都府北部や郊外の病院に勤務した時は、そんなやりとりは全くなかったので、京都市内にお住みの患者さんだけの反応でした。

さらに、大阪人の私、物の値段に興味津々でつい「その服なんぼでかったん？」「そのマンションの家賃いくらなん？」と聞いてしまい「京都人はそんなに答えません」と友達に怒られたこともあります。まじっ、これが京都かーとシミジミ考えてしまいます。大阪人に聞いて怒られた事はありませんし、むしろ「これなんぼで買ったと思う？」と聞かれて「上手な買いもんしたんやろ」と自慢話が始まる大阪人多いです。これはこれで、大阪人のアカンところでもあるんですけどね。

診察の場面でも、京都ならではの患者さんを診る事もあります。

今回の映画の主人公である東京から来たお嫁さんは、老舗の女将に怒られてもなかなかメンタル強めで元気でしたが、京都になじめずに精神科を受診する若いお嫁さんを何人か診察したことがあります。多くは、京都老舗の長男が関東の大学に進学し、学生時代に出会った関東の女性が嫁いでこられたケースでした。「老舗の若女将」は誰もができるわけではなく、いろんな能力がいるんだと思います。頼れる実家も友人もみんな関東で、いきなり知らない京都で生活するだけでも大変なのに、「老舗の若女将」としての仕事は大きな負担で、老舗の長男がシッカリしていない場合、孤立して精神科を頼るしかないのかなぁと思います。

京都の郊外の病院に勤務している時、ある患者さんが、娘さんが京都の老舗の着物屋さんに嫁いでいる話をされました。「私はたよりないんで、こんなんでもうつ病とかになっちゃったんですが、娘は老舗に嫁いで、お義母さんと上手にやってるんです。嫁ぐときに、しっかりしたお義母さんやったんで心配して『辛かったら帰ってきてでもいいで』と言ったくらいです。でも、お義母さんとケンカせんと、子育てもお店の難しい仕事もこなしてて、祇園祭の時は祭りのお手伝いもせんといかんみたいで、大変やったみたい。祭りの後は、孫と一緒に私のところに帰ってきて寝てましたわ。でも、ほんまよう頑張ってる、自慢の娘です」と話された時、やっぱ京都老舗は京都の人でもハードルが高いんやなぁと思いました。

ただ、京都の真ん中に生活してみて、ほんと京都ってスゴイなぁと思います。映画の舞台となった老舗扇子屋さん、実は跡取り娘さんがおられて、いろいろイベントを企画してくれたりで面白いお店です。「能」に使われる扇子も取り扱っているようで、お店の2階の広間で能楽の先生をよんで軽いミニライブ的なものを時々企画されていて、お店に貼ったチラシをみて近所の方々に交じって私も参加した事があります。初めての老舗扇子屋さん訪問、京町屋の典型的な

縦長のお家で、奥に入るとおくどさん(かまど)があって、中庭があって、「おー、中はこんな感じやったんか」と感動した覚えがあります。「能楽」のイベントも勉強になりました。

老舗扇子屋さんのちょっと先の並びに、古民家を改装した美容室ができて、通っていたのですが、美容師さんと仲良くなると、古民家の中を探検させてくれるようになりました。美容室には地下に「防空壕」があって、今はオシャレなギャラリーに改装されていたのですが「防空壕」の感じはそのまま、「古民家の地下に防空壕があるなんて」と見学して感動しました。

私はマンション住まいで、直接自治会などと深い交流は無く、未だ「お客さん」な感じですが、京都の真ん中に生活していると、京都の奥深さや歴史を享受させて頂く事が多くて、楽しませて頂いています。

コロナで緊急事態宣言がでて、「京都から出るな」となった時は、不謹慎で申し訳ないのですが、散歩がてら今まで行ったことのない京都の神社仏閣や街並みを散策できて、改めてじっくり京都を勉強する時間となりました。近所だけでも回り切れない程の神社仏閣があり、それぞれの歴史を勉強すると、日本史の教科書に載っている様な人物と関連していたりと「さすが京都」と感服します。まだまだ訪ねていない名所もたくさん残っていて、ほんとこれからも京都散策を続けていきたいと思います。京都は今、観光客であふれていますが、繰り返し訪れたくなる魅力は、よくわかります。

で、京都のおひと。

生粋の京都女子とご飯を食べている時「東京に出張で行った時、銀座の天ぷら屋さんでご飯を食べるのが好きなんです。いつも一人で静かに食べ終わった後、最後につ『おおきに』って言ってお店を出るんですよ。ふふっ」と彼女が微笑みながら話します。ほんと、いつもおしとやかな彼女ですが、奥底の京都人魂が見えた気がしました。「最後に京都から来ている事をさりげなくアピールして店を出るんですね」と言うと、彼女は「ふふふ」とまた微笑みます。すごいなー、お江戸で「京都から来てるんですけど自慢」ですか。いやー、やるなー京都人。

大阪人の私、「大阪から来てますよ自慢」などしようと思った事ありません。むしろ、すいません、お江戸を散歩させてもらってますってな感じです。

「最後に京都アピール」とは、ほんま「京都のおひと」はすごいです。

☆ぶぶ漬けどうぞ…京都弁で「お茶漬けどうですか？」という意味。「そろそろお帰り下さい」と遠回しに伝える京都の「本音と建前」を表す言葉。

子ども食堂篇

9年目を迎えた無料塾・子ども食堂

馬渡 徳子

今回は、我が子ども食堂の現況についてご紹介したいと思います。

無料塾・子ども食堂には、『子どもの権利条約カレンダー』とポスター（子どもの権利条約31条の会制作）を掲示しています。

2019年からは、教え子である金沢大学の学生や大学院の留学生、富山大学の学生が、ボランティアにきてくれています。彼らは、それぞれが自治体委託の学習支援、カタリバ、北陸きょうだい会、かなざわユースセンター、石川に夜間中学をつくる会（県立あすなろ中学が実現し解散）のメンバーです。彼らから「イベントは大人主導ではなくて、子どもたちが企画から参画できるようにしましょう。」と提案され、改めて子どもの権利条約31条の価値に気付かされました。

昨年度からは、金沢大学教職大学院の方々のフィールドワークを受け入れており、この掲示に気付いてくださった時には、とても嬉しくなります。

さて、現在利用登録している子どもたちは、3自治体11校（小中高校・特別支援学校）で、乳幼児（加配保育の子どもも）から高校生まで72名です。不登校（完全な不登校から緩やかな不

登校の子ども）を選択している子どもたちや放課後等デイサービスに通う子どもたちもいます。

開催日は毎週月曜日（祭日は休み）の17時頃から20時までで、夏休み等の長期休暇中には、火と水曜日の昼に追加開催（盆休みと年末年始休み）しています。自由に出入りできるのと、希望に応じて送迎もあります。家族三代で参加される方もいて、子どもも大人も無料です。

毎週60食（イベント時は80食）を午後から作成しています。一昨年には長期休暇中は、王将（全国的な子ども食堂支援）のご支援も得ています。大学生からの提案で、クリスマス会は子どもたち主導でピザとクレープを作成し、ボランティアがお手伝いをしています。長期休暇中のおやつ時間には、子どもたち主導でクレープやホットケーキ、たこ焼きを作っていて、その出来栄に「映えるう！」と感嘆の声が上がります。

クリスマスプレゼントや夏祭りの景品なども、子どもたちと選んで準備をしています。財源は、定期的に寄付を下さる精神科や小児科医師や元美術教師の油絵画家の方、弁護士などの応援があり、成り立っています。

イベント時のボランティアには、地元企業の社員さんや保育士、助産師、元教師等の社会人も応援に沢山駆けつけてくださり、子どもたちは毎回わくわくしながら楽しみにしています。

母体法人が公益社団法人の医療機関ですから、コロナ禍も相談にのっていただきながら乗り越えました。感染症やアレルギー、予期せぬ事故や災害時への対応等のマニュアルに添っての対応が叶うことが強みです。医療ソーシャルワーカーに生活相談をつなぐこともできます。

今年は5年ぶりに利用者(子ども・保護者)アンケートを実施し、寄せられた声に励まされました。

子どもたちからは、メニューは秘密

にて「なんのごはんがでるかかわからないから、いつもわくわくする」「いえやきゅうしょくとはちがうカレーライス」「みんなといっしょにたべるごはんがたのしい」、わくわくするのは「みんなでつくるおやつやピザ・クレープ・たこやき・おこのみやき」「じぶんのたんじょうかいのケーキ」「プレゼントやプラバン、こうさく」「がいこくのひととか、ふだんおしゃべりしたことのないおとなやおにいさん、おねえさんとあそぶこと」

保護者からは、「いつも助かっています。大人とのかかわりに飢えている我が子たち、いつも『おかえり』と迎えてくれて、久しぶりに遠慮がちに思春期の子が来ても『嬉しい』『待ってたよ』と迎えてくれて、話や遊び相手をしてくれて喜んでいきます」「炬燵みたいなからだも心も緩めるところ」「こ



こで幾度となく危機を救っていただきました。そんな家族は、うちだけではないと思います。本当にありがとう。」「私が大病で入院中に、上のきょうだいとだけで過ごした時がありました。事情を聞いて簡単に宅配にはせずに、逆に『だったらなおのこと、みんなでご飯を食べよう』と子どもたちみんなを送迎で迎えて下さいました。他にもシングルマザーの支援を教えてください、乗り越えられました」

かくして、9年目を迎えてようやく「生活に困っている子育て世帯が利用するところ」ではなく、**誰でもウェルカム**ということが**地域に浸透**してきました。今夏は3度も地元紙に取り上げていただく機会があり、長期休暇中のみならず「子どもの居場所」への関心の高さが伺われました。

「人生は、何が起こるかわかりません。これから、誰もがみな、生活課題を無くすことはできないけれど、どう向き合ってどう対処していけばいいのか、まずはお話をきかせてください。一緒に考えましょう。場合によっては、同意を経て、適切な専門職におつなぎいたします。」という姿勢をスタッフは貫いています。

そう、子ども時代の私自身が、実家で出逢ったおもしろいおじさん、お婆さんのように、**来てくれたことを喜び、居たいようにいていいよとの態度を堅持**したいと思います。



大切にしていることが、8つあります。①子どもたちをファーストネームで呼ぶこと。②「おかえり。待ってたよ。」「ようこそ」とお迎えすること。③4つの大小環境の異なる部屋のどこを選んでもいいよ。④誰もが無料の

価値を、可能な限り堅持すること。⑤人を見かけで判断しないこと。⑥いろんな人がいることを、逆におもしろがる発想の転換をもち、排除しないこと。⑦イベントは、子どもたちの参画で企画から運営すること。⑧毎月の運営会議を怠らず、合議で決めていくことです。

さてさて、これからどんな子どもたちと地域の大人たちに出逢えるかな。スタッフわくわくしながら活動しています。

蜘蛛の糸

<

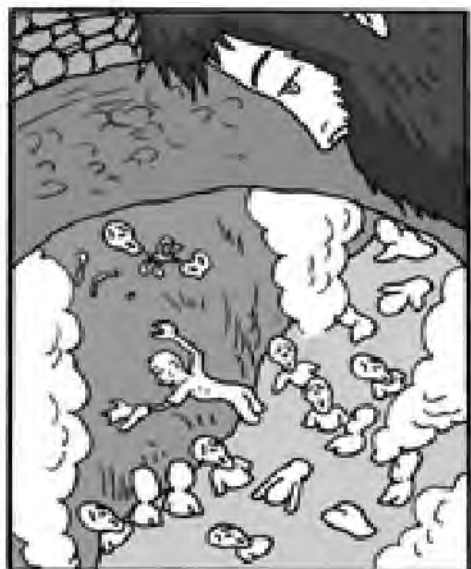
も

いと



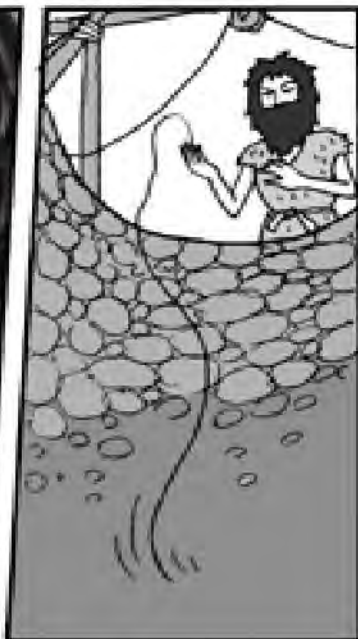
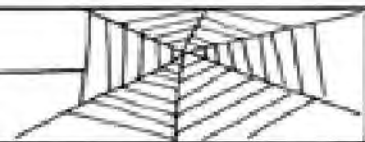
原作 芥川龍之介
漫画 柳 たかを

クモの糸



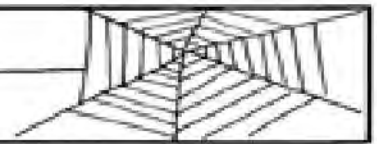


クモの糸



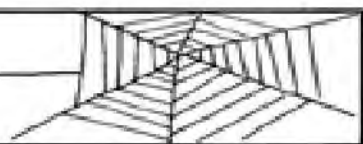


クモの糸



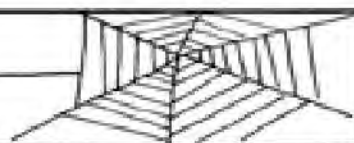


クモの糸



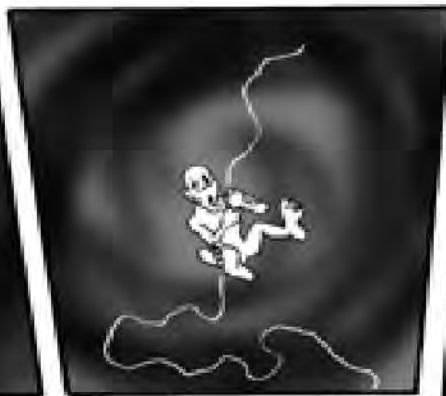
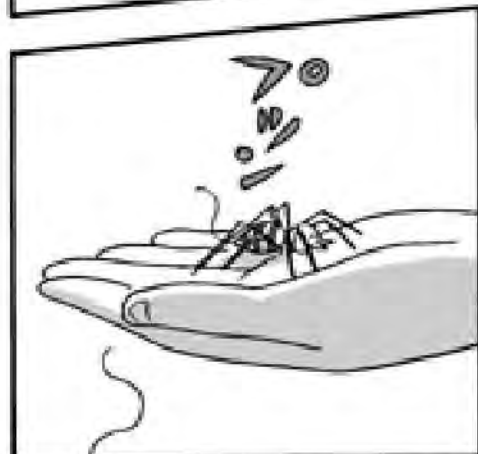
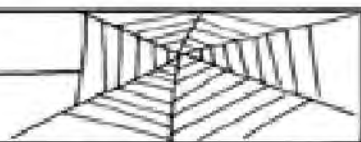


クモの糸



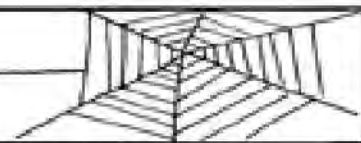


クモの糸



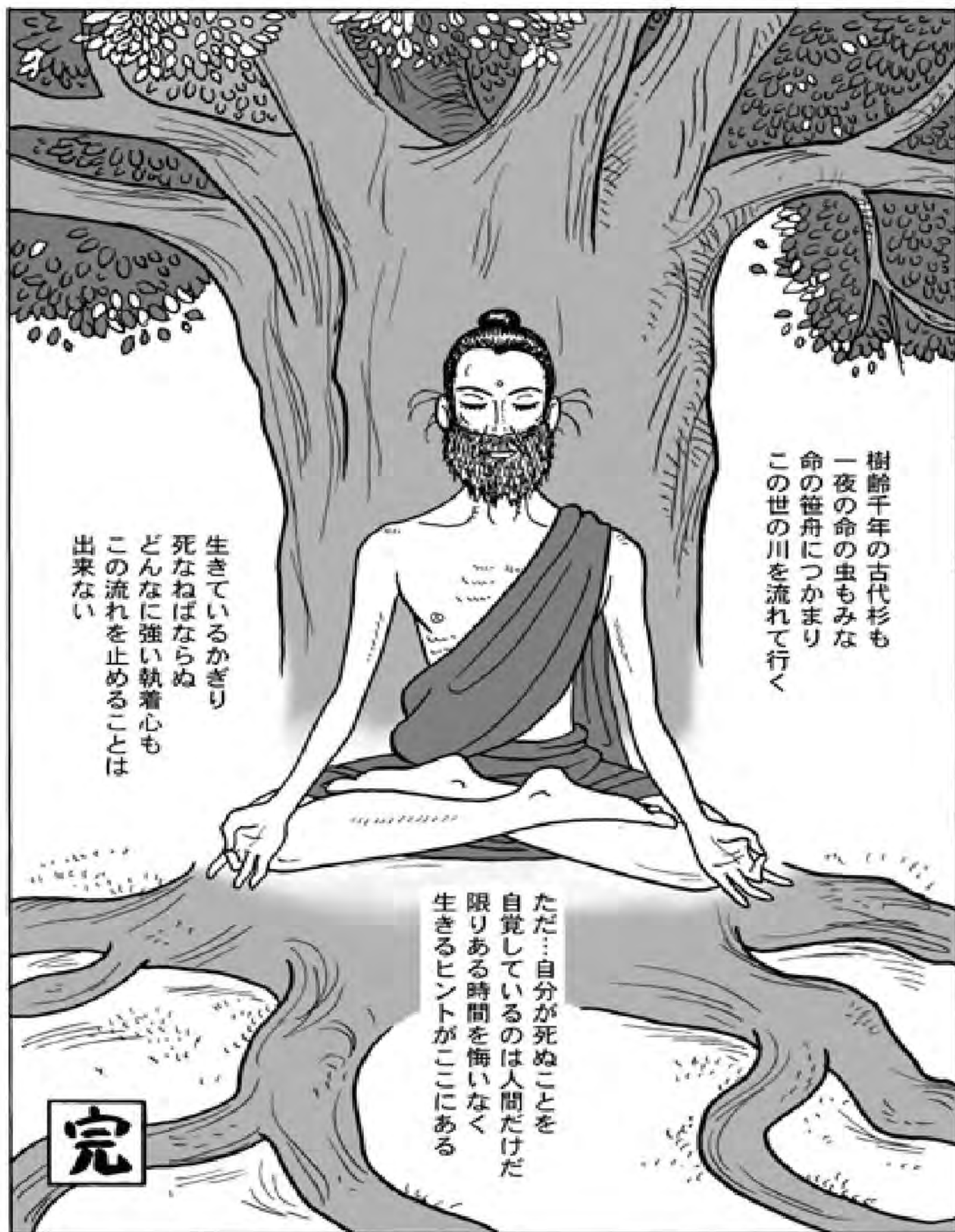
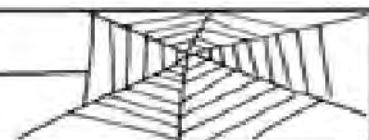


クモの糸





クモの糸



樹齢千年の古代杉も
一夜の命の虫もみな
命の笹舟につかまり
この世の川を流れて行く

生きているかぎり
死なねばならぬ
どんなに強い執着心も
この流れを止めることは
出来ない

ただ…自分が死ぬことを
自覚しているのは人間だけだ
限りある時間を悔いなく
生きるヒントがここにある

完

心理コーディネーターになるために Vol.19

山下桂永子

☆Aくんについて

Aくんは現在小学5年生の男児である。幼少期からかんしゃくや夜驚が激しく、生まれたばかりの弟への暴力などもあり、困った母親が3歳半健診の時に保健師に育児相談をしたことから、親子教室へ通い、その後教育センターに紹介され、母子並行面接に通所していた。

また、小学校進学時には、支援学級に在籍することになった。小学校入学後は、Aくんのプレイセラピーは終了し、母親のみ月に1回相談に訪れている。学校では大きなトラブルはないものの、人間関係のつまづきで登校しぶりになったり、相変わらず家庭では弟に対して、高圧的に接し、時に暴力をふるうなどしていた。

☆医療受診のきっかけ

Aくんが小学校3年生の1学期の時、母親より、最近学童で友達関係のトラブルが多くなり、テンションがあがって授業中に大きな声をあげるなどして先生から注意されることが多くなってきたことで、登校しぶりがひどくなっている。また、懇談では先生から服薬をすすめられたとの話があった。

Aくんはこれまで発達についての医療受診をしたことはない。年長時に実施した発達検査では知的には問題がなく、集団の中でも大きなトラブルや先生の話が理解できないということとはなかった。ただコミュニケーションが一方的であったり、こだわりが強く、気持ちの切り替えに課題があり、保護者の判断で支援学級在籍を希望されていた。

☆保護者の戸惑い

母親とはAくんについての発達の課題については話し合ってきたが、医療受診については、母親がやや拒否的なこともあり、積極的には話し合っていなかった。「学校の先生から薬を飲んでと言われるとやっぱりショックで。。。そんなにうちの子はひどいのかなって。やっぱり診断もらったほうがいいんじゃないでしょうか。。。？」と言う母親に、私も「Aくんの場合



合は、これまで集団の中では大きなトラブルもなかったし、勉強もついていけているようだし、診断や服薬にあまり効果があるとは思えなかったんですが、うーん、A くんにとってもお母さんにとってもメリットデメリットあると思いますので、ご一緒に検討していきましょう」と伝え、月に 1 回の面談のペースを少し増やして医療受診について母親と話し合っていくことになった。

その 2 週間後の医療受診についての話し合いでは、普段面談をしている母親だけでなく、父親も来所され保護者の医療受診についての不安を一つ一つ伺いながら、そのことについての対応を検討し、服薬と診断についてのメリットデメリットについて伝えていった。

☆A くん受診と服薬

夏休み前になり、A くんは母親は思い切って病院に予約の申し込みをした。ただなかなか予約が取れず、発達検査の予約が数か月待ちになるということで、教育センターで発達検査を取り、情報提供書を作成して、母親に病院に持参していただくことで初回面談の日程を早めてもらった結果、夏休み中に受診し、服薬を開始したとのことだった。

2 学期に入り、母親は仕事の合間を縫って、A くんを放課後児童デイサービスの見学体験に連れていき、その利用手続きを行うために役所に行くなど積極的に動かれていた。学校にも A くんが服薬をしていることを伝え、丁寧に見守っていただくことと、その様子を共有してもらうなどした結果、登校しづりはやや軽減したとのことだった。



☆保護者の不安

こどもの発達や精神的な問題についての医療受診は、保護者にさまざまな不安と葛藤をもたらす。我が子が「発達障害ではないか?」「うつではないか?」と思っても医療受診に至るまでは数年かかることも珍しくはない。

いざ、医療受診を検討しても、どこにかかるべき? 仕事しながら連れていける場所に病院はある? 受診まで長く待たなければならない? 診断がおりたらどうしよう、薬の副作用は? 薬をやめれなくなったりしない? そもそも子どもになんて説明して病院に連れていったらいい? 家族が服薬を反対しているけれどどうしたらいい?

などなど次々と沸き起こる疑問や不安をひとつひとつ越えていくのは本当に大変で、そのハードルはとてつもなく高い。その高いハードルを越えようとする保護者の気持ちを伺って、知りうる限りの情報とともにメリットとデメリットを伝えていく。

☆医療受診のメリットデメリット

個人的には、医療分野の勤務経験があることもあり、医療受診にはメリットが大きいと思っている。診断することで、児童発達支援、放課後児童デイサービスといった療育など



の福祉サービスを受けることができるし、服薬をすることで、感覚過敏でイライラしたり頭の中が疲れ切ってしまうことや、多動衝動不注意で思わぬミスやトラブルが起きるのを減らすことができる。

すべてそれで解決になるわけではないが、少なくとも苦しんでいる症状を一旦緩和しなければ、適切な環境やサービスを受けたところで効果は限定的である。

また、医療や福祉とつながることで、今後の長い人生においてさまざまな視点を取り入れながら子どもと関わることは、保護者にとってもメリットではないかと思う。

ただ、やはりデメリットもある。診断や服薬により、症状が目立たなくなることで、その子どもや保護者の本質的な困り感が見えにくくなり、集団での指導もその子に合ったものではなく、はっきり言えば、子どもにトラブルさえなければ、大人たちが思考停止に陥り、その後の個別支援や環境調整が止まってしまうようなこともある。

☆医療受診についての教育相談

診断や服薬がただのレッテルを貼るような行為にはならないよう、こどもを大人にとって都合の良い存在にさせようという行為にならないよう細心の注意を払い、話をしていくのが医療受診についての相談になる。

診断や服薬のその後どうするか、子どもの変化に合わせてどのような環境調整を行うのか、その振り返りを定期的に行うという意識を持ち、教育現場や福祉、医療と連携しながら話し合っていく必要がある。





またもや前言撤回？全力で取り組んだからこそ見えてきた壁

猫問題を解決するための社会的企業として、「ねこから目線。」を2018年に立ち上げて、はや7年が経ちました。対人援助学マガジンには、立ち上げ当初から、その瞬間に考えていることを書いているのですが、振り返って読んでいくと「言ってる事ちゃうやんけ！！」と関西人に盛大にツッコまれそうなほど、前言撤回を何度かしています。それも結構な規模の（笑）。例えば、立ち上げたてのころは、「問題解決を目的にしているので、会社を大きくすることはせず、閉業を目標に活動します」と言っていました。しかし、今では、個人事業から株式会社になり、メンバーもどんどん増え、拠点は全国10ヶ所。はじめに言っていた事と今やっていることが違いすぎます。なぜなら、自分一人が仕事として24時間365日動いたとしても、たった一人でできることなんてたかが知れていて、猫問題という大きな社会問題を解決するどころか、一石を投じるまでもいかず、ゴマ粒1つ投げたくらいの影響力しかなかったからです。マガジンでは、その都度、「元々こう思っていたんだけど、その方針で全力で取り組んでみた結果、こういう現実が見えてきたので、こう方針転換をすることにしました」と丁寧に書くように心がけてきつもりです。

私はこれまで、学校の歴史の授業は日本史も世界史も絶望的なほど興味が持てなくて、なんでそんなことを勉強しないといけないんだろう？と思っていました（笑）。でも、猫の活動を通して、“今”だけを見ても“**取り組みの正しい評価**”はできないんだと猫に教えてもらいました。

例えば、今は全国的に、ノラ猫問題を解決するためにTNR（ノラ猫さんを一旦捕獲しTrap、不妊手術Neuterを実施して、元の場所に戻すReturnこと）のための不妊手術費を行政が助成する。というケースが増えています。一方で、東京の千代田区や豊島区など都心のエリアでは、ノラ猫を保護して譲渡するための医療費全般に助成金が出たりしています。これはとっても素晴らしいことではあるのですが、その**前段階**として“**10年くらいかけて徹底的なTNRをやり尽くしてきたから**”という歴史があります。この歴史を知らず

に、「今」だけを切り取って見てしまうと、「殺処分もノラ猫も少ない地域は、TNR じゃなくて、ノラ猫の保護譲渡に力を入れているんだ！」と見当違いな理解をしてしまう危険性があります。なので、成功事例を真似するにしても、「今」ではなく、**どういう取り組みの歴史を辿って今に至るのか**を学び、その**“過程”**を自分の地域に落とし込んでいくことが大切なんだと思います。

と、言い訳がましい前振りが長くなってしまったのですが、今回のマガジンは「寄付に頼らず、持続可能な活動をするために株式会社という形態を選んで、活動しているねこから目線。ですが、この度、寄付も集めていこうと思います！」というお話です。笑

毎度全力の体当たりで PDCA 回していますので、その回転具合をみなさんとも共有できたら嬉しいです！笑

そもそも何故、寄付に頼らないことにしたのか。

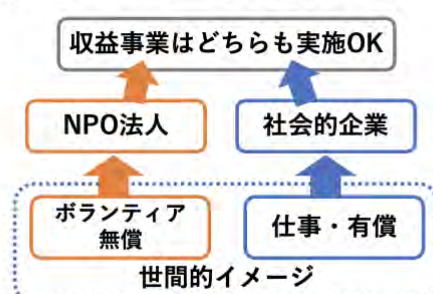
そもそもねこから目線。を法人化しようと考えた時に、NPO 法人にするか株式会社にするか悩みました。結果として株式会社を選択したのですが、理由としては、「世間的なイメージの違い」が大きかったです。本来、「NPO 法人＝無償で動いてくれる団体」。というわけではないのですが、世間的には「NPO 法人＝無償で動いてくれる団体」。みたいな印象がまだまだ根強くあります。ねこから目線。は有「料で保護猫活動をサポートするサービスを提供しています」と、HP に料金表も明記しているのですが、それでもパッと電話をかけてこられた方にお見積もりを伝えると「ボランティアのクセに金取るのか！！」と怒られたり、驚かれたり、悲しまれたりします。その時に、「うちは、株式会社なんです」とお伝えすると「あ、そちら会社なん？」と有料であるということを理解いただきやすいという実体験がありました。

NPO法人と社会的企業の違い



目的は同じでも活動の**資金源**が異なる

NPO法人と社会的企業の違い



会社の方が有償だと**納得(理解)**してもらいやすい

あと、「ボランティア団体さんからの批判を恐れた」という理由もあります（笑）。これはどういうことかということ、TNRであったり、保護譲渡であったり、これまでボランティ

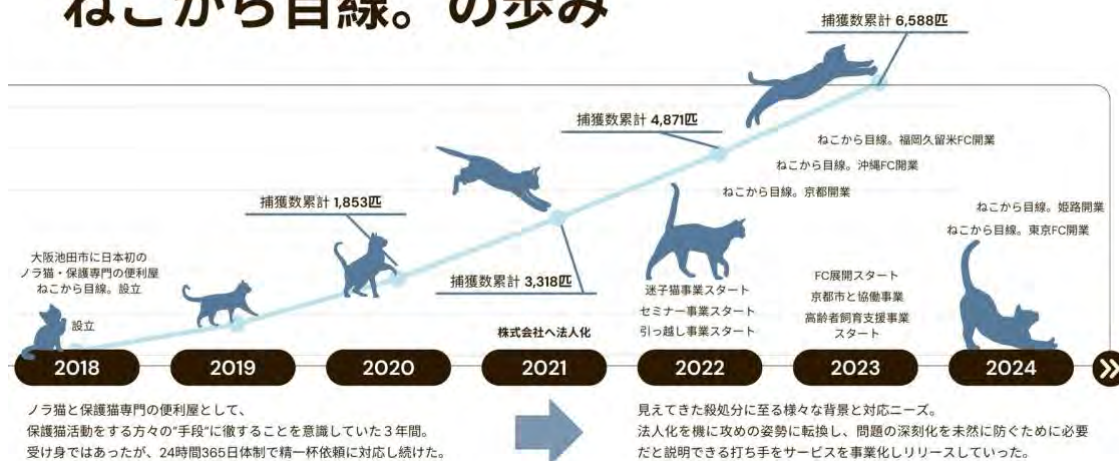
ア団体さんが無償で奉仕活動してきた内容を「有料で仕事としてやります！」と宣言するわけですから、同じことを同じような組織でやっていたら、「ボランティアのふりして金儲けするな！」と腹が立つんじゃないかと思いました。そこで、NPO 法人ではなく、株式会社をあえて選択することで、「あ、違う角度から猫問題にアプローチしようとチャレンジしているんだな。自分たちと寄付者の取り合いをするライバルじゃないんだな。」と違いをと認識していただき、敵意をなるべく持たれないようにしよう。という下心もありました。

そして、その選択は功を奏しまして、「寄付に頼らない保護猫活動の新しいカタチ」とか、「猫の社会的企業（社会問題解決のために収益事業を行う企業体のこと）」と珍しがっていただき、未熟な会社ながらもテレビや新聞に取り上げていただく機会もいただき、結果的にナイス判断だったと思っています。

8年目に気がついた壁

しかし、じゃあなぜ8年目の今になって「寄付」も欲しいと言い出すのか。これを説明するためには、もう少し思い出話にお付き合いいただく必要があります。まず、ねこから目線。を開業する前。フルタイムで働いていた私が、自腹で休日を使って実施できた TNR は1年間で10~30匹程度です。それが、ねこから目線。を開業し、仕事として受けることで、1年目で427匹、2年目で1,000匹を超え、そこからは毎年1,500匹前後の猫さんのTNRや保護のための捕獲を実施することができるようになりました。

ねこから目線。の歩み



ねこから目線。の年表には捕獲対応頭数が入っています

でも、8年目になり、依頼主さんがいらっしゃる案件のみ対応するスタイルでは、1,500匹の壁があるように感じできました。TNRや保護が必要なノラ猫さんがなくなったわけ

ではないんです。まだまだ交通事故死数もすごい頭数います（殺処分の32倍の猫が路上で亡くなり遺体として回収されている統計がある）。では、この壁はなんだろう？この壁を乗り越えるために必要なコトはなんだろう？そう考える日々が続いていました。

依頼主さんがいない猫たちがいる

ねこから目線。の場合、自分の近くにノラ猫さんがいて、その子のために TNR や保護活動をしたい、と考えた方からの依頼があって初めて成り立ちます。つまり、これまで依頼をいただいて TNR をさせてもらったおよそ 9,000 匹のノラ猫さんたちは、依頼主さんが身近にいた、ある意味ラッキーな子たちだったといえます。しかし、いろんな現場に行ったり、相談を受けたりする中で、人がそもそも居ないエリアで繁殖しているノラ猫さんや、人はいるものの経済的な理由や、問題意識の低さから依頼にはならないエリアで頑張っている子たちが沢山いることも見えてきました。

依頼主さんが居ないエリアのノラ猫さんたちにアプローチするためには、いくつかクリアしなくてはいけないことがあります。1つは、どうやって猫さんやお世話をしていてくれる人の情報を集めるか、次に関係者の洗い出しと TNR への理解と協力を得ること（ここが一番時間かかりそう）、そして3つ目にして一番問題なのが予算をどこから捻出するかです。“一番の問題は予算”と書きましたが、「お金があればなんでもできる！」と思うのは大きな間違いで、お金を正しくきちんと使う組織力がなければ、集金詐欺になってしまいます。なので、昨年までの自分であれば、ねこからで広く寄付を募るという判断はできなかったと思います。でも、8期目に入った今であれば、情報収集も実働も十分やれると思えるようになりました。目の前に立ちはだかる 1,500 匹の壁を突破するために、次の一手にチャレンジしたいと思います！！うおーーー。

ファンドチーム結成

ひとことに「寄付も集める」といても、誰からどのように集めるのかといった企画と制度設計をしていく必要があります。そこで、ねこから目線。の経営顧問（って書くと堅そうですが、学校の部活の顧問の先生にイメージは近い）である団さん主導のもと、「ファンドチーム」を結成することになりました。経営会議の中で、団さんから「ファンドレイザーを集めよう」と言われた時は正直『????』でした。私の中のファンドレイザーは、めちゃくちゃ優秀な1人くらいが寄付の営業専門職員として動くソロ活動のイメージでした。でも、団さんの構想はだいぶ違い、「まずは能力の寄付を沢山人から集めるねん」という内容でした。なるほど、確かに寄付とは金銭的なものとは限りません。早速 HP と Instagram



で募ってみると、おそろおそろ何名か「興味あるけど何するの?」と問い合わせをくれました。そんな感じにゆるく結成されつつあるファンドチームでは、バリバリお仕事をされている方にご自身の能力を寄付していただく感じで、3週間に1回くらいのペースで夜にZOOMでミーティングを行い、ざっくりと「寄付広報チーム」「寄付者コミュニケーションチーム」「遺贈チーム」とチームに別れつつ、あれこれ楽しく喋りながらアイデアを出し合っています。現在11名、ファンドチームはまだまだメンバー募集中です!!!

ねこから基金の行く末は如何に

これまで、お金の寄付集めはしてなくても、ブログでAmazon 欲しいもののリストを公開して、ちゅ〜るやペットシートなどの物資支援は以前から募っていました。ある時、Google の口コミに「会社としてお金もらってるくせに、ボランティアみたいに物資寄付募ってて矛盾」と書かれたことがありました。なかなかグサってきたんですが、まあでもねこから目線。のことを長く知ってくれている人じゃない限り、そう感じてもし方がないよな。と妙に納得したのを覚えています。飼い猫さん対応の迷子捜索はしっかり費用いただいています。TNR や保護系の依頼はかなりギリギリの薄利で対応していることや、依頼がなくても見過ごせない猫さんの保護譲渡やレスキュー出動費として軽く年間100万円分くらいは自分たちの持ち出しや、「お釣りは猫に使って」と言ってくださった依頼者様からいただいたお金をプールして活動しています。メイン形態が有償事業だからって、無償活動をしていないわけではないのです。でも、ボランティア団体のように見えないように、あえて持ち出しで対応している案件は、HP や SNS には書きすぎないように注意していました。だからさーっと HP 見ただけの人に伝わらなくて当然なんです。

きっと、お金の寄付を集め出したら、そういった批判や風当たりはあもっと強くあるんだろうなと覚悟しています。正直少し怖いですが、恐怖心よりも目の前に立ちはだかる壁を突き破りたい、もっともっと猫と社会の役に立てるようになりたい、きっとまだまだねこから目線。は社会的企業として成長できる!というワクワクした気持ちの方が強いので、沢山の人を巻き込みながら走り続けていきたいと思います。

ちなみに直近では、のファンドチームの仕事としては、寄付集めの1つの形としてサポート企業様からいただいたご寄付で開催する無料の講座、その名も「寄付講座」を開講します〜!

ファンドチームはまだまだメンバー募集中です!!!



おわり



小池英梨子

ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～ 代表

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から

49

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

今回は「ひ行～ふ行」から以下の11個。
引き続き飛ばし気味で書いていきます。最後まであと少し、どうぞお付き合いください。

- 人の噂も七十五日
- 人の口に戸は立てられぬ
- 人の振り見て我が振り直せ
- 人は人中、田は田中
- 人は見かけによらぬもの
- 人を知る者は智なり、
自ら知る者は明なり
- 百聞は一見に如かず
- 火を乞うは燧^{すい}を取るに若かず
- 夫婦は会わせ物離れ物
- 覆^{ふく}水^{すい}盆に返らず
- 福は無為に生ず

<人の噂も七十五日>

世間で人があれこれうわさをするのも一時的なもので、しばらくすると自然に消えてしまうということ。

<人の口に戸は立てられぬ>

世間の噂は防ぐことができないということのたとえ。家の戸を閉めるように人の口の戸を閉めることはできないという意から。「世間の口に戸は立てられぬ」ともいう。

二つの諺についてまとめて書こうと思う。というのも、この二つはリンクすると思うからである。

人の噂は、最近では SNS で広がるため、素早く、そしていつまでも広がり続けるイメージがある。また更にオヒシハヒシが付いて拡散していく。

今は小学生に至るまでスマホを持っているし、簡単に勝手なことを流すことができる。フェイク動画や偽情報も簡単にできる。怖い時代である。そうして流される嘘や噂に、子どもたちはつらい思いをする。

ただ、1週間も経てば別の話題に移っていくのも事実だ。情報の伝達は早い、興味が失われるのも以前より早くなっている。子どもたちは悪い噂や誹謗中傷を SNS で流されることに戦々恐々としていて、とにかく良い人を演じ続けている。

それでも失敗してしまうことはある。すると子ども達はまず不登校になる。人との関係を修復する、謝罪して何とかとりなす、などと言った人間関係の立て直しが難しい。

そこでこの諺を出して、しばらく学校を休んでいたら、学校に行ったときに思い出されるけど、数日我慢したら、それでその話以外の話題に子どもたちは切り替わってしまうものだと言っている。学校に行けない日が長くなればなるほど戻りにくくなるのだから、休んでも数日から1週間で戻ればと思っている。謝る時のセリフも考えて、練習もして戻すなどと言うことをやっている。もしその子が悪くなければ、例えばいじめられているなどであれば、それは全く別の問題だし、学校に行けなくなるのはむしろおかしいという話をするし、学校とも話していくことになるだろう。

この諺、「人の噂は1週間」「つぶやきは止められない」などと変えたらよいのかな？

英語では・・・

A wonder lasts but nine days.
(不思議に思うというのも九日だけ)

<人の振り見て我が振り直せ>

人の姿や行動を見てよいところを見習い、自分の姿や行動を改めよということ。

人の悪いところばかりを探してあげつらう子は多いが、人の良いところを見ようとする子は少ない。自分が良いと思う言動、良いと思う人を真似ていくことで、自分もその人のようになっていく。勿論最近のフェイクに騙されてはいけないが、良いところ

を見ようとする力をつけることが、今の社会で大事なのではないと思う。

悪いところというのは目立つもので見つけやすい。だからこそ、良いところを見つけてほしい。又反面教師的に、悪い言動をまねしないように自分を戒めてほしいと思ってこの諺を子どもたちに伝えている。

英語では・・・

It is good to beware by other men`s harms.

(他人の受けた禍によって警戒心を強くするのは良いことである。)

Learn wisdom by s the follies of others.

(他人の愚行によって英知を学べ)

Learn from others` mistakes.

(他人の失敗から学べ) ともいう。

<人は人中、田は田中>

人は大勢の中でもまれ鍛えられるのがよく、田はほかの田に囲まれた田が良いということ。

インクルーシブ教育というのがある。一方で支援学級、支援学校というのがある。子どもたちが学校でその子の能力・特性に応じた教育を受けることは大事である。しかし、一般の子どもたちと離れてしまったら、社会に出た時に困ることが多い。社会はまだ未熟で、発達特性を持った人への対応が不十分である。

ある学校で発達特性があって切れやすい子を、全く隔離して1年間過ごさせていた。その子は1年間、殆どろくな教育も受けず、放っておかれたのである。その結果、社会性は育たなかった。その後進学したものの、1年間のハンディは大きく、進学先では問題行動の嵐となった。

たとえ少人数でも良い。同年代と関わりながら、トラブルを起こしたとしてもその行動を見直し、反省し、修正して行くことで社会性が育つのである。人は人の中でしか育たないのである。

問題行動を起こしている子の対処に困っている通常学級の先生方にこの諺を送りたい。

<人は見かけによらぬもの>

人の能力や性格などは、外見だけでは判断ができない。人は外見に似ず、意外な一面を持っているものだということ。

子どもたちも保護者も、好き嫌いが結構はっきりしてきたと思う。好き嫌いを言うことを否定するものではないが、人に対して直感的に合う合わないを決め、そこからまず譲らない。見た目だけで決めてしまうのと同じである。確かに見た目で生理的に苦手と思うこともあるだろう。しかし、話してみたら違ったということがあっても事実である。関わっても見ずに、最初から毛嫌いしたり、避けたりするのは違うのではないか。

身なりも大事にすべきではあるが、穴の開いたジーンズをはいていたとしても、それはファッションだし、ピアスをいっぱい

つけてるからヤンキーということではないし、刺青をしているから反社会的な人(暴力団)というわけではない。

最近は年寄りには理解しがたいファッションも多いから、見た目で決められたら大変である。先ず、関わってみよう、話してみよう！そしてその人をある程度理解してから好き嫌いを決めても良いのではないかと思う。毛嫌いしてきた人の中に、もしかしたら自分にぴったりの友達がいたかもしれないのだから。

英語では・・・

Appearances are deceitful. (外見は当てにならない)

<人を知る者は智なり、

自ら知る者は明なり>

人の賢愚を見分けることのできる者は知者であり、自分自身を知り、正しく評価できる者は知者より優れた明者であるということ。明＝聡明の意。 出典 老子

自分自身というのはわかりにくいものかもしれない。自分を知るのは他人の目を通じてとも言われている。自分が良くわからないという人もいる。「自分」は色々あるのが普通だ。「だらしない自分」「真面目な自分」「頑張る自分」「さぼりたい自分」「意地悪な自分」「気弱な自分」etc.

いろいろな「自分」をある程度まとめて、これが「自分」というのを感じているだけである。本当のところ、自分自身を知るのは人に言われて「そうかな？そうかも」と思って、「これが自分」と思っているのかもしれない

ない。でも人に言われても「違うな」と思うこともあるだろう。

結局自分を知るには、自分としっかり向き合い、自分の悪いところも良いところもすべて認めた上で、こういう自分でありたいという方向でまとめ上げるということになるだろう。

自分の弱さ、情けなさ、悪意もすべて受け入れることが一番大事なのではないだろうか？ダメな部分嫌な部分を否定して、良い部分だけで自分を造ろうとしたらそれはとても苦しい自分になってしまうだろう。もっと自分のダメなところを認めてあげてほしいという思いから、子どもたちに伝えている。

<百聞は一見に如かず>

百回繰り返して聞くよりも、たった一度でも自分の目で見るほうが確かであるということ。「せんぶん百聞は一見に如かず」「じぶん耳聞はめけん目見に如かず」ともいう。

最近インターネットで何でも調べられるし、景色とかも写真で見ることができる。だから人から聞くだけで理解するということは少なくなったかもしれない。大抵の人はネットで調べるから。しかし、どんなに情報を集めても、どんなに調べても、実際にその場所に行って、観たり感じたり触れたりすることは、ネットで調べるだけとは全く違う。

食べ物一つとってもそうだろう。あそこの何とかがおいしいという情報はいくらでもネットに流れている。人気ランキングとかもある。それに乗せられて食べに行って

みたら、それほどおいしくなかったという経験を持つことも少なくないだろう。学校で習ったことも含め、訊いた話、テレビやネットで見聞きしただけではなく、出来るだけ実際に体験したり、観たりしてほしい。ネット情報に頼る傾向の多い子どもたちには、この諺と一緒に「動け！」と言いつけている。

英語では・・・

Better have it than hear of it.

(話を聴くより体験するほうがよい)

Seeing is believing.

(見ることは信じること)

<火を乞うは燧を取るに若かず>

人を当てにするよりも、自分で努力してやったほうが確実であるということのたとえ。人に火種をくれと頼むよりも、自分で火打ち石を使って火おこした方が良いということから。燧＝火打ちの道具。

出典ではこの後に、「きゅう汲をき寄するはせい井をうが鑿つに若かず」(水を他人に頼るのではなく、自分で井戸を掘ったほうが良い)と続く。
出典 淮南子

人を当てにすると考えた通りの結果を得られないので不満を持ったりイライラしたりすることが多くなる。人を当てにするときはその結果に期待しないことが肝心である。自分基準の結果を相手に求めるのはある意味わがままではないか。

もし、自分が求める基準の結果を得たい

なら自分でやるのが確実である。他人にお願いしたら、結果の良しあしに関わらず、やってくれてありがとうという気持ちになれば、イライラすることもがっかりすることもない。そうした心構えを伝えるために、この諺を使っている。大昔から人は同じことを繰り返しているのだと改めて思う。

<夫婦は合わせ物離れ物>

夫婦はもともと他人同士が一緒になったものだから、別れることがあっても仕方がないということ。

夫婦はもともと婚約届という紙切れ一枚の契約関係である。契約は破棄されることがある。

生まれも育ちも違う者同士が一緒になって、そう簡単に上手くいくはずはない。ぶつかり合うことも憎み合うこともあるだろう。子どもが居ると、「子は鎧」でお互い我慢できることもあるが、子どもが大きくなって巣立ったら熟年離婚になったりする。夫が退職したらその日に離婚という話もよくある。

家族という形を考えた時、カップルから夫婦になり、子どもが生まれて父母になる。夫婦の役割は解消したとしても父母の役割は解消できない。これは契約ではないから。親子の関係は一生である。そこを守れるのなら、夫婦の契約は破棄されても特に問題はないが、憎み合って別れるのは子どもにとって良くない。子どものためには自然消滅的な円満離婚が一番であろう。

<覆水盆に返らず>

一旦離婚した夫婦の仲は、もとははもとらないということのたとえ。転じて、一度してしまった失敗は、とり返しがつかないことのたとえ。一度こぼれた水は、二度ともとの盆に戻らないということから。覆水＝こぼれた水。
出典 ^{しゅうい}拾遺記

離婚した夫婦は元には戻れないという意味で作られた諺だが、一般的には一度こぼれてしまった水は戻らない、則ちやってしまったことは取り返しがつかないという意味で使われていると思う。筆者もやってしまったことは仕方がないという意味で使っている。

いつまでもやってしまった失敗をくよくよ考えている子に時々出会う。確かにあそこであしなければよかった、こうすれば良かったと反省しきりになるのはわかる。反省することが悪いわけではないが、要は次をどうするかであろう。

いつまでも後ろばかり見えても前には進めないのだ。「次は同じ失敗をしないぞ、次はこうしよう！」そういう風に考えさせるために、この諺を使っている。

ゲーム感覚で人が死んでも生き返ると思っている子がいる時代である。動画では巻き戻しも可能で、こぼれた水が元に戻ったりする。実際にこぼれた水は戻らないということを体感させる必要があるかもしれない。ミルクはこぼれると後が大変だから、水でも実際にこぼしてみせるか。

英語では・・・

It is no use crying over spilt milk.

(こぼれたミルクのことを嘆いてもむだで

ある)

Things done cannot be undone.
(一度なされたことはもとに戻せない)

<福は無為に生ず>

幸福は、手に入れようと追い求めたりせず、無欲に生きている人のところにやってくるということ。出典にはこのことばに続いて「患^{うれ}いは多欲に生じ、害は備えざるに生じ、穢^えは穢^のかざるに生ず(わざわざいは欲望が深いところに生じ、損害は備えがないために生じ、田畑の荒廃は雑草を除かないために生じる)とある。出典 淮南子

「幸せになりたい」と誰もが思う。それは自然な感情だろう。「お金持ちになりたい」と思うから宝くじを買う。では宝くじに当たったら幸せになれるのか？実際宝くじに当たった人が凄く幸せになったという話を聞いたことが無い。小当たりなら良いかもしれないが、1億2億というお金を手に入れたら、よく知らない親戚までがお金をせびりに来ると聞くと、あちこちから寄付の話も届くそう。そんなこんなしてたらあっという間にお金が無くなったと。所詮あぶく銭なのかもしれない。

無欲でいるということは、あれが欲しい、あれが食べたい、あそこに行きたい、などと言う欲が全く無いわけである。今のままで足りている、つまり「足るを知る」わけで、そうしたら、心も体も満たされていて、何も不自由は感じないだろう。

それこそ「幸せ」であろう。幸せになりたいくてなるのではなく、足りていれば、気づけ

ば幸せになっているというものだ。

そんな自分でありたいという思いを込めて選んでみた。

出典説明

老子・・・春秋戦国時代の思想家。道家の祖。姓は李、名は耳、字は聃^{たん}(一説には伯陽)。老子は尊称。周の図書室の書記官だったが、周末の乱世を逃れて西方の関所を通った時、役人に頼まれて『老子道德経(老子)』二巻を著したという。

淮南子・・・内編二十一巻

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立した哲学書。編著者は、前漢の高祖劉邦^{りゅうほう}の孫である淮南王劉安^{わいなんおうりゅうあん}。無為自然の道家思想を中心都市、政治・軍事・天文・地理などにわたって諸学派の説を収めている。内編二十一巻・外編三十三巻があったとされるが、現存するのは内編二十一巻。

拾遺記・・・10巻

中国の後秦の王嘉が撰した志怪小説集。上古より東晋に及ぶ小稗伝の類を収めている。(志怪小説とは漢魏六朝時代に記述された神鬼など各種の奇怪な話の小説を指す。古代神話、伝記が源となっている。その発生は、当時の社会の不穏不安、宗教や迷信の流行、鬼神の大げさな語り、回忌を説くという社会の気風と関係がある。《大阪大学》)

参考文献：以前にも掲載したが、此処に載せている故事・諺及び出典説明は「新明解故事・ことわざ辞典」三省堂編修所編 より転載させていただいている。

うたとかたりの対人援助学

第33回「子守唄・わらべうた学会 2025 夏の学校」

鵜野 祐介

はじめに

2022年9月に発足を開催し、2024年より本格始動した子守唄・わらべうた学会では、今年（2025年）8月2日（土）・3日（日）の1泊2日にわたって、夏の学校を開催した。会場は群馬県下仁田町旧西牧小学校跡地の女性村ねぎぼうず、子守唄・わらべうた学会会員や本学会に関心をお持ちの方、20数名が参加された。私も同学会の代表として前日から3日間現地で過ごしたが、本稿ではこのイベントについて、参加者の感想も交えながら総括的に振り返り、今後へとつなげていきたいと思う。



・基調報告「子守唄・わらべうた学会の目指すもの」

鵜野祐介

・講話「日本子守唄協会と女性村ねぎぼうずの取り組み」

西館好子

15時15分～16時：休憩

・「フジコ・ヘミングさんのピアノを聴く」横谷和子



16時～17時：講演

・「日本の音楽とわらべうたの歴史的変遷」尾原昭夫



プログラム

▷8月2日（土）

13時30分～15時15分：オー

プニング・セッション

・「開校の挨拶」鵜野祐介

・参加者全員の自己紹介



17時～17時30分：

自由見学

松永伍一、鶴見和子など館内各部屋の参観

17時30分：下仁田館へ移動

19時～20時30分：夕食、懇親会



・講演「群馬は童謡の宝庫」須賀正二



▷8月3日（日）

9時～12時：研究発表、実践報告、講演

- ・研究発表「ベトナムの子守唄から見る自然観 タイ族の初期儀礼子守唄にあるアニミズム世界観」
TRAN THI NGOC QUY



- ・実践報告1「わたしのこもりうた 《DA/LEDA メソッド》の展開」鈴木久仁子



- ・実践報告2「子守唄・わらべうたー小さな人形を使っ」尾崎ふみこ

12時：閉校の挨拶 鶴野祐介

参加者の感想

イベント終了後、参加された方がたから自由回答で感想をお送りいただいた。その中からいくつかご紹介しておく。

▷全体的な感想

・2日間を通して、私は「だれもが、日常生活の中で、食べることが当たり前のように、うたを（子守唄を）唄うことが当たり前になる」ことを夢に見ているのだとあらためて自覚することができました。だれもが自分の声で日常のなかでうたを（子守唄を）うたう、そのためにできることを楽しみながら取り組んでいこうと思います。

・全体から、主催者の方々が「子守唄・わらべうた学会」が何を目的として何を目指しているのか、その事を伝えようとし、一緒に考えることを願っていらっしゃることが感じられました。と、同時になかなか伝わらず、共有できずにいる難しさを感じまし

た。色々あっていいのだと思いますが、1 日目にもお話しにありましたし、また、2 日目でもお話しがあったように思いますが、混沌とした不消化の部分をかかえたまま過ごした感じがします。時間が足りないということがあるかもしれないですね。これからも伝え続け一緒に考えていく場を作っていただきたいと思います。私も考え、取り組み続けていきたいと思っています。

・時間をかけて企画されたすばらしい会、私のような者にも門戸を開いていただき、学会主催の学びに思い切って参加して良かったです。私は「おはなし」ボランティアから「わらべうた」にたどり着きました。わらべうたをどの視点でとらえたらよいのか、文化人類学、音楽、文学、教育、保育、子育て支援、自分はどの立場なのか、迷うことが多々ありました。今回いろいろな立場でわらべうたを研究、実践されている方を知ることができました。尾原先生にお会いすることができ、心より感謝申し上げます。

▷会場について…懐かしさを感じる校舎と教室、下仁田の山々とまわりの自然から伝わる様々な要素が絡み合って今思い出しても鮮やかです。夏の学校の目的の一つである一人一人が感じる事、閉校の時の鵜野さんのお話にもあった五感を開き、感じることを大切にしたいとお話を考えたとき、この会場は本当によかったと思います。

▷研究発表について…最近の育児心理学において、世界的に胎児が母の胎内で、すでに音を、声を、歌を、音楽を聴いて成長しつつあるということ、それが出産後の成長・発達にも関わるという実証研究が進んでいるなかで、タイ族でははるか昔から胎児に月毎に聴かせる子守唄があり実践されてきたという報告に大きな衝撃を受けた。

▷「群馬は童謡の宝庫」について…<子宝まんなか社会>の構築の主張に同感。『ぐんまの童謡』受贈に感謝。

▷その他

・宿での懇談会など、参加者全員の自由トークを重

んじ、もう少し時間を取りたい。

・希望者に、ジオパーク・荒船風穴そのほか、下仁田の自然環境、地質学的歴史の実地見学もあればよい。

・「女性村ねぎぼうず」の資料、内容を生かした講座（例えば 子守唄・松永伍一の資料を生かした講座）があるとよい。

・自己紹介に個々の活動や研究内容を加えたらどうか？ またはテーマに沿った座談会など。

・懇親会（夕食）はテーブル三つ（6・7人）位のグループに分けて、それぞれのグループに講師スタッフが入っておはなしが出来るとよかった（最後にそれぞれのグループ報告）。

運営面での課題

今回の「夏の学校」で実質的な実行委員長を務めていただいた落合美知子さんからのご報告を要約して紹介する。

▷夏の学校を開催する体制

西舘さん、佐久間さんには、たくさんの方の前準備をしていただいたが、会場を担当した私や受付・集金係が周知していないことが、多々あった。準備段階で役割、担当を決めておくとうい。

▷移動手段

下仁田駅から会場までの移動手段は、個々するにはお金がかかり過ぎた（タクシー代は4000円前後）。バスでは200円。70代からは無料。でも本数はあまりないので、バスの時刻に合わせた開始のスケジュールにする必要があった。タクシーの手配をする係も必要だった。今回は11人が同じ（落合氏の主催する）会員のために自動車で来た2人に協力してもらい、手分けして乗った。

▷宿泊の申し込み

宿の申し込みはまとめてする必要がある。今回、西舘さんに20人の事前予約をしていただき、個々

に申し込むようにしたが、下仁田館では一人一人の申し込みに対応するシステムがないため個別のTEL予約は無理だった。参加申し込みの時に宿泊を確認しておき、宿泊者名と性別をまとめてfaxで報告する必要があった。

▷担当者からの要望

受付・会計担当が気づいたことは、参加者には簡単な名札（貼り付けるものでよい）があったらよかった。参加者の名簿（名前と簡単な紹介入り）が欲しかった。また、「子守唄・わらべた学会」の領収書が必要だった（今回は西館さんからいただく）。

おわりに

今回の「夏の学校」は、2014年8月に参加した「第8回みやぎ民話の学校」（宮城県丸森町）から着想された。全国各地から集まった200名を超える参加者の一人として、1泊2日で講演・シンポジウム、分科会に分かれての民話語り、夜の交流会、3・11震災遺構見学ツアーなどの全プログラムを堪能し、「民話」の代わりに「子守唄・わらべた」をコンセプトとした集いの場を、いつか設けることができないだろうか、と考えていた。

会場として、NPO法人日本子守唄協会の理事長であり本学会の理事でもある西館好子さんが、数年前に立ち上げて面白い企画を次々と展開させている群馬県下仁田町の「女性村ねぎぼうず」がいいのでは、と思いついた。そこで西館さんにこの企画を持ち掛けて、賛同を得たのは今年2月のこと。

そこから開校当日までのわずかな期間を、西館さんと一緒に準備を進めて下さったのは、埼玉県川口市で「ちいさいおうち」を主宰する落合美知子さんとそこに集う方々だった。さらに、本学会事務局の佐久間憲一さんや西館さんのパートナー・岩倉栄一さんにもご尽力いただいて、こうして「夏の学校」が実現できた。参加された全ての皆様にも心からの謝意を表したい。「イヤイライケレ（ありがとう）！」

私自身、今回はじめて群馬県を訪れて、いろいろな発見があった。断層に隆起する山並み、屹立する深緑の樹林、空の色の鮮やかな青、強烈な陽光、大

音量の蝉時雨、限りなく透明な清流、水面の上を渡るアカネトンボの群れ……、日本や世界の子守唄やわらべたの起源や歴史、現状と未来について、共に学び、語らい、歌うのに相応しい場所だった。

尾原先生のご講演は、子守唄やわらべたの音楽学的な特徴を日本の音楽史に位置付けて解説するものだったが、合唱や篠笛演奏も交えつつ、高度な内容をとても分かりやすくお話された。今回は主に中世（室町期）までだったので、近世以降となるであろう次回のご講演を今から楽しみにしている。

フジコ・ヘミング寄贈の「気難しそうな声」を奏でるピアノをあやすように弾かれた横谷さん、産育儀礼にまつわる興味深いベトナム・タイ族の伝承子守唄を紹介されたクイーさん、世界にたった一つの「わたしのこもりうた」を作ろうと呼びかけてきた鈴木さん、子守唄やわらべたを子どもたちに届けるためのツールとして人形を使った実践をおこなってきた尾崎さん、群馬ゆかりの童謡作家たちの紹介を通して「子宝まんなか社会」の実現を説いた須賀さん、いずれも大変興味深く拝聴した。

来年（2026年）5月下旬、同じ会場で次回の開催を計画している。今回と同様、「参加して良かったね！」と皆が笑顔になれるような「学校」となることを願いつつ。



ああ、 結婚！

—婚活日記—

第35回

黒田長宏

<2025年5月11日>

警察署に行った。悪いことはしていない。されていたのだ。対人援助学マガジンに書いたマッチング相手の数名がロマンス詐欺師だということによりやく気づかされてきた。

警察官の言うのには、はっきりと詐欺です。と言うのだ。大きく労力を費やし、傷ついている。

<5月14日>

事件発覚の翌日は、詐欺ショックをネタに職場の数人に一日中ハイになってしゃべっていたが、3日も経過すると、またマッチングアプリを再開している。某マッチングアプリをいったん休会か退会したので、一人マッチング

したからと(詐欺師だったのだが)、断りを入れた人から連絡があった。

詐欺師と同じ日にマッチングしていた人だったが、まさか連絡が来るとは思わなかった人だし、メッセージ交換のデータが残っているとも思わなかったので意外だった。別のアプリはデータが残っていて、有料会員に戻れば、普通の戻れるとわかっていたのだが、そこも2人残っているが、1人は反応が長く無くなってしまったが、あと1人は真面目に返信は来るが、さよなら模様(昔そういう歌があったな)ではある。それに加えての新たな人を発掘だ。

<5月29日>

不思議なもので成就してはいないが、詐欺師のよくくるアプリを辞めて、違うアプリから2人とメール交換状態にはなっている。

<6月11日>

58回目の誕生日。2人、マッチングアプリからメール交換しているが、進展なし。来るだけでありがたく思うべきだろう。

<7月14日>

ようやく言うべきか。まだどうなるかわからないが、何事もそうだが、パートナーズという出会いアプリで思わず、ユーチューブ共同制作者になってくれた人ができた。『マーサとクッピーのチャレンジトーク』という名前で既にアップロードが始まった。婚約というような方向ではないスタートとはなったが、LINE友達として2か月過ぎて、実際ユーチューブ友達みたいに会ったので、ありがたいことだと思う。

<7月21日>

はやくも、YouTube コンビ、『マーサとクッピーのチャレンジトーク』の2度目のロケをした。

ビギナーズラックなのか、動物好きの相方マーサが取材したいという、フトアゴヒゲトカゲとレオパードゲッコーという、私にとって初めて聞く名前の小動物が、名の知れた動物園にもいないのに、

今年4月開校の動物と触れ合うことで人間性を育むというフリースクール、茨城県石岡市にある、

アジア動物ふれあい学園にいくことを知り、取材できることになった。なんだかマーサが導かれたのか、思いもよらぬうまくいった展開だった。この YouTube は Google 検索でも YouTube からでも、

YouTube からは当然ではあるが、番組名を入れて検索すれば出てくる。短信でも同じことを書いてしまうかも知れない。その学園も対人援助ということではその通りの場所ではないかと思った次第である。そして私らの YouTube も。マーサとは婚活で応募していたつもりが YouTube チームになってしまった。となると想像される通り、私がクッピーというわけである。

<8月4日>

昨日、YouTube『マーサとクッピーのチャレンジトーク』の3度目のロケを行った。後付けだが、スタートアップで増やしたとして、本音は今後は経済的事情で(交通費とか)月1回のペースでロケを計画。

その代わりでもないが、LINE ビデオ動画使用で番組を増やす計画。

ここに掲載させてもらってからずいぶん経過したようだ。おまけに去年は死にかけた。

思弁的になってしまった時もあった。別人の文章のようでもある。(それはないか)

自分の結婚難解決のために、婚活アプリで知り合った人となぜか YouTube の共同制作者になってしまっているが、対人援助という意味では、相手の好きなウーパールーパーの録画を増やせていたり、対人援助学の学で言うなら、独学のような進め方をしているようだ。この文章も含め、私のこれまでの行為は対人援助学に対してなんなのだろう？何冊かの本は買っただけで…。申し訳ありません。それに、自分でこうして書かせてもらっているのに、最初はいくつか読んでいたのに、対人援助学マガジンも読んでいません。重ねて申し訳ありません…。

<2025年5月11日>

警察署に行った。悪いことはしていない。されていたのだ。対人援助学マガジンに書いたマッチング相手の数名がロマンス詐欺師だということによりやく気づかされてきた。

警察官の言うのには、はっきりと詐欺です。と言うのだ。大きく労力を費やし、傷ついている。

<5月14日>

事件発覚の翌日は、詐欺ショックをネタに職場の数人に一日中ハイになってしゃべっていたが、

3日も経過すると、またマッチングアプリを再開している。某マッチングアプリをいったん休会か退会したので、一人マッチングしたからと(詐欺師だったのだが)、断りを入れた人から連絡があった。

詐欺師と同じ日にマッチングしていた人だったが、まさか連絡が来るとは思わなかった人だし、メッセージ交換のデータが残っているとも思わなかったのが意外だった。別のアプリはデータが残っていて、有料会員に戻れば、普通の戻れるとわかっていたのだが、そこも2人残っているが、1人は反応が長く無くなってしまったが、あと1人は真面目に返信は来るが、さよなら模様(昔そういう歌があったな)ではある。それに加えての新たな人を発掘だ。

<5月29日>

不思議なもので成就してはいないが、詐欺師のよくくるアプリを辞めて、違うアプリから2人とメール交換状態にはなっている。

<6月11日>

58回目の誕生日。2人、マッチングアプリからメール交換しているが、進展なし。来るだけでありがたく思うべきだろう。

<7月14日>

ようやくと言うべきか。まだどうなるかわからないが、何事もそうだが、パートナーズという出会いアプリで思わず、ユーチューブ共同制作者になってくれた人ができた。『マーサとクッピーのチャレンジトーク』という名前で既にアップロードが始まった。婚約というような方向ではないスタートとはなったが、LINE 友達として2か月過ぎて、実際ユーチューブ

友達みたいに会ったので、ありがたいことだと思う。

<7月21日>

はやくも、YouTube コンビ、『マーサとクッピーのチャレンジトーク』の2度目のロケをした。

ビギナーズラックなのか、動物好きの相方マーサが取材したいという、フトアゴヒゲトカゲとレオパードゲッコーという、私にとって初めて聞く名前の小動物が、名の知れた動物園にもいないのに、

今年4月開校の動物と触れ合うことで人間性を育むというフリースクール、茨城県石岡市にある、

アジア動物ふれあい学園にいいことを知り、取材できることになった。なんだかマーサが導かれたのか、思いもよらぬうまくいった展開だった。この YouTube は Google 検索でも YouTube からでも、

YouTube からは当然ではあるが、番組名を入れて検索すれば出てくる。短信でも同じことを書いてしまうかも知れない。その学園も対人援助ということではその通りの場所ではないかと思った次第である。そして私らの YouTube も。マーサとは婚活で応募していたつもりが YouTube チームになってしまった。となると想像される通り、私がクッピーというわけである。

<8月4日>

昨日、YouTube『マーサとクッピーのチャレンジトーク』の3度目のロケを行った。後付けだが、スタートアップで増やしたとして、本音は

今後は経済的事情で(交通費とか)月1回のペースでロケを計画。

その代わりでもないが、LINE ビデオ動画使用で番組を増やす計画。

ここに掲載させてもらってからずいぶん経過したようだ。おまけに去年は死にかけた。

思弁的になってしまった時もあった。別人の文章のようでもある。(それはないか)

自分の結婚難解決のために、婚活アプリで知り合った人となぜか YouTube の共同制作者になってしまっているが、対人援助という意味では、相手の好きなウーパールーパーの録画を増やせていたり、対人援助学の学で言うなら、独学のような進め方をしているようだ。この文章も含め、私のこれまでの行為は対人援助学に対してなんなのだろう？何冊かの本は買っただけで…。申し訳ありません。それに、自分でこうして書かせてもらっているのに、最初はいくつか読んでいたのに、対人援助学マガジンも読んでいません。重ねて申し訳ありません…。

〔PBLの風と土 第34回〕

先生も＜勉強するんだ…＞と言われたら

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL（Problem-Based Learning）の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題し、8年目からは再び筆者の教育実践を紹介中です。

1. 教育者・研究者も学習者として

筆者の勤務先の所属は「共通教育推進機構」である。そのため初対面の方に自己紹介をする、と、たいてい追加の説明を求められる。実際、2025年8月9日、石川県七尾市田鶴浜地区で開催された「田鶴浜あかりまつり」で出会った方からも「で、何学部で教えていらっしゃるんですか？」と問いかけられた。そうした際に「いや、学部ではなくて機構です」と答えても、大学には学部以外にも教員の所属組織があることが広く知られていないため、「で、ご所属は？」と堂々巡りになることがある。そこで筆者は正確ではないと自覚しつつも、「学部は専門分野ごとに分かれるため縦割りになりがちですが、共通教育はどの学部にも所属していても必要とされる学びを大学全体で提供できるよう横につなぐ役割を担っています」と、長い説明をすることになる。¹

次に「じゃあ、共通教育がご専門ですか？」と尋ねられると、これまた答えに窮する。昭和の時代に大学を卒業した方々には「共通教育推進機構は、かつての教養部を現代的に復活させた組織です」と説明すれば合点がいくが、平成以降に卒業した方や在学生に共通教育を説明する場合には、1991年の「大学設置基準の大綱化」による大学改革に触れる必要がある。これはさらに歴史を遡り、1947年の「大学基準」制定に始まり、新制大学の整備とともに、ヨーロッパ型の学年制・専門教育型から、アメリカ型の単位制・一般教養と専門教育を併せ持つ枠

組みへの転換が進んだことに由来する。1956年には「基礎教育科目」という区分が設けられ、1970年の改正で分野・科目例示・単位数などの基準が緩和され、そして1991年の大綱化により、省令による規制から原則による自由度の高い編成へと移行した。その結果、大学ごとに地域連携も含め自由に教養教育を編成できるようになったのである。²

ただし、多くの人が「専門は？」と問うとき、必ずしも定義の説明を求めているわけではない。そこで「専門は社会心理学の中でもグループ・ダイナミクスです」と答えるのだが、今度は社会心理学やグループ・ダイナミクスをどの程度説明するか逡巡することになる。ここまで読んでくださった方は「山口洋典とはややこしい人物だ」という印象を持たれたかもしれない。しかし少なくとも「共通教育」は筆者の専門ではなく、所属組織の役割を表す区分にすぎない。立命館大学において、共通教育推進機構は、国際教育推進機構・教育開発推進機構・教職教育推進機構と並び、各学部教育を補完するために設置されている。その中で共通教育推進機構は教養教育センター、キャリア教育センター、サービスラーニングセンターからなり、筆者は学生の地域参加を促すサービスラーニング科目を担当している。もちろん、サービス・ラーニングは確立された理論や方法論に基づく教育法であり、専門と称することもできる。しかし、先に記したとおり、筆者の学問的基盤は杉万 (2013) の『グループ・ダイ



写真1：立命館大学共通教育推進機構の運営体制
(<https://www.ritsumei.ac.jp/liberalarts/about>)

ナミックス入門』に依拠するものであり、グループを「人間たちだけでなく、その人間たちにとっての環境をも含む概念」（p.3）と捉え、さらにそれを「動いていくもの、変化していく存在」（p.7）として分析する立場である。筆者このグループ・ダイナミックスを専門に据え、教育・研究さらには地域貢献のテーマとしてサービス・ラーニングやまちづくりや災害復興を取り扱っている、という具合である。

ここまで前置きが長くなったが、前回の本連載の次回予告では、河井（2025）が示した「大学生の学びと成長のフレームワーク」（p.18）を取り上げ、知識の取り扱い方や他者・自己への向き合い方が二元論から多元論、関係論、コミットメントへと発展していく過程に対して、教員はいかに貢献できるのか、その可能性を事例とともに探りたいと記した。今回取り上げるのは、東京大学で開催された異文化間教育学会第46回でのケース／パネル発表「日本の大学国際化における教員の学び」である。この発表は神戸大学の村山かなえ先生を代表とするもので、筆者は指定討論者として参加した。実は本稿でこの事例を扱う理由は、別の場で「先生も勉強するんですね」と声をかけられた経験にある。グループ・ダイナミックスの立場からいえば「変化しないことは、変化のスピードがゼロという特殊ケース」（杉万, 2013, p.8）である。前回取り上げたアクティブ・ラーナーの観点に照らせば、教員は「興味や関心に沿った集団的な活動に身を置く」アクティブ・ラーナーかつアクティブ・リサーチャーで

あり、学びと成長の機会を積極的に獲得している。今回の事例は、その具体的な姿を示すものである。

2. 2つのツールを用いた経験の省察

学術団体の会議で発表する際には、応募時に発表予定内容をまとめた抄録を提出する必要がある。今回の発表「日本の大学国際化における教員の学び」は村山かなえ先生（神戸大学）が代表者となり、抄録の作成も取りまとめられた。抄録には背景、目的、方法、発表内容、指定討論、ディスカッション、そして引用文献が簡潔に盛りこまれた。そのうち目的として示されたのは、まず留学やキャリア支援等のアドバイジング業務に携わる経験を通して、各教員がどのように学び変容しうるか、また学びのプロセスにおいてどのような知識・スキル・姿勢を獲得しうるかを省察すること、次に各教員の学びから、日本の大学国際化とキャリア教育の接点、DEI推進や分野を超えた共創のあり方など、今日の日本の大学における教育への展開と連関を議論を通して考察すること、であった。

発表の特徴は、代表者である村山先生が準備した2種類の省察ツールを用いた点にある。すなわち、発表者自身による自己評価と、その内容を他の発表者と共有し合うことでの相互評価が組み込まれていた点である。1つ目のツールは、松尾（2011）による「経験キャリアシート」である。学生へのアドバイジング経験を「経験」「学び」「仕事の姿勢」に分けて記録することで、暗黙のうちに積み重ねてきた活動や判断を可視化し、個人の学びの形成過程を明らかにするものである。2つ目のツールは、花崎（2001）による「価値論（9カテゴリー）」と「存在論（4カテゴリー）」を組み合わせた「現在の価値観のマトリックス」である。こちらは、自らの経験をより広い枠組みに照らして俯瞰し、実践に潜む価値観や存在論的前提を言語化することを促す。これらのシートは図2に示した。³

抄録提出後、発表当日までに2度の打ち合わせが行われた。5月23日の対面での打ち合わせでは、まず「経験キャリアシート」を用いて個別体験の省察を行い、その内容を「価値観マト

1. 経験キャリアシート

(松尾 2011, pp. 200-202 に基づき発表者作成)

配布資料

期間 所屬 部署	経験学習		仕事の姿勢
	経験	学び	
1. 経験 (「前編」・「中編」・「後編」) (「前編」・「中編」・「後編」)	・ 期間中の全般的な仕事内容を振り返る ・ 自分を成長させてくれた経験を記入する ・ ドラマティックな経験だけでなく、一見地味な経験も大切	・ どんな教訓を得たか	・ 「ストレッチ」 ・ 「リフレクション」 ・ 「エンジョイメント」 ・ 「つながり」の価値観からの評価 ・ 経験した時にどのような気持ちだったのかを思い出して記入する

2. 現在の価値観のマトリックス

(花崎 2001, pp. 335, 340-341 に基づき発表者作成)

配布資料

存在論のカテゴリー （存在論のカテゴリーによる分類）	存在すること （名詞であらわす）	持つこと （動詞、形容詞、副詞、法など）	行うこと （動詞であらわす）	相互に働きかけること （場所と環境）
生存 （サバステンス）				
保護 （プロテクション）				
愛情 （アフェクション）				
理解 （アンダースタンディング）				
参加 （パーティシペーション）				
関係 （アイデンティティ）				
創造 （クリエーション）				
自己同一性 （アイデンティティ）				
自由 （フリーダム）				

図2：分析に用いられ発表時に配布された「経験キャリアシート」(左)と「現在の価値観のマトリックス」(右)

リクス」で分析することで、今後の教育・研究や制度設計にどのように接続できるかを検討した。6月10日のオンラインでの打ち合わせでは、改めて [松尾 \(2011\)](#) のシートと [花崎 \(2001\)](#) のマトリックスの双方を用いるのかについての意見交換を行った。筆者は指定討論者の立場であったため、これらのツールを事前に記入することはなかったが、堀江未来先生（立命館大学）と坂井伸彰先生（長浜バイオ大学）、そして村山先生自身が省察した内容に対する第三者からのコメントに加え、なぜこの項目で省察することに意義があるのかについてもコメントを準備する必要があった。そして4者での対話を通じて、教員の学生に対するアドバイジングの体験を2つのツールで省察する枠組みの意義を深く掘り下げることができた。

3. 発表当日の内容：個々の経験の内省

こうした準備と議論を経て迎えた大会当日、会場では3名の先生方による省察の成果が披露され、発表と指定討論、そして会場全体での対話を通じて、学生に対するアドバイジング経験を通じた教員の学びという共通のテーマが共有された。なお、大会当日には会場でQRコードが提示され、3名の省察内容を記述した2つのツールがGoogleスプレッドシートにより6月末まで閲覧可能な状態で紹介された。ただし、これらは参加者以外には提供しないという前提があったため、本稿では筆者が指定討論の際に触れた内容を中心に要約して紹介したい。なお、村山先生の「経験キャリアシート」は既に [村山 \(2025\)](#) で公刊されている。そもそも今回の発表の背景には、村山先生自身が「筆者の省察による学びの過程の表出を提示することによ

り、それぞれの立場と現状において自身を捉え直す可能性を追求したい」(p.133) という意図があり、その点も踏まえて [村山 \(2025\)](#) を参照いただければと願っている。

(1)堀江未来先生の事例

堀江先生は、学部・修士を修めた名古屋大学で留学生相談室のアドバイジング業務に携わり、南山大学で職員として実践を重ねた後、博士論文執筆と授業担当を通じて「書くこと」「教えること」の底を自覚するに至った。さらに職員から教員への転換、2度の研究専念期間での理論再学習、そして立命館附属校の校長経験における「誠実さ (authenticity) を貫く最後の砦」としてのリーダーシップなど、多様なキャリアの節目を経ている。「経験キャリアシート」ではこうした多層的なキャリアが整理され、「現在の価値観のマトリックス」では他者への助言が自分に跳ね返ることを通じて、高い倫理観に裏打ちされた行為が浮かび上がったという。

討論では筆者から「ツールに取り組むのに最適な時期はいつか」という問いを投げかけた。この点は後の会場全体での対話でも改めて話題となり、その際に堀江先生は研究専念期間を「デトックス」と呼び、立ち止まることで新たな発見が得られた一方、立ち止まることには怖さもあると率直に語った。そして、学び続ける教員に求められる資質として、立ち止まって熟考する勇気があるかどうかはその1つではないか、と参加者に応えた。

(2)坂井伸彰先生の事例

坂井先生は、電機メーカー9年間勤務、明治大学職員5年間勤務を経て、名古屋大学で留学生のキャリア支援に従事した経験をもつ。ここで得られた学びは、「留学生だから」ではなく「目の前の一人ひとり」に丁寧に向き合う重要性であった。また、未開拓の領域における研究と実践の可能性を認識し、特任講師として積極的に研究に取り組んだ。「経験キャリアシート」と「現在の価値観のマトリックス」による内省では、キャリアアドバイジング業務が現在の教育・研究・校務への価値観形成に大きく影響していたことを再認識し、共有と相互承認による学びの意義を強く感じたという。

討論では、事前打ち合わせで指摘された「ネガティブ志向ではないか」という問いを改めて取り上げた。筆者からは「謙虚に経験を見つめるがゆえに自己肯定感が低く見えてしまうのではないか」「むしろそれを劣等感ではなく、『引け目』の対義語として『押し目』などと捉え、確かな自負に転換できるのではないかと投げかけた。これに対し坂井先生は「仲間と内容を共有し相互承認ができたからこそ意義を実感できた」と応答し、省察の共有がもたらす効果を強調した。

(3)村山かなえ先生の事例

村山先生は、メルボルン大学での学びを経て、立命館大学や名古屋大学で国際教育に携わり、現在は神戸大学で特命講師を務める。日頃から経験を記録・想起する習慣があり、周囲から「外部記憶装置」と呼ばれることもあるという。既に公開された「経験キャリアシート」の成果に加え、今回の発表では「価値観マトリックス」に取り組むことで、多様なステークホルダーとの関係性が自らの活動を方向づけていること、そして与えられたフォーマットに記入する行為そのものが「自己を対象化する」契機であることが示された。

討論では、筆者から「体験を取捨選択する基準をどう設けたか」「フォーマットに沿うことで生じる反作用は何か」という問いを投

げかけた。村山先生は「まずは共通の前提として『これでやってみよう』と提示した。完璧な枠組みよりも、手を動かすこと自体が省察の契機になる」と応答し、省察を実践へ橋渡しする姿勢を示した。

個々の発表と討論の後には、会場を4つのグループに分けた意見交換が行われた。その概要をグループごとに整理しておく。これらをもとにすれば、参加者には省察のためのツールとその意義が好意的に受けとめられたことがうかがえるのではなかろうか。

「キャリアが長い人はむしろ早い段階で行うことが効果的で、またマニュアルのない非定型業務を見つめ直す手がかりになりそう」
(グループ1)

「シート記入の頻度と共有範囲が気になる」
(グループ2)

「記入例の提示や他者介入の範囲の設定が鍵になるのではないかと。また空白セルや記入量のムラからも自らの業務への意味づけを深められるのでは」(グループ3)

「授業内で学生の経験の省察にも活用できそう。自ら記入し他者と比較する中で自身の理想像を見出せるのでは」(グループ4)

ここで改めて当日の発表の意義を振り返っておきたい。3名の先生方の省察は、それぞれ異なる経験を共通のツールを介して言葉にすることで、新たな意味を見いだすと同時に、経験を通じた学びを相互に承認し合う契機を生み出し



写真1：当日の発表終了後の一コマ
(2025年6月22日、東京大学小島ホール第1セミナー室)

ていた。その上で、指定討論者としての筆者は、このやりとりを単なる回想に終わらせるのではなく、次の実践や制度設計へとどう接続できるかを意識して問いを投げかけた。その結果、発表者だけでなく参加者自身も「自分ならどう取り組むか」と構想をめぐるすることになり、よりよい実践への手がかりを共に考える場となったと受け止めている。

4. 勉強と学習のあいだにあるもの

今回取り上げた事例は、国際教育交流やキャリア支援に携わる3名の実践者が、「経験キャリアシート」と「現在の価値観のマトリックス」というツールを用いて、自らの歩みを整理し、アドバイジングを通した学びと成長の軌跡を共有したものである。筆者の立場から見れば、そこで浮かび上がったのは、省察の契機をあえて設けることの重要性であった。教育・研究に加え校務として学生支援に関わる教員は、常に新たな事例に直面するため、体系的に経験を振り返る余裕が乏しい。しかし今回の語りを参照すれば、「立ち止まる」（堀江先生）、「体験を選び、言葉を絞る」（村山先生）、「仲間と共有し相互承認する」（坂井先生）といった

行為を通して、行為の中に埋もれていた学びや価値観を顕在化させることが可能である。

こうした振り返りにまつわる一連の行為を理解するうえで重要なのが、省察と反省の違いである。立命館大学スポーツ健康科学部の河井亨先生が、[Schön \(1983=2007\)](#) の議論を踏まえて示した図3（[河井, 2018](#)）にあるように、過去の行為への後悔や謝罪が伴う反省とは異なり、省察とは経験を素材として複合的・連続的に成り立つ営みである。つまり省察は、行為を振り返ること自体が目的ではなく、そこから次の行為へと橋渡しをするプロセスである。だからこそ、日常の実務のなかで生じる素朴な疑問や違和感が、次の学びの種となり得る。⁴

筆者がとりわけ強調したいのは、省察を通して学びと成長に実直に取り組む実践家、すなわち省察的な学習者とは、決して熱心な勉強家という意味ではない、という点である。ここで言う勉強とは、文字どおり「勉めて強いられる」側面を含む営みを指す。少なくとも今回紹介した先生方は、省察を通して経験を捉え直し、そこから次の行動を形づくる学習を重ねているという共通点がある。すなわち、知識や技能を積み上げることに貪欲なわけではなく、むしろ認

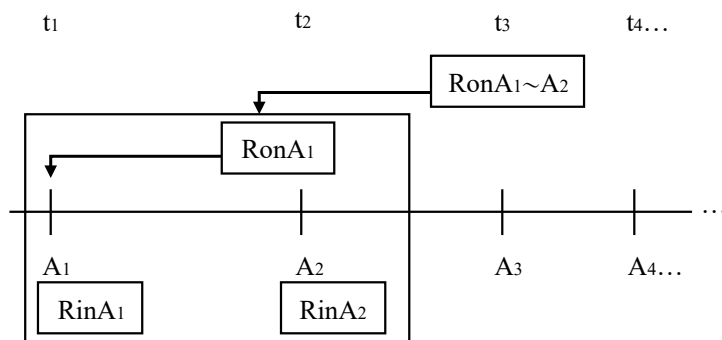


図3-1

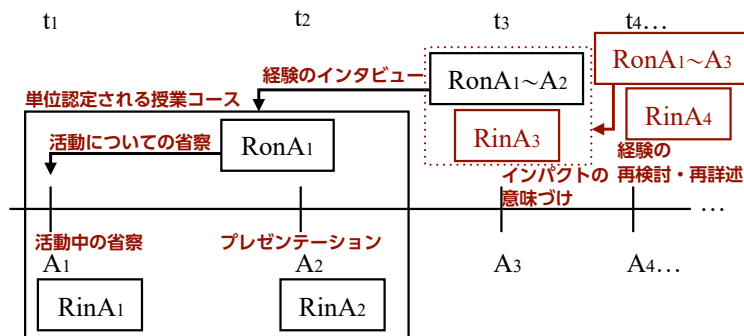


図3-2

図3：複数時点の行為についてのリフレクションと行為の中のリフレクション
（上の図3-1がオリジナル、下の図3-2は[河井, 2018](#), p.66に山口が加筆）

識や態度を見つめ直す機会を積極的に得てきていた。前述のとおり、よりよい実践となるように、あえて立ち止まり、自らに問いを投げかけ、そこから新たに歩み出すことの繰り返しによって、学びと成長のプロセスが支えられていた。

こうした視点から筆者は討論の場で、いくつかの問いを投げかけた。たとえば「立ち止まることの怖さはなかったか」という問いに対して堀江先生は「職を離れた時期や研究専念の時期にこそ、省察がデトックスの役割を果たした」と応答された。また「省察した内容はどこまで他者と共有すべきか」という問いに対して坂井先生は「他者に話すことで意味づけが深まるが、携えておくだけでも十分な価値がある」と述べられた。さらに「学生が授業で実施する意義はあるか」との問いには、村山先生が「他者

のシートを読むことで理想像を発見できる」と応じられた。

これらのやりとりから、筆者が改めて確信したのは、省察は一人称の営みであると同時に、二人称・三人称の関わりのなかで深まる営みだということである。また、共通のフォーマットを用いることによって、記入の空白や記述の揺らぎが新たな問いを誘発し、探究への発露をもたらすことも見えてきた。次回の連載では、この探究の大切さに焦点を充てることにした。日常の実践のなかでふと立ち上がる素朴な疑問が、どのように学びの出発点となるのか。省察を支える体験を素材に、違和感をどう深め、未来の知へとつなげるのか。その営みを、今回紐解いた問いを問い直すことの意義を踏まえつつ、改めて考えてみたい。

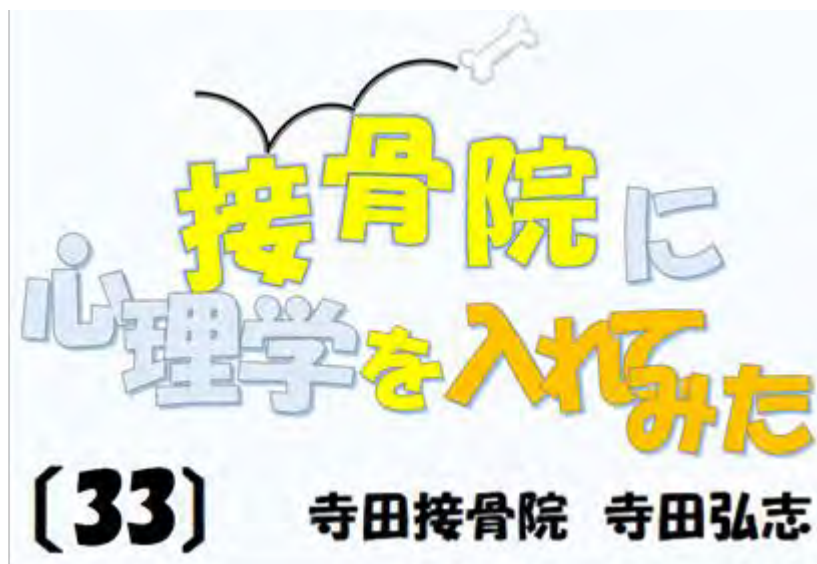
(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

- 花崎皋平. 2001. 増補 アイデンティティと共生の哲学. 平凡社.
河井亨. 2018. 経験学習におけるリフレクション再考. ボランティア学研究 18, 61-72.
河井亨. 2025. 大学生の学びと成長：知識・他者・自分との関係から人生をつくる. ナカニシヤ出版.
松尾睦. 2011. 職場が生きていく人が育つ「経験学習」入門. ダイヤモンド社.
村山かなえ. 2025. 異分野共創型教育開発での大学教員の学びの過程—国際教育交流と多文化共修の視点で—, 大学教育研究 33, 117-134.
清水一彦. 1994. 大学教育改革における単位制度運用の現状と課題. 教育制度学研究 1, 115-136.
Schön, D. A. 1983. The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action. Basic books. (柳沢昌一・三輪建二(監訳) 2007 省察的実践とは何か——プロフェッショナルの行為と思考. 鳳書房.)
杉方利夫. 2013. グループ・ダイナミックス入門：組織と地域を変える実践学. 世界思想社.

【注】

- 1 ちなみに立命館大学は他大学に比べて教職員の種類が多いことが、少なくとも筆者の周辺では時折話題となる。学部（大学院の場合は研究科）か機構かといった所属組織や教授・准教授・講師・助教といった職位の違いだけでなく、多岐にわたる雇用種別がある。そして、それぞれの雇用種別ごとに授業担当の責任時間に加えて最長任用期間が定められている。筆者の手元にある「立命館大学教員雇用種別一覧」には28種類の雇用種別に細分化されている。
- 2 この点は筆者がコーディネーターを務めた大学コンソーシアム京都による第27回FDフォーラムのシンポジウム「科目・教養・教員の未来～コロナ禍を経たこれからの大学教育を展望する」で話題提供された清水一彦先生による解説が参考になる。報告集 (<https://www.consortium.or.jp/wp-content/uploads/fd/40006/27thfdf-shinpo02.pdf>) の他、清水（1994）を一例としてあげておく。
- 3 ここで言うアドバイジングは「アカデミック・アドバイジング」のことである。例えば[日本アカデミック・アドバイジング協会](#)では「学生自身による将来の目的・目標の決定とその達成に向けて、担当者が途中段階のアセスメントを行いながら学生個人のニーズに沿った支援をすること」と定義している。その他、文部科学省における政策上の意義など、複数の議論や定義があるものの、本稿では立ち入らない。
- 4 図3で示されているのは、教員と学生の間での「ボランティア活動での経験をふりかえってプレゼンテーションを行い、その後インタビュー調査でそれらの経験について語る」という一連の行為である（河井, 2018, p.66）。河井（2018）は、リフレクションが複合的かつ構造的になされていくことを、Schön（1983=2007）が「行為の中のリフレクション（Reflection in Action）」と「行為についてのリフレクション（Reflection on Action）」を区別したことをもとに図解化した。つまり行為についての振り返りと振り返るという行為があり、図3の記号を用いるならば、何らかの行為（A1）が発生（t1）すれば必ず振り返る契機（RinA1）が生まれ、実際に何らかの振り返り（RonA1）が求められる（t2）場合は振り返りという行為が発生（RinA2）し、後日（t3）その一連の振り返りについて振り返る（RonA1～A2）こともある、という具合である。



続・数値化、そして無症状の問題

J R 茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

2 回目に来られた患者さんとの会話です。

「体が前回とは違うねじれ方をしていますね」

「ほんとだ、前とは違う姿勢で痛みが消えますね」

「1 番手の問題が改善して、2 番手の問題が出てきたみたいですよ」

「へー。そうなんですね」

3 回目に来られたとき

「3 番手の問題が出てきたみたいですよ」

「あら、いやだ」

4 回目

「今日は4 番手が出ていましたが、4 番手が改善したとたんに5 番手が出てきましたよ」

「うそ」

「ほら、最初に痛みが少なくなった姿勢がありましたよね。ところが途中からは別の姿勢にしたほうが、痛みが少なくなったでしょ」

「たしかにそうですね」

5回目

「6番手ぐらいですかね。毎回違いますよね」

「ええー、どこまで続くのかしら」

・
・
・

12回目

「今日も違うパターンが楽になりますね」

「いくらでも出てきますねえ」

「ええーっと、何番手かわからなくなってしまいました」

「ずーっと続くのかしら？」

「いや、どこかで落ち着くと思いますよ」

「それなら良かった」

この患者さんのように、施術をして何日かすると、別の問題が出てくる患者さんがいらっしゃいます。

4回目のところにあるように、施術している間に、別の問題が出てくるといってもあります。

症状がシンプルな患者さんもいらっしゃいますが、接骨院に通われるような患者さんの場合、様々な筋肉の縮みすぎや伸びすぎが絡み合って、複雑な症状が形成されているということが少なくありません。

ただ、たくさん問題があっても、それらの問題がすべて現れているわけではありません。ある症状によって別の症状が隠されてしまうことがあるのです。

例えば、右肩の僧帽筋が縮みすぎていて痛いというときに、そこを伸ばしながらほぐしたところ、痛みが消えました。ところが、右肩の痛みが消えた後、それまで痛くなかった左肩の僧帽筋に痛みが現れたというようなことが起きるのです。

なぜこのような現象が生じるのかを、前号で紹介した数値化の手法を用いて、もう少し詳しく説明してみます。

前号の繰り返しになりますが、縮みすぎの度合 t を次のように定めます。

もっとも筋肉が縮みすぎている状態： $t = 100$

もっとも筋肉が伸びすぎている状態： $t = -100$

中間のどちらでもない状態： $t = 0$

筋肉が正常に縮んでいる状態： $30 > t > 0$

筋肉が正常に伸びている状態： $0 > t > -30$

筋肉が縮みすぎている状態： $100 \geq t \geq 30$

このうち $40 \geq t \geq 30$ は無症状（境界）

筋肉が伸びすぎている状態： $-30 \geq t \geq -100$

このうち $-30 \geq t \geq -40$ は無症状（境界）

筋肉は通常 $30 > t > -30$ の範囲で伸び縮みしています。

t の絶対値が 40 を超えると、痛みなどの症状が現れます。

また、縮みすぎたり伸びすぎたりしている部分をアルファベットの太文字 A、B、C、D、E・・・で表します。ただ、伸びているのを前提として記す場合は Z、Y、X、W、V・・・で表します。正常な範囲での縮んだり伸びたりは、（ ）でくくり、無症状の縮みすぎ・伸びすぎは、【 】でくくるものとします。

では、別の問題が出てくる仕組みを説明します。

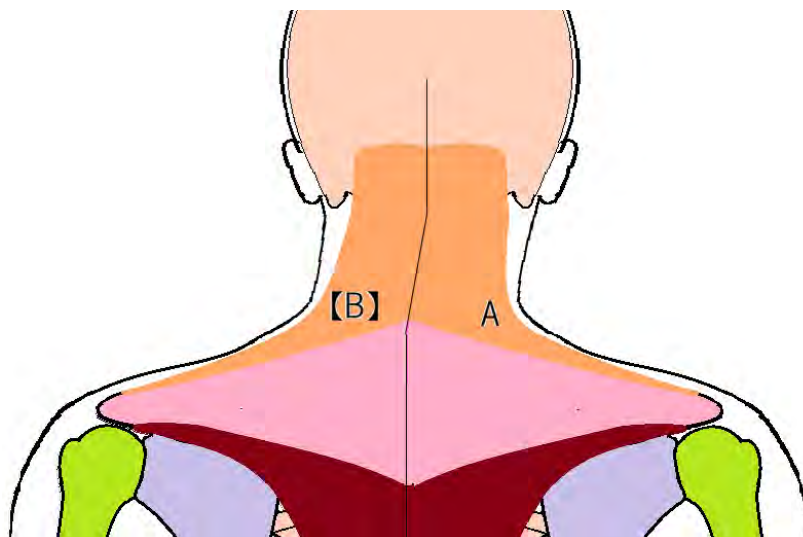
縮みすぎと無症状の縮みすぎの混在

右肩僧帽筋 A が $t = 70$ 、左肩僧帽筋 B が $t = 50$ で縮みすぎているとします。

左右の僧帽筋は頭部と頸椎を介して、互いに引き合うので、より強く縮んでいる右側に引っ張られます。この結果、左僧帽筋 B が伸ばされて、 $t = 40$ くらいの縮み方になったとします。

縮みすぎたところは伸ばされるとたいてい痛みが消えます。 t が 50 だった B は、無症状の縮みすぎ【B】（ $t = 40$ ）となり、そして、A の縮みすぎだけが症状として現れます。

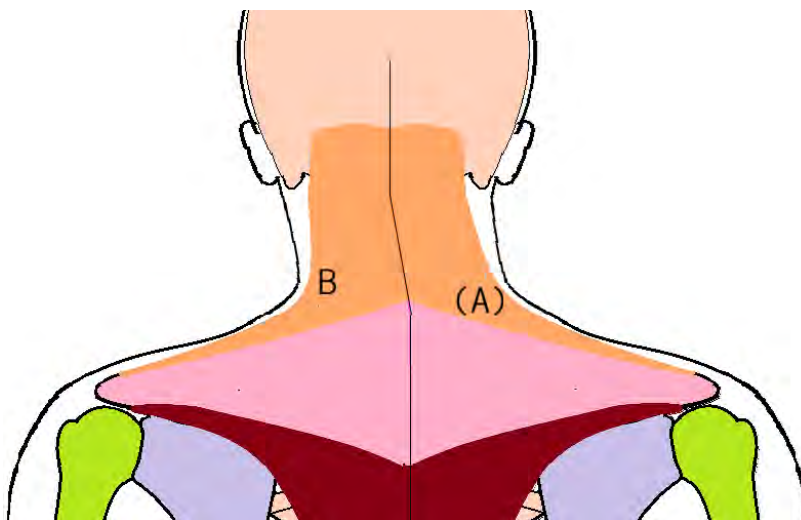
これはAが単独で縮みすぎているのと似たような状態になります。



右肩が痛くて、左肩は痛くないという状態です。

ここで、Aの縮みすぎを伸ばすように施術します。Aを伸ばしながら、さすったりもんだりします。

Aの縮みすぎが正常の範囲まで改善されると(A)になり、【B】は引っ張られなくなるのでBに戻り、こんどはBの縮みすぎが症状として現れてきます。



Bのtは、50くらいに戻るか、あるいはAに引っ張られることがなくなるので、50よりもっと大きくなるかもしれません。

施術中にすぐに現れることもあれば、翌日とか2、3日たってから現れることもあります。

もう一つ、例をあげます。冒頭の患者さんは、ふくらはぎに痛みがありました。

はじめは、つま先を上げて外にねじると痛みが軽くなったので、つま先を内にねじる筋肉（後脛骨筋や長指屈筋など）が縮みすぎていると考え、伸ばしながらほぐしました。するといったん痛みが消えました。

ところが、しばらく他の部位に施術している間に、またふくらはぎに痛みがぶり返してしまいました。

もう一度、痛みの少ないポジションをさがすと、つま先を上げて内にねじると痛みが軽くなりました。つま先を外にねじる筋肉（長腓骨筋や下腿三頭筋の内側の部分など）が縮みすぎていると考え、伸ばしながらほぐしたところ、痛みが消え、施術中に痛みがぶり返すことはありませんでした。

つま先を内にねじる筋肉 A が $t = 70$ 、つま先を外にねじる筋肉の B が $t = 50$ だったとすると、つま先は内にねじれて B が伸ばされるので、B の t は 40 くらいに低下し、無症状の【B】となります。

施術で A が伸ばされ（A）になると、つま先は外にねじれるので【B】が縮んで t が 50 以上になり、B として症状が出てきます。

このようにして、ある問題を改善すると、無症状だった問題が症状として現れるということがあります。

たいていは、何日かして症状として現れますが、ときには施術中、すぐに隠れていた症状が現れてくることがあります。

「前は開く方が良かったけれど、今回は閉じる方がいい」といった具合に、症状ガラッとかわる患者さんもいらっしゃいます。

何度施術しても、同じような問題が出てくる「頑固な症状」をお持ちの患者さんもいらっしゃいます。

でも、一番多いのが、症状が少しずつ変化する患者さんです。

「前回とはちょっと違いますね」ということがよくあるのですが、前回の施術で体のバランスが変わり、無症状だった問題が現れてきた可能性が高いです。

もちろん、患者さんが今までとは違う動作や姿勢をされたとか、生活環境に変化があったという場合もあるでしょう。施術者としては、そういう変化を見落とさずに、毎回、初検のように、ひとつずつ丁寧に確認して施術していくことが大事です。

パラドキシカルストレッチングと パラドキシカルコントラクティング (5)

一見縮めながら、縮みすぎている筋肉を伸ばすストレッチングを「パラドキシカルストレッチング」(逆説的伸長)、いっぽう、一見伸ばしながら、伸びすぎている筋肉を縮めるコントラクティングを「パラドキシカルコントラクティング」(逆説的短縮)と呼んでいます。

今回も、なぜこのようなことが起きるのかについて、前回取り上げた数値化に加えて、次の二つのアプローチを用いて説明します。

コンプレッシングエフィシエとテーピングエフィシエ

筋肉の縮みすぎ・伸びすぎを鑑別し改善する方法として、コンプレッシングエフィシエとテーピングエフィシエがあります。

以前紹介したポジショニングエフィシエも、筋肉の縮みすぎ・伸びすぎを鑑別することができますが、より正確なのがコンプレッシングエフィシエであり、もっとも正確なのがテーピングエフィシエです。

ただ、正確にはなるものの、手間や材料が必要になるとか使えない箇所があるとか、デメリットやリスクもあります。普段使いにはポジショニングエフィシエで十分であり、判断に迷ったときや行き詰ったとき、慎重にしなければなら

ないときに、コンプレッシングエフィシエやテーピングエフィシエを用いればよいでしょう。

筋肉の縮みすぎた部分はふくらみ、伸びすぎた部分はへこみます。症状のある部分が、縮みすぎているのか、伸びすぎているのかは、見た目だけではなかなか判断することができません。

症状の出ている部分に、ベルトやサポーターを巻いて、筋線維を締め付けるように加圧（コンプレッシング）します。

（くぼんだところや体幹・四肢を横切る筋肉には効果が出ません。また、頸動脈付近は加圧しないでください。）

加圧すると、縮みすぎてふくらんだところはへこんで伸びるので、症状が少なくなります。反対に伸びすぎてへこんだところはさらにへこんで伸びすぎるので、症状がひどくなります。

加圧した結果によって、その部分が縮みすぎか伸びすぎかを判定することができます。

縮みすぎの場合は、加圧したまま押したりもんだりさすったりすれば、痛みは少ないまま短時間で症状が改善します。これがコンプレッシングエフィシエです。

伸びすぎの場合は、加圧するのをやめ、痛みの少なくなる方向にさすったり、筋線維の方向にそってテーピングしたりすれば症状が改善するでしょう。

ベルトやサポーターのかわりに、テープを用いるのがテーピングエフィシエです。（くぼんだところや毛が生えているところには使えません。毛をそっていただければ使える場合もあります。）

テーピングエフィシエの良いところは、体幹や四肢に一周巻かなくても、必要な部分だけ（例えば半周だけ）テープを貼って患部に加圧できることです。

ベルトなどで一周巻いて加圧すると、患部とは違うところも加圧してしまうので、判断を誤ることがたまにあります。例えば、「腕の前面の上腕二頭筋にベルトを巻いて痛みが軽くなったのかと思ったら、実は後面の上腕三頭筋が加圧されていたからだった」というようなことがあります。

ターゲットの部分を加圧し、症状が改善するなら、しばらくもんだり、押したりすれば、テープをはがしても症状は改善しているでしょう。

テープをはがすと症状が戻ってしまうときは、しばらく貼っておいてもらうこともできます。

ただ、あまり長く貼ると、はがすときに痛いとか、肌を傷めるとか、かぶれるとか、リスクがあるので注意が必要です。

テーピングエフィシエの良いところを付け加えると、テープの向きを変えれば、患部を縮める効果を出せることです。ただ、ここではその説明は省略します。

ポジショニングエフィシエは、ある筋肉が縮みすぎか伸びすぎかを判断するのに役立ちますが、筋肉のある部分（局部）が縮みすぎているのか伸びすぎているのかを判断するのには向いていません。

いっぽう、コンプレッシングエフィシエやテーピングエフィシエは、筋肉の部分ごとに縮みすぎか伸びすぎかを判断するのに役に立ちます。

筋肉の縮みすぎ伸びすぎと、部分ごとの縮みすぎ伸びすぎが一致しないことがあります。

このような場合に、パラドキシカルストレッチングやパラドキシカルコントラクティングが有効になります。

例えば、ある筋肉の中のA、B、Cの3箇所に痛みがあったとします。（わかりやすくするため、ここでは症状を痛みとします。）

ポジショニングをすると、この筋肉を伸ばす方がA、B、Cの痛みが少なくなることから、この筋肉が縮みすぎだとわかったとします。

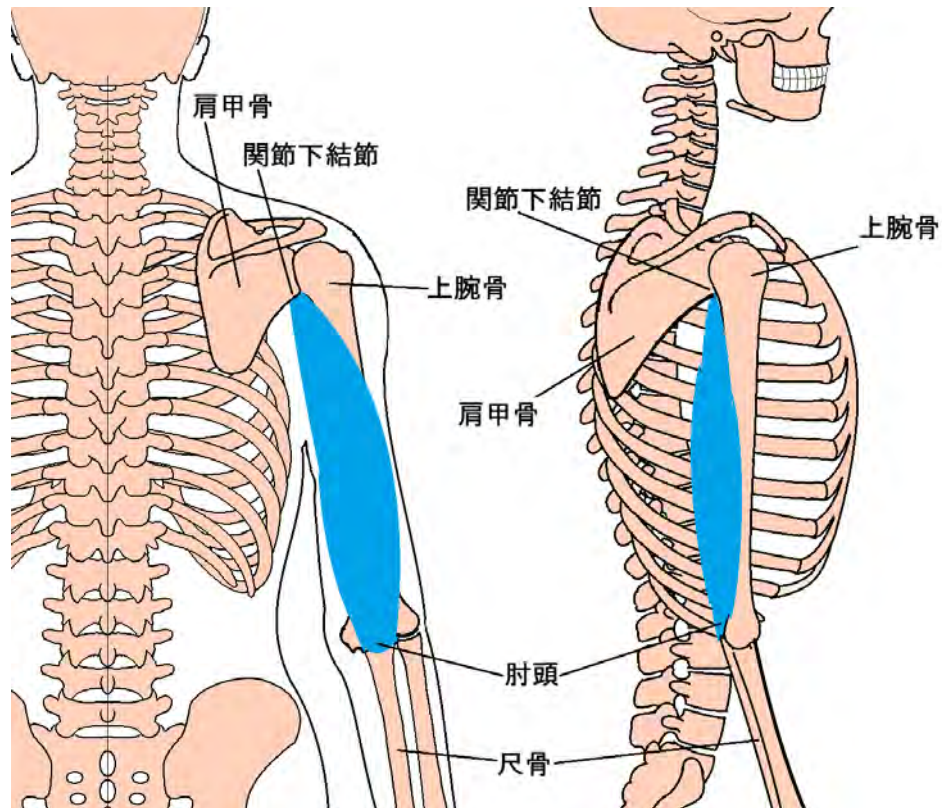
そこでこの筋肉を伸ばしながらほぐすポジショニングエフィシエをしました。

しかし、ポジショニングエフィシエをただけでは、元の位置に戻すと痛みもぶり返してしまいました。

ポジショニングエフィシエのみで改善することもあるのですが、効果が不十分な場合は、コンプレッシングエフィ

シエをおこなってみます。(テーピングエフィシエは必要があれば用いますが、ここでは省略します。)

前号では5つのケースを紹介しましたが、今回は上腕三頭筋のケースを6つ紹介したいと思います。



右上腕三頭筋（水色）は、肩甲骨の関節のくぼみの下（関節下結節）と、上腕骨の裏面内外から、尺骨の上端（肘頭）をつないでいます。

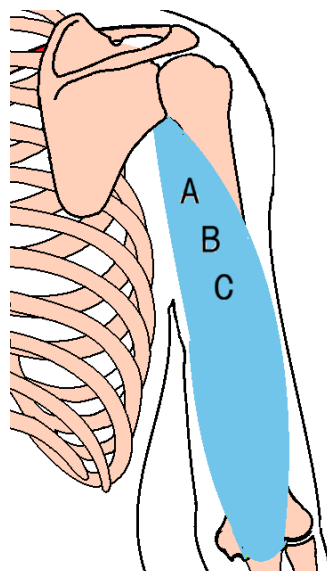
肘を伸ばすはたらきと、上腕を体側に引き寄せるはたらきをします。つまり、肘を伸ばして上腕を体側に引き寄せれば縮めることができます。肘を曲げるか、上腕を体側から遠ざけるなどすれば伸ばすことができます。

ここでは周囲の筋肉には、特に症状は出ていなかったとします。

A、B、Cは右の図のような位置とします。

ケース6

ベルトで加圧してみると、A、B、Cすべて痛みが減りました。そこで上腕三頭筋を伸ばしながら



ら、A、B、Cを加圧して、さらにもんでみました。
元の位置に戻し、ベルトをはずすと、痛みがすべて消えました。

施術が不足していたか、A、B、Cの位置で筋膜が広がっていたのでしょうか。

このケースは通常のストレッチになります。

A、B、Cのtは50くらいだったとします。

上腕三頭筋の中や、起始側の肩甲骨、停止側の尺骨を動かす筋肉の中に、正常な範囲で伸びている箇所(Z)、(Y)、(X)、(W)、(V)・・・があると考えられ、それらのtの合計は-150くらいになります。

ケース7

ベルトで加圧すると、A、Bは痛みがなくなりましたが、Cは痛みが消えませんでした。Cの痛みはA、BのほうからCに向かってさすると痛みが少ないことがわかりました。A、Bを伸びるポジションで加圧しながらほぐし、またCのほうに向かってさすりしました。

元の位置に戻し、ベルトをはずすと、痛みがすべて消えました。

A、Bが縮みすぎて、Cが伸びすぎていたので、ポジショニングエフィシエでは改善しなかったのでしょうか。

A、Bのtが50、Cのtが-80、上腕三頭筋の中や、起始側の肩甲骨、停止側の尺骨を動かす筋肉の中に、正常な範囲で伸びている箇所(Z)、(Y)、(X)、(W)、(V)・・・があると考えられ、それらのtの合計は-20くらいになります。

Cに対しておこなったのが、パラドキシカルコントラクティングになります。

ケース8

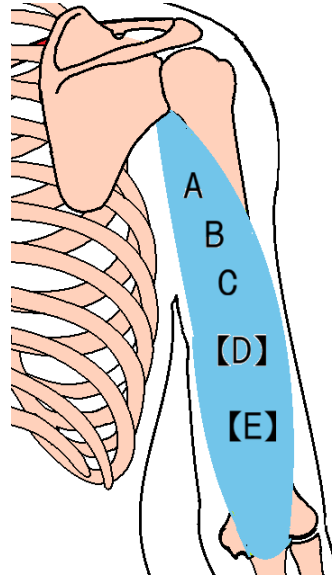
ベルトで加圧すると、Bは痛みがなくなりましたが、A、Cは痛みが消えませんでした。Aの痛みはBのほうからAに向かってさすると痛みが少ないことがわかりました。

Cの痛みは、Bとは反対側からCのほうに向かってさすると痛みが少ないことがわかりました。Bを伸びるポジショ

ンで加圧しながらほぐし、またBからAのほうへ、Bの反対側からCのほうに向かってさすりました。

元の位置に戻し、ベルトをはずすと、AとB痛みは消えましたが、Cの痛みは消えませんでした。

そこでCのBとは反対側に、無症状の縮みすぎているところ【D】【E】・・・があるのではないかと考え、その部分にベルトを巻いて加圧し、上腕三頭筋を伸ばすようなポジショニングをしてみました。するとCの痛みが改善したので、【D】【E】・・・をほぐしながらCのほうにさすりました。



元に戻してベルトをはずすと、痛みがすべて消えました。

上腕三頭筋を伸ばす姿勢で痛みが減ったのは、B、【D】

【E】・・・を伸ばす姿勢をとったからであり、しかし、ポジショニングエフィシエをただけでは改善しなかったのは、AとCの伸びすぎと、無症状の縮みすぎ【D】

【E】・・・に対して何もできていなかったからなのです。

Aのtが-50、Bのtが50、Cのtが-50、【D】

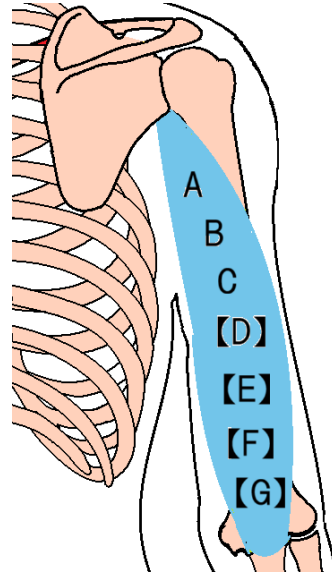
【E】のtがそれぞれ40、上腕三頭筋の中や、起始側の肩甲骨、停止側の尺骨を動かす筋肉の中に、正常な範囲で伸びている箇所(Z)、(Y)、(X)、(W)、(V)・・・があると考えられ、それらのtの合計は-30くらいになります。

A、Cに対しておこなったのが、パラドキシカルコントラクティングになります。

ケース9

上腕三頭筋を伸ばす姿勢をすると痛みが少なくなるのに、ベルトで加圧しても、A、B、Cはいずれも痛みが消えませんでした。またAからCに向かってさするより、CからAに向かってさするほうが痛みが少ないことがわかりました。

そこでCのA、Bとは反対側に、無症状の縮みすぎているところ【D】【E】【F】【G】・・・があるのではないかと考え、その部分にベルトを巻いて加圧し、上腕三頭筋を伸ばす姿勢をすると、A、B、Cの痛みが減ったので、【D】【E】【F】【G】・・・をほぐしながらCのほうにさすりました。元に戻してベルトをはずすと、痛みがすべて消えました。



上腕三頭筋を伸ばす姿勢で痛みが減ったのは、【D】【E】【F】【G】・・・を伸ばす姿勢をとったからであり、ポジショニングエフィシエをただけでは改善しなかったのは、A、B、Cの伸びすぎと、無症状の縮みすぎ【D】【E】【F】【G】・・・に対して何もできていなかったからなのです。

A、B、Cのtがそれぞれ－50、【D】【E】【F】【G】のtがそれぞれ40、上腕三頭筋の中や、起始側の肩甲骨、停止側の尺骨を動かす筋肉の中に、正常な範囲で伸びている箇所（Z）、（Y）、（X）、（W）、（V）・・・があると考えられ、それらのtの合計は－10くらいになります。

A、B、Cに対しておこなったのが、パラドキシカルコントラクティングになります。

ケース10

上腕三頭筋を縮める姿勢をすると痛みが少なくなるのに、A、B、Cを縮めるようにさすっても、いずれも痛みが消えませんでした。

そこでそれぞれにベルトを巻いて加圧してみたところ、Bは痛みが消えましたが、AとCは痛いままでした。

このケースで上腕三頭筋は、全体としては伸びすぎているけれども、Bの部分では縮みすぎていると考えられました。また、AとCは、Bに向かってさするよりも、Bの側からさするほうが痛みが少ないことがわかりました。

そこで、上腕三頭筋を縮めながら、Bをベルトで加圧してほぐし、さらにBからAへ、BからCへさすってAとCを縮めました。

元に戻してベルトをはずすと、痛みがすべて消えました。AとCのtがそれぞれ50、Bのtが80、上腕三頭筋の中や、起始側の肩甲骨、停止側の尺骨を動かす筋肉の中に、正常な範囲で縮んでいる箇所(D)、(E)、(F)、(G)、(H)・・・があると考えられ、それらのtの合計は20くらいになります。

Bに対しておこなったのが、パラドキシカルストレッチになります。

ケース11

上腕三頭筋を縮める姿勢をすると痛みが少なくなるのに、A、B、Cを縮めるようにさすっても、いずれも痛みが消えませんでした。

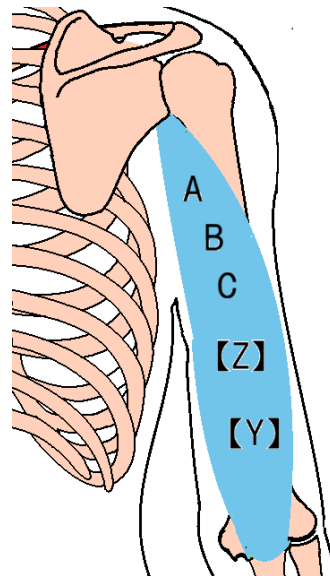
そこでそれぞれにベルトを巻いて加圧してみたところ、AとCは痛みが消えましたが、Bは痛いままでした。

このケースで上腕三頭筋は、全体としては伸びすぎているけれども、AとCの部分では縮みすぎていると考えられました。

また、Bに対しては、Cの側からさすよりも、Aの側からさすほうが痛みが少ないことがわかりました。

そこでCのA、Bとは反対側に、無症状の伸びすぎているところ【Z】【Y】・・・があるのではないかと考えました。

AとCの部分にベルトを巻いて加圧し、上腕三頭筋を縮める姿勢をとると痛みが減ったので、そのままAとCをほぐしました。AからBのほうに、Cから【Z】【Y】のほうにさすってBと【Z】【Y】を縮めました。



元に戻してベルトをはずすと、痛みがすべて消えました。

A、Cのtがそれぞれ50、Bのtが-50、【Z】【Y】のtがそれぞれ-40、上腕三頭筋の中や、起始側の肩甲骨、停止側の尺骨を動かす筋肉の中に、正常な範囲で縮んでいる箇所（D）、（E）、（F）、（G）、（H）・・・があると考えられ、それらのtの合計は30くらいになります。

AとCに対しておこなったのが、パラドキシカルストレッチングになります。

比較表

ケース	A	B	C	
6	50	50	50	通常のストレッチング A B C
7	50	50	-50	パラドキシカルコント ラクティング C
8	-50	50	-50	パラドキシカルコント ラクティング A C
9	-50	-50	-50	パラドキシカルコント ラクティング A B C
10	-50	80	-50	パラドキシカルストレ ッチング B
11	50	-50	50	パラドキシカルストレ ッチング A C

今回、上腕三頭筋に3カ所の痛みがあるケースをいくつか取り上げ、前回とは違うタイプのパラドキシカルストレッチングやパラドキシカルコントラクティングを、数値化を用いて説明してみました。

ひとつの筋肉だけでも、まだまだたくさんのケースがあります。体全体でみれば、縮みすぎ伸びすぎの組み合わせとその解決方法は無限にあります。

また、無症状の縮みすぎや伸びすぎがあることをお伝えしました。

前半に書いたように、他の問題に対して施術をしていくと、症状として現れてくることがあり、そのほうがむしろ対応しやすいこともあります。

無症状の問題とは、問題がないということではなく、自覚されにくく、また、術者にも気づきにくい問題であり、それが患者さんの主訴の一因であれば、気がつきにくい分、解決が難しくなることもあります。

主訴に関心が集中していて気づきにくいとか、感覚神経が鈍感になっていたり、麻痺したりしていて、わかりにくいという場合もあります。患者さんの病歴や日常生活で気になることなどを詳しく聞き取りしてみると、手がかりをみつけれられることもあります。

どうも原因がはっきりしないというときに、患者さんによくよくたずねてみると、「触られるとちょっと痛い」「困っている痛みには比べれば、とるにたりない痛みだから黙っていた」「むしろ痛くて気持ちいい」「くすぐったい」などという部位が見つかることがあります。

また、術者がよく触診してみると、筋肉が固い部位や、通常よりもふくらんだりへこんだりしている部位、動きの悪い部位が見つかることがあります。

そういう部位が、無症状の縮みすぎや伸びすぎで、そこに施術すると主訴が改善することがあります。

また、疑わしいなと思う筋肉と同じようなはたらきをする筋肉に注目すると、そこに症状が見つかり、施術すると主訴の解決に役立つことがあります。

例えば、さわられるとくすぐったいところは、感覚が敏感でくすぐったい場合と、筋肉が縮みすぎたり、伸びすぎたりしてくすぐったい場合があります。もう少し、縮みすぎたり、伸びすぎたりすると痛みになるという、痛みの一歩手前がくすぐったい状態だということがあるのです。

患者さんはたいてい、くすぐったいところを触られたがりません。しかし、他に主訴の原因が見当たらないとか、主訴の原因としてそこが疑わしい場合は、「ベルトを巻くと、くすぐたくなくなることがあるので、一度巻かせてみてください」と言って、ベルトを巻かせていただきます。

やっぱりくすぐったいということもあるのですが、（そのときは別の方法を考えます）、ベルトで加圧するとくすぐったさが消えることがあり、そのときは加圧したまま筋肉をほぐしてみます。

すると、くすぐったさも患者さんの主訴もなくなってしまうことがあるのです。

ではまた

現代社会を『関係性』という観点から考える③④

更生保護官署職員 三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

1 はじめに

本連載も6年を迎え、コロナ禍はじめ社会情勢は大きく変化しています。私自身も専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだことや様々な関わりの中で学びまた考えさせられたことを連載原稿に落とし込み、主題そのものはぶれることなく視野をより広くして書いていきたいと考えています。

冒頭で、これまでの連載の経過を記載していきます。

連載14では『「開く」と「閉じる」こと』と題して私見を述べ、連載15では『つながりが支えるところ』と題して、社会的には容認されないような要求を次々と親族や支援者に行うことで結果的に物理的にも心理的にも「閉じた」生活となり社会的孤立に至り心身状態の悪化を招いてしまった高齢者（単身生活者）の事例について考察を行いました。

連載16では、『「見える」と「見えない」こと』という切り口で、現代社会を関係性という観点から見直し、連載17では、これまでの連載を踏まえ、「地域社会」との「関わり方」を考えると題して、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察しています。

つまり、本連載では「地域社会」で生きるということについてほぼ一貫して考えてきたともいえます。そして今まさに現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあまたあります。家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。

こうした点について連載18では「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということと題して問題提起し、連載19回では「自分は誰かとつながっている」という感覚を持つために私が必要だと痛感している『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、連載20では、『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、それぞれコロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について私見を述べました。連載21では、SocietyからHomeへ矮小化していく社会について書いています。

連載23では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について、地域包括ケアシステムの在り方について私見を述べました。

連載24ではすこし角度を変え、自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさと題し、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他

性」につながるなどについて、引き続き連載 25 では「知らないことが不安や排除につながる」ということというテーマでそれぞれ私見を述べました。

連載 26 では、大学生に刑事政策と司法あるいは更生保護について話をする機会に感じたことをベースに「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか」というテーマで私見を述べ、続く連載 27 では、私が昨今感じている「理想とされる家族は今や『描かれるもの』の中にあるものか」ということにつき、課題提起の意味合いをこめ私見を述べました。

連載 28(連載 29 と記載していますが 28 に修正します)では「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じることが出来る社会へと題して、「愛と仕事」(フロイト)及び「居場所と出番」(犯罪対策閣僚会議)に言及しました。それを受けて連載 29 は、家族介護当事者の立場から、「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」と題して、様々な境遇のただなかにある人を「社会がどう見るか」という点について、私見を述べました。

連載第 30 回では「改めて「介護は誰が担うべきか 家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察」として、連載 6「刑事政策から見た「介護」～高齢犯罪者による殺人事件を一例として」を更に深めるかたちで、厚生労働省のデータ等にも言及しつつ、家族アセスメントという観点から私見を述べました。連載 31 では久々に少年非行をとりあげ「非行とは行うものなのか巻き込まれるものなのか」について「関係性」の視点で検討しました。連載 32 では、令和 6 年 12 月に公開されたドキュメンタリー映画「どうすればよかったか」をベースに「家族における「ケア」の在り方 映画「どうすればよかったか」から考える」を記載しています。

連載 33 では、対人援助の場面で多用される「みまもり」「みまもる」ということばについて考えています。

連載 34 となる今回は、「若者と薬物依存」について、地域社会でどう向き合うのかということテーマに考えていきます。

私にとっては、薬物依存(症)当事者と家族支援は、入職後間もない頃からのライフワークです。刑事政策の枠組みにおける薬物依存症者の処遇に悩んでいたころ、先輩職員に誘われ、あるダルク設立1周年のイベントに参加をしました。そこで回復を目指す当事者、彼らを支えダルク設立のために尽力している多様な分野の支援者の生の声に触れる機会を得たことが、保護観察官として、人としての大きな転機となりました。それ以後、ボランティアとして家族会のお手伝いや運営委員会への参加等を通し、薬物依存当事者やその家族、様々な職域から参加した支援者と共に「動く」体験を重ねて今日に至ります。

こうしたダルクとの出会いから 30 年以上が過ぎ、ダルクの認知度も大きく向上しました。その一方、薬物依存の状況やその背景も大きく変化しています。今回の原稿のなかで私見となります。

2 「治安が悪化している」「薬物事案が増えている」のか

インターネットの発達著しく各地のニュースに即時詳細に触れることができるようになりました。そのことによって、内容の真偽や根拠となるデータはともかく、標記のように感じる方も少なくないのではないのでしょうか。いわゆる「体感治安」の悪化です。

少年非行について、「犯罪白書」掲載のデータの変遷を概観してみましょう。少年による刑法犯、危険運転致死傷及び過失運転致死傷等の検挙人員は、昭和期には昭和 26 年、39 年、58 年をピークとする 3 つの大きな波が見られ、その後、平成 8 年から 10 年及び 13 年から 15 年に一時的な増加があったものの全体としては減少傾向となり平成 24 年以降戦後最少を記録し続け、令和 3 年は戦後最少を更新する 2 万 9,802 人（前年比 7.1% 減）となりました（令和 4 年版犯罪白書）令和 5～6 年は増加していますが、コロナ禍の行動規制が緩和された時期とも重なり、背景・要因については慎重な検討が必要でしょう。刑法犯検挙人員における少年人口比についても低下傾向が見られ、令和 3 年は 186.5（同 9.3% 減）、少年人口比の最も高かった昭和 56 年（1,432.2）の約 8 分の 1 になっています。

薬物事犯などの特別法犯についても、令和元年前後から増加しているものの、昭和 50 年代後半のピーク時から大きく減少しています。

一方で、刑事司法の手續において処遇される「非行少年」の数が大きく減少していても、現代の少年、あるいは若者（本稿ではそれらをまとめて青少年と記載）は「生きづらさ」を抱えているといわれています。それはどのようなもののでしょうか。

3 見えやすい「非行」、見えづらい「生きづらさ」

かつて「非行」は総じて社会から認知されやすいものでした。集団でバイクを連ねての暴走行為、学校内での喧嘩や対教師暴力などは、周囲の目を避けることなく敢行されてきたからです。非行少年の検挙件数がピークとなっていた昭和 56 年前後の非行少年には、変形学生服や特攻服など独特なスタイルがあり、これもまた非常に「見えやすい」ものでした。「見えやすい」ゆえに、警察等から認知され検挙・補導の対象となり、非行少年・触法少年として刑事司法における手續に委ねられることになりました。

そして現代（令和 7 年）、少年非行が減少するなか、現代の少年の「生きづらさ」は、不登校、いじめなどのかたちで我々の前にたち現れています。「子どもの貧困」「ヤングケアラー」「教育格差」といったことばで、そうした生きづらさが語られる機会も増えています。

さらには、こうした「生きづらさ」は、暴走族等の「非行」に比べて見えづらい面があります。「見えづらさ」とは、学校や地域社会などの公共スペースで発現しないがゆえの見えづらさ、そして、リアルな社会ではなくインターネットのなかでのトラブルや事件特有の見えづらさの双方があります。こうした見えづらい「生きづらさ」を抱える青少年を適切なケア・支援につなげるためには、青少年の日常生活に関わる全ての人々が、彼らに対して暖かく積極的な積極的関心を向け、生活圏でのリアルな関わりを重ねていくことから始める必要ではないでしょうか。

4 現代の「見えづらい」依存症

ダルク創設当初、ダルク内でケアされる薬物依存症は覚醒剤をメインとする違法薬物が主であったと記憶しています。違法薬物の使用等で検挙され、刑事司法手續のなかで弁護士その他に紹介され、困り果てた家族、家族や弁護士から勧められた薬物依存当事者がダルクにアクセスするのが主でした。そして、大阪ダルクが「近畿圏内初」のダルクとして創設されたことからわかるように、ダルクの数もケアできる人数、アクセスする機会は限られていました。当時は、違法薬物に対する依存症の処遇は、殆どが「検挙され裁判で実刑判決を

受け、判決が確定する」などして収容された矯正施設（刑事施設・少年院）で行われていたといっても過言ではないでしょう。

違法薬物の依存症当事者の処遇やケアを受け皿の大きさは、矯正施設が圧倒的に大きく、その次に限られた受け皿として医療機関があり、ダルクをはじめとする民間回復施設等の受け皿は更に小さい、とも評されていました。しかしながら、刑事司法手続に本人の意思とは関係なくアクセスすることで、身柄拘束等で薬物を使用できない環境に身を置いて薬物と物理的に距離を置き、薬物使用について改めて考えたり、医療やダルク等につながる端緒を掴むことができるという側面も確かにあるといえます。もちろん矯正施設内だけで薬物依存症に対する処遇・ケアが完結するわけではないため、矯正施設や保護観察所ではダルクをはじめとする地域関係機関との連携も進められてきました。

昨今、私が関わってきたダルクに寄せられる相談は、覚醒剤等の違法薬物使用から市販薬・処方薬等の過剰服薬（オーバードーズ OD）等になってきています。市販薬・処方薬のOD自体は違法ではないがゆえに基本的には刑事司法手続にアクセスすることはなく、困っているということを表明しない・できない当事者や家族等への介入が遅れがちになってしまいます。薬物使用は、合法・違法は問わず自己治療的な側面があります。薬物使用が「生きづらさ」を解決するための手段となっている場合には、それを手放すことは独力では困難です。

こうした現状では、刑事政策の手続だけではなく、青少年に接する機会のあるあらゆる大人が、現代の青少年を取り巻く「生きづらさ」に思いを致しながらそれぞれの立場に関わりを行うことが必要になると考えます。専門家としての視点と、地域社会のなかで生活する当事者としての視点の双方が、「生きづらさ」の気付きにつながるのではないのでしょうか。

5 「居場所」などのサードプレイスを考える前にまず必要なこと

家庭や学校で居づらくなった青少年にとって、サードプレイスとしての子ども食堂や学習支援の場などを「居場所」とすることも確かに大切なことでしょう。平成後期から全国各地に子ども食堂をはじめとする「居場所」が立ちあげられました。地域社会に密着した「居場所」もあれば、女性支援に特化した「居場所」、精神科病院や自治体と連携しメンタルヘルスの相談・支援を受けられる「居場所」など、その形態や受入れ方法等も多様になっています。後述するように、そうした「居場所」と紹介することも助言・支援の1つでしょう。

私自身がこうした「居場所」の運営支援の端に加えていただいている経験に照らすと、とにかく「居場所」を紹介すればそれで解決するという単純なものではありません。

まずは青少年やその家族、そして当該青少年に関わる学校等の既存の機関の状況、特に、青少年とその家族・学校との関係性に注目することが必要になると考えています。当事者に対する処遇・支援だけではなく、家族・学校等といった当事者の身近な存在に対して処遇・支援を行うこともまた、青少年を支えるうえでは有効です。

少年の生活全般を支える住居としての機能を持つ、住まいの機能がある「居場所」、たとえば、自立援助ホームや子どもシェルター等の数は非常に限られています。つまり、どんなに居心地のよい「居場所」でも、ずっとそこで過ごせるわけではありません。青少年にとって生活の大部分を占める家庭・学校で少しでも青少年が落ち着いて過ごせるようにするには

どうすればいいか、という視点が重要ではないでしょうか。

家族や家庭における養育・介護等の「ケア」を家族療法の観点から考える際、それらが円滑に行われるためには、経済的な要件だけではなく家族が(ある程度)健康であること(疾病障害に対して適切な治療・支援を受けている)、家族や家庭内の関係性といった3点が鍵になるということは、本マガジン編集長の団先生も強調しておられるところです。

「だって家族だからあたりまえ」という言葉で「ケア」の責任を家族に一任することや、「この家族には任せておけない」と判断して、ケアやその対象を家族から分離することでは、課題の根本的な解決にはつながらないのではないのではないかという視点で、目の前の青少年やその家族を「みる」(診る、観る、看るなど)ことが、必要になってくると考えています。

6 居場所は「つくる」より「つながる」「つなげる」ことが大切

「居場所」とは、立ちあげるだけではなく、「居場所」をコアとして地域社会の多くの者が「つながる」ことが、個々の青少年だけではなく、青少年をとりまく地域課題の発見とその解決にむけての取組のためには重要です。

自治体内初の「子ども食堂」立ち上げに際し、「いまどき貧しい子どもなんているのか」という声もあがったこともあります。子どもの貧困に関する報道が増えていった平成20年代半ばのことでしたが、それでも身なりなどの分かりやすいといったわかりやすい貧しさがイメージされていたのかもしれませんが、それでも、地域で子どもの育ちを支援する団体・機関が連携するネットワークをつくって「つながる」ことにより、地域の理解と協力が醸成されていきました。

また、本当にニーズを抱えた方を「居場所」に「つなげる」こともまた重要です。先に述べた「子ども食堂」では、学校や教育委員会、社会福祉協議会、自治体窓口と連携することによってそれを実現していきました。連携の過程において発見された地域課題についても、「つながる」ことで得られたネットワークにより解決への取組がなされていきました。こうした取組が重ねられたからこそ、コロナ禍で集合型の活動が難しい時期でも、必要な物資を携えての個別のアウトリーチへの活動形態の切り替え、そして私を含めての自治体外の支援メンバーも物資の調達などを担うことができたのです。

7 必要とされる「社会的処方」の観点

ニーズを持つ人を「居場所」につなげることは、保護観察官であれば更生保護法等に規定された「補導援護」、社会福祉士・精神保健福祉士であれば「ソーシャルワーク」の実践の1つといえるでしょう。

英国のNHS(National Health Service 公的医療保険サービス)が行う「社会的処方(social prescribing)」、クライアントの健康の社会的決定要因(Social Determinants of Health:SDH 孤立・貧困)に対応する取組にヒントがあると私は考えています。ただ、パンフレットを渡すだけではなく、クライアント自身の喜びや強みを医療従事者、そしてクライアントと様々な地域の社会資源をつなぐ「リンクワーカー」が協働作業で見いだしていくことが大きな特徴です。

社会的処方と称されるか否かは別として、医療機関を訪れた人に対して、日常生活上の指導・助言がなされる機会は少なくないと思われます。様々な社会資源や健康に関する情報を待合室に設置していることも多く見受けられます。

人間の行動変容は情報に接触するだけでは起こりうるほど単純なものではなく、誰からその情報を手渡されるかという点が重要でしょう。情報伝達と動機付けという双方の観点において、医療従事者の方の専門性が生かされる点が多いと感じています。

私自身、10代から家族のケアに関わり、社会人としてのキャリアと家族介護従事者としてのキャリアがほぼ同期間という人生を送ってきました。家庭や仕事の状況にも配慮し常に暖かく見守ってくださったかかりつけ医の先生方、認知症の人と家族の会につなげてくださった認知症ケア専門医の先生やスタッフに支えられ、なんとか業務との両立をしながら今日に至っています。

参考文献：法務総合研究所 犯罪白書各年版

三浦恵子 若者の「生きづらさ」と地域で向き合う 大阪保険医雑誌(2025.7 特集：若者のいま 医療的アプローチを考える)

備考：社会的処方に関する事項については下記が参考になると考えます。

対談・座談会 近藤尚己，平沼仁実，守本陽一，柴垣維乃 2023.12.18 週刊医学界新聞(通常号)：第3546号 医学書院 医学界新聞 社会的処方の現在地とこれから

https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2023/3546_01 R7.6.14 確認

執筆者短信

「高齢者」について、統一的な定義は実はありません。世界保健機関の定義では、65歳以上の人のことを高齢者としています。法令や行政により年齢を定められています。そのため、労働法令や社会保険関係については留意が必要であり、私も注意を払って対応してきました。しかし私自身にとっては、高齢者の諸制度はまだまだ他人事という意識がありました。

ところが昨今、自分自身が「高齢者」の枠に入るとは思ってもみなかったという出来事がありました。

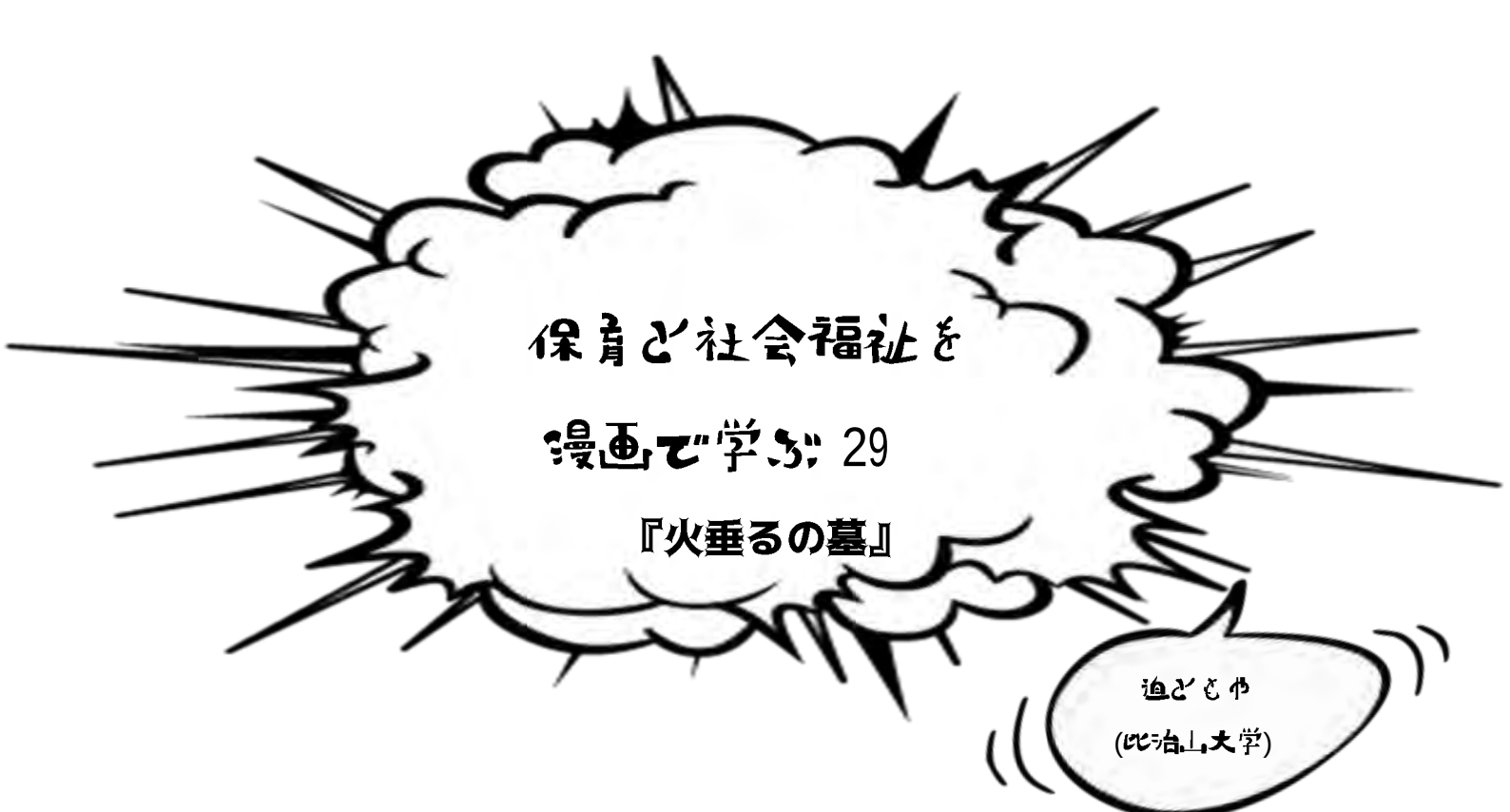
今年5月末に帯状疱疹を再発しました。痛みその他が酷く、折悪しく発表を行う予定であった某学会は、遠方の会場への移動が困難であるため欠席するという為体でした。

周囲からはお見舞いの言葉とともに、「帯状疱疹ヘルペスワクチンの接種を受けておけばよかったのにね」とも声掛けをいただきました。実はこの直前にもワクチン接種に関するポスターを眼にしていました。ただ、当時のポスターの文言やイラストが「高齢者の方向け」であったため、「私はまだその対象ではない」と思い込んでしまっていました。

実はワクチン接種に関しては「50歳以上」の方に接種が勧められていたのです。

「50歳で高齢者？いやいやサザエさんの時代か！」(子どもも孫もいる波平さんはマスオさんと同じ会社に勤務しており、50代という設定と思われます)と憤ってみたり、自分が高齢者のくりにハマっていることに愕然としたりで、今回の帯状疱疹ヘルペス再発は、身体の痛み以上に魂の痛みとなったのです。

皆さん御自愛くださいませ。



保育と社会福祉を

漫画で学ぶ 29

『火垂るの墓』

迫ともや
(比治山大学)

これまで本エッセイでは漫画作品を扱ってきましたが、今回は少し趣を変えてアニメ映画『火垂るの墓』（高畑勲 1988 原作：野坂昭如 1968）をもとに、戦争について、児童福祉の課題について、考えたいと思います。戦後 80 年の節目を迎える今年、参議院選挙では日本の核武装や徴兵制を主張する国政政党が躍進しました。社会や時代状況の変化の中で、本エッセイを通して何かを考えるきっかけが掴めればと考えます。

『火垂るの墓』は戦時下の神戸で親を失った兄妹の短い夏のアンソロジー。「戦争の悲惨さ」「かわいそう」だけでなく、子どもらしい清々しい感性も見ることができ、それが一層のはかなさと哀しさを誘います。本作品はまた「子どもの生存を誰がどう支えるのか」という児童福祉の問題を突きつける作品でもあります。

昭和 20 年 9 月 21 日夜、ぼくは死んだ。

物語冒頭で主人公の兄、清太は神戸三宮の駅舎で倒れ、最期を迎えます。「支援につながらなかった子どもの終着点」を象徴しているように思われます。

清太と節子の母親は空襲によって全身火傷を負います。包帯には蛆がわき、亡くなった母親は野焼き同然に茶毘にふせられます。このことは医療や衛生、死者の弔いについて社会基盤が機能不全に陥った「限界状況」にあることを意味します。社会の機能不全は子どもを追い詰めていきます。

14 歳の清太と 4 歳の節子は、西宮に住む叔母の家に身を寄せます。おばさんの家には娘と勤労奉仕をする下宿人の青年がおり、二人には具の多い雑炊と白米を食べさせますが、清太と節子には殆ど具のない雑炊が差し出されます。おばさんは二人に厳しい言葉を投げかけます。

「お国のために働いている人の弁当と、一日中ぶらぶらしているあんたらと、なんで同じや思うの」

お国や地域、家族の為に役に立つ存在は一人前の扱いがされますが、働かず、学校にも行かない清太と節子は疫病神扱いされて、自分たちだけで防空壕で生活する道を選びます。

疎開や配給の情報は、隣組に入らなければ得られません。子どもだけで生活する場面は幼い観客にはわくわくする展開のようにも見えます。大人の理不尽さに屈することなく、集団と同化することで生存を選ぶよりも、清太は子どもらしい自立心とプライドを優先して、孤立していきます。

大人の目線でこの場面を見ると、無謀さが目につきます。しかしそのリスクを、清太はリアリティをもって認識できていません。周りの大人が若気の至りを諷める言葉を発しますが、本気で二人を連れ戻そうとはしていません。

戦時下の「限界状況」では、栄養・衛生・医療・住居等の生存基盤が機能しません。余裕がない状況では、勝手な行動をする子どもは切り捨てられてしまいます。

西宮のお婆さんの態度は「助けてもらいたければ、良い子にしておけ」というメッセージとなります。しかしこの「良い子」は大人の意思に従う存在にすぎず、個性がありません。

幼い観客は、お婆さんを悪人、清太と節子をかわいそうと見るかもしれません。しかし「限界状況」では、誰もがこのお婆さんのようになる可能性があります。

「火垂るの墓」には清太と節子の無邪気な遊びの場面がたくさん登場します。

ドロップの缶を鳴らしたり、川遊びやままごとをする場面もあります。混乱した状況下でも、子どもらしい安心と日常の回復をもたらす遊びの力を表しています。

蚊帳の中に蛍を放ち、光に目を輝かせる二人ですが、翌朝には、蛍は皆死んでしまっています。儚さを嘆きながらもお墓を作る場面は、弔いとごっこ遊びが結びついています。節子が蛍のお墓を作るシーンに、母親の遺体をたくさんの遺体と共に穴に入れて、焼く場面がフラッシュバックします。

清太がオルガンを弾いて節子を喜ばせていると、叔母からひどく叱られるエピソードもあります。

「欲しがりません、勝つまでは」がスローガンの状況下では、陽気に遊ぶことは不謹慎だとしか捉えられません。ですが、限界状況を生きるためにはむしろ遊びこそが生きる力をもたらすものとなります。それを抑圧されることは、子どもらしさを奪うことになります。さらに14歳の清太が4歳の節子の世話をする状態は、今日ならヤングケアラーの問題とも重なります。

清太はやがて農家から窃盗をしたり、焼夷弾で焼ける家に泥棒に入ったりします。米軍のB29に「もっとやれ」とはやし立てる清太の姿は、「限界状況」で生きるなかで善悪や道徳の規範意識が薄れてしまう状態を示しています。「限界状況」では、私たちも清太のように行動することになるかもしれません。やがて節子は栄養失調で倒れ、日本の敗戦を知った清太も力を失い、三宮の駅で力尽きてしまいます。

昭和20年9月21日夜、ぼくは死んだ。

再び、作品冒頭のセリフです。「火垂るの墓」は清太の死の場面から始まっていました。死んだ清太は時折作品の中に現れ、二人のエピソードを走馬灯のように見えています。つまり観客がこの作品を見るとき、清太は「幽霊」のような存在になって、私たちとともに生前のエピソードを見ているのです。

敗戦後の日本では戦災孤児が駅や闇市周辺に野宿し、かっぱらいや恐喝をする状態が社会問題化しました。かれらについて、戦時中は「国児」と呼び、国で保護する案がありましたが、敗戦後には「浮浪児」とみなされ、強制的に保護されて施設送りにされました（「狩り込み」といいます）。収容施設も急造したバラック建てや古い工場を利用したものなどで、ボロボロの室内に収容定員の何倍もの子どもが押し込まれ、食事也十分に取れない状態で、脱走する者が続出したといえます。

戦争がひとたび始まれば、一般市民の甚大な被害をもたらします。戦争がいけないことは火を見るより明らかですが、勇ましい人たちは「戦争をしないため」を口実に軍備拡大を求めます。間違って使うことは絶対にないのでしょうか。

私たちは、仮に最前線で戦わされなくても、清太と節子のように儂く命を落とすかもしれませんし、西宮のおばさんのように生きるかもしれません。相手国でも、一般市民の状態は同様でしょう。

『火垂るの墓』の清太は、叔母宅で我慢をしていればよかったのでしょうか。あるいは親が残した預金を早く下ろせば二人は助かっていたのでしょうか。実際には、福祉的な支援につながる情報へのアクセス（配給や相談、行政への窓口）、そして何より温かい年長者の保護や伴走が欠けていたのではないか。保育と福祉を学ぶ筆者はそうのように考えてしまいます。

最期に、読者に三つの問いを送りたいと思います。

- ① 清太と節子の行動のうち、現代の社会資源があれば変わり得た選択は何だろうか。
- ② 作品の誰が、どの場面で第三者による介入として有効なものを差し伸べられたか。
- ③ 現代の私たちの社会で、地域の子どもの安全網はどのような状態になっているか。

紹介作品：『火垂るの墓』監督/脚本：高畑勲（1988）

原作：野坂昭如（1968）『アメリカひじき・火垂るの墓』文藝春秋

参考サイト：高畑勲「見た人はそこに怯えてほしい 火垂るの墓、意地悪なおばさんの真実」2025年5月23日、朝日新聞デジタル

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 31～

＜魔法の処方薬＞

杉江 太郎

～情報の拡散～

私の職場は相談援助を行う公的機関である。様々な相談が寄せられ、様々な相談援助が展開されていく・・・はずである。

「・・・はずである」と歯切れ悪く書いたのは、社会の煽りを受けて相談援助機能が失われつつあるのではないかということを危惧しているからである。

この社会は、情報に溢れている。情報の拡散技術の向上により、誰でも簡単に情報にアクセスができ、誰でも拡散することが出来るようになった。その速度や量は格段に増している。

この業界だけではなく、どの業界であっても、大きな事件や事故などがあると、瞬く間に情報が拡散されていく。特に『加害-被害』の関係性が明確であったり、加害側を擁護する動き（責任を隠蔽するような動き）があったりすると、匿名の第三者は、まるで正義を振りかざすかのように、情報の拡散に躍起になり、組織やその組織に所属する個人の糾弾に繋がっていく。

私の業界でも、虐待による死亡事例等

があると、第三者の有識者により、関わっていた機関の対応について、検証されることになっている。子どもが死亡するという最悪の結果になってしまった以上、その対応の検証が求められ、2度と同じことが起きないように対応策を検討することは必要である。そうした動きは都度、メディアにて報道される。

そのことに先行する形で、匿名の第三者による SNS 等による拡散が行われることが多い。その拡散の目的は、対応を検討することではなく、組織や個人を責め立てることを目的にしているようにも感じてしまう。

こういった拡散は、援助職者にとって、不安を高めるきっかけとなってしまう。遠く離れた地域の事象であっても、決して人事ではなくなってしまう、似たような家族を目にすると、途端に不安が高くなり、その援助者の中には、相談援助を展開するという選択ではなく、他機関にその解決を依頼するという選択をとってしまう場合がある。それは、一見すると、援助を展開することを放棄し、援助を別の機関に委ねることで自身の不安を解消

しているようにも見えてしまう。

本来であれば協力し合って援助を展開していくべきはすが、責任の所在を巡る押し付け合いが行われてしまうため、対立構造に陥ってしまう可能性がある。対立構造の中では、お互いが相談援助以外の部分に力を注ぐこととなり、得られるものも限られてしまっていることから、結果としてその従事者を疲弊させてしまう。

～組織の疲弊～

従事者が疲弊することで、組織を疲弊させることに繋がってしまう。その組織の心理的・安全性が失われることに繋がりを、その組織に所属している援助職者全体をも疲弊させてしまう。

私の職場においては、近年、虐待対応が中心となり、相談援助ではなく、介入的な関わりが求められるようになっていく。

他機関の援助職者からも介入的な関わりを求められることが増えているが、介入的な関わりには、一時保護や施設入所などの家庭から子どもを分離して処遇を検討するという方法が含まれており、その処遇を決定するに当たっては、家族や子どもへの直接的な影響が大きく、その決定は慎重にされるべきでもある。

ただ、死亡事例などがあり、その組織の関わりが明白で、介入的な立場を取っていないと、たちまちその情報が拡散さ

れ、責任を巡ってその組織が糾弾されることになる。

そのことは、まったく関与のなかった遠い地の組織の不安が高めてしまうことに繋がり、短絡的に「一時保護をした方が良いのではないか」という介入的な対応を求める風潮を強めてしまう。もちろん、子どもが今以上に、傷付かないように対応を検討しなければいけないが、それと並行して、もし介入するとしても、その後の影響や先の見通しについて検討しておかなければいけない。特に分離を伴う介入をする場合は、分離した後の再統合もセットで考えておかなければならないのである。介入さえすれば解決するというような、まるで『魔法の処方薬』な方法など存在しないのである。

～『魔法の処方薬』を求めた結果～

私の所属する組織は、『介入』だけをやる機関ではない。私が入るもっと前には、不登校の子どもらを集めてキャンプをしたり、琵琶湖1周サイクリングなどをしていたりしていたと聞く。非行の子ども通所や、家族療法なども盛んであったらしい。相談援助を担う公的機関として役割を果たしてきたように見える。決して、これは、昔が良かったと言いたいのではない。時代の変化とともに組織も柔軟に変わっていく必要があるだろうし、その時代にあった相談援助の形を模索していかなければならない。

ただ、虐待対応に人手が足りないからという理由で、国を挙げて組織の母体（人員）を増やしたり、介入が足りないという理由をもって、その組織の法的な権限を強化したり、保護者の厳罰化を進めるかのように、相談経過を全て警察と共有するようになったりと、まるで『魔法の処方薬』を与えているつもりになってしまっているのではないかという、気持ちになってしまう。そのような対応を続けた結果、虐待の認知件数は増え、益々その対応に追われるようになり、どの組織も人員が定員以上に確保できなくなり、都会では人材の引き抜きが行われているという噂をもたらしている。

経験年数の低下により、組織全体が若返り、相談援助の役割を知らされないまま去っていく人もいる。組織全体の疲弊にも繋がっている。国がついにリクルートの課題に目を向けるようになっている。

このことは冒頭に書いた、相談援助機能が失われつつあるのではないかという私の懸念にも繋がっていく。

～『魔法の処方薬』はない～

この業界に『魔法の処方薬』はないと断言する。では、解決に向けて、どうすればいいのか。そもそも解決など出来るのであろうか。

どの時代もそうであったように、目の前の家族や子どもに対して、何が出来る

のか、何なら出来ないのかを常に模索し続け、常に最善の選択をし続けるだけである。

最善の選択をし続けるためには、無知であってはいけない。その家族を知ろうとし、その子どもを知ろうとしなければならない。その家族やその子どもが所属する集団、その家族やその子どもに関わっている組織のことを知ろうとしなければいけない。常に全体に興味を持ち、物事を『加害-被害』のように『原因-結果』だけで分断せずに全体を俯瞰して見る必要がある。

援助職者の中には、怒りを前面に押し出して、自己の主張してくるように見える人もいる。見えると書いたのは、その人のことを『怒りを前面に押し出してくる人』と捉えてしまうとそれ以上、対話が進まなくなってしまうと思うからである。もしかしたら疲弊する組織に属しており、守られていない人なのかもしれない。もしかしたら組織が『魔法の処方薬』を探し求めており、巻き込まれているのかもしれない。自身にも余裕がないと出来ないのかもしれないが、相手に興味を持ち、状況を知ろうとすることで、組織全体や個人の理解に繋がるかもしれない。

常に模索し、次の一手を考え続ける。その先にどのような未来があるかは誰にもわからない。うまくいくか、うまくいかないかの保障はない。無責任かもしれないが、誰にも責任は取れないものであ

る。もがいて、苦しんで、少しの変化も見逃さない。

益々、介入的な対応が求められる組織ではあるが、相談機能を衰退させないように、もがき続けたいと考えている。『魔法の処方薬』を疑っていきたい。



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑬～

自己決定とは何か？

援助職に求められる“支える力”



松岡園子

私が、統合失調症を患う母と2人暮らしの生活を選択した10代をなんとか切り抜けてくることができたのは、自己決定を支えてくれる人が周りにいて下さったからだと思っています。また、本音で話せる人が周りにいて下さったからだとも思っています。

今号ではこの「自己決定」と「本音で話せる」というテーマについて、援助に関わる方と一緒に考えてみたいことをまとめました。

私たちは日々の暮らしの中で、多くの選択をしています。朝何時に起きるか、どんな服を着るか、何を食べるか、どこで誰と過ごすか。こうした小さな選択の積み重ねが「自分らしさ」を形づくり、人生そのものになっていきます。そして、この「自分で選ぶこと」、つまり自己決定こそが、すべての人にとって欠かせない尊厳の根幹だと思います。

ここでの自己決定とは、自分自身の意志に基づいて、自らの行動や人生の方向性を選ぶこととしてお話を進めていきますが、それは単なる自由とは違い、他者から押しつけられたり、情報が与えられない中でなんとなく選ばれたりするのではなく、本人の考えや価値観を大切にしながら、自分で「これを選ぶ」と決める行為です。この考え方は、特に対人援助職において極めて重要ではないでしょうか。なぜなら、援助を必要とする人は、身体的・精神的・社会的な理由により、選択の幅が制限されがちだからです。そんなときに支援者がどのように関わるかによって、本人の「決める力」が育つか、それとも奪われてしまうかが大きく変わってきます。

自己決定を支えるとはどういうことか？

自己決定を「支える」とは、ただ「相手の好きにさせる」ということではありません。それはむしろ、本人が自分で選べるように環境や情報を整え、必要なサポートを行うことでは

ないでしょうか。

例えば、以下のような支援が「自己決定を支える」行為だと考えています。

情報が偏っていないか、理解しやすい形で提供する

複数の選択肢を用意し、それぞれのメリット・デメリットと一緒に整理する

本人の価値観や希望を丁寧に聴き、急かさず考える時間を尊重する

仮にその選択が失敗に終わっても、非難せず、再挑戦を支える

特に支援の現場では、援助者が「正解」を提示してしまいがちです。善意であっても、「こうすべき」「あなたにはこれが合っている」といった決めつけは、相手の自己決定の機会を奪ってしまいます。

自己決定を支える援助者に必要なのは、「導く人」ではなく、「伴走者」としての姿勢です。相手が自分の人生のハンドルを握れるように、隣で地図を広げ、一緒に考え、必要なときだけ支える。そんな距離感が求められます。

「自己決定」は生きる力

人が自分の人生に責任を持てるようになるためには、「自分で決めた」という実感が必要です。誰かに決められた人生ではなく、自分で選び、時に失敗し、そこから学びながら進んでいく。そのプロセスこそが、人を大きく成長させていきます。

そして、その歩みを支えるのが、援助職の大切な役割ではないでしょうか。また、そうした援助を進めていく上で大切なのが、本音で話せる関係づくりだと思います。

本音を話せる関係って、どうやってつくるの？

— 無理せず心を開ける、やさしいつなぐりの育て方 —

誰かと話しているとき、ふとこんなことを感じることはありませんか？

「本当の気持ちは言えなかったな...」

「あの人にはつい遠慮してしまう」

「なんでも話せる関係って、どうやってできるんだろう？」

人と関わるうえで、「本音で話せるかどうか」はとても大きなポイントだと思います。でも実は、本音って、がんばって言おうとするものじゃないんです。ここからは「本音を話せる関係」について、ちょっとだけ深く、やさしくお話ししてみます。

◆ 本音を話せるって、どういう状態？

簡単に言えば、「自分の気持ちを素直に出しても大丈夫だと思える状態」のこと。

たとえば――

嫌なことがあったら「ちょっと今日は落ち込んでてさ」と言える

不安なときに「ちょっと相談してもいい？」と声をかけられる

うれしいことがあったら、遠慮せずに一緒に喜べる

そんなふうには、「これ言ったらどう思われるかな？」という不安より、「この人にはちゃんと伝えてみよう」という安心感が勝っている関係。

◆ でも、なぜ本音って言いづらいの？

本音を出すのって、実はちょっと勇気がいることです。

なぜなら、本音にはこんな“こわさ”がついてくるから。

嫌われるかもしれない

わかってもらえなかったらどうしよう

相手を困らせてしまうかも

「面倒な人」と思われるのがこわい

だから私たちは、つい“本音フィルター”をかけてしまう。でもそれって、けっこうしんどいし、誤解のもとにもなりますよね。

◆ 本音を言える関係は「安心」から生まれる

本音を話せる関係に必要なのは、ズバリ安心感です。

人は、こんなときに安心します。

否定されずに、ちゃんと「うんうん」と聞いてもらえる

話したことを勝手に他の人に広められない

アドバイスを押しつけられない

自分の話にも、相手の話にも、ちゃんと「温度」がある

つまり、「ここでは大丈夫」と思えることで、心が少しずつ開いていくんですね。では、どうすればそういう関係をつくれるのでしょうか？ポイントは、“本音を話す力”よりも、“本音を受けとめられる関係”をつくることではないでしょうか。私も自分の子どもの頃を振り返って、本音を話せる関係づくりのヒントになりそうな事柄をまとめました。

1. まずは「自分からちょっとだけ」話してみる

本音を引き出すためには、援助者の側が少しだけ心を開いてみるのがコツ。

たとえば――

「最近ちょっと疲れ気味で…」

「実はちょっと落ち込んでたの」

「こういうの、けっこう不安で」

大きな話じゃなくて良いと思います。小さな正直さが、信頼の芽になります。

2. 聴くときは、否定も評価もしない

「それって甘えてるんじゃない？」

「いや、それはこうしたほうがいいよ」

—こういう反応って、悪気がなくても相手に“壁”を感じさせてしまいます。

代わりに、

「そう思ったのね」

「それはつらかったね」

「わかるよ、私もそういうことあるよ」

というように、相手の気持ちをそのまま受けとめる姿勢が大事だと思います。

3. 言葉にしなくても、気持ちを感じ取る

本音って、言葉じゃない形でも出ていることがあります。

表情が少し沈んでる

声のトーンが元気ない

いつもより返事がそっけない

そんな小さな変化に気づいて、「なんかあった？」とやさしく声をかけることが、相手に安心を与えます。

4. 無理に話させようとしない

「ちゃんと話してよ！」と言われると、かえって言いたくなくなるのが人間です。本音は、無理やり引き出すものじゃなくて、自然に出てくるもの。

「話したくなったら、いつでも聞くよ」

「今は話さなくて大丈夫だからね」

そんな声かけのほうが、あとで本音が出てくるきっかけになります。

5. 長い時間をかけて、少しずつ

本音が出せる関係って、一晩でできるものではありません。焦らず、少しずつ、信頼を積み重ねていくことが大切です。何度も会話を重ねる中で、「この人には話しても大丈夫かも」って、ふと思える瞬間がやってきます。



原田牧場 Note

Page 20

春、標茶町タウンプロモーション計画の一環で町民インタビューを受けました。役場と提携してプロモーションを進めている雑誌編集者の方が来られ「町外に発信したい町の良いところ」「こうだったらもっといいなと思う仕組み」について話すチャンス을いただきました。



標茶町タウンプロモーション計画について

標茶町では、「標茶町」の知名度を上げ、人口減少に歯止めをかけることや関係人口等の創出を目的とし、標茶町をどのように宣伝をしていくことが良いか、その方針をまとめた「標茶町タウンプロモーション計画」を策定しました。タウンプロモーションを進めていくうえでは、標茶町に住む人が自分の町に誇りを持ち、その良さを町内外に伝えていくことで、効果が発揮されます。これから行政をはじめ、町内企業や町民、標茶町と関わる方々と連携し、取り組みを進めていきます。

■ タウンプロモーションとは？

地域の魅力を伝える広報・営業活動。地域の魅力を内外に発信し、その地域へヒト・モノ・カネを呼び込み地域経済を活性化することが活動として位置づけられています。

過疎化が進む田舎は移住者をどのようにして呼び込むか？＝町の良いところの掘り起こしが一番のテーマですが、町民インタビューが掲載されている役場だよりの最後のページの求人欄、何ヶ月も同じ求人が出ているのに驚愕です！という話から始めました。介護士、保育士、看護員、調理員、保健師、全部がずっと足りていない状況では、いくら町の良いところをアピールしても表向きだけのことになってしまう。外へのPRと同時に行政サービスの充実を目指して、全国への求人＋移住、快適な住まいのあっせんも含めた仕組みづくりを是非やってくださいとお願いしました。小規模ではありますが、我が家は従業員用のアパートを建て、道外から移住してくれる働き手を募集し、地域コミュニティへ参加してもらうまでの橋渡し役をやっているので、

経験談をお伝えすることもできました。より誇れる町づくりに今全員で邁進しないと。なんとなく暮らしていけるし…では取り返しのつかないことになるなと実感する機会でした。

そんなことで我が家の働き手は、移住を兼ねた方に限っていきたいと思いつつ、捨ててはいけないもう一本の柱があります。シニアの雇用です。先日60代半ばの搾乳パートさんが肩を壊し2ヶ月の療養となりました。長らく使った肩の老化、この先はいたわりながらやるしかないとの診断です。今年から年金はもらえるようになったけど、物価、燃料高、通院もあり年金だけでは暮らせないという事情があります。仕事量を少し減らす対応で、4年前にやめた70代のパートさんに久しぶりに連絡を取り、無理を言って来てもらい、搾乳人数を増やして、ゆったり目に作業が進むようにしました。着替えスペースには簡易椅子と手すりを備え付けました。すると70代のパートさんが、久しぶりだったけどやってみたら体も動くし、しばらく続けてもいいか？と言うので事情を聞くと、年金で暮らしていけると思って辞めたんだけど、目の病気が見つかり保険外の注射が高額でやっていけなくて、と。身につまされる思いがしました。搾乳は楽な仕事ではない、それでも汗だくになって作業してくださるのがありがたく、こちらこそお願いします！と返答しました。暮らせる分、と思うと時給は高めになるし、労働力の「力」部分では若い人に劣る部分もあるけれど、技術力は衰え知らずです。乳房炎の発見が早い、乳頭の拭き取り作業が上手いので乳質がさらに良くなったことが乳成分の数値に表れました。作業スピードがゆっくりというのも牛には喜ばれます。（牛は素早い動きに敏感で驚きやすい）コスパ、効率のような尺度では測れないものがあるということ、基幹産業である酪農を介したお互いの助け合いが地域貢献しているという意味合いの雇用、続けていこうと思います。

最後に、4年前にやめた70代のパートさんに声をかけた理由ですが、辞める時に一言残して行かれたからです。「希ちゃん、本当に本当に困った時は言っておいで。どうしてもものときは手伝いに来るから！」残してくれた優しさに励まされて、何かあった時でも頼れる人がいる安心感でやってこれたと思います。真に受けて連絡してくるとは思っていなかったでしょうがね（笑）

肩を壊したパートさんも復帰してみたら仲間が戻ってきてた！と嬉しそうに仕事をされています。その相乗効果か？皆さん以前より動きが良いのです。夏から秋は福利厚生で父さん母さんが作った無農薬野菜の配布をしてはまた笑顔。環境が整った時の自然発生的な（無理のない）パワーアップを目の当たりにし、尊敬する人生の先輩方と、まだもう少し一緒に働けることに感謝、感謝です。



外からの目線を持ち合わせた雑誌編集者の方が、ひとグループ1時間ほどかけてインタビューし、短い文章ながら、町を良くするヒントが凝縮されたコーナーです。いろんな立場の町民が町への思いを語る、それ以外の方もコードを読み取ってアンケートフォームから意見を届けられる工夫があり、我が町ながら良い取り組みだと思います。

関心がある方は検索して見てください。
一広報しべちゃ2025年3月号よりー

筆者 原田 希

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年 北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫とともに新規就農者の支援や

女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当

私の頭の中のまだエンピツ④

そだちと臨床研究会 川畑 隆

自分で考える

客観的とは誰の考えか

世間では「主観的」は「自分勝手」ともつながり、「客観的」に比べてこれまで分がなかったように思いますが、どうでしょうか。でも最近、「主観的」を地でいっているように見える大国の大統領のおかげで、「主観」が勢いを盛り返してきています。「客観的」な見解だと理解してうなずいていたこと（「常識」と言い換えていいかもしれませんが）が実はそうじゃないんじゃないか、いや、そうじゃなかったんだと思わせられる圧力のよくなものが、極端な形で顕わになってきているように思います。

「客観」を誰しもそう思うような見解だとして、そのような見解がそこにまさに客観的に自分の足で立っているわけではありません。「客観的」だとそれぞれの人が「主観的」に理解してきたわけで、現状は「客観」に支配されがちだった「主観」の部分が大きく揺さぶりをかけられているとも言えるのではないでしょうか。そういう意味では件の大統領は「主観」の解放の先駆者かもしれません。

しかし、先ほど「極端な形」と書きましたが、「主観」の解放が「ウ

ソ」でも何でもありとなり、個人の好みがそのまま公的な政治を左右するとなると、やっぱりまずいわけです。でも「ウソ」と「ホント」が明確に分けられることもあれば、見方によってかわったり、どちらかわからないこともある世の中で私たちは生きています。

…ということは、「主観」すなわち一人ひとりの考えが今また問われているのだという現状認識は的外れではないように思います。…この物言いは私の主観が客観化を求めている、「いや、その現状認識には異論がある」という相手も含めた交流への期待を含んでいると言えます。

「自分勝手」はあまりよい意味では使われません。しかし「自分にとつて使い勝手のよい」「自分自身になじむ」言動を指すのだとしたら無理のない自分をめざすわけで、「主観か客観か」ではなく「主観も客観も自分の中でバランスよくブレンドされた状態」をどう目指すか、そこでどう他者とつながるかということの価値を含んでいるように思います。

操られているか

先ほどの大国の大統領について、ある国際政治評論家が「〇〇の操り人形になっている」とテレビで発言したのを聴きました。〇〇は人名ではなかったと思うのですが、私の勘で、その大統領についてよく言われている「ポピュリズム（大衆主義）」を入れてみました。「ポピュリズムの操り人形になっている」…フムフムと納得しました。「大衆は本音ではこう考えているんだし私もそうなんだから、そこを何でも取り入れていきたい、それが人民のための政治だ」という「客観を装った主観」とでも言えるような認識が主導権をもち、目の前の一つひとつの現実吟味によらずに何で

もそれですませてしまうような事態が描写されているように思われました。そのフレーズがなぜ私の耳に飛び込んできたかは、私が「操り人形」ということに敏感だからですし、操られるのが嫌だということは自覚しているつもりです。とは言っても実際は操られているかもしれませんから、自分への点検項目のひとつとして準備されています。

そして今回、テレビから聞こえてきた言葉が刺激となって、「実は私も操られているんじゃないか」：そんな不安が私の中に生じたのです。

対応への疑義

私が属する「そだちと臨床研究会」が定期的に開催している『対応のバリエーション勉強会（以下、対バリ）』の実際の様子を、ある家族支援に関する研修会の演台で、研究会メンバーが実践形式でプレゼンテーションしました。その中で、子どものことで来談しているロールプレイ家族に対して面接者役のメンバーのひとりが行った対応（質問）が、その後、メンバー間で話題になりました。

対バリの趣旨は、「支援現場のいろんな場面における相手への対応には正解があるわけではないので、ロールプレイで行われた対応のよいところを探しながら役に立ちうまくいく対応を検討しよう」というもので、勉強会ではロールプレイだからできるいろんな対応を試してみることも含めて参加者に促しています。

話題になったのは、対バリの紹介を目的としたロールプレイ場面での面接者役の対応だったのですが、それは「役に立ちうまくいく対応だなあ」と参加者に明確に見えたわけではなく、「不思議」で「不可解」に受け取

られた可能性があるものでした。もちろん、フロアのかたがたには「対応に正解はなく試してみたらよい」という対バリの趣旨を伝えた後でのプレゼンテーションだったのですが、それでも「役に立ちうまくいく」「よりよい対応」だと即刻思えるような対応を期待し想定していたかたがたとっては意外だったかもしれません。メンバーの中からも「秀でた対応だった」と大多数が思えるようなプレゼンテーションのほうがよかったという意見が出たくらいでしたから。

「正解はない」のはホントか

私の中で立ち上がった不安は、プレゼンテーションとしてどうだったのかという点を離れて、対バリそのものについてでした。

「対応に正解はないから…」と対バリの意義について述べているのに、その私たち自身が「よりよい対応」「秀でた対応」という「正解」を想定しているのではないか、「正解はない」と言うために「正解はない」と言っているのではないかという疑いが、私の中であらためて出てきたのです。「あらためて」なのは、それまでも気にはなっていたからです。

正解があるとする、その正解に近づくために不正解を正すというアプローチが出てきやすくなります。そして、そのアプローチは批判に直結します。私たちが当初対バリにルールプレイを用いることになったときに、この批判が検討の対象になりました。ルールプレイに尻込みする人が多いのは、せっかく頑張ってルールプレイしたのに批判されて辛かったという経験があるからではないかと考えたのです。ですから、他のメンバーのルールプレイの内容について批判するのではなく、その人のプレイのよ

かったところに限定してコメントするというルールを導入しました。

さて、このルール下ではメンバーの中に生じた批判心は表出を抑制され、賞賛のための賞賛も出てくる余地が増えることにもなります。ですから批判されたかもしれないプレイヤーと批判を抑制したメンバーの双方にとって、批判によって得られたかもしれないメリットを逸した部分はあるかもしれません。しかし、いったんある点に批判心が向けられるとそのプレイの評価がそこに張りついてしまう可能性があります。そしてそのことによって批判ではない視点、賞賛されてよい視点が葬られてはもったいないことになります。つまりロールプレイした人の中に潜在的にもある支援力を掘り出し、ロールプレイを観たメンバーはその掘り出す力を養うチャンスを作りたいと考えたのです。私たちは、批判によるデメリットを回避することと併せて、このメリットを選択したわけです。

ただ、このどんな対応にもよいところはあるという視点を補強するために「正解はない」とまで見解をスライドさせた側面があり、私の中に少し「言い過ぎている」のではないかという惑いが残ったようです。かと言って「正解はある」と思っているわけではありません。前号で述べた「確かなどころ」に少しでも近いかもしれない「確からしいところ」を手に入れたのと同じように、「こういう時には大体こう対応するのがいい」と言えるようなものはあるのだと思います。しかし、その個々の対応場面には唯一無二の諸要素があるのですから「どんな時にもこれが正解だ」と言えるものはないと、これは確かに言えるのだと思っています。

今回は若干の今回の続きと、「ものごとをポジティブに捉える」という考えにも操られていないかと、考えてみることにします。

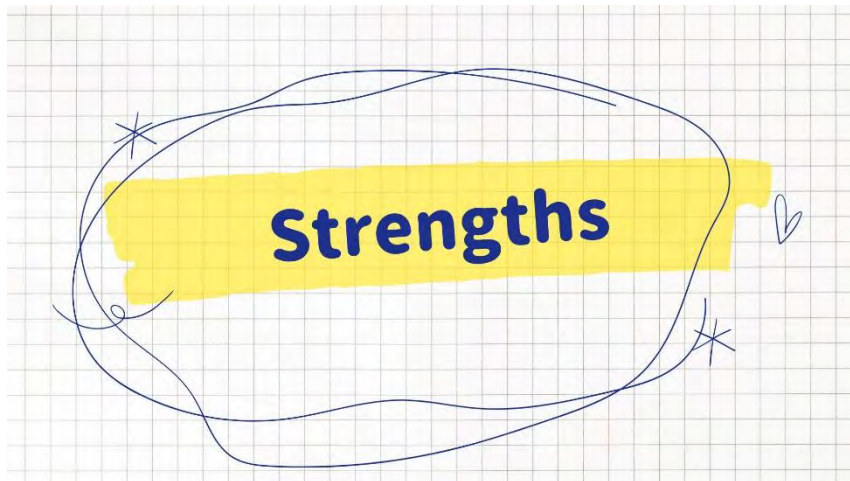
(了)

応援、母ちゃん！ 22

～強みからはじまる人材育成～

たまむら ふみ

玉村 文



1. 働く母ちゃんの挑戦：人材育成にも「強み」を

約 15 年前、大学院を修了し、対人援助の仕事に就いた時のことです。ある方に「10 年続ければプロになれるよ」と言われた言葉が、今も強く印象に残っています。その瞬間、「わたしはプロになりたい」と心に誓った記憶があります。

しかし現実は甘くありませんでした。入職して数年経つと、同僚や先輩の多くが 2～3 年で転職や休職をしていく姿を目の当たりにしました。わたし自身も、「この環境からは離れたほうがよいのでは」と感じる事が何度もありました。そうしたときには異動願いやワーキングホリデー制度を活用し、自ら環境を変えてきました。それでも同じ組織で子ども・若者支援を続けてきたことは、わたしの誇りでもあります。

最近では、対人援助職の離職・転職・休職はますます増えています。わたしの所属する組織では、3 年以内に約 7 割が退職し、5 年働けば役職がつくことも珍しくない状

況です。そんな現場で、人材をどう育て、どう定着させるかは、ずっとわたしの課題意識でした。

そんな中で、小さな希望が芽生えたのが実習指導の仕事でした。キャリア 5 年目から実習生を担当するようになった頃、元実習生が毎年のようにわたしの職場に入職してくるようになったのです。特別にリクルートしたわけでもないのに、自然と「この職場で働きたい」と思ってくれたのかもしれませんが。わたしの仕事ぶりやチームの空気が、「働くことのポジティブな面」を伝えられたのだと、育休中のプログラムで内省したことで理解しました。

そのとき、出会ったのが「ストレングスファインダー」でした。

2. ストレングスファインダーとは？

ストレングスファインダーとは、アメリカのギャラップ社が開発した自己分析ツールです。人の持つ資質を 34 種類に分類し、個人の強みとなる上位 5 つ（トップ 5）を導き出します。このツールの大きな特徴は、「弱みを直す」よりも「強みを活かす」ことに焦点をあてている点です。

たとえば、「人間関係を築く力」や「戦略的に物事を考える力」といった具体的な資質を明らかにし、それを日常の中でどう使えるかを考えるきっかけになります。自分の強みを言語化し、他者と共有することで、自己理解と相互理解が深まっていきます。

わたしはこのツールを、育休中に受検しました。診断結果を育休仲間と共有し合うなかで、自分が「ポジティブな側面に光を当てられる人間」であると理解し、その資質を仕事やチーム作りに活かしていこうと考えるようになりました。

3. チームに導入してみた実践例

5 月:「強みを知る」

2025 年 4 月から、わたしのチームにストレングスファインダーを導入しました。助成金を活用して書籍を購入し、付属コードでオンライン受検。安価ながらトップ 5 の資質を把握できる方法です。結果はそれぞれのメールアドレスに届き、書籍の中に資質の詳しい解説も掲載されています。

ただし、翻訳の影響で意味がわかりづらい表現もあるため、YouTube で日本人認定コーチによる解説動画なども補足として紹介しました。

その後、ワークシートを作成し、自分の資質とその説明、「強みを発揮したエピソード」「これから発揮できそうなこと」を書き出してもらいました。下記にわたしのトップ 5 などを書いたワークシートの例も提示し、参考として共有しました。これは、自分の記入の助けになるだけでなく、チームメンバーの一人であるわたしの強みを他のメンバーが把握する機会にもなりました。

<例>

ワークシートを記入した後、1on1 の時間を設定しました。この対話の目的は、単にワークシートを確認するだけでなく、自分の強みを自分の言葉で語るという経験を通して、自己理解を深めてもらうことにありました。業務のなかでは自分の強みを言葉にする機会はほとんどなく、自分の価値や役割を見失いやすいこともあります。だからこそ、自分の口で語ること自体が、内省と自信につながると考えています。1 人約 50 分の時間を取り、各自がトップ 5 の資質を自分の言葉で説明し、その中から 2 つを選んで「強みを発揮したエピソード」や「今後発揮できそうなこと」について語ってもらいました。

このプロセスで、「強みを発揮できそうなこと」がなかなか書けなかったという声が多くありました。理由をたどると、「自分の資質をこれまで弱みだと思っていた」「複数の資質が組み合わさって強みになるため、ひとつずつに分けにくい」といった声が上がりました。

特に印象的だったのは、20 代のある後輩のケースです。彼女は、これまでいくら上司に褒められても「皆さんのおかげです」「私は何もしていません」と謙遜し、自分の力を受け入れようともしませんでした。わたしはこの取り組みを、そんな彼女が少しでも自分の力を認め、自信を育てる機会にしたいと思っていました。

実際に 1on1 でワークシートをもとに話をするなかで、彼女は「自信はないけれど、これは事実だった」と、自分の過去の経験を具体的に語ってくれました。未来についても、「この強みはこんな場面で活かそう」と自分なりに言葉にしてくれました。

さらに、生成 AI（チャット GPT など）を活用して、トップ 5 の資質のかけ合わせから自分だけの強みを表現する工夫も試みました。20 代の若手メンバーはとても興味を持ち、自分の強みをより深く理解する楽しさを感じてくれたようです。

ワークシートをもとに話すうちに、自分の強みを過去の出来事に結びつけて言葉にできるようになっていきました。

「自信はないけれど、これは事実だった」と語ってくれたとき、彼女の言葉に確かさが宿っていたように感じました。

さらに、チャット GPT のような生成 AI を使って、自分の資質をかけ合わせてユニークな強みの表現を考えるなど、楽しみながら取り組む工夫もしました。若手のメンバーたちはこの方法にとっても興味を持ち、自分を知るプロセスに積極的になっていきました。

6 月:「強みを活かす」

5 月の最後に「次の 1 ヶ月、自分の強みを意識して使ってみましょう」と宿題を出しました。対人援助職では、自分の努力が報われない場面も多く、無力感や罪悪感を抱くこともあります。だからこそ、「自分にあるもの」を意識する視点は非常に大切です。

1 ヶ月後、30 分の 1on1 で振り返りを実施。あるメンバーは、会議の中で話題が拡散した際、「元の議題に立ち戻ろう」と軌道修正し、目的に向けて整理する役割を自然と担っていたと話してくれました。それはまさに「原点思考」という資質の発揮でした。

「過去にも似たような場面で、同じように振る舞っていました」と本人も気づき、「こういうときは私の出番です」と言えるようになりました。そこで、「私の出番シート」という項目を新たにワークシートに加えることにしました。

7 月:「チームで共有する」

これまでは主に個人とわたしの 1on1 で進めてきましたが、7 月はチーム全体に向けた働きかけを行いました。といっても、交代制のシフト勤務の施設ということもあり、全員揃う会議は難しく、雑談の時間に少しずつ「お互いの強みを話す時間」をつくっていきました。

その中で、資質の傾向として「人間関係構築に強みが多いタイプ」と「戦略的思考に強みが多いタイプ」に二分されることが見えてきました。

人間関係構築型のメンバーは「考えが深い人ってすごい」と言い、思考型のメンバーは「コミュ力が高くて尊敬する」と話すなど、相互の価値を認め合うフィードバックが生まれました。

また、「自分の強みを当たり前と感じやすい」「なぜこんな簡単なことができないの?とってしまう」といった、自覚の難しさや他者比較の傾向も浮き彫りになりました。

そこで、「過去の自分と比べてどうだったか」に意識を向けるよう促すことで、他者比較ではなく、内省できるようにな視点も共有していきました。

4. 気づきと成果

この 3 ヶ月の取り組みを通じて、さまざまな変化が見えてきました。

たとえば、あるメンバーは、自分の強みを理解したことで他者と比較することをやめ、「自分の出番」を意識するようになりました。これまでであれば黙って見守っていたような会議の膠着状態の場面で、「この状況は自分の出番かもしれない」と感じ、新たな提案を発言するようになりました。その発言によって、会議の流れが前に進んだこともありました。

- ・ 強みによる自己理解と他者理解の向上
- ・ 比較や競争から「補い合い」への意識転換
- ・ チーム全体の雰囲気が協力的に変化している

目に見える成果はまだこれからかもしれませんが、メンバーの表情や発言、チーム内でのやりとりに「変化の芽」が確かに育っていると感じています。

5. おわりに：優しく強いチームを目指して

この取り組みを別の会議で紹介すると、「よくそんな時間があるね」「時短勤務なのに？」と言われることもありました。実際、わたしは時短管理職です。それでも時間が限られているからこそ、無駄を省き、意味のある時間の使い方を大切にしています。

ダラダラとした雑談ではなく、ワークシートの事前配布、1on1 の丁寧な準備、ストレンジスファインダーや AI ツールなどの活用。これらの工夫が、「優しく強いチームづくり」の一助となっています。

職場でやっていることを、家庭でもやれたらいいなと思うことがあります。子育てもまた、チームマネジメントと重なる部分が多いのです。

これからも働く母ちゃんとして、試行錯誤を楽しみながら、チームと家族のどちらにも目を向けて歩んでいきたいと思います。

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

スポーツの場所で近年カメラによる判定が採用されるようになって観客も選手もモヤモヤが残る事はほぼ無くなった。『三苦の1ミリ』などはその代表例だろう。

ようになるらしいが自分の頭をポンポンと叩いて意思表示というのは何か可愛い。相撲をスポーツと言うのに抵抗のある人もあろうがNHKのニュースでもスポーツの時間に流れているからスポーツという感覚で見ると、足元

とともに体の生き死にが判定の中心となるがいずれは全てをAIが判定するという事になるとそれはそれでちよつとモヤモヤする。



白黒のつけ方

以前は街中を歩いていて道を尋ねられる事がよくあったが最近はそのうことは殆ど無い。クルマには必ず置いていた大きな道路地図帳も見なくなった。
スマホ片手の外国人観光客が迷う事無く地下鉄やバスを乗り降りしているのを見ると本当に便利な時代にな

ツボ検索

つたものだと思う。
そういえば昔子どもが学校で提出する個人票には学校までの地図を描き込むスペースがあった。
今は個々に出力した地図を貼付けるようになっているらしい。
将来はQRコードになりそうだな。



馬を駆る

流鏝馬（やぶさめ）は京都では下鴨神社が有名だ。近年、流鏝馬はちょっとしたブームらしくてそれぞれ押しの射手を追っかけるファンもいる。確かにその装束も含めて疾走する姿はとても勇壮でカッコいい。

馬を走らせるという事では伏見区の藤ノ森神社にもよく似た神事がある。駈馬（かけうま）と言われ、こちらは矢を射る事はしないが様々な姿勢で馬を走らせ、それらは戦場での馬上の動きにつながっているという。そしてここは勝運の神社として関西の競馬ファンにはよく知られている。そう言えば京阪沿線にはこの二つの他に淀の競馬場があり、京阪電車の相性『おけいはん』は『お競はん』ではないかと思ったりするのだが、これはちょっと強引かな。





地縛霊

夏は各地にお化け屋敷ができるし怪談話も多くなる。

漫画やアニメの世界では妖怪がアイドル並みの人気者になったりしている。

私が地縛霊とか背後霊とかいうものを知ったのは少年マガジンに連載されたつのだじろう氏の『うしろの百太郎』だった。連載開始が1973年ということなのでもう50年以上前である。

人には見えていないがこの世界と重なってもう一つ別の世界がある、という考えがある。

鎌倉時代の国宝『餓鬼草紙』には人間のそばにいてその排泄物を口にいれようと待ち構えている何人もの餓鬼が描かれているのは有名だ。

私自身は霊感が強い方ではないのでそんな得体の知れぬものを見たことはないのだが亡くなった妻は若い頃から霊感が強くて時折、霊を感じるものがあつたし見えると良く言った。Aは人間の積み上げてきた膨大な知識やデータを吸収して答えを出すのだが、果たして霊感はどうなんだろう。

コレばかりは、語ることはできても感じるのは無理だろうな。

目玉オヤジの居場所



この目玉親父のキャラクターには愛着がある。大学2回生の春、産経新聞社が募集した1コマ漫画のコンクールで授賞し、その時に副賞として鬼太郎の人形を頂いた。30センチほどのその人形の胸を押すと「ゲ、ゲ、ゲゲのゲ〜♪」と歌い出す、当時としてはなかなか新しい仕掛け玩具で金色の前髪をあげると左目には大きな穴があいていてそこに目玉オヤジの人形がすっぽりはまっているいささか不気味な人形だった。それは結婚後も書斎の本棚に長い間飾っていたが、二度目の引っ越しの時に目玉オヤジだけが行方不明になった。片目が空洞のままの鬼太郎人形はその後、劣化もあって今はもう残っていないが、時々あの目玉オヤジは今頃どこに居るのだろうかと思うことがある。

川下の風景⑱

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【明日という不確実性への希望】

モビールという北欧あたりの玩具がある。幼子はベッドの上で、糸にぶら下がった何頭かのクジラを眺める。空中に漂う一頭のクジラが、春の心地よい風でゆれれば、糸で繋がった他のクジラもゆれる。勢いがついて全体が大きくゆれれば、一頭のクジラは大波に飲まれるように大きくゆらぐ。私たちの暮らしとはそういうもので、事象も人の暮らしもどこかの誰かと繋がっている。“ゆれる”ことを問題とするなら、原因は心地よい風だから窓を閉めればいい。しかし、次は暑さをしのぐエアコンの風かも知れないし、動かないクジラに苦情を申し立てるように泣く幼子の大声かも知れない。つまり、“ゆれる”という不確実性について問題を論じたところで、それを回避して暮らしを営むことはできない。

一方、安定しているからこそ“安心”がある。天気予報のように、今日と同じ日常が繰り返されること。変わらぬ自分が明日も存在する、そんな根拠のない希望的観測があるから自己維持していける。人間の表皮細胞が毎日四千万個ずつ生まれ変わることを知っていれば、昨日の“私”は今日の“私”ではない。私たちの暮らしは“変化と安定”で構成される、という事実さえ知っていれば、目の前の桜は去年の桜とは異なる。4月、環境が大きく変わり、不安に挫けそうになる人へ。大丈夫、明日は変えられるし、明日はおそらく同じようにやってくる。

【変わらないことを愉しむ】

春の夜長とは言わないが、ここ三ヶ月ほどルーティンにしていることがいくつかある。平日の週2～3回程度の夜ランニング。大した距離じゃない。僅か7キロ程度を40分程かけて走る。そうしておく週末の山行が随分楽になるし、できるだけ遠くに、高く登りたいと思えばこそ、スピードと体力を欲している。就寝時は落語をBGMにするようになった。興味がなかったが、話術の習得の為に聴いている。専門学校の教壇に立つようになって12年目になるが、勢いで語るには限界もある。落語は学ぶべき点が多い。呼吸で物語が変わる。少しずつでも本を読む。スマホをいじる時間があれば、本を読んでいる方がいい。月2冊を目標としているが、まあぼちぼちだ。ようやく村上春樹の長編が終わる。実用書と小説、これを行ったり来たり。アウトプットも欠かせない。人は言葉で物語を作る。意図的にその機会を作らないと身に付かない。4月から新たな講師生活が始まるので、毎年の資料を改変していく。同じ教材でも、インプットした分、必ず視方が変わる。どれだけ世の中が変わっても、変えない方が良いこともある。生成AIの技術がどれだけ進歩したとか、株価が乱高下しているとか、流行りのタレントがどうか。私のルーティンに影響を及ぼすことはない。どうせ5年も経たないうちに世の中はまた変わる。名作と古典落語と、悠久の山々は何も変わらない。変わらないことを愉しむ春だ。

【94歳の介護認定更新調査立ち合い】

ない。

介護2だが、下がってもサービス利用に支障は

ただ、それを支える妻も同じく高齢者だ。

評価としての認定が下がることは、良くなったという実感以上に、自分たちの暮らしが過小評価される心持ちになる。

調査と言うと張り切るお年頃だから、

「何でもかんでもできる、と言うちゃいかんよ」と老夫婦にアドバイスしておく。

案の定、94歳は役者だから、なかなか大袈裟な年寄りになってしまう。

「いや～立てへんわ。歩くのも困る」

しかし、調査が長くなるとあちこちで辻褄が合わなくなるし、余計に調査が長くなって、挙句の果てに、

「ちょっと、トイレへ」と歩いて行っちゃう。そこは、長年連れ添った老夫婦。阿吽の呼吸で妻が素早くリカバリー。誉められた光景じゃないけど、私は別に何も言わない。ちゃんと日常の暮らしがここにあるじゃないか。「介護の時間」で暮らしを計るとはこういうことだ。

【母、息子の親子喧嘩】

老健のレスパイトから帰宅すると、必ずこれが起こる。最早、イベントのようなものだ。そのたびに出向いて行って、親子の間に割って入って双方の話を聞いてやる。毎回、結論も変わらない。中長期の展望を述べてやる。それでまた、レスパイトに入って行かれる。こうして在宅生活は細々とやっている。

【家族が親の施設入居を決めた】

それを私に同意を求められても困る。更には、「これを本人に説明した方がよいか、どうか」で夫婦の意見は異なるらしい。認知症により短期記憶が著しく低下していくが、きちんと説明しておきたい嫁と、結局、そのプロセスに意味を見いだせない息子の意見の食い違い。

これも、家族の好きにされればよい。ただ、円満な合意というのは難しいだろう。翌日には忘れてしまうのだ。そもそも、生きている時間軸が異なる。家族の贖罪の為にやるのなら、やらない方がよい。姥捨て山に登る際、息子に負われた母は道中の枝を折った。帰り道、息子が道に迷わぬように、と。負われる老親の心持ちは誰にも分らない。

施設入所の段取りは全て家族にやってもらう。自分たちの親を預ける場所だ。見学から申請まで家族がやるべき作業だ。「いい人」病のケアマネはそれを代行しようとするが、それは家族の力を奪っている。行くも、戻るも、家族が決める責任と権利を持っている。それを奪ってはならない。

【不思議なもんだな】

毎年見てるのに、今年も心待ちにする。季節は私たちの心境や生活に変化をもたらす。引きこもってた人がふらっと陽気に誘われて外出してみたり。認知症のある方が、急に話し出してみたり。家族は「薬を変えたから」とか「これをやめてみたら」というキッカケを思い出して喋ってくれる。そんなこと、今までもやってきたし、すぐに状況はまた変わるかも知れない。思うに、春のせいだとも思う。

陽気が高まると、介護者の心境も変わる。介護者に余裕の隙間ができると、ちゃんとそれはクライアント本人に伝わる。それでも当人たちがキッカケを思っただけならそれでいい。

「そうか、よかったね」と聴いてあげるので良い。他に誰が言えるんだろう。

援助者の大きな役割でもある。

2025.8.25 米津達也

こころ日記「ぼちぼち」その④

戦後生まれ

今年は戦後80年と言われ、メディアは戦争をテーマにしたものを多く取り上げている。もう「戦後」という言葉は死語だと言う人もいる。歴史の域に入っているとも。

自身は戦後8年後に生まれだが、幼かった頃を思い出すと、周りに戦争の跡を感じるものはほとんどなかった。昭和20年からの日本の戦後復興は、すさまじい勢いと速さで進んでいったのだと思う。

戦争を身近に感じたのは、父が40代にして出征したと聞いたことだ。九州の南端から戦地に向かう寸前に終戦を迎えたので、戦地には行かずにすんだ。おそらく南方の激戦地に行ったに違いない。死を覚悟した父は、やれやれとでも思っただろうか。

「鉄砲も持たされず食料もなく、勝つわけがないと思いよった」とお酒が入るとよく言っていたのを思い出す。

我が家は、兄弟親戚、父の友人などが集まりよく宴会をしていた。近くにあった京都大学の学生を下宿させていたこともあり、人の出入りが頻繁だった。若い人達を交えての宴会は、必ず先の戦争が話題になった。白熱してくると、政治の話から日本国のあり方まで議論が始まる。難しい話だったが、大人たちの会話の時間が何より面白かったのを覚えている。戦争のリアルさを教えてくれたのは、家族や戦時下に暮らしていた身近な人達だった。

家以外で戦争があったのだと感じたのは、近くの神社の祭りに行ったときこと。傷痍軍人と言われた人が、軍歌を流しながら物乞いをする姿を見た時だった。何となく怖さを見てはいけないうものを見てしまったという感覚に襲われ、思わず父親に「あの人、何してはんの？」と尋ねたことがある。父は顔を曇らせただけで、何も答えてはくれなかった。学生のころまでそのような人を時々見かけることがあったが、ようやく戦争と結び付けて考えられるようになった。

高度経済成長の中、戦争を語る人が少なかったが、今ようやく「語り継ぐ」ことが注目されている。

そういえば小学生の頃、戦争を経験していた先生が多くいたと思うが、私たちに戦争についての話をしたことがあっただろうか。

国語の教科書には、戦争をテーマにした教材はあったが、具体的に戦争の悲惨さや被害など、教員の口から聞いたことはなかった。あえて口にしないという暗黙の雰囲気があったのか。戦中の軍国教育と戦後の教育との隔たりに、教員を辞した人も多かったと聞く。思春期の頃、「戦争を知らない子どもたち」という歌をよく口ずさんだが、戦争のことは何も知らないし、知らされてもいないなあと思ったのを覚えている。

あの頃の教員は、様々な権利を獲得するために労働運動にも邁進していた。5月1日のメーデーには、ほとんどの先生はいなくなっていた。子どもたちは、「先生いってらっしゃい！」

と見送り、その間は、静かに自主学習。先生たちは、私たちのために頑張っているのだと思っていた。当時の教員は、戦後の教育に何を期待し、頑張ろうとしていたのか思いを馳せたくなる。

戦中・戦後の産めよ増やせよ政策によって、私より5つくらい上は団塊世代と言われている。その余波で、私たちの世代も学級数が多く、学級は50人くらいいたのだろうか。とにかく子どもがうじゃうじゃいて、学校は私にとって落ち着く場所ではなかった。

何よりいやだったのは、私は集団行動が苦手だったので、要領が悪くよく叱られたことだ。体育時の行進の足並み、集会での並び方などなど、皆と揃えて活動することの苦痛、不満ばかりだったように思う。

修学旅行の時、トイレに行ったら、すでに皇居前での集合写真の撮影が終わっていたということもあった。その当時は、一人くらいいなくても問題にならなかったのだろ

う。私もあえて「写っていません」とは言えなかった。

学習の中でも、例えば絵を描くとき、肌色は朱色と白と決められていたが、なぜか納得できなかった。人によって肌の色は違うぞ。友だちの顔を描いた私の絵だけが、茶色系になっていた。決められた色を使わなかった私を、担任は稀有な目を見たのを忘れない。

末っ子でもあり、大人の中で育ったせいか、同年の子どもたちとはあまり話が合わなかったし、ちょっと大人を舐めたような態度は、先生から嫌われる要因だったのかなと思う。

当時の教員は今とは違う大変さがあった。プリント一枚一枚すべて手書きのガリ版印刷で、時間がない時は子どもたちにも声がかかり、職員室で、インクまみれになりながら手伝ったりもした。だからプリントはとても貴重だった。

2年生の時、私は学校の帰り道、溝のタニシに夢中になり、紐で綴じた九九表をうっかり忘れてしまった。慌てて探しに戻ったが見つからなかった。先生からは厳しく叱られ、再度プリントをもらうことは叶わなかった。泣く泣く家で九九表を作った。それがあったから、九九が覚えられた。怪我の功名とはこのことだろうか。

小学校時代のエピソードはいっぱいあるが、振り返ると常に雑に扱われていたなと思う。

大勢の中で目立たぬように悪いこともしたし、危険な目にも遭った。褒めてももらえなかったけれど、自分のことは自分で何とかする、できる力をつけてもらったと思う。

変わらない学校

今年、久しぶりに小学校で働く機会を得た。学習支援員として困った子に声をかける仕事だ。私が育った学校、現役で働いていた頃からすると学校は変化しているが、変わらないこともたくさんあることに気づく。

子どもが減っているというのに、学級の人数は、相変わらず35人以上。現役だったころ、一クラス20人なら毎日全員に声をかけ

ることができるのと思ったものだ。一日の終わりに、今日は〇〇さんいたかな、何をしていたかなと振り返ることが多かった。

子どもの体は大きく成長しているのに、教室の大きさは変わらない。教科書はすべてA4判になり、机の上にちゃんと置けずはみ出している。しかも今IT化が進み、全児童生徒にクロムブックが持たされているので、筆箱とノートを置くと、机上は混雑極まりない。タブレットは本当に必要なのかと疑問を持つ。

学校内には、実に決まりごとが多いと改めて思う。廊下は走らない、曲がり角の飛び出し坊やのイラスト。階段一つ一つに全国都道府県名が貼られ、知識のオンパレード。それに加え、学校目標、行事のスローガン。子どもたちへの頑張れのメッセージが満ち溢れている壁面に、疲れてしまう。

驚いたこともある。教室掲示の子どもたちの絵画が、同じ構図、同じ色の作品ばかりなことだ。肌色を正しく描かなかった昔の私を思い出した。誰も疑問に思わずに、あっち向いてホイ！と言えば、みんな同じ方を向き同じことをする、させる教育なのだ。私もそんな教育の一旦を担っていたのだと思うと、過去を猛省する。

日本の子どもたちは、ノーと言うことが苦手だ。そして自己肯定感も低いと言われる。

子どもの人権を考えると、教育を変えない限り社会は変わらないと思った。

つつく

スクールソーシャルワーカーの仕事③ みおちゃんとの面接

みおちゃんは、私がスクールソーシャルワーカー(以後 SSW と表現)として、初めて関わった女の子である。出会ったのは小学校4年生の1学期。3年生の3月から登校できなくなり、4年生になってからは1日も登校していなかった。学校からの支援依頼は「不登校への対応。不登校の解消に向けて学校として今後の対応をどうしていけばよいか」という相談主訴だった。

SSW として初めて担当するケース。不登校のこどもとは、職場のフリースクールで関わってはいたが、「不登校の解消」に向けての支援経験はなかった。「解消」という依頼に、正直こたえられるだろうかと不安があった。とにかく、まずは情報収集からと学校訪問し、これまでの支援経過をお聞きした。そのうえで、最初はお母さんと面接を実施し、状況のアセスメントに取り組んだ。そしてお母さんの思いを元に、ケース会議を開いて先生方とアクションプランを検討した。

迷いが多くあった。なかでも一番の迷いは、本人のみおちゃんと会っていないままのアクションプランを作成したこと、みおちゃんの声聴いていないことだった。担任の先生が週2回、家庭訪問を実施していたが、本人とは会えていなかった。SSW がみおちゃんと会うことをお母さんに提案したが、「今は、ちょっと・・・」「みおとは・・・会うのは控えてほしい。あとから荒れるかもしれないし。」と同意が得られない。クライアント本人と面接できないまま、ソーシャルワーク支援をすすめていけるのだろうか。クライアントは誰なのか？お母さん？みおちゃん？学校の先生？そんな迷いも生じて、なんとか主演のみおちゃんに会いたい、面接をしたいとモヤモヤする日々だった。みおちゃんがどんな思いを抱いているのかを本人から聴きたい。直接声を聴くにはどうしたらよいのか。その一方でソーシャルワーカーとしての経験はあるものの、子どもとの面接はほとんど経験なく、面接スキルもないと認識していた。

お母さんは、本人の思いを尊重し、「みおが話したいと言ったら、高名さんに会ってもらいたい」と伝えてくれていた。あせらず、その機会をひたすら待つしかなかった。

依頼から5ヶ月、そのときがやってきた。お母さんとの面接で「最近、怖い夢を観るから寝るのが怖い」とみおちゃんが話していることを聞いた。その数日

後、「その怖さを誰かに聴いてもらいたいと娘が言っている、高名さんのことを話したら、高名さんに聴いてもらいたいと言ってます」とお母さんから連絡があった。そしてみおちゃんと会うことになった。

念願の本人との面接、私の緊張は半端ない。しかしみおちゃんもまた緊張していた。その時の場面。

12月だというのに、素足にサンダル、ロングTシャツのようなワンピースに黒いカーデガンをはおっている。薄着。面談室で母と並んで座る。終始うつむいているが、ときおり顔はあげてくれる。お母さんは、みおちゃんの背中をさすったり、腰に手を回したりしてスキンシップをはかりながら、代弁したり発言を促したりしている。

みお：緊張しすぎて、なんにもしゃべれないかもしれない。

と最初に口にしたが、母の促しでかなりたくさん自分の言葉で、状況を話してくれた。お母さんがみおちゃんの顔をみながら話してくれる。

母：怖い夢を見るのがいやで、寝るのが怖いんだよね。それをどうにかしたいと思っているんだよね。女の先生なら話せるというから。月曜日に高名さんのことを話ししたら、聴いてもらいたいって思ったんだよね。

みお：うん。(高名さんが)どんな人かわからなかったし。ほんとはこんなこと、ママにも話したくなかった。ばあばのうちにいくとき、パパがイライラしていて。「みおの荷物が多い」とか言い方が強くて。それが怖い。寝る前になるとそんなことを思い出して怖くなる。パパはイライラしやすい。でもイライラしてほしくない。みおはまだ10歳だから。一人暮らししてみたいと思ったりするけど、それはまだ無理だから。ばあばが「ママと二人ではあばのところにくれば？」って言ってくれたから。

母：私が入院中に、そんな話を娘とばあばとでしたみたいなんです。私は直接聴いたわけではないので・・・

みお：ママ以外の人と話したかった。ママがいない間、ママと話せなかったし。ばあばの家にいるときは、パパがいなくてばあばとたくさん話しができた。ママが帰ってきて(退院して)、ママがいなかったときのことを誰かにきいてもらいたかった。

初回面接はこんな展開だった。初めてみおちゃんの姿をみて、そして声を聴くことができた。相槌と促しで、ひたすらみおちゃんの話す言葉に耳を傾けた。

お母さんが急に入院することになって、父と二人で過ごしたり、母方祖母の家で過ごしたりしたあとのことだった。お母さんのいない生活をなんとか乗り越えたみおちゃん。話題は学校のことでなかったが、みおちゃんの世界を少しだ

けのぞくことができたように感じた。そしてここからみおちゃんとの関係が始まった。

面接後お母さんより以下のメールが届いた。

『昨日もありがとうございました。帰宅後から、前日までとは違い、パパとクリスマスプレゼントを調べて、お風呂も私とは入らず、パパとお風呂も入ったり。寝る前に不安を訴えることもなかったです。高名さんにじっくり話を聞いてもらって、安心できたからかなと。今朝、娘に聴いてみたら、やはり話を聞いてもらって寝るときに不安にならなかったし、怖い夢も大丈夫だったと話していたので、昨日高名さんとお会いできてよかったと思っています。』

『日曜日に娘が話していたのですが、「学校も勉強も嫌だし、学校で嫌なことも色々あって学校にいかなくなったけど、それでこんなふうになると思わなかった。学校に行ったほうが友達とも遊んだりできるし、よかった。でも、今は学校に行くのは無理。友達とかにどう思われているかもわからないから。怖い。」と泣きながら話していて、娘のずっと抱えている寂しさや辛さがわかりました。この寂しさや辛さがなくなるように、また少しずつ学校や友達とのつながりを作っていけたらと思っています。』

SSW との面接が、ほんの少しだがみおちゃんの不安解消につながったようで、ほっとした。お母さんは、みおちゃんが抱える課題（父との関係、学校や友達との関係）を受け止め、解決に向けて努力する姿勢を示してくれていることが伝わってきたメールだった。

自分の関わりが、みおちゃんにとって良い変化を生み出してくれたらと願っている。



miho Hatanaka,

小学校で性教育の講師として話をし始めた頃、この授業のことを「いのちの授業」と呼んでいた。「ころとからだの性教育」というようになったのは、大学院で論文を書くようになり、ゼミで曖昧さを指摘されて言葉や定義を自分なりに問い直したという経緯がある。「ころとからだ」。それを考える授業での「いのち」の詩。今回も、二編を。



【第19話 いのちのうた 4 : こどものコトバ】

私の行う性教育では教材はなるべくリアルな体験に結びつくようにと考えており、自分の体と結び付けて捉えられるように工夫を重ねてきた。例えば妊婦の疑似体験用の“お腹”は3kgの米。教材用に販売されているシミュレーターもあるが、自身の4回の妊婦経験からも米のフィット感やリアルな体感にはなかなか及ばない。また米は大切な食べ物として命を感じさせるものであり、疑似体験とは言え粗末には扱わないものを用いたいという想いがあった。胎児の人形も自作して、その“体内”には川で拾った丸い石を納めた。こちらも市販の人形はどうも“かわいらしく”てリアルさに欠け、妊娠3か月と8か月の胎児人形の、顔の表情が同じなのはともかく、頭身が同じなのは違和感があった。遠方での授業で人形が持参できない時には細密に描いた絵を用意したり、実際の妊婦さんに授業に参加してもらった時には胎児の心音を聴いたりしたこともある。そのトコトコと小さく打つ心音に耳を澄ませた後、自分の心音とを聴き比べさせると、ゆったりと大きく打つ音に子どもたちは喜んだ。手の脈をとり、呼吸の度の胸やお腹の膨らみやへこみを感じ、手の冷たさや温かさを感じ、体を支える骨や子宮の収まる骨盤を触ってみて、自分の体と結びつける。性教育は「どこかの誰か」の話ではなく、「あなたのからだ」の話なのだ」とわかってもらえることが、最も大切なことかもしれない。

「いのち」

作：K 小学校 4 年生のみなさん

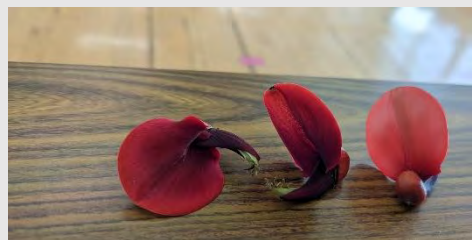
息をしていること
生きていること
家族といっしょにごはんを食べれること
友達といっしょに遊べること

「いのち」は、
人が生きていくための、体にたいせつな物
このよに必要な物

長生きする人は長く生きていく。(人生とおもう)
一生に一つの命
なくなると
二度と元にもどらない大切なもの
(しんぞう) うごかんくなったらしぬ。
だから大事にせないけん
「いのち」は、
一回しか使えないもの

自分
友達
動物
心
人間のいき
「いのち」は、
とうめいな色をしている

「いのち」は、
人間の弱点
神様がくれたしれん
人間がもっているもの
みんなにあるもの
生きるきぼう



Red-1

「いのち」

作：0小学校2年生のみなさん

いのちは、人をいきらせています。

それがいのちです。

いのちは大切です。いのちがなかったらしんでしまう。

いのちは、1こしかないから1回ころされたらもう、いきや、こきゅうもできなくなる。

なくなってしまったらしぬから、

からだのなかにないと、いけないものとおもいます。

自分のいのちは、いきてるためのいのち。

じぶんが生きるためのどうぐみたいなもの

いのちは、むねにある。

あるいたりすると いのちがドキドキしていると思いうかべます。

いのちはからだのエンジンみたいなものです。

いのちはたいせつなもの。

ものすごくだいじな、 体からまもられているようなもの

そして、

自分の大せつなものを

まもってくれるもの。

いのちは、人のだいじなうんめい。

ひとをたすけるもの。

二さいになってどうろにでていたら、たすける。

いのちをだいじにする人に

やさしさがくると思いました。

いのちは、うまれるもの

3ばん目の赤ちゃん

1人に1つしかないもの

生まれて一ばんせいちょうするもの。

いのちは、じぶんじしん。

だいじな心

いきる力

自分が生きるためのお母さんがくれた、

たからもののようなもの



Red-2

NO MANGA, NO LIFE.

著：高山かおり

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

はじめに

私は現在、幼児2人を育てている主婦である。以前は、対人援助職を養成する学校の教員をしていた。所持資格は、臨床心理士と公認心理師である。今回、研究室の先輩であり、職場の上司でもあった渡辺先生に声をかけていただき、原稿を書かせていただくことになった。大変ありがたいと思う反面、はたして、私で力になれるのだろうかと思いながら、筆を走らせている。

私にとっての漫画について

まず、今回のテーマである漫画についてだが、私は日頃から漫画を読む人間の部類に入ると思う。よく読むかどうかは、個人によって感覚が異なると思うので、より具体的に示すと、昨年は、1年間で700冊以上を読んでいる。どんなに少ない年でも、年間300冊は間違いなく読んでいると思う。以前は紙本派であったが、引っ越しが多いこともあり、現在は専ら電子書籍である。

私にとっての漫画は、趣味であり、癒しであり、生きる糧である。

しかし、多くの漫画を読んではいるものの、今回原稿を書かせていただくにあたって一番躊躇した点は、漫画で学びを得ようと思いつきながら読んでいないということである。何かを学ぼうとして読もうとすると、疲れてしまう。ただひたすらに漫画の世界に没頭しているのがある。

漫画と学び、そして対人援助への繋がりについて

ただ、結果論ではあるが、学び等に繋がったことは幾度もあったりする。

対人援助に繋げるならば、他者と話をする際の話のネタとして、漫画で得た知識が活きることが多い。

たとえば、漫画の登場人物たちは個性的な名前が多いため、難しい漢字や珍しい名字の読み方が自然と身についたり、妖怪の名前や兵器の名前、カクテルの種類、スポーツのルール、方言等、超インドア派である私が普通に生活しているだけでは、なかなか出会えないような知識に触れ合えたりする。

もちろん、漫画ファンの方であれば、作品そのものの話もできるため、コミュニケーションをする際の、話の引き出しには、あまり困ったことはないかもしれない。

また、漫画がきっかけで、学びにつながったこともある。私は大学で、第二外国語に中国語を選択したのだが、きっかけは、小学生の頃に読んだ中華系をモチーフにした漫画である。「ありがとう」の言葉が「谢谢」と知り、中国語を勉強してみたいと思ったのだ。なおその後、香港漫画にも興味を持ち、広東語を少しかじるようになり、今は韓国漫画がアツいこともあり、韓国語もかじりはじめています。

漫画がきっかけで、私の世界は、より広がっていると感じるが、もちろん注意しなければならないこともある。漫画に限ったことではないが、内容の全てが必ずしも正しいわけではないということである。

たとえば、かつて読んだミステリー漫画では、カウンセラーが薬を処方していたり、恋愛漫画では、カウンセラーとクライアントが恋人関係になっていて、ひっくり返りそうになったことがある。自分の関連領域であれば、間違いに気がつくことができると思うが、他領域となると難しいかもしれない。

もちろん、漫画作品の世界は、必ずしも現実の法律等と一致するとは限らないのだが、怪しいと思ったり、気になった時は、その都度調べるようにしている。

なお、漫画家の先生たちも様々な背景を持った方が多数いらっしゃるため、ご自身の経験を題材にして描かれていたり、入念に取材をされる先生もいれば、医療系や闘病系の漫画であれば、医師等の監修者がついていることも珍しくはない。近頃は、無理に漫画で何かを吸収しようとしなくとも、自然と漫画で学べるようになっている作品が増えてきている気がする。

私の神だと思う漫画（以下、神漫画）について

最後に、勉強をしているつもりはないのに、読者は、いつの間にか学習している神漫画についても書いておきたい。何がすごいかというと、一番は、記憶の持続性である。私は、幼少期にその作品に触れてから、30年以上保持し続けている。仮に忘れそうになっても、キャラクターの名前から想起しやすく、再認はもちろん、再生でも、間違えることはない。

その神漫画の名前は、武内直子先生による『美少女戦士セーラームーン』である。主人公

は、月野うさぎという名前であり、セーラームーンに変身する。仲間の水野亜美はセーラーマーズ、火野レイはセーラーマーズというように、それぞれのキャラクターは、太陽系の衛星や惑星がモチーフになっている。月は Moon、水星は Mercury、火星は Mars といったように、セーラームーンの読者であるならば、冥王星まで、英語名で衛星や惑星の名前が言えるのである。

なお、当時は、英語を勉強しているつもりは全くなかった。夢中で漫画を読んでいるうちに、キャラクターたちに魅せられて、自然に覚えているのである。

教員時代、楽しく学べて、かつ記憶の持続性が保たれる授業ができたと思っていたが、実際は非常に難しかった。私にとって、理想的な教材であり、不動の神漫画なのである。

おわりに

先述したが、私は今、主婦をしている。そろそろ社会に戻りたいと思っても、子どもが体調を崩しやすく、1週間に1日以上幼稚園を休んでいることが多いため、現実的には難しいと感じている。

ただ、主婦であることで、多くの主婦の方が直面するであろう不安を体感できていることは、ある意味良かったかもしれない。働きたくても様々な事由で働けないこと、周囲が働いている中で自分だけが置いていかれているような感覚に陥ること、ブランクが長くなる中で今後本当に働けるだろうか、そもそも仕事は見つかるのだろうかという不安等、日々様々なことに悩んでいる。

しかし今は、割り切るしかない。子どもたちを日々生かすことが仕事であり、今後仕事をする上での、充電期間だと思いうようにしている。そして、再び仕事に就いた際には、より様々な悩みを持つ方々の気持ちに寄り添えたらと思っている。

近い将来、自分も対人援助職としてリポートできるよう、今は目の前の家族を笑顔にできるように努めたい。もちろん、自分の元気がなければ、他者へ元気をわけることができない。そのため、私は今日も、自分の笑顔のために漫画を読むのである。

オススメ漫画紹介：

『スパあんこうの胃袋』（著：あきばさやか 先生）

→他者を気づかえるのに、自分自身には不器用になって
しまう。頑張るあなた寄り添う、深海魚たちによる
温かなおもてなしのお話。

<https://www.kadokawa.co.jp/product/322202000285/>



—つづく—

新・島根の中山間地から Work as Life

第5回

「災害と復興とケア」

野中 浩一



1. 輪島の2025年8月

島根から石川まで車で7時間、そして金沢市からバスで約3時間。輪島に行ってきた。(一社)生涯活躍のまち推進協議会から下記のような内容のメールをいただいたことがきっかけだった。

能登半島、なかでも輪島市および能登町で約3,800戸の仮設住宅の見守り支援を行っていること。

能登半島地震による直接死228人に対し、災害関連死は397人になったこと(7月9日時点)。

災害関連死の防止を主な目的として見守り支援をしていること、そして当該活動は災害支援に留まらない地域づくりにつながるものであり、4月20日以降、輪島市内3カ所で、地域住民に集会、食事、入浴、福祉サービス、雇用の場を提供するコミュニティセンターを立ち上げたこと。

このメールを見て、パソコンでボランティア登録を済ませ、ほんの10日間、見守り支援活動に加わってきた。

以下の写真は、決して被害が大きい特別な場所というわけではなく、私が現地で生活するうえで日々通っていた道を撮ったものである。(※1)





これらの写真だけを見ると、復興がまったく進んでいないのではないかと感じる人がいるかもしれない。

しかし実際に行ってみた感覚では、災害から 1 年半の間で地震や豪雨によって崩れた家の多くは片付けられ、主要道路の陥没やのり面のがけ崩れや仮設住宅の建設などライフラインにつながる復旧が驚くべきスピードで進んでいる印象であった。

それでも、今なお各所でトラックや重機が多数稼働しており、復旧または新興すべき課題が山積しているように感じられた。

◎これまでの災害復興の動きと今後の展望

内閣府 <https://www.bousai.go.jp/updates/r60101notojishin/1nenkan.html>

石川県 <https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kouhou/hot/motto-2025winter/dekigoto.html>

2. お風呂と食事で全員集合

ボランティアをしている期間、お風呂と食事のために通った「コミセン（コミュニティ・センター）」のマリントウン BASE では、定食を食べているときによく 1970 年代の曲が流れていた。ときに^{まどかひろし}門広志だったり、ときにドリフターズだったり。47 歳の私が生まれた頃の曲である。



この輪島のコミセン。一般的に言うコミセンとは作りが違う。お風呂と食堂がメインになっていて、そこに自由に集うこともでき、お土産の物販もある。

こうした生活になくはないお風呂と食事のインフラ機能を兼ね備えたコミセン。2025 年に 4/20 「コミセン マリントウン BASE」、5/4 「コミセン 門前 BASE」、6/8 「コミセン^{ふげし}鳳至BASE」が、復興の拠点として立て続けに作られた。

これらの施設は、2015 年 12 月、社会福祉法人^{ぶっしきえん}佛子園、公益社団法人青年海外協力協会によるジョイントベンチャーによる地域共生拠点「輪島 KABULET（カブーレ）」の相似形のような存在だ。

コミセンにお風呂や食堂があると聞くと驚くかもしれない。私は公民館やコミセンというと、市民活動をする場所という認識であった。

私と同じような認識を持つ人は、ネット検索で、第二次世界大戦後に GHQ が作成したナトコ映画を見てもらうと面白い。戦後の日本の公民館には、パン屋、歯医者、美容院など、その地域にないサービスを

実現したり、簡素な結婚式といった地域の慣例にない取り組みをしていたことが分かる（※2）。

◎ごちゃまぜで街づくり 地域共生拠点

輪島のコミセン BASE <https://wajima-kabulet.jp/info/163/>

輪島 KABULET <https://wajima-kabulet.jp/town/index.html>

3. 地震災害から１年半、豪雨災害から１年

能登半島の輪島市に 10 日間滞在して、仮設住宅の訪問支援のボランティアに参加させてもらった。
日々ボランティア数名が、仮設住宅を 2 人 1 組でまわりながら、お話を聞く。



写真は「一般社団法人 生涯活躍のまち推進協議会」のホームページより <https://shougaikatsuyaku.town/news/>

ボランティアの拠点づくりや募集をしている青年海外協力協会（JOCA）の職員さんと、集まったボランティアさん達と、仮設住宅を 1 戸 1 戸まわり、事前情報を勘案しながらお話を聞く。

ここで地震災害から 1 年半、豪雨災害から 1 年が経った今の能登の状況を、転出、仮設住宅、復興計画の観点から見ていきたい。

<転出状況>

輪島市、珠洲市、能登町、穴水町を合わせた奥能登地域では、「6 月 1 日時点の奥能登地域の人口は推計で 4 万 9052 人と、去年 1 月 1 日時点の 5 万 5213 人と比べ 6161 人、率にして 11.2%の減少となり、ふるさとを離れてほかの地域に移る動きが続いて」いる。わずか 1 年半の間に分かっているだけで 11.2%も転出していることの影響は小さい。2025 年の奥能登地域の 65 歳以上の老年人口の割合は 50%を超えており、生産年齢人口の流出により高齢化が加速している可能性が容易に想像される（※3）。

（NHK <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20250701/k10014849001000.html>）

<仮設住宅>

下記の写真のような仮設住宅に、被災した人々が暮らしている。「今回の地震では、石川県内で11万6282棟の住宅に被害が生じ」、「県内の地震の被災者9390世帯、1万9681人が仮設住宅で暮らしている。」

(毎日新聞 <https://mainichi.jp/articles/20250701/k00/00m/040/229000c>)

建設時期やエリアによって色々な形の仮設住宅があるが、1～2人用は1Kで4畳半一間と台所といった間取りである。なお、仮設住宅がどのように分布しているかは、下記ZENRINの地図を参照されたい。



画像は石川県のホームページより <https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kenju/saigai/r6oukyuukasetsujuutaku.html>)



ZENRIN 石川県応急仮設住宅マップ https://www.zenrin.co.jp/product/article/noto_kasetsu_map/index.html

<今後の展望と困難感>

震災から1年・豪雨から半年で約7000戸の仮設住宅が供給され、そこから半年を経た7月時点では被害を受けた3万棟以上の住宅が公費解体されるなど、復興への道のりは着実に進んでいる。

一方で期待されている公営住宅は、用地確保・測量→造成と設計→工事といった過程を経なければ建築できず、輪島では早くも令和10年以降の入居予定となっている。誰もが復興を急ぎ頑張っている中ではあるものの、最初の入居まであと3年というハードルが仮設住宅の高齢者に立ちはだかる。

◎復興についての情報

石川県 復興公営住宅の整備状況 https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kenju/fukkou_kouei_seibi.html

仮設住宅での暮らしについて、概ねにおいて満足している人、他所にも拠りどころや荷物の置き場がある人がある一方で、仮設住宅にしか居場所がなく、狭い中での家族との関係性の困難や、大病を患っていたり足腰を悪くしている中でしんどさを我慢しながら寝起きしている人もいます。

現在の仮設住宅に、実は空いている部屋（特に大人数用の空き部屋）があることやほぼ使われていない部屋があることを踏まえば、利用実態と困難世帯とを調査して再配分をすることで、公営住宅が入居可能になる3年後を待たずに、現状に強い困難を抱える世帯の利便性を上げることが可能になると思われる。

ただしこの被災地でも聞かれるように、同じ被災者同士、よそと比較してしまう状況や、それによる自己嫌悪、妬みや嫉みの感情がある。この点は非常にデリケートな領域であり、仮設住宅の再配分や公営住宅の入居選考において、この比較から生じる感情は、円滑な進行に水を差しかねない要因であろう。また、自身が住民でもありながら数々のクレームと向き合ってきた行政職員としても頭が痛い問題であろうと想像される。

被災から1年半が経ち、現在まで仮設住宅住まいをしている人の中には、やはり生まれ育った地元で暮らしたい人、もとの場所に家を再建する予定の人、すでに高齢で家の再建や他所に移る経済的な余裕がない人、病気がちだったり心身の障害があって出ていく意欲自体が湧かない人など、様々であると感じている。

仮設住宅住まいの高齢者の中には、都会地に息子または娘家族の家があり、そこに移り住むことを試したケースもある。しかし後日談として、実際に行ってみるとやる事がなくて辛い思いをしたといった話も少なくない。安全で広くて便利。自分の部屋もある。けれど、そこに自分がいる必然性がない。行ける場所があることは贅沢だと思いつつ、やる事がなくて辛さに耐えることはできない。自分の裁量で家事をする、できる範囲で畑仕事をする、当たり前家族の世話をし、顔見知りのご近所さんと話をすると目に見えない時間の積み重ねが、日々を支えていることが実感され、輪島に戻る。

豪雨で地域の姿が変わってしまったとしても、馴染みの「場所と人」、そして自分を取り巻く「関係と役割」があることは、日々を生きるうえで変わらぬ土台である。今回輪島に行き復興の様子を見聞きする中で、この「場所と人」「関係と役割」を再構築することの大切さと、そのための試みが随所に感じられた。

4. ケアをするではなく、存在がケアになる

震災と復興。その一部になりたいと考え、今回輪島を訪れた。私がなにかしらの行動をしたいと感じたのは、震災後の豪雨災害のニュースを見た時だった。復興支援や心のケアといった言葉があるが、実際に被災地に行く身として、正直何かができるような気はしていなかった。むしろ、地震と豪雨による家族、家、地域といった人生の大切な繋がりに対する圧倒的な被害と、1年半経った今もその影響を受け続ける人々がいる中で、何もできないかもしれないという思いがあり、しかし一方で何かできることがないか知りたい気持ちもあり輪島を訪れた。

私が輪島を訪ねた時点で、住む家があり、食べるものがあり、衛生状態も悪くない印象であった。ただし住環境や移動の利便性については、仮設住宅があるエリアの違いや、各家庭の事情によってかなり差がある印象を受けた。仮設住宅の傍には公民館や交流の場があり、そこでは高齢者向けの体操やレクリエーションが行われていた。さらに漁師や海女の仕事や輪島塗の仕事など、地場産業も少しずつだが着実に動き出している印象を受けた。そうした中でも災害関連死があり、訪問支援という役割があった。

たった10日間の滞在、わずか72時間のボランティア活動の中であつたが、長らく被災地に関わり続けてきた職員さんやボランティアさんの存在の力を日々感じていた。

どこにでも座り込んで笑顔で住民と話し込む人、高齢者にとって分かりにくい公営住宅の計画や家賃設定などを繰り返し繰り返し丁寧に解説する人、訪問している時間はとにかく楽しい時間にしたいと全力トークをする人、予定外や時間外でも関わった高齢者のその後が気になってしょうがない人たちがそこにいた。支援やケアといった形式ばったものではなく自分事として繋がりを結ぶその姿には、孤立や絶望や無力感に訴えかける強い力を感じた。

<注釈>

※1 写真

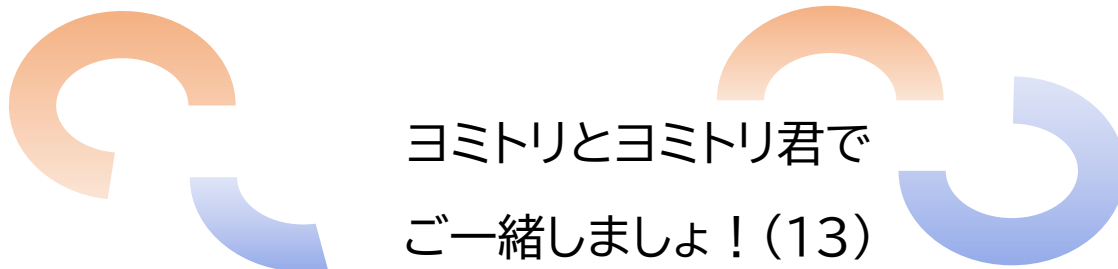
ボランティアの時間外に撮影した写真である

※2 ナトコ映画

この話は島根大学の社会教育士講座「生涯学習概論」の牧野篤先生の講義の受け売りであることをお断りしておきたい

※3 老年人口

日本全体の老年人口の割合は、2024 年 9 月時点で 29.3%である。



ヨミトリとヨミトリ君で 一緒にしましょ！（13）

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことです。技術と技能を心で繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

「失業の危機？！」

留まるところを知らないヨミトリ君の進化。支援依頼の件数の激増だけでなくご相談内容も益々多岐にわたり、その分技術的な課題も生まれますが、ピンチはチャンスに。大きく羽ばたくヨミトリ君です。一方、高木は…。直近 3 ヶ月の活動から学んだこと、感じたことをピックアップしました。

■「第 10 回介助つきコミュニケーション研究会」で発表しました

6 月に國學院大學たまプラーザキャンパスで「第 10 回介助つきコミュニケーション研究会」が開催されました。

同大人間開発学部教授 柴田保之先生による「介助つきコミュニケーションの現在」の講義に続き、指筆談を利用者さんとのコミュニケーションに取り入れている施設職員の方のお話、当事者とご家族による発表がありました。「コミュニケーションの援助をする側と当事者とが対等の立場で参加する」ことを旨とする同会の双方の参加者の思いが一つとなった素晴らしい会でした。

ヨミトリ君は昨年に続き紹介の機会をいただき、開発者の岡田さんが「その後のヨミトリ君」について発表しました。また、ヨミトリ君体験コーナーにも熱い関心をお寄せいただき、たくさん質問も受け、ありがたいことでした。目視では体の動きが確認できない重度の身体障害の方が体験され、すぐにヨミトリ君を的確に操作して「はい」「いいえ」の押し分けをすることができました。体験後に岡田さんに指筆談でとても軽く操作できてすごく良いと書いてくださり、またお一人ヨミトリ君の魅力をわかってくださる方ができてとても嬉しかったです。

前号でも書いた通り、ヨミトリ君は現在、いわゆる閉じ込め症候群(Locked-in Syndrome)の状態にある意思疎通が困難な重度身体障害当事者のわずかな動きを、ひずみゲージを用いた超高感度の圧認識でセンシングする他、脳波、特殊筋電でも取得し、PCやタブレット等のデバイス操作が可能になっています。今回このユニークな特長を発表の中でお話したところ、なんとご参加者の中に脳研究の学

生さんがおられ、体験コーナーに来られて「こういった演算をすればトリガーを取りやすいですよ」といった脳波に関する貴重なアドバイスをしてくださいました。本当にありがたいことでした。

もう一つの大感謝は、昨年も参加された指筆談デバイス開発中の技術者の方の質疑応答タイムでのお尋ねです。何かというと、昨年岡田さんは当時のヨミトリ君の課題として、ひずみゲージを用いる特性上、頻繁に手で数値のリセット操作をしなければいけないことを挙げたのですが、この技術者の方がそのことを覚えておられ、何らかの改善が為されているか現状について質問されました。実はこのご質問は本当に大切なところを訊いてくださって、今回の発表のテーマである「ヨミトリ君のその後」の中でも、特筆すべき大きな改善点の一つだったのですが、トピックとして入れるのを忘れた。オートキャリブレーションの機能を搭載したのです。これにより、介助者が都度リセットボタンを押さなくても、自動で高精度に位置のズレを数秒で復旧させることができるようになり、介助者の作業負担、当事者の「待つ」ストレスが大幅に軽減されました。岡田さんが質問への回答としてこの改善点を述べた時、会場に一瞬小さなどよめきが起こったほど、とても重要なことだったのです。流行りの言葉で不謹慎ですが、仕込みかと言われてもおかしくない程、すごくタイムリーな重要な質問をしてくださり、感謝感激でした。

■ヨミトリ君革命

さて、そんな日々進化を遂げるヨミトリ君の最新状況ですが、「指式ヨミトリ君」が開発され当事者の方々により検証中。そして続いて「手首式ヨミトリ君」が新たに開発済みです。これまでの、当事者の目視に至らないマイクロ・ムーブとしての押す動作を認識できることだけでも他に類を見ないすごい実用性だったのですが、ついに押さなくてもよいバージョンができてしまいました。

これには大きなきっかけがありました。関東方面でヨミトリ君の普及に熱心に取り組んでくださっている敏腕コーディネーターAさんのおかげで支援依頼が激増したことは前号で書きました。繰り返しになりますが、元々、病気や事故による脳損傷の重度の後遺症により全身性の麻痺で寝たきり、ほとんど体を動かすことができない方の手からの微小荷重を超高感度で認識するのがヨミトリ君の真骨頂ですが、Aさんが先行体験者のレポートを他のご家族も共有できるようにして下さったおかげで、支援後のレポートによって届けられる当事者やご家族の喜びのお声が反響を呼び、不随意運動のある方、急に想定以上の力が出てしまう方のご家族からもぜひ体験したいというご依頼を多数いただくようになりました。

岡田さんが実際に支援に伺うと、やはり不随意運動があるとヨミトリ君の操作が安定せず、また強い拘縮がある場合にはヨミトリ君の設置すら不可能なケースも出てきました。ヨミトリ君は無理でも、指筆談で当事者の方との意思疎通は可能なので、意思疎通不能で苦難の中におられたご本人やご家族にたいへんお喜びいただき希望を持っていただけのは大きな成果であるのは間違いありません。私は「指筆談で意思疎通できたのはすごいこと。すべての方にヨミトリ君が有効というわけにはいかないのでは」とつい思ってしまっていたのですが、岡田さんは納得されませんでした。「拘縮や不随意の程度が重い人も使えるヨミトリ君の開発を急ぎます！」と強い決意を表明されました。尊いご意志に私は涙しました。

そして、またまたエンジニアおそろべし。拘縮の強い手や不随意で揺れる手をヨミトリ君に沿わせようとするのではなく、その手の形状や動きにヨミトリ君を合わせられるようなデバイスをとの発想から、手に直接装着するヨミトリ君を開発されたのでした。まずは、指筆談で指の先端からの出力をキャッチする仕組みでデバイスを開発。当事者の皆さんの協力で検証作業を実行中です。その積み重ねに加え、かねてから仮説としていた「指筆談の鍵は当事者の指からの出力ではなく手首の動き」という考えから、「手首式ヨミトリ君」が開発されたのです。手首式ヨミトリ君はこれから検証に入ります。

しかもこれら一連の機器の完成が早かった。でも、決して偶然早く出来上がるわけではなく、早いのに理由はああるということがだんだんわかってきました。一つの実機が誕生し、それを当事者の方々に試していただいて検証し、改良していくという一見一つの流れのように思えますが、おそらく岡田さんは様々な事象を複層的に捉えながらその時その時の最適解を形にしているのだと気がついたのです。表層に出ない有力な物・アイデアがきつとたくさん控えているのですね。

そして衝撃的な知らせが入りました。最も新しい開発品として高精度書字デバイスができたとのこと。書字デバイスの開発はヨミトリ君 4 号で一旦ストップした、ように見えてしっかり継続されていました。ヨミトリ君 5 号、指式、手首式と、すべて繋がっていました。何度でも言います。エンジニアおそろべし。最新式は重度身体障害の方々が書字想起時に発出するマイクロ・ムーブの 16 方向の識別が可能とのこと。8 月は支援がお休みだったので本投稿時にはまだ実機を見ておらず、近々の披露が本当に楽しみです。

■支援のバリエーション

が、出来過ぎも困るのです。実のところ。発想からコンセプトの構築、試作機の開発、テスト、製品化までソフト・ハードの両面ですべてを自力でできるのが強みの岡田さん。そして指筆談をマスターした今はオールマイティ支援者！あれ、高木要らんやん…。過去号の投稿で「お払い箱もまた嬉し」なんて書いていた頃は私も余裕がありました。というわけで、現在はヨミトリ君支援は基本岡田さんの単独支援で進められています。そして「高木さんも一緒に」とご温情をいただいた時に私も嬉しく同行させていただいております。しかしニッチを攻め続ける人生はまだ終わりません！独自の嗅覚で人手が足りなさそうなところを探し当て、強引に活動の場をいただいて楽しく過ごしています。

2013 年に指筆談の勉強の開始とほぼ同時にボランティアとして関わり始めた脳卒中障害者のいきがいつくり NPO 法人ドリームでは事業の一つとしてカフェを運営しています。脳卒中の後遺症はさまざま、片麻痺、言語障害、感情失禁、高次脳機能障害など当事者が抱える困難さもさまざまですが、片麻痺等でも作業しやすい工夫された厨房環境で、マスター・ママさんとして皆お互いを尊重し合いながら連携し、誇りを持ってお仕事をされています。ボランティアは主にホールの接客を担当しますが、当事者スタッフさん達のサポートを通して多くの学びがあり、語らいを通じた交流も心が和みます。失語症のスタッフさんとお話しする時は、発話に時間がかかったり言いたい言葉と違う単語が出て来てしまったりするのを、なるべく自然な雰囲気や語句の候補を出してみたり、プレッシャーをかけないようにこちらから質問をしてみたり、この辺の対話のアプローチは遷延性意識障害の当事者の方々と指筆談で

話す時のすごいヒントになります。また、熱心に通ってくださる常連さんの他、最近はインバウンド効果で外国のお客様も増えて来ました。外国語での接客は錆びついた頭にすごく良い刺激になります。職員さんと一緒に外国語のメニュー表を作ったり、これも意思疎通の活動の一環！ということに。

■東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」

同じく2013年にご縁ができ、2022年から本格的に活動に関わっている東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」では、ヨミトリ君の活動が関東・関西地区のご依頼激増で、悲しいかなこのところなかなかヨミトリ君の空き枠が回ってきません。秋から挽回すべく作戦を練り中です。直近では、来月の会報の発行や10月に開催するBCI(ブレイン・コンピュータ・インターフェイス)に関する講演会の準備などでバタバタしていますが、どれもとても楽しみでワクワクします。

ひまわりでは隔週で定例のオンライン・ミーティングを開催していますが、先月入会された新規の会員さんが早速オンライン・ミーティングに参加され、率直な思いを語られました。ご家族が突然遷延性意識障害となったことに最初はただただショックで戸惑われつつも、当初施設入所のご意向だったのが、ひまわりで在宅介護をしている会員さんの様子を聞き再検討され、次のミーティングで、「やはりいつも家族の姿を見ていたい」と、在宅介護を決意されたことを話してくださいました。その後、同じくミーティングに参加されていた在宅でご家族を看ておられる会員さんが、「うちも在宅を始める時は何かと不安だったので」と、在宅介護を決意された新規会員さんにご自宅の見学を申し出てくださったり。孤立しがちな遷延性意識障害当事者とご家族ですが、「ひまわり」を一つの媒体として、痛みや困難を共有し情報を交換することで、当事者の皆さんが安心して日々を過ごし、ご家族の介護負担や心配が軽減されるように願うばかりです。ご家族とアイデアを出し合って、身近な介護やリハビリに関する身近なテーマで勉強会も開いていきたいと思います。指筆談の体験会や当事者の方々が意見を述べ合う東海地区版「きんこんの会」もやりたいなー。

■ヨミトリ君支援同行

そんな中、以前ヨミトリ君体験を受けられたご家族から、また来てほしいとご依頼をいただき、岡田さんと久しぶりにお訪ねしてきました。この間に、当事者のBさんはご家族とまばたきでの意思疎通を確立されており、いろいろなリハビリを取り入れられて体の動きも可動域が広がるなど、日々の工夫と取り組みの継続で着実に成果を上げておられました。これは本当にすごいことです。

岡田さんの単独支援で何ら支障はないのですが、高木が同行するメリットが何かあるとすれば、ヨミトリ君のセッティングや操作時の状態の確認、たとえば位置や感度の微調整を、操作する手と反対の手で指筆談で様子を書いていただくことで、リアルタイムで行っていくことができる点でしょうか。また、一つの機器での操作から別の機器でのゲームへの切り替えなど、機器の交換やセッティングを岡田さんがしている間の当事者の方との指筆談での雑談タイムは、ぼろっと本音を出されたり、ご家族との対話

を楽しまれたり、介助者として気づきの多い時間です。

前号の最後に、私はこう書きました。「表出の苦労なく話すように、語るようにあなたが自然に書くことができ、一瞬でもその閉じ込め状態を忘れて解放されるなら、あなたの傍らにいられることを私はただ感謝して、そしてうれしい」と。今回、図らずもBさんの方から「こうして話していると、すごく自然に書いて自分が話せないということを忘れます」と言っていただき、読み取っている時はとにかく指先の書字による荷重圧の増減と移動の認識に全神経を集中しているのでふいに言われたBさんの言葉は一瞬止まって、そして私の中に深くありがたく浸みてきました。

ただその後、「でもこうして話していただける時はいいけど、また話せなくなった時がかえってつらい」と続けられました。昨年の年次大会の企画ワークショップで発表した時も、意思疎通支援の大きな課題の一つとして挙げた「言葉が再び届いた喜びと、喜びが故に強く感じる介助者不在時のもどかしさという新たな試練」。一年経ちましたが介助者は圧倒的に不足したままです。

それでもね、Bさん、指筆談でお話しして、Bさんがしっかりとした考えを持ち、ご家族に感謝しそしてご家族を大切に思っていることは、ご家族、そして岡田さんも高木も確かにお聞きし受け止めました。あなたは書くことができる、話すことができるということに、どうか自信と希望を持ってください。ヨミトリ君操作への率直な感想もありがとうございました。課題点はしっかり持ち帰りました。日々の意思疎通はご家族と獲得した方法で深めていくという考えも理解しました。ヨミトリ君が更に使いやすくなり新しい発明ができればまたぜひ持って来てほしいという、ヨミトリ君との向き合い方もよくわかりました。今回呼んでくださって本当にありがとうございました。私たちは繋がっています。共に切磋琢磨していきましょう。

■第17回年次大会がんばります！

来月は対人援助学会年次大会です。ヨミトリ君の「今」をお届けすべく、今年もエンジニアの岡田さんを主発表者としてプロジェクトのメンバーでポスター発表に応募しました。選考の暁には、ポスターと共にヨミトリ君の実機を展示し、意識レベルが不明といわれる遷延性意識障害の当事者の方々がどのようにヨミトリ君を操作してその意思を表出しているかをご紹介します。特に、本稿冒頭で書いた、圧認識、脳波、特殊筋電で信号を取得、ユニット化されたモジュールを組み合わせる独自のシステムを知っていただけたらうれしいです。

大会初日最終プログラムの対人援助マガジンの交流会もとてもとても楽しみです。

そして大会で新たに会った方、再会できた方、指筆談やヨミトリ君に関心を持ってくださった方のことを遷延性意識障害当事者・ご家族の方々にお話しして、いろいろな形で社会と繋がっていることをお伝えできればと思います。

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性は常にあります！

あなたがわかっていること伝えたい。

情報を必要としている方、表出しているのにまだ伝わっていないあなたの大切な方に、指筆談とヨミトリ君が届きますように。

ご一緒にしましょ！

<https://www.goisshoshimasho.com/>

ヨミトリ君HP

<http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitokun-project/>

東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」

<https://pvs-himawari.wepage.com/>

<筆者プロフィール>

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「指筆談ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。「ご一緒にしましょ」代表。ヨミトリ君プロジェクト。東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」役員。第52回NHK障害福祉賞優秀賞。ヨミトリ君共同考案者。

備忘録～理事長の独り言②～

8月某日

園長交替のための理事会等の手続きもスムーズに進んで、4月から新しい園長の下で新体制がスタートし、新しい支援課長や主任も張り切って仕事をしている。

そんな中、かねての予定通り児童自立支援施設への移し替えということで中学一年生終了時点で退所したこどもが、慣例に従って2か月間児相の一時保護所で生活してから施設入所ということになった。それはいいのだが、その間、こちらの措置は解除せずに措置停止するとの児相の言い分。措置停止は定員上は入所しているというカウントになるので、定員の枠は埋まって、事務費は入ってくるが入れ替わりで新しいこどもは入所させられない。

またもう一件は、入所中のこどもの保護者が、入所措置の同意を翻し家庭引き取りを要求するという事態が発生。それに対応するために児相は、学園への入所措置は解除し、身柄を学園に一時保護委託する、ということにした。保護者との調整は児相が当たっていて、家裁の同意を得ての法第28条の措置も視野に入れているとのこと。この場合は、定員上は空きがあることになるが、実際は一時保護委託しているこどもがいるので、やはり新しいこどもは入所させられない。新園長も頭の痛いことだろう。

8月某日

里親不調ということで、中学1年生時に入所したこどもがいる。入所にあたり里親さんも児相の担当者も、「あなたが落ち着いたら、また里親さんのところへ戻れるから！」ということ話を話していた。そして、長期休みには一時保護委託でその里親さん宅への外泊を実施したりもしてきた。ところが、そのこどもが中学3年生になり、中卒後の進路を検討する頃になって少し雲行きが変わってきた。どうも「いずれ引き取るから頑張れ」というのは、当時暴れていて里親宅で面倒を見るのが大変になった本児を、なんとか当学園に入所させたいという気持ちから出た言葉だったようで、次第に、長期休暇の外泊も「無理！」になり、「外出で我慢してね・・・」ということになってきている。

そのことを責める気持ちはないが、退所後の引き取りが無理なら無理で、そのことを早くこども自身に説明し、そのうえで高校の進学先を決め、高卒後どのような生き方をするのかを検討しなければならないのに、その事実をこども自身に告げてその事実直面させることを、学園の担当も児相も避けているように見えてしょうがない。一人でヤキモキしているこの頃である。

実の親子の場合は、親子関係がどんなにガタガタになって入所したこどもでも親は親な

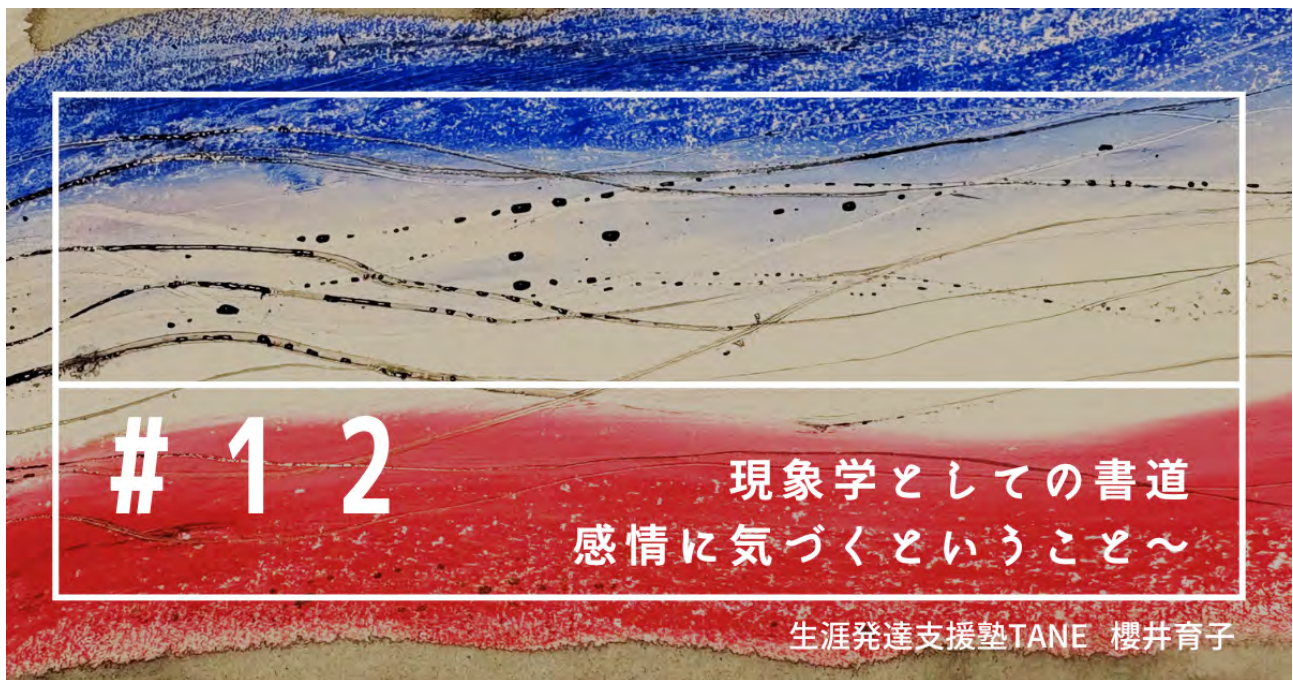
のだけれど、里親さんの場合は、委託が解除されてしまえば、そのこどもと関りを持ち続ける必然性がなくなってしまう。このことは、里親制度の問題だと思う。それにしても、このこどもがまだ幼い時に里親委託に同意した実親が、今はどこでどうして居るのか・・・児相は状況を把握しているのだろうか・・・それも気になるところである。

8月某日

カール・ロジャースの「カウンセリング」を日本に紹介し、その後、独自に「カウンセリング」という言葉で「人間が変わるということ」を追求し続けた友田不二男氏であるが、彼の主張の基本ベースの一つは、「因果論的な考えを人間に適用してはいけない」ということである。学生時代から縁が合って、その友田氏と「カウンセリング」を追いかけてきた。

ところが、これまで仕事として関わってきた児相や施設の現場は、「何故、そのこどもはそのような行動をしたのか、原因は何だ・・・」「原因が分かれば、手が打てる・・・」という、因果論的な考えが前面に出る世界だった。そのために、仕事の現場では因果論的な考え方をして、カウンセリングのワークショップや学習会の時はそれを引っ込めるという、二束のワラジを履くような生活を送らざるを得なかった。でもこれからは、「因果論的な考えを人間に適用してはいけない」という友田氏の非因果論的な考え方を、安心して追求できるような気がしている。

(了)



はじめに

この夏、「エドューケーターから学ぶフランス子ども家庭福祉」の5日間研修に参加した。そこで、放課後タイムの時間に「すみあそび」の体験会を開催をできたこと、あらためて安發さん、そして対人援助学会の皆様との出会いに感謝している。本当に出会いによって生かされている。次から次へと起きていくこの連鎖に、自分自身の「在り方」もまた考えるきっかけとなった。

エドューケーターの事例が示す「大人の在り方」

フランスでは、心理的社会的能力（compétences psychosociales）を義務教育に正式に取り入れた。感情を認知し、言語化する営み。そのためにまずは形にならない感情を表現することが重要であることを教育の中で伝えているというのだ。

「自分が身につけていないことは、子どもに伝えられない。」

スライドで紹介され、心に残ったのはいくつかあるが、最も響いた。これは単純だが、重みのある言葉だった。大人が自分の感情や弱さに気づけていなければ、子どもの繊細さや葛藤を肯定することはできない。かねがね伝えてきた、大人が自分の感受性を認めることが、対人援助の第一歩なのだというのをあらためて確認できた。実際のところ、わたしが教員になってからも悉皆の研修といえば、技術的なものや知識理解の文脈が多く、ストレスケアや感情認知などの自己覚知を深める研修や機会はほとんどないか、個人に任せられている。また、感情についても学校では「感情をコントロールする」ということをトレーニングすることに重きを置きがちで、「安心して出す」ということを伝える機会が少ないのが日本かもしれない。

すみあそびの実践を通して

「すみあそび」も、そのひとつだなと感じた。今回、放課後タイムで体験の場を2日間開いた。「自由に」と言われて戸惑いつつも、紙の上に何かが姿を現す。書を通じて、感情あるいはそれ以前のものが外に出され、可視化され、認識される。実際にやってもらった感想は、以下の通り。「やっているうちに夢中になってきた」「なんでもいい、自由、と言われると戸惑う自分もいる」「カッコつけなきゃ、何かしなきゃと思っている自分が出てくる」「自由は意外と難しい」「子どもたちにとって書写で比べられる感覚はあまりいいものではないと気づいた」「みんな違うことをしているのは面白い。表現に評価してはならないと感じた」

この短い体験のなかでも、「感情に気づく」「自分の中の評価軸に気づく」「人と違っていいと実感する」といった心理的社会的能力につながる気づきが自然と生まれていたのは嬉しかった。書を通して大人自身が自分の感情や気分に触れやすくなる。この経験は、そのまま子どもや他者に関わるときの基盤になるのだと思う。

他者の表現を受け止める練習

書は、何かをうまく「表す」ための技術ではない。現象学的に言えば、それは「現れるもの」として立ち上がる。線の震え、掠れ、全ての特徴は、その人の呼吸や心の揺らぎそのものだ。意図せず現れてしまうものに、ただ立ち会う。それが書の本質だと思っている。すみあそびを通じて大人自身が「現れるもの」に気づくとき、他者との関わりにも同じ態度が持ち込まれる。子どもの言葉や沈黙、視線や仕草に「意味づけ」する前に、そのまま立ち会う。**自分勝手な解釈をしない**というその態度こそが援助においてもっとも必要な基盤であり、人権を尊重することには他ならないのだ。もちろん「もっとこう書きたい」というニーズは本人のみのものである。ところが、子どもたちがすみあそびをしていると、やはり「こうしたら?」「漢字書いたら?」などと余計なことを言う親もいる。何気ないと思われるこの行為自体も、「近親姦的関わり」として、本人に必要以上に介入しているという状況に近いような気がしてならない。しかし、回数を重ねるうちに、自然に「それもいいね」という態度に変化することが多い。つまり、「すみあそび」の現場で他者の表現を見続けることにより、いつしか柔軟になっていくこともある。

優先すべきは「わたし」のニーズ

「徹底的に自分自身を大事にする」ということが中心にあって初めて、他者理解は深まるのだということ。わがままであること自体を否定的に捉えがちであるが、「ニーズを叶える」ということは、「自分が社会を変えていけるのだ」と言う自信になる。日本の教育は「何かができるようになれば自信がついて、自己肯定感が上がる」などと捉え、発表の機会を与えたり、できることを増やそうとしたりしがちだ。しかし、それよりもまずは「君のニーズを満たすことが重要だ」と、世界に大切にされるという体験こそが、「わたしはここにいる」という肯定感になるのだと思う。そしてそれは、支援者こそが味わっておかなければならない感覚だと思う。

安心できるコミュニティの意味

現在、Art Play Worker養成講座が始まり、オンラインでのすみあそび実践が広がっている。画面越しに筆をとり、同じ時間を共にするだけで、不思議と「安心して感情を出せる場」ができていく。そこにはただ「そのままでいること」が受け止められる。このような場を持つことは、大人にとって大きな意味を持つ。日々、子どもやクライアントの感情に寄り添う大人こそ、自分の内面を置ける場所が必要だからだ。繊細さを否定せずに「大丈夫だ」と確かめ合えるコミュニティがあることは、そのまま現場での安心につながっていくのではないかと信じている。

朱 紅 育 子 shukou icco (生涯発達支援塾TANE・書と生き方研究所代表)

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家・美術家。認知発達の視点からアートと生き方を統合する「朱紅・書と生き方研究所」運営。既存の枠を外し続ける「フリーランス教育者」のオンラインサークル「はみだすラボ」を現在拡張中。Art Play Worker養成講座BASIC、12月からの1期生を募集中。

こころのたね



子どもたちの「いま」を知る

2025・教職員向け

・暴力の構図を読み解く

相談内容の中で恋愛相談も出てきました。当然最も重要な思春期の課題であり、この部分を体験することで、自己理解と他者理解が深まります。だからこそ、丁寧に話を聞くこと、冷やかしなどではなく真面目に恋愛について話せる環境があることは重要です。日々の会話の中に、暴力の「加害者」、「被害者」になる気配を読み解くことが重要です。

「パートナーシップ」とは決して我慢をし合うことではなく、「対等に伝え合える関係」です。昭和型の夫婦関係をまだ引きずっている家庭も多く、隠れDVに気がついていない生徒も多いです。先生方をお願いしたいのは、「大人なんてそういうものだ」ではなく、「健全な大人は言葉で自分の感情を説明できること」なのだというのを、さまざまな機会に分かち合ってもらっています。

・生まれてきたことへの祝福を

「この世界に希望が持てない」という子がいました。親から否定され、大人に話を聞いてもらうことの少ない生徒たちにとって先生方と触れ合える機会の尊さ、そしてその時間の意味は深いなと思っております。日々の授業を通して、先生方が目指しているご自身の理想、世界観を、ぜひシェアしてあげてほしいなと思っています。生徒が本当に欲しいのは「単位」ではなくありのままを見てもらえる「安心」と「承認」かもしれません。

因果律を教えず、対話し続ける

人間の数だけ、思い込みがある、という世界で子どもたちは生きています。いや、大人もですね。できる限り冷静に、中庸で、バランスよくありたい、と思うわけですが、わたしたちはそもそも「自分の癖」があるのでそれは難しいのです。例えば「好み」「趣味」「特技」も違うわけです。当然、「習慣」も違います。

ほとんどの方が、「自分が正しい」という世界で生きているのですが、その正しさというのも思い込みです。もし「普通はこうだよ」というようなことがあったら、疑った方がいいのです。「自分の普通は本当か？」と。「みんなが言ってる」って、本当か？と。

「努力すれば報われる」でもなく「計画すればできる」でもないんです。「何のために」努力するのか、「何のために」計画するのか、そこにそれぞれの「価値観」「ニーズ」を聞き出すことで、「何をしたらいいか」が本人に見える、ということなのだと思います。

フランスでは「子どものニーズ」を徹底的に大事にしていることを、この夏、こども家庭福祉を学ぶ研修で聴いてきました。子どもがわたしたち大人から見たら疑問に思うような選択をしたとしても、まずはそのニーズを叶えることに「寄り添われる」という体験をさせる。それは、「社会に自分がいてもいいのだ」という安心感になるのだ、ということです。そして何よりエデュケーター自身が、常に自分の常識を疑い、チーム内で対話し続けているということでした。

詳しくは以下に掲載しているので関心がある方はぜひどうぞ！

「エデュケーターから学んだこと①」

「エデュケーターから学んだこと②」



育子のnote

コソダテノシンリ (10)

中谷陽輔

連載第10回目です。記念すべき今回で、ここ3回の連載で続けてきた現代社会におけるコソダテの大テーマ、「スマホ・タブレット」について、一区切りをつけておきます。これまで、①学業面、②対人面、③生活面と整理しながら、いずれにおいても、子どもの心身への影響として、メリットを打ち消してしまうほどの大きなデメリットがあることを述べてきました。

一方で、日本のコソダテ界限では、子どもにスマホ・タブレットを持たせることへの抵抗感は、その大なるリスクに比べるとかなり低い印象があります。

スマホ・タブレット所持の低年齢化が進み、「みんな持っている」「持たせていないと子どもが可哀想」といったような風潮すら感じられます。学校では GIGA スクール構想の流れが止まりません。とはいえ、肌感覚として「なんかこれ、良くないかも！」「これって子どもに持たせたらやばくない？」と思っている保護者さんやコソダテ界限の支援者も少なくないはずです。

そこで今回は、スマホ・タブレットなどデジタル機器と子どもとの関わりについて、海外の動きに視野を向けることで、日本の「今」を照らし返してみます。

アメリカの動向——害の気づきと告発、そして大規模な規制へ

巨大IT企業を多数抱える世界第一位の経済大国、アメリカ。しかし実のところ、それらの巨大IT企業をめぐる内部告発・訴訟が数年前から頻発しています。

2021年10月5日、Facebook社が、Instagramにより若者の摂食障害等の精神疾患や自殺が増えるデータを把握していたにもかかわらず公表せず隠ぺいしていたことなどが、アメリカ議会で同社元社員より告発されました。その後、議会での追及もあつたりしたこともあってか、子ども向けのInstagram開発は中止となり、時を同じくして社名を Meta に変更する、といったことが生じました。

ただそれ以後も、アメリカの42の州・区が青少年の精神面に悪影響を与えたとして Meta 社を集団提訴しました(2023年10月24日)。さらにニューヨーク市は、14歳未満の子どもにSNSを利用させないことなどを保護者や学校関係者に求める勧告を発表(2024年1月24日)。「巨大IT企業がこどものプライバシーを利益に換え、心の健康を危険にさらすのを見過ごすことはできない」との立場を明確にしました。その後、Meta社やGoogle社など、5つのSNS(Instagram、TikTok、Facebook、YouTube、Snapchat)の運営会社に対し、若者のカウンセリング費用などに年間1億ドル(約150億円)以上かかったとして損害賠償を

求め提訴しています(2024 年 2 月 14 日)。

同じく大西洋に面するフロリダ州では、より明確に、保護者の同意に関わらず、14 歳未満の SNS アカウント取得を禁止するという法案が成立しました(2024 年 3 月 25 日)。この法案により、14 歳未満が持つ既存のアカウントや、親や保護者の同意がない 14~15 歳が使うアカウントは SNS 運営会社が停止・削除する必要があります。従わない場合、運営会社に罰金を科されることになっています。

その他にも、アメリカ西部ユタ州でも、未成年(18 歳未満)の利用に関して親の同意を得ることを SNS 運営企業に義務づけ、未成年は SNS 依存症に陥った場合、事業者を訴えることができるという法案が成立するなど、アメリカでは州ごとの SNS 規制が広がってきています。

そしてこれらの司法・行政の動きは徐々に大規模になってきています。

たとえばアメリカの議会では、Meta 社、X(旧 Twitter)社、Tiktok 社など SNS5社の最高責任者(CEO)が公聴会で呼ばれており、各社の取り組みが子どもを守る上では不十分であると批判されているとともに、ある議員は「ソーシャルメディア会社は人殺しだ」「SNS は人を殺している」と厳しい言葉を投げかけています(2024 年 1 月 31 日)

また、アメリカではこの間、各州の動きのみならず、国レベルの規制の動きも進んできています。

アメリカで最も権威ある医者と言われる、医務総監(アメリカの公衆衛生の総指揮官)のマーシー氏は、ソーシャルメディアが10代の若者や子どもに「深刻な危害のリスク」をもたらしているとし、SNS を公衆衛生課題に位置付け、即座に取るべき取り組みや規制を勧告しました(2023 年 5 月 23 日)。

さらに、同氏は、翌年に「若者の精神衛生は緊急事態だ」として、ソーシャルメディアにタバコと同様の「警告文」をつけるよう法整備べきだとニューヨーク・タイムズ紙への寄稿で主張しています(2024 年 6 月 17 日)。その内容を見ると、「ソーシャルメディアで起きていることは、安全機能のない車に子どもを乗せ、制限速度のない道路を運転するのと同じだ」「信号機もルールもない。そして、私たちは彼らに『最善を尽くしなさい。それを管理する方法を見つけなさい』と伝えています。考えてみれば正気の沙汰ではない」とかなりの危機感を持っていることが伺えます。

さらに、あえて私から付け加えるとすると、車には“依存性がない”のです。たとえば、寝食も後回しにして、何時間も、なんなら一日中、車を運転し続けるってこと、かなり考えにくいですよ。

そして仮に、“依存性がある”車で、子どもが積極的に乗り続け、その“依存性”により脳がハックされて、子どもが全く降りることができなくなったら・・・何が起きるでしょう？

その場合、必ず致命的な事態が起きる、というのは、火を見るよりも明らかなのです。

…このように、アメリカでは、ソーシャルメディアへの依存による青少年のメンタルヘルスが社会問題化してきたからこそ、国家的規制の方針となってきました。実際、過去 20 年間で青少年のうつ病や自殺行為が増加している現象について、青少年の間で広く使用されているソーシャルメディアの出現と一致していることがさまざまな学術論文から指摘されるようになってきていました(cf. Vidal, et al., 2020)。

それでも、国家的規制の動きが始まったのはここ 1～2 年の話です。ちなみに、タバコの規制についても、その実害に関するエビデンスがかなり蓄積され、内部告発・巨額訴訟が行われるようになってからようやく国家的規制、という流れがありました。アメリカの医務総監マーシー氏が、SNS にタバコ並みの規制を行うことを提言していますが、そこにも偶然とはいえないような一致があります。

ソーシャルメディア(SNS)への規制は、社会問題になってしばらくしてから国家的な規制の方針となりました。つまり、エビデンスがかなり明らかになってきてからも、国の規制が整うまで、何年も、下手したらさらなる年月が経ってしまう…そう考えると、その狭間の時代を生きる青少年の将来こそ、私は可哀想で、心配でなりません。

その他の国の動向——デジタル機器を子どもからいかに遠ざけるか

[中国]

アメリカに次いで世界第二位の経済大国に発展した中国。もちろん巨大 IT 企業が多数あります。そんな中国でも、実はアメリカに先んじて、国家的規制が行われていました。

Facebook 社で内部告発が行われた日から 1 か月と少し前の、2021年 8 月 30 日。中国政府は、18 歳未満の未成年者がオンラインゲームで遊べる時間を週末(金・土・日)および祝日の夜 8～9 時の 1 時間のみに制限する通知を出しました。その通知では、オンラインゲームは子どもの精神を蝕む「アヘン」として非難されています。そして同年 9 月 1 日から早速、オンラインゲームを提供する全企業に対応を義務付けました。

このような国家的規制に至る背景には、社会問題化する子どものオンラインゲーム依存症への対策の「失敗」がありました。中国には、当時すでに、ネット依存治療施設が400か所以上ありました。その治療施設の実態は、「WEB JUNKIE(ウェブ・ジャンキー)」として、ドキュメンタリー映画になっています。そこでは、強制的に連れてこられた若者が軍隊的な集団生活を行いながら、投薬・精神療法・ネット以外の時間の過ごし方を学んでいる様子が示されています。ただ、そこまでの治療設備への投資を行っても、社会問題化したオンラインゲーム依存症の対策として追いついていない現実が改善できず、国家的規制へと舵を切ることになったのです。

…この事実、オンラインゲームが自由にできる環境がいかに子どもにとって危険である

かのみならず、この問題が、個人や家族への対応だけで解決できるような性質のものではないことを、よく物語っている、ともいえます。

[オーストラリア]

2024 年 11 月 28 日、オーストラリア議会では、16 歳未満の SNS 利用禁止を掲げる法案が可決され、1 年後に施行予定となっています。

国家レベルで子どもの SNS 利用禁止を定める法律は世界初となります。しかしながら、その背景には、SNS により子どもが亡くなる事件が頻発したという悲しい事情がありました。

なお、この法律においては、子どもや保護者への罰則はなく、SNS のプラットフォーム企業 (X、Instagram、Facebook、Tiktok など) が、子どもが接続できないような合理的措置を講じなかった場合、最大で 4950 万豪ドル (約 50 億円) と高額な罰金が科されることになっています。

ここで重要なポイントは、中国もそうでしたが、この問題は、個人や家庭がどうこうするというよりも、国が規制しないとイケない問題である、と国が認めたといえることです。

[フランス]

フランスでは、2023 年 7 月に 15 歳未満の子どもが SNS を利用する際に、保護者の同意を必須とする法律が制定されました。SNS 事業者には、法律が制定する前に登録しているユーザーも含めて、保護者の同意のない 15 歳未満のユーザー登録を拒否することを義務付けられています。さらにフランスでは、15 歳までの子どもを対象に、携帯電話を使わない日、いわばデジタル・デトックスをする日を作ることも試行的に行われています。

また、フランスのマクロン大統領が委託した調査報告書 (2024 年 4 月 30 日) によると、スマートフォン含む携帯電話の使用は 11 歳になるまで、スマートフォンによるインターネット利用は 13 歳になるまで原則禁止すべきだと勧告されています。さらに SNS も、「倫理的な SNS」を利用することが好ましいと考えられており、Instagram や Tiktok は倫理的な SNS から除外されています。この報告結果も受けて、マクロン大統領は、15 歳未満の SNS を禁止する方向で検討していると報道されています。

なお、同じ欧州のノルウェーでも、政府が「テック企業は小さな子どもたちの頭脳にとって敵」と表現し、SNS を利用する最低年齢を 13 歳から 15 歳へと厳格化しています

加えて、欧州連合 (EU) としても、SNS などによる未成年者へのリスクを軽減するため、プラットフォームと呼ばれる巨大 IT 企業が守るべきガイドラインが発表されています (2025 年 7 月 14 日)。

・・・さて、どうでしょう。冒頭に述べたような、スマホやタブレットを「みんな持っている」「持たせていないと子どもが可哀想」といった風潮が感じられる日本の「今」は、ここまで読んだ皆さんに「今」、どのように映るでしょうか。

世界におけるICT教育の評価と動向——アナログ教育への回帰

GIGA スクール構想が進んでいることも、子どもにとってタブレットが身近になる一因でしょう。[学業面](#)についてはすでに、スマホやタブレットを使用するほどに、成績が低下しやすくなると、コソダテノシンリでは結論付けていました。

ただそのことを指摘するのは当然、私だけではありません。そこで今度は、GIGA スクール構想が謳う、ICT 教育について、世界の動向を見ていくことにします。

まず、国連における教育科学文化機関であるユネスコ(UNESCO)は、その年次報告書において、スマートフォンが学習活動を妨げる可能性があるため、学校でのスマートフォン使用を禁止するよう警告しています(2023 年 7 月 26 日)。報告書では、スマートフォンが近くにあるだけで学習に悪影響を及ぼすことも指摘されています。そして実際、ベルギー、スペイン、英国で、学校にスマートフォンの持ち込みをさせないようにしたところ、学習パフォーマンスが向上したという調査結果も示されています。

また、この報告書の時点では、校内でのスマートフォンの使用を禁止している学校は 4 分の 1 にも満たないこともわかりました。ちなみに、前章であげたフランスでは、いち早く、2018 年、幼稚園から中学校までを対象に、校内でのスマホを全面的に禁止する法律が定められています。ただその後、小中学校において、スマホ・タブレットなどデジタル機器について、学校生活における教育目的以外の使用、たとえば授業中・休憩中問わず、娯楽目的での使用を禁止する方針を打ち出す国や法律制定が増加しました(2024 年～オランダ、2025 年～ブラジル・デンマーク・ベルギー・フィンランドなど)

これらは、スマホやタブレットを身近におくことで、学習への集中力が下がることなどが理由として挙げられており、[学業面](#)について述べた際の「Brain Drain」という現象で説明可能です。さらに、教育目的でのタブレット使用についても、良い効果を示す信頼性の高い研究というのはいまだ存在しません。むしろ、その悪影響は、脳の発達の観点から明確にあり、その影響は低年齢ほど重篤なものになりえます。

このことを裏付けるように、ICT 教育から一転、アナログな「紙の教科書」に回帰する動きを取っている国が複数あります。

その代表格は、北欧の IT 先進国スウェーデンです。もちろん ICT 教育にもいち早く取り組み、2010年から、1 人 1 台のデジタル端末によるデジタル教育を行っていました。しかしその間、PISA(OECD 生徒の学習到達度調査)は著しい順位低下があり、全科目が OECD 内でも平均以下となり、北欧諸国で最下位となる科目もでてきました。

そこで政府は、子どもたちの良質な紙の本への接触機会が不足し、スマートフォンなどのデ

デジタル機器の使用時間が長いことを問題視しました。そして 2023 年に法改正が行われ、デジタル教材か否かを問わず「印刷されたものを教科書」と定義し、スウェーデン政府は、学校教育庁が提案した学校制度の国家デジタル化戦略を進めない方針を打ち出しました。特に低年齢層では、紙の本に触れ、読み、手で書くことを重視し、教育は基本的にスクリーン無しで行うべきであると、電子スクリーンに触れる時間は減らす方向性を明確にしました。

また、フィンランドでも、一時期は PISA の高水準を背景に教育立国として注目を集めていましたが、ICT 教育導入後の PISA の順位低下を受けて、デジタル教科書を紙の教科書に戻す自治体が増えてきています。

加えて、日本の隣国である韓国では、教育改革として、AI によるデジタル教科書を 2025 年度から全国一斉導入することになっていました。それが、「デジタルデバイスへの過度な依存や読解力・思考力の低下が懸念される」といった国民世論や教員の 9 割以上の導入反対の声を受け、AI デジタル教科書の導入は急遽停止。結果的に「補助教材」という位置づけとなり、使用するかどうかは学校・教員の裁量に任されることになりました。

これらの諸外国の動きをみると、「GIGA スクール構想が教育の最先端！」「1 人 1 台端末を実現した！」なんて喜んだりすることには、かなり慎重になったほうがいいように思えてきます。むしろ、今の状況を放置するとしたら、日本全体としての学力はどんどんと低下していくという予測が、決して望まない形で当たってしまうように思えてなりません。

なお、今回述べたような諸外国の動向は、今年の 4 月、子ども家庭庁でようやく議論されたようです（インターネットの利用を巡る青少年の保護の在り方に関するワーキンググループ第 5 回）。先の予測が外れるような、具体的な施策を検討・実行できるようであってほしいと、心より願っています。

改めて、日本の現状——違和感が「なぜか」広がらない??

今回の原稿でもたびたび言及している PISA の結果ですが、以前、[学業面](#)について述べた際、2015 年の結果ですでに、学校におけるパソコン台数が多いほど「数学リテラシー」が低いこと、授業中にインターネット利用頻度が多いほど「読解力」が低いことがデータから示されていることに触れました。ちなみに、PISA の結果の翻訳版としては国立教育政策研究所が出版していますが、それらの結果は「なぜか」記載されていませんでした。

そしてその後、予定通り、文部科学省は 2019 年、GIGA スクール構想をスタートしました。

今回述べた各国の動向だけでなく、今回まで 3 連続で記載してきた内容は、インターネットでも十分に得られる情報であり、事実、日本語で読める文献も多数あったかと思います。ただ、「なぜか」、こういった情報は、日本国内であまり、というかほとんど知られていません。

…少々話は変わりますが、本テーマに関することで、昨年 11～12 月に「文春砲」が放たれたことをご存知でしょうか。

その名も、「デジタル教育で日本人がバカになる！」として、気合の入った 4 回シリーズとなっています。特に初回記事の反響は大きく、読者による人気記事ランキング(2024 年 11 月 19 日付)でも、第2位にダブルスコアの差をつけた第1位となっていました。

…が、この「文春砲」について知っている人は、これまたほとんどいないのではないのでしょうか。

「文春砲」といえば、どこぞの芸能人のスキャンダルを暴き、その翌日にはすぐさま、テレビでもネットでも大いにニュースになるイメージがあります。ただ、これだけ読者の人気があった記事について、その人気に応じた規模で取り扱ったテレビや報道を、少なくとも私は知りません。

ちなみにですが、もし本稿で週刊文春の 4 回シリーズに関心を持ったとしても、楽●マガジンからは見れないようになっているようですので、悪しからずご了承ください。他にもない私が見ようとしてサービスを開きましたがどこにも見当たらず、雑誌本体を購入しましたから間違いありません。オンラインサービスとしての楽●マガジンは、「本サービスは、紙版と一部内容が異なります」と注意書きにも書かれています。人気があったはずの記事ですが、「なぜか」省略されたようです。

再び話は変わりますが、真偽の詳細はさておき、日本のメディアは、広告主にとって都合が悪い情報はほぼ全く報道されない、みたいなことをよく聞きますね。たとえば、とある業界ではかつて、あの人に睨まれたらタレントきてもらえないから、その人に都合の良くない事情を知っていても、一切報道はしない、みたいな。

ということは、子育てと「スマホ・タブレット」に関する、科学的・合理的な情報がそこにあったとしても、その情報が「スマホ・タブレット」を売る側の IT 企業にとってネガティブなものだったとしたら…そして、報道元が「スマホ・タブレット」を売る IT 企業や関連会社からの広告費をもらっていたら…その情報は、一切報道されない、といったことは、十分あり得ますよね。

今の世の中、巨大 IT 企業が多く収益を上げていることから、その広告費は莫大な規模だと想像します。そしてそういった広告費からフリーでいられる報道元というのが、どれほどあるのか。私にはわかりません。

ただもしかしたら、世論の関心度がいくらあっても、大手テレビや IT 企業側が積極的に流す情報源に頼っている人ほど、正確な情報が入ってこず、非科学的・非合理的な結論(たとえば、

ですが、コソダテにおいてスマホ・タブレットを安易に活用しようとする、とか)に至ってしまう、という皮肉が生じてしまっているのが、日本の現状なのかもしれません。

…ただ、もし本稿をもって違和感を持った方がいたら、このテーマについて、精力的に活動されている団体が大きく二つありますので、ご参照いただけたらと思います。

① ネット健康問題啓発者養成全国連絡協議会

(Networking Conference of Enlighteners Training for Health Effects on Internet Use; **THInet**)

HP: <https://net-kenkou-youseikyo.com/>

② スマホ依存防止学会

(Prevention Initiative against Smartphone Addiction; **PISA**)

HP: <https://uruuishishunki.wixsite.com/mysite-1>

正直なところ、私がこれまでお伝えしてきたスマホ・タブレットの子どもの心身への影響についても、それらに属する方々から得た情報がかなり多いです。

いずれにせよ、私は、それらの情報源に一定程度自ら触れつつ、吟味した結果、子どもの健やかな発育において、スマホ・タブレットの安易な所持・使用は、「百害あって一利なし」というのがコソダテノシンリだと、断言したいと思います。

もちろんそれらの情報源にあたるかどうか、そこから得た情報をどのようにとらえるかどうかは、皆さん次第です。

ただ、私自身、ここのテーマをもとに手の届く範囲の人と意見交換をしたりしますが、思った以上に、違和感を持つ親御さんや支援者の方は多いです。身近な人、迷っている人がいたら、ちょっとこんなことを聞いた、と伝えて話し合ってもらいたら幸いです。

…現代日本で「コソダテ」をするうえでは、自分の目の前に入ってくる情報を漫然と受けとるだけではなく、その情報がなぜ・どのように取捨選別されて出てきているのか、本当に必要な「シンリ」とは何なのか、を見極めることが不可欠になってしまっている。

…このことを、コソダテノシンリとしても重要である、と強調しておくことで、第10回目を終えておきます。

【引用・参考文献】

※ 今回は、原稿の特性上、文献を本文の記載順に並べていること、ご了承ください

◎ アメリカの動向

本経済新聞 (2021). Facebook 内部告発者「安全より利益優先」 米公聴会 10月6日記

事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGN050IP0V01C21A0000000/>

読売新聞オンライン (2023).「インスタとFBに中毒性」米国42州・区がメタを提訴…NY州司法長官「若者の心の健康が悪化」10月25日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.yomiuri.co.jp/economy/20231025-OYT1T50062/>

読売新聞オンライン (2024). ニューヨーク市がSNSを「公衆衛生上の危険」に指定…「子どもの精神を危険にさらす」1月26日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.yomiuri.co.jp/world/20240126-OYT1T50150/>

日テレ NEWS (2024). ニューヨーク市、5つのSNS運営会社を提訴 2月16日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://news.ntv.co.jp/category/international/71c4ee7f9f4945ae8aff913b850b74d4>

TBS NEWS DIG (2024). 米南部・フロリダ州で16歳未満のSNS利用禁止の法案可決 1月25日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/962432?display=1>

日本経済新聞 (2024). 米フロリダ州、14歳未満のSNSアカウント取得を禁止 3月27日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGN26DXD0W4A320C2000000/>

日本経済新聞 (2023).「未成年は親の同意を」SNS利用、米国で強まる規制 4月1日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGN29CID0Z20C23A3000000/>

こども家庭庁 成育局安全対策課 (2024). 諸外国における青少年のインターネットの利用を巡る課題と対策について(第5回 インターネットの利用を巡る青少年の保護の在り方に関するWG:参考資料1)令和7年4月24日 Retrieved August 25, 2025 from https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/d1712e10-67fb-4bd9-b0cd-79617f602afe/53c8464f/20250501_councils_internet-kaigi_d1712e10_03.pdf

日本経済新聞 (2023). SNSの多用「若者に重大なリスク」米公衆衛生トップ 5月24日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.nikkei.com/article/D>

[GXZQOGN23DAA0T20C23A5000000/](https://www.youtube.com/watch?v=QPCq6u9o1lQ)

TBS NEWS DIG (2024). 「子どもが自殺・性被害」米議会 SNS 運営企業 CEO を追及
「あなたたちの手は血塗られている」 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.youtube.com/watch?v=QPCq6u9o1lQ>

ロイター (2024). 米上院司法委、メタらSNS5 社トップ追及 子どもの性被害問題で 2 月
1 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://jp.reuters.com/business/technology/OBDGI563AVJIFK3C5G2UEJU24U-2024-01-31/>

朝日新聞 (2024). 米医務総監、SNS にたばこのような「警告文」を 若者への悪影響で 6
月 18 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.asahi.com/articles/ASS6K7D1HS6KUHB1005M.html>

ロイター (2024). SNSに警告文を 若者の精神衛生に悪影響と＝米医務総監 6 月 18 日
記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://jp.reuters.com/world/us/ABUQC4P6VBOCJCZ2VW4XRJKPJI-2024-06-18/>

Vidal, C., Lhaksampa, T., Miller, L., & Platt, R. (2020). Social media use and depression in adolescents: a scoping review. *International Review of Psychiatry*. 32(3), 235-253. Retrieved August 25, 2025 from <https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC7392374/>

◎ その他の国の動向

日本経済新聞 (2021). 中国、ゲームは「週末 1 日 1 時間」強まる青少年管理 8 月 30 日
記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGM308P70Q1A830C2000000/>

西日本新聞 me (2021). 18 歳未満は週末 1 時間だけ…中国、オンラインゲーム規制の本
当の狙い 9 月 1 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.nishinippon.co.jp/item/793888/>

WIRED (2014). 中国の「ネット中毒者矯正施設」(動画) Retrieved August 25, 2025 from <https://wired.jp/2014/01/17/web-junkie-exclusive-clip/>

朝日新聞 (2024). 16 歳未満の SNS 利用禁止へ オーストラリア、世界初の法案提出 11

月 21 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.asahi.com/articles/ASSCP22RSSCPUHBI01JM.html>

日本経済新聞 (2024). オーストラリア、16 歳未満の SNS 利用禁止案可決 世界初 11 月 28 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGM289250Y4A121C2000000/>

中央日報 (2024). フランス政府、「11歳未満は携帯禁止、インスタは15歳を過ぎてもダメ」検討 5 月 2 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://japanese.joins.com/JArticle/318171?sectcode=A00&servcode=A00>

朝日新聞 (2025). 欧州で強まる未成年の SNS 規制 フランスは 15 歳未満禁止に意欲 7 月 15 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.asahi.com/articles/AST7G5V5MT7GUHBI023M.html>

Reuters (2024). What countries do to regulate children's social media access 11 月 29 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.reuters.com/technology/what-countries-do-regulate-childrens-social-media-access-2024-11-28/>

◎ 世界におけるICT教育の評価と動向

Forbes JAPAN (2023). 国連の教育機関ユネスコが「学校でのスマホ禁止」呼びかけ 7 月 28 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://forbesjapan.com/articles/detail/64909>

世界経済フォーラム (2023). ユネスコが「学校でのスマホ禁止」を呼びかける理由 8 月 8 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://jp.weforum.org/stories/2023/08/yunesukoga-denosumaho-wo-bikakeru/>

読売新聞オンライン (2025). ブラジルの小中学校、スマホ・タブレット端末の使用禁止へ…生徒の8割が授業中に集中力散漫に 1 月 16 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.yomiuri.co.jp/world/20250115-OYT1T50198/>

Gigazine (2025). 小中学校の生徒によるスマートフォンの使用を制限する法律がフィンランドで成立 5 月 1 日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://gigazine.net/news/20250501-finland-bans-smartphones-in-schools/>

Ward, A. F., Duke, K., Gneezy, A., & Bos, M. W. (2017). Brain Drain: The Mere Presence of One's Own Smartphone Reduces Available Cognitive Capacity. *Journal of the Association for Consumer Research*, 2(2), 140-154. Retrieved August 25, 2025 from <https://www.journals.uchicago.edu/doi/full/10.1086/691462>

Government Offices of Sweden (2024). Government investing in more reading time and less screen time 2月8日記事 Retrieved August 25, 2025 from https://www.government.se/articles/2024/02/government-investing-in-more-reading-time-and-less-screen-time/?utm_source=chatgpt.com

読売新聞オンライン (2025). デジタル導入の「教育先進国」で成績低下や心身の不調が顕在化…フィンランド、紙の教科書復活「歓迎」3月18日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/news/20250317-OYT1T50203/>

KBS WORLD JAPANESE (2025). AI教科書を教科書ではなく教育資料に変更 8月5日記事 Retrieved August 25, 2025 from https://world.kbs.co.kr/service/news_view.htm?lang=j&Seq_Code=90868

◎ 改めて、日本の現状

こども家庭庁 (2025). インターネットの利用を巡る青少年の保護の在り方に関するワーキンググループ 第5回会合 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.cfa.go.jp/councils/internet-kaigi/d1712e10>

日本経済新聞 (2024). ネット利用で青少年保護へ 政府が議論 SNSトラブル増 各国、年齢制限など模索 11月26日記事 Retrieved August 25, 2025 from <https://www.nikkei.com/article/DGKKZO85033600V21C24A1EP0000/>

OECD (2015). How Computers are Related to Students' Performance (Chapter 6). In OECD, *Students, Computers and Learning: Making the Connection* (pp.145-164). Retrieved August 25, 2025 from <https://www.oecd.org/publications/students-computers-and-learning-9789264239555-en.htm>

国立教育政策研究所（2016）. OECD 生徒の学習到達度調査(Programme for International Student Assessment)～ 2015 年調査国際結果の要約～ 平成 28(2016)年 12 月 Retrieved August 25, 2025 from https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2015/03_result.pdf

<プロフィール>

児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、早 10 年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育て&子育て支援まみれの日々を送っている。プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに月数回、不定期投稿中。
(<https://childcare-support.hatenablog.jp/>)

教室の窓から

令和 7年
(2025年) 8月
來須 真紀

被爆80年によせて

1945年8月6日午前8時15分。広島に人類史上初の原子爆弾が投下されて今年で80年。今号では、ヒロシマと核、戦争、平和について書こうと思います。

「広島の平和教育」

広島市の小中学校では、学校教育の中で原爆や戦争についての学習をします。8月6日は登校日で全校生徒で平和祈念式典を見て、平和について考えます。広島市立の小中高等学校では「ひろしま平和ノート」という教材があり、系統立てて平和学習を進めます。プログラムのにはきちんと系統立てられており、核兵器や戦争に対して様々な角度から学習することができます。

広島の平和教育の落とし穴

しかし、プログラムのすばらしさや広島の先生たちの熱意はあれど、ひろしまの平和教育を実際に受けて育った子どもたちの中には「核兵器反対」「戦争反対」って言うておけばとりあえず正解でしょという印象をもっている子どもや強烈的な恐怖を植え付けられている子どももいます。

多文化共生の中のひろしまの平和教育

また、外国籍の子どもたちも年々増えていることも平和教育の難しさになっています。私は授業中「日本め、原爆落ちてざまあみろ」といったことにも出会ったことがあります。この発言に私は大変考えさせられました。今現在の私の平和教育への考え方の原点になっている大切な言葉でもあります。

佐藤優さんと学ぶ中高生のための世界の安全と平和フォーラム

先日、表題のフォーラムのお手伝いをしてきました。フォーラムの中で佐藤さんは中高生たちに「広島の平和学習はとてもよくできている。しかし、それは 守破離でいう守の部分。高校生、大学生は破離の部分にステップアップしなければならない」とおっしゃっていました。また、そのためにも「核兵器反対」「戦争反対」という立場の人ともダイアログ(対話)することが必要とのこと。なるほど!!。

アインシュタインとフロイトの話

先述のフォーラムでは課題図書がありました。「ひとはなぜ戦争をする

のか」です。この本は、1932年、第2次世界大戦直前。第1次世界大戦で多くの人が犠牲になった後、再び戦争の気配が高まってきている時期、国際連盟が「有名な知識人同士で平和について語る企画をたて、アインシュタインがフロイトを選び、書簡の交換をしたというものです。

アインシュタインはフロイトに「戦争はなぜ繰り返されるのか？国を滅ぼし、人を苦しめるのに。だから法律のように国際的なルールと強制力があればいいのではないか？でも、人間は感情的になるから宣伝にのせられて戦争を支持するからどうしたら人間の心は変えられるか？」聞きます。それにフロイトは「人間には生きたい、仲間とつながりたい、守りたいという生命本能(エロス)と壊したい、支配したい、相手を消したいという死の本能(タナトス)がある。戦争はこの死の本能が爆発した形。そして暴力は古いルールで動物も力の強いものが勝つ。人間も根っこは動物。戦争を減らすのには強く国際的なルールを作ることと人の心を教育すること(知識や事実を広め戦争の美化する嘘に騙されないようにする。そして仲間意識を人類全体に広げること)であると答えました。

第2次世界大戦が始まる前にこんなことを話していたお二人。本当にすごいなと思います。

佐藤さんのお話

フォーラムで佐藤氏は、核廃絶を目指すためには、核だけに焦点を当てて考えず、様々な視点から考えほしいと言われました。核兵器だけではなく核の平和利用のこと。核を平和利用をしたら経済はどう動くのか。その平和利用しようとしている国の歴史や背景。問題を多角的に広く見るということでしょうか？そしてそのために一生懸命勉強してほしいともいわれました。

私の所感

実は、私は被爆2世です。母は、0歳で入市被爆し、被爆者となりました。祖父は、職業軍人で8月6日は広島に勤務しており被爆しました。私個人は核と人類は共存できないと思っています。核兵器は悪で、核抑止など許されるものでは二と思っています。しかし、私は教員として多角的に戦争や核兵器、平和について子どもたちに伝えてきたのか佐藤氏のいう守の部分をしっかりやってきたのかと最近考えます。被爆80年に「伝えていく」責任だけではなく子どもたちに「何を伝え」「どのような力をつけるのか」を考え、実践していきたいと思っています。

1. はじめに

前回は子どもたちの 2024 年度の年度末の課題文の感想の表現から、「見ること」、「聴くこと」に着目して考えた。そしてそこには当事者の方たち（スタディツアーで出会う人たち）の「語り」とその語りをスタディツアーの参加者として「聴く」〈わたし〉の関係があるを書いた。

「伝承」という言葉は「伝える」「承ける」の 2 つの構造からなっている。子どもたちが伝えられたことを「承ける」、そしてそれを誰かに「伝える」という営為は、どの話を引き受けるかというところからゆだねられている。様々な可能性に開かれている。だからこそ子どもたちは主体的にならざるを得ない。誰か代わりの人がいるということでもない。

そしてこれは「なぜ東北なのか？」という問いとも直結する。「阪神と復興」「熊本と復興」「能登と復興」ではなく、「東北と復興」の理由。この講座が目指している子どもたちの姿は平和を希求する、不正や不公正をゆるさない市民の一人として生きていくようになることだ。さらにそこにはこの社会を生きていく一人の主体としてあることが求められる。小さな声を丹念に拾い上げること、語りに耳を傾けることが、さらなる自らの語りの可能性、多様な意味付けへと可能性を広げている。

この間考えてきたのだが、きっと対人援助学・対人援助職・対人援助者につながる視点、「種」のようなものを植えることが高校社会科の授業ではできるのだと感じている。それは小学校や中学校とは違う高等学校の発達段階にある子どもたちだからこそできるものでもある。小学校や中学校で学んできたことや自己のアイデンティティについて考える時期（進路やキャリアともかわるかもしれない）だからこそ、子どもたちが見つけることが「種」があると思うのだ。そしてその「種」は大学・大学院での研究やフィールドワークによってより芽吹き、花を咲かせていくのだろうと思う。では子どもたちが見つける「種」とは何か。そしてそのための「種」を見つめるために教員ができることは何なのかを、これから数回に分けて考えていきたいと思う。それは「道徳」ではない。あくまでも社会科教育や高校での教科教育、あるいはホームルームでの活動とつながるものとして考えている。

2. 「応答責任」と「興味」「関心」

宮地尚子はトラウマの環状島という理論を打ち出した。それは支援者のためのサバイバルマップでもあり、トラウマをめぐる当事者、支援者、傍観者のポジショナリティを「環状」の島の中で表現し、〈内海〉〈外海〉〈内斜面〉〈外斜面〉〈尾根〉〈風〉〈重力〉〈水位〉などの用語を駆使しながらトラウマの周りで何が起きているのかを明らかにしようとしたものである。これらの背景にあるのは先述したハーマンの加害者と被害者、そしてその間にいる第三者がどのような振る舞いを求められるのかということだ。実際に 2024 年度の福島県浜通りスタディツアーを終えた後に、この「環状島」理論を例に、自分達の立ち位置について生徒たちに問うたところ、当事者でも支援者でもない、かといって傍観者ではいられないので、〈わたし〉は外海を泳いでいき、その波打ち際から外斜面を登ろうとしているところだと表現した生徒がいた。

旅人として石巻や浜通りを訪れた高校生である〈わたし〉たちは、語り手の話を「聴く」ことによってその後どのような立ち位置をとり、そしてどういった反応が生じているのであろうか。ここでは教育学者であるガート・ビースタの教育学の理論も応用しながら考えたい。

スタディツアーの中では見ることや聴くことを通して、人びとの声・物語・顔〔表情・所作・雰囲気〕/展示物/建物/風景/音など…の「世界」との出会いを「経験」する。そこに〈わたし〉が相対したとき―「我々の独自の、特異な声を要求する」、「我々がいる状況によって「要求される」―レヴィナスが提示しようとしたよう

に他者の顔に要求される一応答責任を引き受ける方法なのだ。他の誰かが我々に代わってこの応答責任を引き受けることはありえない。」という状況に陥る。しかし「世界」との出会いによって、スタディツアーの中で〈わたし〉が要求される「応答責任」は、放棄することができない。なぜならば、「応答責任を引き受けないようにするためには、我々は、何かを「忘却」しなければならない」からであり、それは先述したハーマンのいう「加害者に加担すること」、あるいは宮地尚子の理論で出てくる「傍観者」としてのポジショナリティをとることになるからだ。そのため〈わたし〉が要求される「応答責任」と向き合わざるを得ないが、そこでは〈わたし〉の思い通りの言葉/行動ができなくなる＝conflict と出会うことになる。この出会いに対して〈わたし〉は次の3つの方策で対応することができる。

- ①「世界」の破壊（出会ったものの否定「責めたてる」）
- ②「自己」の破壊（出会ったものから身を引き、世界の中の自己の存在も否定）
- ③「世界」の存在と「自己」の存在の中間点にとどまり続ける＝対話

そしてこの3つのうち、③中間点にとどまり続ける＝対話の場所が独自の〈わたし〉が存在する＝「成長した仕方」が達成されるような場所となる。その中間点は、「対話は決して終わることのない、どこまでも続く挑戦」「継続し持続する活力、注意、関与を求める」「純粋な自己表現の場ではなく、私たちの自己表現が制限されたり、中断されたり、応答されたりする場」としての性格を帯びており、「中間点＝対話」という不断のプロセスの渦中に留まり続けることによって、「現実のために」〈わたし〉たちが世界の中に存在するということ、〈わたし〉が何をなすか、〈わたし〉がいかにあるか、という〈わたし〉が問われることとなる。そのため中間点に留まり続けることによって応答責任を引き受ける独自の〈わたし〉が「まどろみからの目覚め」として、現れ続ける。そしてその結果「成長した仕方」での存在の質、あるいは存在することの質は、「私たち自身の人生と、他者とともに生きる人生にとって、私たちが望むものが望ましいものなのかどうかと問うことによって、私たちの欲望が点検された現実を受け入れるプロセス」であり、この問いは常に「欲望の中断」をとまなっている。

そのためスタディツアーにおける教員の役割とは「世界」との出会いを経た生徒たちを「中間点」に留まり続けるようにすること、である。時には励まして「中間点」にとどまらせたり、時には「一時撤退」の安全圏を確保することも含まれるだろう。それを見極めながら、子どもたちに声をかけていくことになる。

こうした「世界」と「自己」の2つの「中間点」にとどまり続けることによって、生まれるものが interest 「興味・関心」である。堀江宗正によれば、フロムは「「関心 interest」という言葉は、本来はラテン語で「間に存在すること inter-esse」を意味していた」ため、「人と人との間に存在するがゆえに、人は他の人に関心を抱くのである」と考えていたという。さらにこうした本来の（原義としての）「interest」の意味に近い日本語の言葉は「関心」で「能動的に関わろうとする心構え」であり、逆に現代的な「interest」用法に近いものが「興味」で「感覚を通して受動的に心をかき立てられ、引きつけられる様」だそうだ。デューイも「interest 興味」について考えており、「(i) 能動的発展の全体的状態 (ii) 予知され、望まれた客観的な諸結果、(iii) 人間の情緒的傾向」としている。フロムとの共通点は「能動的」であるということだろう。そのうえで、ある人が何かに興味 (interest) をもっているといわれるときの強調点は、「ある対象に夢中になっていること、熱中している事、心を奪われていること」あるいは「油断なく見張ること、気にかけること、注意深くすること」といったその人自身の態度に置かれている。「興味、愛情、関心、動機づけ、というような語は、予知されたものが個人の運命に対してもつ関係や、ある起こりうる結果を獲得するために行動したいと思う彼の能動的欲求を強調する」という。デューイもフロムも「interest」の語源から、「間にあるもの」として考えている。しかしフロムが精神分析医として語り手と聴き手の「間にあるもの」として意識したのに対し、デューイは教育学の観点から「行為者とその目的」との「間にあるもの」として考えている。デューイによれば、「最初の段階と完成段階との間」にある「通過すべき過程」＝中間状況は時間がかかるものであり、それゆえに、中間状況にあるものはすべて「興味あるもの」となる。この中間状況は、ビースタの言う「中間点」に近い言葉

であるが、デューイの中間情況が、「最初の段階と完成段階」との間であるのに対して、ビースタは「世界と自己」の間であるという点で異なっている。ただし、ビースタの「中間点」においては、「継続し持続する活力、注意、関与を求める」ということもあるため、その点においては、フロム、デューイの「interest」の概念と重なる部分がある。ここで出てくる中間情況、あるいは中間点に立つという事は中立であるということではない。中立が「どちらでもない」ことに対して、中間点は「どちらでもある」ということである。ビースタの世界と自己の中間点に留まることも、デューイの最初の段階と完成段階との時間的な間に自己が存在することも、どちらでもないという「中立」とは異なっている。ただし前者が「存在」の中間であるのに対して後者は「時間的中間」である。この2つの異なるベクトルを重ね合わせた中間点とはどこにあるのだろうか。世界も自己も否定せず、最初の段階と完成段階の間のプロセスに自分を置き続けるということ。この点に置き続けることで、人は成長し続けることができるのではないだろうか。その場合には教員の役割とは成長の方向を示すことであり、中間点に留まれるよう（時には一時撤退も認めつつ）教えていくことでは無いだろうか。このことを示唆する生徒の感想として以下のようなものがあげられる。

・「自分にできること」に立ち尽くすような気持ちになることも多くあった。学んだ責任を果たしているかという問いが常にあった。そんな中で「東北のことを忘れない」「考え続ける」という言葉をきいても、それだけでは何も力になれないのではないかと無力感を感じていた。しかし学びを重ねていくうちに、それしかできないのではなく、それができるのだという風に響くようになった。自分ができることを問うてそれが抽象的であっても意味がないと切り捨ててはいけないのだと思った。

・国が進める政策によって苦しみ続ける人がいることを知った。これは福島だけに限らない。水俣病や、沖縄戦、その他にも社会で起こる様々な問題に言えることだ。国の利益のため、一部の人が犠牲になる。しかし、私は一概に国が悪いと言えない。なぜなら私は国が取り組む政策によって利益を得ているからだ。そうすると、私は間接的に「加害/悪」ということになる。

問題はこの事柄に「当事者性」が関わってくることだ。当事者性がないと考えることもできてしまう。私自身、今回のツアーを通して、なんだかとても重たいものを背負った気がする。それは今まで学んできたことを通じて、私が当事者性と少しずつ向き合い始めているからだと思った。学び舎ゆめのもりで南郷さんがおっしゃっていた「高校生の時に思った課題意識をそのまま持っていたら…」という言葉と、メンバーでの振り返りの際にでた「社会の流れの早さについていけるのか」という問題。私達が学んでいく内にも原子力再稼働への道は進んでいってしまう。だから、私は今、自分が向き合い始めた当事者性や、問題意識をこのまま持ち続けていたい。

・いろいろなところで私たちの立場や目指しているものって何なんだろうと感じた。まだ知って、感じて、考えることも完全にできていないのに、知ってしまった。聞いてしまった。から語り継がなくなっちゃいけない。下の人に繋いでいかなければいけない義務が生じてしまった。これから私はどうしたらいいんだろう。何かしなくなっちゃいけないと思う焦りは感じているけれど、私には何ができるんだろう。行動してそれが間違った、現地の人には迷惑な事にならないとは言切れないから怖くなる。そんなことを考えさせられるスタディーツアーだった。

・「東北」と「復興」に対しての考えを述べる中で、ずっと悩むのが自分の立ち位置である。つまりは自分のポジショナリティ。もちろん被災当事者ではないので自分事には中々なれないが、決して他人事ではない。自分には厳然と加害性があるわけで、いわば加害当事者という当事者の一種なのかもしれない。加害責任があるから決して他人事ではないのだ。自分の「東北の復興」をまとめると、それは加害当事者の「ごまかし」(理解した気になってしまっている、惨事便乗型資本主義)と被害当事者の「あきらめ」(帰りたいけどふるさとがない、震災トラウマ復興ストレス、分断・対立)。

じゃあ自分はどこにいればいい。宮地尚子の「環状島＝トラウマの地政学」に出てくる環状島の論理を自分に当てはめて立ち位置を考えてみた。非当事者の自分たちは、支援者と傍観者の二択に分かれているらしい。どちらも腑に落ちない。支援者と思える行動や考えをしているわけでもないし、傍観者と思えるほど無知・無関心ではない。自分の立ち位置を模索している中、腑に落ちる表現があった。それは立命館大学の村本教授の「証人」という言葉だ。環状島のどこに

いるのかはまだ分からないが、今は証人という言葉に納得している。これで悩んでいた、自分の行動や考えも少し明確になった。証人になるということ、それは被災当事者の証言や背景を理解していくプロセスであり、代弁(もちろん理解はしきれない前提)するという事であると考える。

・おそらく、2023年度のどこかのレポートで「自分ごととして」とか書いた気がする当時の自分にとっては激しく納得はしながらも、衝撃であった。自分ごとにはしきらず、自分ごとにしようと近づける、自らの立ち位置を考えつつ、あくまで第三者としてどう当事者に関わっていくのか、それはともかく、加害、被害者に続いて当事者は我々目線から何を持って当事者といえるのだろうか、全く自信がないので是非教えていただきたいくらいであるが、考えるに「ある話題について聞き手より核(出来事の確信)に近い人」のことではないかと思う。当事者の条件に、出来事についての“体験”があるかを含ませるか悩むがしかし、核からどこまでが当事者か定めることは難しいことから話し手、聞き手の“比較”で当事者(真には当事者性が高い)を判断することができるように思う。(中略)

次に東北と復興を受講する中で自分の中に疑問というか、悩みがうまれた。それは去年度と比べて、興味深さや学びは深くなったけど、「楽しくなかった」。(つまり苦しかった)去年度、楽しめていたのが間違っていたかどうかは後にして、純粹に震災に関する出来事や事実を知り心が苦しくなった。という苦しみはあるにせよそれではなく、東北と復興という学びの場において目の前(想像上の目の前も含む)の出来事について向き合うこと(考えること)を余儀なくさせられる、大袈裟にいうと強要される。ということに苦しみを覚えた。ズバリ、自ら乗りに行った船ではあるが、最大2年分の蓄積という意地があるし、何にせよ、伝承的行動という成果を上げるまでに「考える」という過程を通過しなくばならず、逃げるに逃げられないのだ。いや、成果や意地を捨てても苦しみというものは一方的に向かってくるかもしれない。そして、知ってしまった以上、逃げるということが、ハーマンの言っていた加害側の行動と類似してしまう。去年より悪化した原因は、自分の中で東北と復興が基礎から発展に難化したことと、考えることを分かち合うクラスメイトがいなかったからであり、さらにその原因は自分の年上以外にずかずかいけない性格や、ひとりで考察を完結したこと。が大きいように思う、そして反省する。改善した先に来年度の東北と復興はないが。

しかし、前にも問うたように楽しいということが良いのかということも考えると、改善点こそ見直すべきだがむしろ頭を抱えて悩み悩み、追い込まれる方が東北と復興ではいい学びを得られるような気がする。だからこそ、東北と復興と自由の森と内田一樹という環境で学ぶのがたった2年で終了してしまうのは、とても悔しい。

・では私は今後どうやって関わっていったらいいのだろうか。いろいろな人から話を聞いて、感じて、考えて。人に繋いでいかないといけない責任を今私は持っている。この責任をどうやって果たすのがいいだろうか。自分の中に知識を蓄えてから今後増え続ける東日本大震災を経験していない世代に伝える？もう少し現地に近づいてみる？それとも責任を放棄して傍観者に回る？いろいろな選択肢があって悩んでしまうが、今のところは責任を放棄するのだけは避けたいなと思っている。たった一年間少しの時間学んだだけの人間が結論を出すのはまだ早い。今後も考え続けていこうと思う。

・正直よく分からない。分かったなんて言えないのは、もちろんのことだが、東北の方達に僕が何かをするべきなのか。その一つが、知ることだと思うが、僕が知ったとて、去った人が戻る訳でもない。

僕が考えているのは、「みんなで考える」ということだ。復興とはどうあるべきか、も大事だけど、それにはまずこの「みんなで考える」が必要だと思う。双葉屋旅館の女将も、大熊未来塾の木村さんも、似たことを仰ってくれた。でもそれは、とても難しいことだ。何故なら、考えるには知らないといけないし、知るには、行動しないといけない。俺ら、「東北と復興」を受講した人は、確かに自分で選んだものの、結局は内田がこの授業をやってくれてなければ、行けなかったと思う。中には、受講してなくても、自分から行く人も、いないとは言えない。でも、そんな人、この受講者の中の、一人や二人だと思う。俺は、胸を張って「行けた」と言えない。そして、受け身の「知る」という行為には、本質というか、本音は見出せないと思う。(この受け身の「知る」とは、自分ごととして考えていないや、この出来事がそこだけの時間軸で完結している人のことだ。)自分から「知る」意欲があることを示して、それでやっとスタートラインに立てると思う。そうやって、自分から行動しなければ、見たもの聞いたことが、その情報としてその状態で止まってしまう、深めることもできない。それに、スタートラインに立ったからといって、被災者の本音というゴールが自分の前にあるとも限らないと思う。そんな自分の身を、心を削りながらのことが「みんな」で、出来るだろうか。「知る」ことですら難しいのに、「考える」まで、「みんな

は、及ぶのか。インターネットが普及して、AIまで発展して、授業はタブレット一つで行えて、どんどん人と関わらずに、生きることが出来て、(それを生きるとは思えないが)手をつけられなくなる。どうすればいいのだろう。そもそも、考える必要がないと思っている人とか、それすら無い人を、原発というものに、何かのかけらでも、自分に責任があると思えない人は、見捨てるしか無いのか。しかしそれは根本の解決には、至っていない。それに僕は、それを諦めちゃいけないと思う。「皆で考える」必要があることを知ったのだから、そこにも僕らが、追求しなきゃいけない責任があると思う。

・「東北と復興」講座を受講して、学ぶことができて本当に良かったと思っている。東日本大震災について関心を持って、沢山のことを知れたことはこれから生きる上で大切なことであり、また、知ったことはこれからの世界をつくる上での責任を負ったことでもある。一年間で学び終えた訳では決してなく、この問題はこれから先ずっと考えていかなければいけないと思う。講座の中で何度も苦しくなって、でも実際に経験した訳ではない自分が苦しいと思うことに申し訳なさみたいなのを感じたりして、すごく悩みながら取り組んだので、これからも自分の心をダメにしまわない程度に、大切にしながら考え続けていきたいと思う。

・三年生という一番最後の年で一番難しい話で、自分が何を言えればいいのかぜんぶ分からなくなって時間がたっても全然まとめることができない。時間が足りない。しかし知って、触れたからには伝えるために学び続けなければいけないと思った。卒業しても今回のスタディツアーで聞いた言葉は大事にしていきたい。ぐちゃぐちゃだけど今言葉として書けるものはこれくらいです。言葉って伝えるって難しい。これを私は今後どうやって言葉にしていけるのか考えなければいけませんね…。

学びの「苦しさ」は「分かった」と「分からない」のはさまにいることからくるものである。ある生徒はスタディツアーの振り返りの夜に見た景色や聴いた話などのスタディツアーでの学びを「知っちゃったから責任から逃れられない」という言葉で表現した。「知っちゃったから」という中動的表現は、この学びのはさまにいる様子を伝える言い得て妙な表現だと思う。ここで面白いのは当時、高校2年生の言葉にある「受け身の「知る」という行為には、本質というか、本音は見出せないと思う。(この受け身の「知る」とは、自分ごととして考えていないや、この出来事がそこだけの時間軸で完結していると思っている人のことだ。)自分から「知る」意欲があることを示して、それでやっとなスタートラインに立てると思う。」という言葉が、この「興味」と「関心」の意味を説明しているところだ。「本質というか、本音を見出」すために能動的に「知る」ことが重要だと言っているが、これは「関心」に他ならない。そしてそれは原義としての「interest」に近い。

3. 分かった・楽しさを目指すところとの違い

授業の目指す姿として、子どもが「分かった」ということ、あるいは「楽しい！」と思うことを目指すことが現在では一般的であるそのために教員はいかに子どもが「分かりやすく」、「楽しい！」と感ずることができるようモノを用意できるかが求められているように感じる。先日、とある研修会でこの「東北と復興」の実践報告をした時にある教員から次のような感想をいただいた。「社会科の教育をされていて子どもたちに他人事ではない、自分事としての感想を言ってもらおうかをずっと考えてきた。どうしたら良いか悩んでいた。だから今回聞いていて「当事者」と同じにはなれないっていう声かけは考えたことがなかった。でもこの授業を受けている子どもたちは、どの子の感想を読んでも自分事として考えていて感動した。」というものだった。

「分かりやすくない」ことが、「理解できない」こととされ、その結果として生じている「楽しくない」、不快な感情が悪いことのように語られることが教育、とりわけ教科教育の場面では多い。社会科教育においても同様である。もちろん子どもたちにとって「理解できない」状態にすることが良くないということは、半分私も同意である。実際授業をされていて、どのように説明するか、どのように問いを出すか、ずっと悩んでいる。ただし「分かりやすい」ことをゴールとして求め過ぎれば、危うさをはらんでいるようにも感じている。例えば「分かりやすい」社会科教育を求めていくと、そこで用いられる題材は、可視化されやすいもの(数字や文書、遺物など形として残っているもの)だったり、結果がすぐ分かる(善悪の二項対立やクロニクル的な歴史

事項の羅列など）ものや暗記するものであったり、あるいはこちらが正解を用意している（教員の側にすでに望んでいる「答え」が存在しているような問い）ものであったりなどである。とりわけ可視化されやすいものとしてVRやパワーポイント、動画などの技術の進歩（そこにはAI技術の進歩もあるだろう）があり、もはや当時の場面を「再現」することは可能であり、同じ経験を「追体験」することもできるように考えられている、あるいは「再現」や「追体験」することが目指されている流れがこの社会の中にはあるのではないだろうか。これは学校の授業空間だけではなくて、多くの資料館や博物館でもそうした展示が増えているように感じる。それによって確かに分かりやすくなっている側面や訪れた人が学びやすくなっている側面はある。自分自身で目の前のモノや聴いた物語から想像する労苦を、技術の進歩によって減らしたことにより、より多くの人たちの「理解できる」状態につなげていることは間違いない。しかしそうした可視化された「分かりやすい」ものだけを、教育、授業の中で取り上げていくことによって、可視化された「分かりやすい」ものだけしか見ない人間に子どもを育てていくことになってはいないだろうか。形あるものだけを「根拠」として求め、数字やデータだけ、一部分の切りとられた言葉や動画だけ、自分にとって「分かりやすい」もの・「理解できる」ものだけを受け入れ、「分かりにくい」もの・「理解できない」ものは批判されたり正当性がないと否定されたり、中には捨象されていくものもあるのではないだろうか。そしてその中には取りこぼされてはいけない大事ななものもあるかもしれない。

現実には「分かりやすすくない」ものが多く存在する。善悪や正誤の二元論的な分かりやすい事象だけではなく、実際には混在して起こっている事象も多くある。人の気持ちや社会構造や文化など、目には見えず「分かりやすすくない」こともある。それらを目に見えている、形になっているところ、数字やデータだけで「分かりやすい」ものとして「理解」できると考えると、かえってそのものの本来の姿を損なってしまう。見えないもの、聴こえない声は、はじめから存在しないものとして考えられてしまう。しかし実際に対人援助が開かれていなければならないのは、見えないもの、聴こえない声に対するものであるはずだ。学校教育においてさえ、数字として可視化されるテストの成績や日常での発言や形として残る作品「だけ」を評価し、可視化されないもの、聴こえない声に対して存在しないとすることが、多くの問題につながることがあることは言うまでもない。例えばいじめの被害者に「なぜアンケートに記述しなかったのだ？」「なぜ聴こえるような声で助けてと言わなかったのだ？」と、形に残るような行動をしなかったことへの自己責任論へとつながりかねない。

それらのものは「分かりやすい」ものにすべきではないものだ。目に見えないものや聴こえない声にも目をこらし、耳を傾け、そして「分かりやすすくない」ことをそれでも「分かろう」と想像することが今の社会の中ではかえって重要なのではないだろうか。「分かりやすすくない」ことを考えることは、世の中には「理解できる」ものばかりではないことを知るばかりではなく、その「分かりやすすくない」ことをそれでも考えるために何が必要かと自己に問い、省察し、その結果次の学びや想像することにつながる。「理解できない」ことによる「楽しくない」ということはあるかもしれないが、それでも考え続けることによってその人自身も成長することができる。

対人援助は本質的には「分かりやすすくない」ものではないだろうか。誰かを助ける、援助することは形としてはとても「分かりやすい」。むしろ誰にでもできるし、誰でも助ける、助けてもらう可能性がある。しかしその内実を突き詰めて考えていった時、人が人を助けるということは、そもそも様々な可能性にひらかれており、単純化して簡単に「分かりやすい」ものとすることができない。むしろそうすることができると言い切ることで「危うい」、「理解していない」と反論する対人援助職で活動されている方たちもいらっしやるのではないだろうか。私もその通りだと思う。だからこそ「分かりやすすくない」ことがこの社会の中にあることを知っていること、そしてそれを「分かりやすすくない」ままに考えるという経験は必ず対人援助を学びたい人たちにとって重要になってくるはずだ。特に「東北と復興」において出て来る「分かりやすすくない」ものは、東日本大震災の被災の中にある多くの当事者の方たちの物語と、その後の「復興」の中で起こっていること、そしてその背景にある歴史・文化・社会（構造）・政治などである。見えていなかった、聴こえていなかった声がある

ことにスタディツアーの学びを通して気付くことで、かえって自分の考えていたよりも「分かりやすすくない」こととなる。もちろん高校生だからこそもう気付くことが出来ているし、受け入れて考えることができるという側面もある。そしてその「分かりやすすくない」ことを考えることは、必ずしも「楽しい」ことではない。だからこそこそから目を背けたり耳をふさいだりすることもできるだろう。時にそれは自分の身を守るために必要なこともあるかもしれない。しかし逆に全ての物事に対してそのように行動し、全ての物事に対して「分かりやすい」「理解できる」と考える姿勢は対人援助職・対人援助者の姿勢なのだろうか。決してそうではないはずで、時に悩み苦しみながらそれでも目の前の出来事から目を逸らさない、耳を傾け続けることを体験すること。それは自らを省察し、考え続ける対人援助職・対人援助者の姿勢とつながっているように思う。

こうして「分かりやすすくない」ものと出会い、考え始めた高校生たちは次に何をさらに知りたいか、考えたいかということで、就職や大学・大学院に行くことを選び取っていく。自らが主体としてこの社会の中でどのように生きていくのか、という姿勢にもつながる。対人援助職・対人援助者といわれる領域の仕事を目指す生徒も多いし、そのために大学に行く生徒も多い。きっとそれぞれの場所でより専門性の高いことを学びつつ、この「東北と復興」のスタディツアーを通して出会った方たち、経験が彼らの学びの根本のところにかかわっているものもあると考えられる。それは高校3年生が大学受験の際の志望理由や大学で学ぶ意味について文章に書くときに「東北と復興」での学びをキーワードとしてあげる生徒が多いことからそう感じている。それは防災や災害に関するものではなく、社会学や福祉、看護など多くの学問領域においてだ。週に1回、2時間しかなく、しかも1つの選択授業でしかない「東北と復興」を受講した生徒たちが大学や専門学校で学びたい動機としてこの講座における「分からないことを分からないままに考えた」体験をあげる。高校生たちにとって大学での学びとつながるものがあるのだろう。

最後に先日7月に実施された2025年度の石巻市スタディツアーに対するある生徒の感想を紹介する。ここまで述べてきた自らの理解、あるいは表現の限界性について触れながら、それでも「表現し得ないもの」を「表現し得ないもの」として表現していくことについての想いを綴っている。

そんな石巻という「多くの人が亡くなった地」をどう表現して良いのか。どう表現していくべきなのか。そもそも、その「石巻」＝「多くの人が亡くなった地」という認識が「石巻」という地域を表現する上での全てになってしまっているのではないか。その認識の下、石巻を語るということは、これまでの石巻の歴史や文化がなかったものとして扱われることと同じ意味を持っているのではないか。それが、石巻にとっては暴力的に映り、また新たな「偏在するく東北」のような抑圧の形を生み出す危険性を帯びている気がしている。そんな危険性がこの認識にはあると感じて、危機感を覚える。「石巻」＝「多くの人が亡くなった地」という認識が自分の中に少なくとも在った、ということが少し悲しく、私は「私」を許せない気持ちになった。

スタディツアーを通じて震災の被害があった場所に行き、実際にその空気感に触れたことで、私は「私の表現」の限界性を知った。いや、本当はそんな格好のいいものではなく、今まで私は、ある物事の表面上に見える存在だけを掬い取り、それに脚色を加えてそれっぽく簡単に騙っていたのだ。だから、そこに内在する表面上には表れない語りであったり、おもいは「表現し得ないもの」として切り捨てるように見ないようにしてきた。だけど、「東北」ひいては「誰かのおもい」を本質的に理解しようとするためには、たとえ今回の門脇小学校や大川小学校の「静けさ」のような表現し得ないものと相対したとしても、その表現し得ないものを「表現し得ないもの」として表現することが、その物事への本質的な理解において重要なことなのだと感じる。だから、たとえどんなに苦しくても思考し、表現を続けることは諦めたくない。

ある看護科教員のアタマの中

9

～精神科実習での学び方～

山岸 若菜

はじめに

看護学生は実習が大変とよく言われます。

特に3回生は一年かけて色んな領域を回って実習をします。

私の担当する精神科実習は一週間なので、14週間かけて複数の病院の病棟に毎回違う学生を連れて行っています。

教員2年目になり、少し落ち着いて実習に関われるようになってきました。

今回は精神科実習に行って感じたことについて書きたいと思います。

毎回聞く学生の戸惑い

これまで精神疾患を持つ人と関わったことがないという学生の方が多く、またドラマなどで見た精神科病棟のイメージもあって実習前はとても緊張しています。

そして実際実習が始まって毎回必ずと言ってよいほど聞くセリフが「何をしゃべったらいいかわかりません。」「何したらいいのかわかりません。」です。

身体の病気を扱う領域では、処置や観察項目が比較的明確で、学生は「やるべきこと」に従って実習を進めることができます。ところが精神科では、やるべきことが不

明確で「どう関わるか」を問われることが多いため、学生は自分の関わりに自信を持ちにくいようです。

「なんで何しゃべったらいいかわからんようになってるん？」と聞いてみるけどあまり明確な答えは返ってきません。

「精神科ではない身体の疾患を扱う科に実習に行くと、患者さんは聞いたことに答えてくれるしあれこれお話をしてくれるけど、反応が全然違うんやもん！」といらだつ学生もいます。

精神科では学生が当たり前と思っている反応が返ってこないことも多く、とても戸惑うようです。

そこで「自分が聞きたいことだけ聞きに行つてへん？自分やったらいきなり学生が来て根掘り葉掘り自分のこと聞いてきたらどう思うん？」と聞くとたいてい、それは嫌やし、しゃべりたくなくなると答えます。

じゃあどんな人やったら自分の話してもいいかなと思うかな？と考えてもらおうと恐る恐る患者さんと関係を作ろうと頑張る学生が出てきます。

嬉しい学生の変化

ある学生は患者さんのところに話に行きたいけど、何を聞いても無表情に「はい」「いいえ」しか返ってこないからどうしたらいいかわからないと悩んでいました。

私もどう対処したらいいかなんてわからないけど、とりあえず一緒に行ってみようかと、その学生と一緒に患者さんの部屋に行ってみました。

学生は「昨日はよく寝られましたか？」「朝ごはん美味しかったですか？」など話しかけていましたが患者さんは「はあ」「まあ」と返事するばかりですぐに沈黙が流れていました。

そこで私は、患者さんに自己紹介して天気の話など他愛のないことを話した後に、その患者さんが昔美容師だったという情報があったので「私最近パーマかけたんです

けど、セットがうまくいかなくて、時々爆発したまま仕事に来てるんです。何か爆発しないいい方法はないものではないでしょうか？」と聞いてみました。

すると、無表情だった患者さんが吹き出しながら「わかりません。」と答えてくれました。

この時学生はすごく驚いていましたが、あとから「笑わはるんやと思ってびっくりした。もっとあの人のことが知りたいと思った。」と教えてくれました。

学生は患者さんの表情の変化をよく見ていて、患者さんと一緒に空間を過ごす大切さを感じたのだらうと思いました。

残りの実習期間をほとんど患者さんのそばで過ごすようになり「あの人のために何か自分ができることはないかな。」と考えるようになっていました。

それなりでも実習は終わる

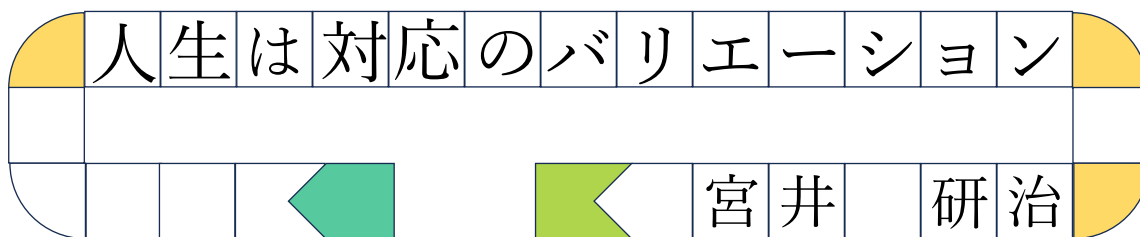
しかし、すべての学生がこうした気づきを得られるわけではありません。

患者さんとの関係作りをあきらめてカルテとにらめっこし、それらしいことを記録に書いて実習を終えてしまう学生もいます。

その場合記録上は整理されているように見えますが、患者さんと向き合うことでしか得られない学びは限られてしまいます。

もったいないなと思うけど、そんな様子を見ていると、精神科の実習の対象は精神疾患を持つ患者さんではありますが、実は学生が自分自身の患者さんとの向き合い方を問われる実習なのだなと感じます。

今回はカルテ上の情報整理にとどまる学びと、患者さんとの関わりから得られる学びとの差をいかに伝え、学生を「患者さんのそば」に導けるかを自分の課題として取り組んでみようと思っています。



-第10話 面接再考（最高！） -

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

記念すべき10回目の記事掲載です。しかしながら、一人感慨にひたるほどには、まだ書いていません。それが目下の感情です。前回は触れましたが、一編5000字は書いているから、5000字×九篇で、45000字は優に書いています。今回（まだ、書いていないのに、取らぬ狸のなんとかですか）見込み文も含めると50000字です。記事の質は兎も角、個人的な文章修行をさせてもらっていることは確かです。

前号で、研修講師を引き受けていて思うことをツラツラと書きました。うまくいく研修とは、というやつです。自分の調子を上げていくためには、会場でこちらの言っていることに大きくうなずいてくれる人や、満面の笑みで応えてくれる人を探すことです。児童福祉業界に携わる人は、偏見絡みで言わせてもらおうと、真面目な人が多い（決して不真面目が良いと言っているわけではありません）。だから、私のウィットに富んだ研修内容に対して、笑いを噛み殺して臨んでいる人も多いのかもしれない。笑いが

欲しいとこで、笑いが返ってこない、慌ててしまうのは私です。「人生は対応のバリエーションですね」なんてことを、テーマに掲げて連載しているのが恥ずかしくなります。そんな時は、この人たちは、本来は笑いたいのに我慢せざるを得ないという研修の文脈に囚われているのだと思い込むようにしています。爆笑の渦を妄想します。もうひと押しで、研修会場が和みそうだと察知すると、「ここ笑うところですよ！」とブースターの決め台詞で攻めることもあります。さらなる空振りもありますが。

真面目さや正直さは、自分もそういう人なので、否定はできない（ここ笑うところじゃないですよ！）が、それだけを錦の御旗のように掲げられると反発したくなるのは何故なのでしょう。この辺りも前回書いた「真面目なことは良きことかな？」に通じる心持ちです。

1.「相談！ ああ、相談！」もしくは「面接！、
ああ、面接！」

以前、「面接の技とコツ」という本を明石書店から出したことがあります。初版の発行は、もう 13 年前になりますが、今思うことと、当時信条にしていたことは、ほぼ同じです。そういう意味では、あまりぶれてはいません。変化や上書きがない。言うことがコロコロ変わらない分、どこかの政党よりは誠実ではないか！ 自分自身を褒めてあげたい。この本を出した 2012 年以降に、所謂、心理面接界隈で出てきた考え方や治療技法は、たんとありすぎて私では、列挙できない(その気力がない)。だから、気になったものだけ上げてみます。「オープンダイアログ」やそれにまつわる「リフレフティング」という進め方、「認知行動療法」の台頭とそれに続く「マインドフルネス」や「アクセプタンスコミットメント(ACT)」、私が知っているのはこれぐらいであり、また、文字面を知っているだけで、内容はほぼ白紙です。だから、“俺っちがやってるのが載ってねーじゃん！”とお怒りの貴兄、私の薄学によるものと、どうぞご容赦ください。

そういうことで、今回は、面接の話を聞いて下さい。私がかつて所属していた福祉現場、主に児童相談所ですが、現在関わっている教育現場、スクールカウンセリング、また、福祉現場では保育園、認定こども園でのコンサルテーションでは、仕事内容は当然違います。しかし、どこでも「面接」という道具立てが必要です。道具立てを、場面設定、仕事形態と言い換えてもよいと思います。当たり前と言えば当たり前ですが、福祉現場や、教育現場以外のほとんどのお仕事でも、人と相対してお話をする作業は不可

欠です。人ではなく、モノづくりを生業とする職人と言われる人や、人ではなくパソコンのみを通して作業する人を除いてはという話になります。しかし、職人さんでも仕事を請け負ったり、材料を発注したりする場合には、依頼主や発注先とお話ししないとなりません。ここにコミュニケーションが発生します。コロナ禍からグッと社会の全面に出てきたオンラインのやりとりも、もちろん「面接」でありましょう。

よく議論される「対面」と「オンライン」の違いですが、もうどっちがいいよねという議論内容は少なくなり、両者の利点をうまく使いましょうという落としどころになることが多いように思います。ただ、少なからずこのコロナ期のコミュニケーション事情を体験してきた者から言わせてもらおうと、オンラインにはオフがないという感じはあります。常にオンの感覚といえますか、顔出ししないときを別にして、一定の緊張を強いられる感じがします。たくさんの参加者があれば、小窓から顔出ししている自分を見られているように感じます。対面は緊張と弛緩の差が大きいのですが、オフがある。隣同士でこそっと話ができる感覚です。そう「ここだけの話」。オンラインでは「ここだけの話」はできない。勝手にブレイクアウトルームには行けませんもんね。

それで、相談、面接の話に戻ります。今も現役で面接の場に聞き手として立たせていただいています。もちろん、役割上は聞く側の人なのですが、その相談の途上では、こちらのお話を聞いてもらうことも多々あります。この状況は、どの聞き手、カウンセラー、セラピストでも同様でしょう。大学の先生としては、院生のケーススーパーヴァイズな

んかでも聞き手として関わらせてもらいます。大学の先生以前、キャリアの大半は児童相談所を中心とした福祉現場で相談を受ける側として働いてきました。私の先輩、同僚、もちろん後輩にはたくさんの優秀なそして熱心に相談を受ける人たち（立場として、心理、福祉、医療という立ち位置は別にしてお仕事をしてきたと思います。関連知識・情報の豊富さや、相談してくる人への思いの強さ、ケースへの見立てのすばらしさ、チームへの連携力、指導力、組織マネジメントと言われるもの、そのどれをとっても、自分が得意、人より秀でているといったことは、ほぼないです。逆に全然できないということもない感じでしょうか。中途半端です。書いていてちょっと寂しくなりました。

少し誇れるものがあるなら、「面接」についてはよく考えてきたように思います。これには記憶があって、今よりけっこう若い頃、通勤電車の道中、行きも帰りも「どうやったら面接がうまくいくのか？」ということを繰り返し考えていたという映像が記憶としてあります。「ちょっと待て、そんなんどうやって撮るんや！」とツッコミが入るところでしょうか。これは日々考えていたであろう自分の映像を勝手に思い浮かべる現在の自分の為せる業ではありますが。この記憶を辿ると、その当時面接がうまくいくという私の感覚は、相談してきた人がどうなれば一番良いのかというケースワーク、受けた相談がどういったメカニズムなのか原因と結果も含め心理士として考察するということがスムーズに運ぶといったようなことではなかったように思います。もちろん、長期的なスパンに立ち、以上のようなケー

スワークや問題のメカニズムといったような事も通勤電車の中では考えていました。でも、メインで考えていたことは、日々人に会う仕事の中で、如何にその日のその面接がどう運んだらよいのかということを考える心理士でした。うまく皆さんに伝わるかどうかわかりませんが、相手がこうきたらどう返せばよいのかとか、どういう所作が相手の気持ちを緩めるのか、こちらの表情は笑顔が良いのかそれだけではないのか、チマチマと細かいことを考えていたと記憶は言っています。コミュニケーションの不思議というか面白さに惹かれるということが強かったように記憶しています。「Here and Now」の受け手としての立ち振る舞いにすごく面白さを感じていた、そのことならいくらでも考えられたように思います。人とのコミュニケーションへの興味でしょうか。相手がどんな人であろうと、如何ようにも受けて立てる心理士になりたい、てなことを考えていたのかもしれませんが。例えば、コミュニケーションにおける合気道の達人みたいな人をイメージしていたのかもしれませんが（うまいこと言うな）。

だから、家族療法にしても、システム論にしても、後に出会う解決志向にしても、「コミュニケーションをうまくとるためにはどうしたらいいの？」という命題によって導かれた感じがします。心理学科の学生さんにきけば、「傾聴」からの「共感」といったクイズの答えみたいな事を返してくれる学生はけっこういます。しかし、実際に臨床のお仕事をしている人からすると、そう簡単にはいかないよというのが実感ではないでしょうか？それは、「傾聴」にしても「共感」にしても、クライアントがこの心理士は自

分の話を「やたらしっかり聴いてくれるな」とか「俺の話ってこんなに感動してもらえる」とか、思ってもらえないと、何も動かないわけです。場合によっては、逆効果になります。経験的にもそういうことは、ありました。例えば、クライアントの話を傾聴よろしく一生懸命リフレインあるいはリフレーズする私に対して、「同じこと言ってんじゃねーよ」。クライアントの話に深く首を垂れる私に対して、「だからどうしたらいいんだよ、お前の考えはねーのかよ?」。なぜか、馬事雑言は東京弁になるのは自分でも面白いです。私の力量のなさにはあつたにせよ、心理士なら同じような体験は多少なりともあるのではないのでしょうか?後々考えれば、これはクライアントの感じ方としては、当たり前のことの一つだと思います。「傾聴」「共感」ましては「受容」にしても相手(クライアント、要支援者、来談者)から見ての形容なわけです。浅はかで傲慢で早とちりな若き心理士であった当時の私には、こんな単純なことさえわからなかったわけです。しくじった話はたんとありますが、うまくいった話も少しだけさせてください。

2. うまくいくとき

なぜうまくいったかの分析はさておき、うまくいくとこんなことが起こるよという話を二席ばかりさせてください。二席ともいわゆるモンスターと言われる人たちだったと思います。一人目のお母さんは、一言でいえば「虐待母」です。しかし、子どもさんも十分に難しいお子さんであり(もちろんそういう子どもに育てたというもあるわけですが)、今後どう育てたらよいか育てあぐねている最中に会った方でした。社会

的には会社組織の中では経理担当で、お母さんの言葉を借りれば、バリバリやっているとどこでした。億の金を右から左に動かしていると自負されていました。たぶん、その自負が、子育てにも、人に相談をするという状況にも、マイナスに作用していたと思います。とにかく、担当するワーカーはけちょんけちょん状態でありました。内容には触れませんが、とりあえず理詰めで、出す案出す案、ことごとく却下されて戦々恐々とした状態でした。お母さんは「(子育てが)わからない」が言えなかったんだと思います。私はというと、気に入られました。何が良かったかはさておき、いったん信頼(?)されるとどんなことが起こるかお話しします。勝負は短時間で決まったように記憶しています。私との初回面接の後から、OKサインをいただいたようでした。同じことを言ってもワーカーでは「ノン」、私なら「イエス」。だから、私から話を通していったように思います。今思えばワーカーも上手ですよ。うまく私を活用してくれていたと思います。とにかく私の語ることは「先生のおっしゃる通り」「先生のおっしゃるようによってみます」「うまくいきました」という感じ。こいうった正の連鎖は、長続きもしないものですが、このお母さんは私が担当から離れても、時々、「娘の今後」について意見を求めてこられました。もちろん、たいしたことは言っていないです。

二席目。これは里親さんでした。内容には触れませんが、児童相談所として里親さんとして今後もお願いしてよいのかという疑義がもちあがっていました。当時、私も管理職の端くれでしたが、児相案件ということで、上司とともに里親さんご自身に事情を

うかがうということでお宅にお邪魔しました。私は心理職という立場もあり、児相を背負う立場の上司より、やや斜めの位置から「初めまして」という形でご挨拶させていただいたように思います。今思うとそれもよかったのかもしれませんが。玄関先から、緊張が走り、非常に穏やかな上司のいつもと違う表情。里親さんも明らかに「また、来たんかい」と不機嫌さを隠しもしない様子でした。話の内容は、ある事実について、児相側の解釈と、里親さんの解釈が相いれない、堂々巡りを続けるというものでした。紛糾パターンのお話内容です。里親さんの話が長いので、時間切れもいいところでした。私と云えば、心理職という立場から、普通に里親さんの長年の苦労や、子育ては誰がやろうと大変な作業です的なことを言っていたに過ぎません。ただ、里親さんの「おたく（私のこと）はどう考えてんの？」というキューを待って答えていたように思います。里親さんの視線が、上司に向けられているものと、私に向けられるものでは明らかに違っておりまして。次回の訪問の約束を取り付け帰るころには、予定時間をはるかに超えておりました。私への対応が優しくかったからという分けではありませんが、2回目以降は私単独で行くということになりました。嫌でしたが、門前払いはないという確信のもと出かけました。なぜか、駅前で里父母さんの二人分のケーキを差し入れに持っていたように思います。まず、訪問先に手土産を持っていくといったことはしませんが、なぜかこの時は、そうした記憶があります。しいて言うなら、「里親であるとか、困りごとであるとかいったことではなく、対等な関係で訪問させてもらっています」という

ようなことを間接的に伝えたかったのかも知れません。その効果のほどはわかりませんが、私のそれ以降の里親さんの受け入れは良好でした。問題の案件は、うやむやなままでしたが、もう少し様子を見ようという児相側の判断に落ち着いたように思います。

3. 何が言いたいのか。

二つの事例からお伝えしたいことは、うまくいっているなら、小細工せずに、そのまま続けましょうということです。なんでもうまくいったか？その要因はなにか？効果査定は、もちろん大事です。でも、あくまで目の前の人が主体です。サーフィンではありませんが、良い波なら乗ってしまいたいということです。うまくいった理由は、後から考えましょう。そして、残念ながらうまくいったと思われる理由は、後のケースのすべてに反映されるものではないと思います。ケースそっちのけで「この解決は、本当の解決なのか？」「自分としての体験は如何なるものであったのか？」「深いレベルでの解釈は如何なものなのか？」いろいろ考えを巡らすのは嫌いではありませんが、こういった事は、あくまで人間の思索であります。言ってしまうと、「妄想」でもあります。一番は、「役に立つと思われること」「役に立ったと言ってもらえること」を基盤にしたいと私は考えています。

とは言え、二つの事例に共通するうまく運んだ要因の大きな部分は、なんとはなしの「希望」みたいなものを提示できたからではないかと思います。これだけでは具体性に欠けます。「希望」を具体的に作る作業としてはそれぞれの当事者の「ニーズ」を共有することだと思います。一席目のお母さん

は、「子どもには、私と同じように自立してやっていける女性になってほしい」、二席目の里親さんは「できるだけ、身寄りのない子どもたちの育ちの場所になってあげたい。社会貢献したい」かと思います。こうしたことを、言葉もしくは態度、雰囲気でもリフレインできたのかもしれませんが。「ニーズ」を教えてもらうには、やはりそれまでに当事者が払ってきた苦労や、努力への労いはマストですね。ここの押さえも、具体性、事実を基にしてお返しするのが、一番伝わるというのが経験則です。回りくどいですが「私は、〇〇という問題に対して△△という努力をしているあなたは、すごいと思うよ」お世辞ではなく、発見として言えれば、程度の差はあっても伝わるものです。まあ、訪問時にケーキを買っていくことをお勧めしているわけではありませんが。

今日は面接における自慢話でした！

けふばあちゃんからの手紙(5)

— 一郎くんへ —

(じゃりんこ文庫 乾 京子)



毎日毎日、とろけてしまいそうなくらい暑い日が続いています。お元気ですか？

先日、何年振りかでお母さんにメールしたら、一郎君がパパになったと聞きました。おめでとうございます。そうですね、一郎くんが文庫に来ていたのは、もう、20年以上も前のことになりました。けふばあちゃんは、いつまで経っても幼稚園、小学生、中学生の頃の一郎くんの顔が浮かびます。弟の治郎君と山田さん兄弟と一緒に来ていましたね。その後、妹のマコちゃんも加わって、あの頃の「じゃりんこ文庫」は、ごったがえしていましたね。

一郎君が、5年生か6年生の時の夏休みの文庫の日のことでした。

「おばちゃん、これ。文庫へプレゼント！」

と、お父さんにもらった建築の廃材で作った「すのこ本立て」を持ってきてくれました。

「ええ〜っ、これ、一人で作ったの？ 持ってくるのも重かったでしょう。」

「学校の夏休みの宿題が『人に喜んでもらうことをする』っていうので、じゃりんこのおばちゃんに喜んでもらえるかなあと思って」

「ありがとう！ 本当にありがとう。とってもうれしいわ。きっと、みんなも喜ぶよ」

20年以上経った今も現役で使っています。

毎月テーマを決めて、書架の中から絵本を選んで、表紙見せの絵本や児童書の展示に使っています。

季節の絵本や、「たびだち」「雨・水」「植物」「月・宇宙」「収穫」「みどりの本」「赤い本」「青い本」「黄色の本」「昔話の本」……いろんなテーマで、展示してきたなあ。今はね、こんなの。7月8月、テーマは夏休み。





見覚えのある本はありますか？

秘密基地やキャンプ、自然と人間。

8月、戦争と平和についてもね。

自由研究の参考書も。

そうそう、毎年の夏休み最後の文庫は、「かがくあそび」

一郎君がすのこ本立てを持ってきてくれた時の年は、

調べてみたら、「お金の消える貯金箱」でした。

今年も、同じだったんだよ。



作家がテーマの時も、アンソニー・クイン、赤羽末吉、バートン・クライドルフ・エッツ・林明子・さとうわきこ・・・

ねっ、大活躍でしょ。この中から選んで、持って帰る子も多いんだよ。

以前は、文庫が終わると片付けていたんだけど、今いるネコの雫はふすまを爪とぎの場所だと思っていて、それを防ぐのに、出しっぱなし。油断すると、ガリガリ、ガリガリ・・・リビングの壁紙も雫に引っかかれて、もふあもふあ状態。あの頃は、三毛猫のユウちゃん、あの子は、網戸もガラス戸もふすまも、自分で開けて出ていったね。



「じゃりんこ文庫日誌」を広げてみたら、一郎君の「すのこ本立て」プレゼントは、日誌のNo.2にできました。その半年前、けふばあちゃんがアヤハから350円ですのこに棚用の木の棒をのこぎりで切ったり、くぎを打ちつけたり、そうやってすのこ本立て作りの中心になってやってくれたのが、一郎君でした。

本立て作った後、公園で拾ってきたフウの実に黒ペンキのスプレーをかけて、マックロクロスケも作っていたんだ。(ああ、そんなこともあったなあ)って思い出してきた。

作業をガレージでやっていたんだけど、

ペンキが乾くのを待っている間、残った木切れを片付けたり、弟くんや友だちとふざけ合っている時、一郎君が残りのペンキで、ガレージのコンクリーの上に、〇〇！と落書きをしました。いつも大人しくて口数の少ない一郎君、一瞬？、(どうしたのかなあ？)、その文字を見た時はびっくりしました。でも、やっぱり、その半年前、3人目の妹君が生まれてから、おかあさんはこんなことをおっしゃっていました。



「実家も遠くて、母にも頼れないので、ついバタバタしてしまって、一郎には、いつもお兄ちゃんであることを押し付けてしまっているんじゃないかなあって、気にしてるんです。あの子にがまんをおしつけてしまってるんじゃないかなあって」

その時の日誌に「おかあさんは、とても気にしていっぱやが、彼女の優しさは、絶対伝わっていると思う。たっぷり時間のある時の一郎君は、本当に優しい目で妹を、おかあさんを見ている」

ふっと、そのことを思い出して、思わず心の奥に閉じ込めていたモヤモヤしたものが、とびだしたのかもしれないなあ。吐き出せてよかったなあ。……と、その時思いました。

「いいよ、いいよ。そのうち消えるやろ。こすると広がるから、そのままでもいいよ」

そんなことのあった後の一郎君の『人に喜んでもらう』プレゼントは、二重三重にうれしいことでした。



文庫の遠足で、大阪の万博公園に行った時のこと覚えていますか？「大阪国際児童文学館」で、円形書架の所に座り込んで、漫画を読んだり、玄関を出たり入ったりして、ピンポン、ピンポンと来館者数の数を増やしたり（頑張ったけど、橋本府政時、閉館になっちゃったね）国立民俗博物館で、世界一周。西アフリカのお話も聞いたね。言葉は分からないのに、なんだかおかしくて笑っちゃった。織物の体験もしたかな？

一郎君は、少年野球をやってたんだよね？



お弁当の後は、お友達と走り回っていたような気がします。

相模川の遠足で、ネイチャーゲームをしたのも記憶にあるでしょうか？

まだまだ、次々と思い出してきました。

でも、次は治郎君やマコちゃんへと繋ぐことといたしましょう。

最後に、パパになった一郎君へ

けふばあちゃんの大好きな尊敬する石井桃子さんのことばを贈りますね。

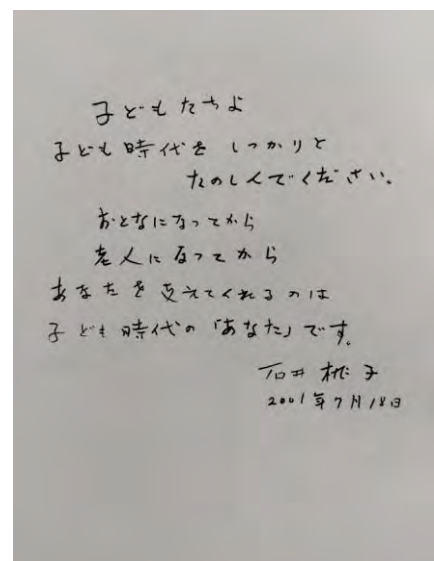
「じゃりんこ文庫」は、このことばがベースになっています。

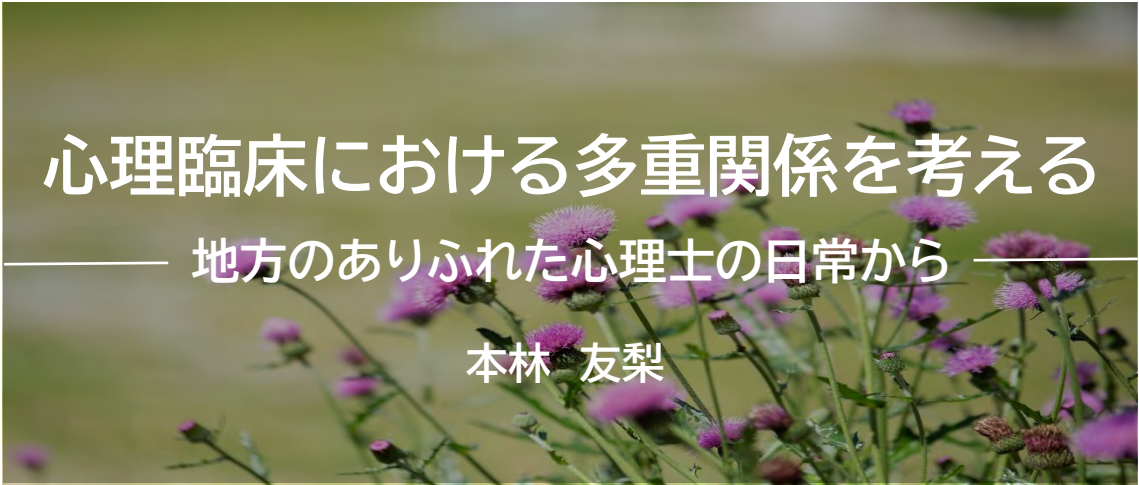
子どもたちには、子どもとして子どもの時間を精一杯生きてほしい！そう思っています。

一郎君も、おとうさんやおかあさんに見守られて、そういう時代を過ごして、現在(いま)があると信じています。

今度は、坊やにそんな子ども時代をね。

けふばあちゃんより(2025年の夏)





心理臨床における多重関係を考える

地方のありふれた心理士の日常から

本林 友梨

勉強会で・・・

本稿で4回目の執筆となる。少ない回数であるが、1回目を執筆していた「私」より心理臨床における多重関係についての感じ方がかなり変化した「私」を実感する。執筆するために知識習得に努力したり（執筆がなくてもしなければならないが、私にはそれがなかなか難しいのである！）、得た知識と日々経験する多重関係的な出来事を繋げていくためにあれこれと考えたり…そうした中で、少し前の「私」よりもやや視野広く、また、感じられ方も豊かになったのだと思う。前回の冒頭で、職場外の対人援助職者の方が旧友であったことを嬉しく思うということを書いたが、そう感じられたこと、そしてそれをこの連載原稿に素直に書けたことが、その証だと考える。私の中で怖い存在としか捉えることができなかった多重関係であるが、今はまた違った感覚として捉えることができている。

さて、とはいっても私にとっては最大の関心事である心理臨床における多重関係であるが、そもそもなぜ私はこうも多重関係

が気になるのかということを考えたい。きっかけは、私が参加している心理士（以下CP）が集まるある勉強会でのことである。先日、そこで私の関心事（多重関係）についてお話したのだが、「フィールドワーカーは、そこまで多重関係を気にしなさそうだけど」という率直な意見を頂いた（『そこまで思いつめなくても大丈夫ですよ』と私を励ます感じもあり、優しさを感じました）。私は修士研究において、フィールドワークを行っており、その経験と私の関心事の間に繋がりが見えにくいとのことであった。

このご指摘を頂いた際、なぜ私がここまで多重関係に関心を寄せるのか上手く説明することはできなかった（し、前述したように励ましのお言葉とも感じたので、説明を求められていないと捉え、ご指摘を受け入れて終わったという感じになった）。しかし、こう言われると気になってしまう。心理臨床を行う中で様々な悩みや困難を感じている私であるが、その中で、なぜ最も多重関係に関心を寄せるのであろうか？研究以前の問題であるかもしれないが、心理臨床の多

重関係を理解していくことのヒントになる可能性もあると考える。

なぜ、私は多重関係に関心を向けるのか

修士研究では、フィールドワークの手法を用いて、介護予防の文脈で開始された高齢者グループ(サロン)の活動維持要因を探究した。フィールドワーク初回、その場に参加の方が、外者の私を輪の中にすぐさま入れてくださった。そこに居ることが当たり前のように、私を居させてくれた。このような場の特徴があり、私はサロンに参加者として参加させていただき、サロンメンバーにも話しかけることをするなど、「積極的な参加者(active Participation)」(箕浦, 1999)としての役割を担うこととなった。自分という存在がその場に影響することを認めつつ、研究に取り組んだ。その場で起こる様々な事柄は「私」を抜きには成立しない、つまり、その場と「私」の相互作用があってその事柄が生じることとなる。参加者の方は、「私」という本来サロンの外者である「私」の存在を認め、さらにサロンの中に含み、ともに過ごすことを許してくれた。心理臨床の本来(基本、理想)はクライアント(以下CI)―CPという一つの関係(役割)の中で展開すべきものであるが、多重関係が伴うとCI―CP以外の関係以外の関係が展開の中に入り込む。本来の心理臨床になくてよい関係が実践に含まれる(影響する)こととなるが、サロンの中に入らせていただいた「私」であるのに、心理臨床になるとそのことについてなぜこんなにも気にするのだろうか。勉強会でいただいたご指摘はもっともである。サロンの方々が許してくれたように、なぜ私はCI―CP以外の関係を許せな

いのか。

それは心理臨床の基本がそうであることは最もであるし(経験を積めば、つまり心理士としての力量が増してくれば薄まるところかもしれないが)、フィールドワーカーの視点からすると、外者の「私」であるからこそ、「私」が与える影響についてとても慎重に考えることを求められたからであろう。フィールドワークの経験から、振舞や醸し出す雰囲気など「私」という存在が他者にどれだけ影響を与えうるかを学んだ。この学びは現在の自身の臨床スタイルに繋がっている。

あとは、前述した“心理臨床の基本がそうであること”と関連することであり、これまでの論考でも述べている通り、CIとの間で多重関係を体験することによって感じる心理臨床の難しさと、それに伴う苦しさを私は感じていることが挙げられる。だがしかし、難しさと苦しさを抱えているだけでは耐え切れず、『どうにかしなければ…!』と思うほど、私はそれらの何に苦しめられているのであろうか?

「風土臨床」と私の苦しみ

『風土臨床：沖縄との関わりから見えてきたもの―心理臨床の新しい地平を目指して』(青木ほか, 2006)という本がある。心理臨床家が沖縄のカミンチュウ(神事に関わる職能者)との出会いの中で学び体験したことをもとに「風土臨床」というアイデアを提唱し、それについて各々の心理臨床家が「風土臨床」ということを論考している。「風土臨床」の「風土」という捉え方はそれぞれの臨床家によって微妙に異なる(「風土」というものを臨床家がどう扱っていくかという

視点については逆の考え方もあるようである) ようだが、「風土臨床」とは自己を含む関係概念として「風土」という言葉を使い、その「風土」のなかで行う心理臨床と、心理臨床を成立させる「風土」の調えも同様に捉えていくような実践的な活動・研究のこと(青木, 2006)である。心理臨床における多重関係が生じやすいことに苦しみ、つまり少なくとも臨床地域の性質というものに手を焼いている私にとって、この文献に収められている先生方の論考は大いに刺激的で、大変感銘を受ける内容となった。私の苦しみについて、この「風土臨床」のアイデアを通して考えてみたい。

第2章第2節「からだと風土」を執筆した橋本朋広氏は、カミンチュウと共に参加した祭りの体験を通して「からだ」に注目するようになり、「からだ」について深めていくことで都市の生活と沖縄の生活の感覚の違いなどを通し「風土臨床」について述べている。哲学者の市川が主体によって生きられるからだを「身」とし、単なる客体としての「肉体」と区別したことになぞられ、「身」となるからだを「透明な身」と呼んだ。祭りで体験した自然との関わりのなかで形作られたからだは「透明な身」であり、集合的な歴史的な身、共同体によって生きられた歴史的な身であるとした。沖縄でその場に応じた「透明な身」を生きた橋本は自身の生活地域に戻るわけであるが、当然の事であるが、沖縄の「透明な身」を生きることができず、また生活地域の「透明な身」を生きることに抵抗することとなり、疲労が溜まったと記している。私が多重関係に苦しみことも同じようなことではないだろうか? 週末、その地域の一人の生活者として「透明な

身」を生きている。家族の中で振舞うべき態度で生きている。そのリズムに乗っている。しかし、CIとの突然の遭遇(例: スーパーで会う)で、急にCPとして「透明な身」を生きなくてはならなくなる瞬間が訪れる。でも、私は器用にそれができない。しんどさに変わる(家族の中での「私」もCPとしての「私」も紛れもなく「私」自身であり、それが表面的にも一致していればよいのであるが、なかなかそうもいかない)。橋本は「透明な身がどのようなものであれ、その場で構成される透明な身から身を引き離そうとすると、「わたし」や体は拠り所を喪失し、孤立し、閉塞してしまう」と述べる。私が感じているしんどさはには、まさしく、孤立感や閉塞感が含まれているように思う。

結論として、一見対立して捉えられる物事であっても、それらの特徴を見抜き、それらを繋げていくことが重要だとした。CPとしての私/生活者としての私を分裂したり、排除したりして、どちらかに閉じこもるのではなく、相互に働きかけることが大切であると理解する。

修士研究においてサロンの参加者が私を中に入れてくれたように、外者の私に働きかけてくれたように(このようなサロンの「風土」がまさしく活動維持要因であったのだ!)、私も習ってきた事柄だけを正しいものと捉えるのではなく、それ以外の事柄に関しても視野を広げ取り入れ、適切に扱えるようになる努力をしなくてはならない。

(また、橋本の考えに沿うと、心理臨床の基本的なルールが適応できなさそうな難しい環境(地域性)がある時に、心理臨床の基本的なルールだけを忠実に守っていくことは、CPとしての私が居心地のいい場所に閉じ

こもるという結果になる危険性もあるといえる。)

第3章第1節「風土臨床の態度と実践」を執筆した青木真理氏は、個人の生は自然と繋がり成立するものであり、自然を世話することで自然だけでなく人や共同体について理解していくことが可能となるとした。また、そのような人や共同体が相互循環している状態が健康や豊かさに繋がると述べ、自然(地域)と分裂するのではなく、寄り添いながら生きることの重要性を示した。つまり、心理臨床の文脈において考えると、その地域に関心を持ち、意識し、世話(ケア)することがCPにも大事だということだとも理解できる。また青木は、共同体の中で生活を営みながら自然を世話していくことなどと里山の成立に似通う点があると述べる。里山は「人の手が入ってこそ、人間以外の生き物の営みが維持される」空間であり、自然と人(人工的な要素)がちょうどいいバランスで保たれているという。私の心理臨床においても、臨床地域という自然的なところと、習ってきた心理臨床の基礎(自然のものではないもの、自然の外にあるものというイメージ)がちょうどいいバランスで居ることができる地点を探していくことが重要だと理解する。これまでは、習ってきた心理臨床の基礎に沿って臨床を行っていきたいという思いと、それを上手く活用していくことができない現実とを、それぞれ認めつつも、相互に繋げて捉えていくようなことはしていなかったと思う。繋げて捉えていく作業は容易なことではないと感じるが、繋げていくという発想自体が私の中になかったことが、私が強いしんどさを抱くことに影響していたのではないかと考える。青

山は、里山成立時の自然と人がちょうどいいバランスであるような時に創出される風土を“よい”臨床的風土とし、そこで行われる創造的・治療的行為を「風土臨床」とする。私が目指すべき心理臨床は、「風土臨床」であるのかと思う。

地域に生きる心理臨床家を目指して

心理臨床における多重関係について、なぜ私はこんなにも苦しんでいるのか。本論では風土臨床というアイデアを通して考えてき、言われてみれば当たり前だと思えるような結論となった感覚もあるが、私の中ではとてもすっきりした気持ちが生じている。それはおそらく、自然(地域)に寄り添うことの重要性や必要さを強く感じる事ができたからだと考える。これまでは、地域に寄り添っていくことは必要ではあると感じていたものの、そうすることは本当に心理臨床に有効に働くのであろうかとかいうことを考え、自信を持てずにいた。しかし、風土臨床というアイデアは、自然(地域)と人などその他様々なものを繋げていくことを重要とするものであった。臨床地域に住み、その中で心理臨床家として生きていくうえでの明確な方針を得られたように感じる。

箕浦康子(編). (1999). フィールドワークの技法と実際——マイクロ・エスノグラフィー入門—— ミネルヴァ書房

青木真理(編). (2006). 風土臨床——沖縄との関わりから見えて来たもの 心理臨床の新しい地平を目指して—— コスモス・ライブラリー



ものすごい、猛暑

毎日熱中症警戒アラートが鳴る日々。外遊びを仕事とする人間にとっては死活問題な気候です。先日はプレーパークスタッフとして出動。久しぶりに炎天下の中、1日中外にいました。子どもたちは猛暑でもお構いなし。水遊び、生き物探し、木登りと大忙しです。お昼ご飯前に少年が小川から小魚を獲ってきて、その小魚を手に握ったままウロウロ。

「お魚弱っていくんとちゃうん〜?!」と声をかけると「焼くねんこれ!」と堂々と宣言されました!「え!マジで?!」と思って観察を続けましたがマジでした。少年がウロウロしていたのはなんと焼き場となる鉄板探しのため。アスファルトの上に置いてみたり、マンホールの上に置いてみたり、朽ちた鉄の看板の上に置いてみたり…「嗚呼、かわいそうなお魚…」と思いつつも、『絶対この魚を焼いてみたい!』という強い思いが伝わる眼差しを見ると、止めることはできませんでした。

プレーパーク及び冒険遊び場のモットーは第1回投稿で取り扱った森のようちえんと似ています。森のようちえんとは違いプレイパークの参加年齢に上限は無し。子どもがすることに大人は手出し、口出しはしません。自由な遊びと失敗する権利を守るための合言葉は「ケガと弁当は自分持ち。」子どもたちのちょっと危ないことも、変なことも、汚いことも大人はとことん見守ります。

次第にだんだんと手の中で魚が弱っていくのを感じたのか、そこそこで踏ん切りをつけた少年。倉庫の前にある分厚めのマンホールを鉄板代わりにすることになりました。うんうん、大人がわざわざ「お魚がかわいそうだよ!」「命を大切に!」とヤイヤイ言わなくても、小さな手のひらの中で命がどうなっていくのを感じるこゝろって大切なかもしれない。小魚を握りながら歩く少年に「お魚が弱っていくよ。」「かわいそうだよ」と思い声をかけてしまうのは野暮だった…きっと彼はそんなことを分かった上で次の活動について考えていたはず…と大人の考えで言葉がでてしまった自分に少し反省です。

「せっかく焼くなら美味しく食べたい!」と感じた少年たちは大人の人差し指ほどの小魚をアルミホイルに包み、塩をかけそれなりに調理。少しでも早く火が通るように!と上から朽ちた鉄板を乗せてサンドイッチしました。「遊んでくるからたびちゃん、魚見といてー!」と水遊びに戻って行った少年たちでしたが、自分たちがやりたいと思って実行したこと、気になるのか分刻みに様子を見にくるんです(笑)肝心の魚はというと、だんだん目が白く、体が生暖かくなって、匂いはほぼ焼き魚…!『焼けるような日差し』という言葉が比喩ではなくなってきている…!と感じた出来事でした。(※マンホールクッキングでは生焼けだ!ということで安全のためにフライパンで再度焼いてから食べたとの

ことです。) 猛暑日には猛暑日にしかできない刺激的な遊びがあることを子どもたちに教えてもらった出来事でした。

その季節だから、できること

小学生が対象となると本人たちの工夫次第でそれなりに夏の遊びを楽しむことができるのですが、乳幼児を相手とするとそうはいかないのが現実。(小学生以上でも危険な暑さが故になんでも子どもの好きなように！とはいかないのですが…) 園に勤務していた4～5年前は今よりも3度くらいは気温が低かったはず。それでも、毎朝30分ほど前倒しで出勤してプールの準備。熱中症計が警戒レベルを示したら「今日は、お外に出られません…」と子どもに伝える心苦しさ…本当に暑さに振り回される日々でした。それでも当時は、なんとか曇りのタイミングを狙う、雨模様の日こそ外に出ちゃおう！と機転を効かせるなどして、夏の自然と触れ合う体験をなんとか提供しよう！と必死だったように思います。

しかし、大人が環境を構成して保育を計画する現場から離れて数年、自然がフィールドとなるとここまでの準備は必要ではなかったのかもしれない…と気づき始めました。6月後半、じめった気温の中でお散歩会がありました。「お散歩会」とは、主に0～2歳児の子どもとその保護者を対象とした戸外遊びの会。森のようちえんのプレ段階として位置づけられることもあります。0歳児さんの親子が参加する場合は、抱っこで参加の子も多いです。抱かれています子どもも、抱っこしているお母さんもじわっと、もわっと気持ちの悪い暑さからは逃げられません。この日でもできるだけ涼しく活動できるようにと森林の中で過ごしたり、小川で生き物探しをしたりしました。

「おはよ～」とみんなが集合してからは日当たりのいい広場で自然散策をしていました。子どもたちと遊ぶ中でこれはすごいな…と毎回感じることは好きなことへの集中力と絶妙なタイミングでの活動に切り替え。遊び

が始まった瞬間から少しでも日陰を求めてしまう大人とは違い、まずはお目当ての生き物を探すぞ！と日差しの下で遊ぶ子どもたち。大人が「そろそろ、お茶飲もうか。」「影のところおいでよ。」と促すことで休憩ができる子もいるのですが、見守りや観察を主とする自然保育活動に携わるようになってからは、意外とそんな声掛けなしでも子ども自らが調節しているのでは…と気づきました。子どもたちは遊びながらどのあたりの水が冷たいか、日陰はどこか感じ取ることができている様子。遊びはじめは「見つけたい！」という欲を軸にバラバラの場所で遊んでいた子どもたち。暑くなってくると上流や木陰に集まり、体が冷えてくると水のぬるい下流や日向に歩いていきます。乳児さんは発達段階的にも「平行遊び」ができるか、できないかというところ。お互いの遊びを見て移動している子もいるとは思いますが、どちらかという生き物としての勘を使い、「心地よく遊べる場」に集まっているように見えるのです。

小川や木陰など心地よく過ごすことのできる場所を有効活用しながら遊ぶ夏の戸外遊び。大人はスズメバチなど危険な虫がいないか、ヘビが出てくるリスクのある草むらがいないか事前にフィールドチェックをする以外に特に環境作りはしていません。子どもたちの感じる力を大切に「心地いい」と感じる場でたっぷり遊び、「ここは違う」と感じる場所からは移動する。この遊び方、一見子どもに振り回されているようにも感じますが、子どもが「いい！」とを感じる環境って自然と大人にも好感触。まっすぐ高く伸びた木々が作る木陰、しっとり、ひんやりとしたおがくずの地面、足を浸すだけで額の汗が引く山水の流れる小川…保護者の方も「気持ちいい…」

「外なのにしんどくない！」とほっとしている姿を見ると、大人が用意し提供する環境なんて、雄大な自然環境と比べたら足元にも及ばないことを痛感します。

「ここがいい。」「また来たい。」と心から感じる環境も森が繋いでくれる出会いのひとつなのかもしれません。



連載第2回では、前回とはモードを変えて、一篇の詩をお届けします。ここでは、「月」と「地球」のあいだに生まれる感覚をオートエスノグラフィⁱとして描きました。この詩は、意味を論理的に読み解く必要はありません。私が月を眺めたり、宇宙開発のリアリティを考えながら感じた感覚を、メタファー（比喩・隠喩）的に思考し表現したものです。心理的現実のなかで立ちあがる矛盾や揺らぎも、そのまま残したり、新たに矛盾を作り出したりしています。読みながら浮かんでくるイメージや身体感覚にゆっくりと触れていただければと思います。

第二の皮膚

眺められ、触れられ、わたしと世界の間にある
「無」との境界

それは皮膚、わたしの外側
それは風景、わたしの外側

風景は
傍らにある肌
そこに浸りつづける情動
破壊を拒む輪郭

月を眺める私は、「ここ」にはいない、
私の身体は、「そこ」にある
そこは からだ表面を超えた 第二の皮膚

バックムーンの光を待ちわびる私は
いつからか、ガラス張りの小さな「地球」にいた。

その時、私は、月にいて
地球の青い記憶のにじみに触れている

その時、私は、地球にいて
金属の影が、スイカに群がるアリのように
私たちの 月を包囲する夢を見る

ふと、見慣れた風景の崩壊を感じ、
まだ予兆の中にある月の肌理に郷愁を抱く。

未来の風景が、今の私を懐かしむ
未来の私が、今の風景を懐かしむ

地球の境界に
名づけることも
触れることもできない
皮膚があった

ⁱ オートエスノグラフィーについては、以下を参照：

[土元哲平・桂 悠介・サトウタツヤ編（2025）『オートエスノグラフィー・マッピング：
「私」からはじめる研究手法を知るための地図』新曜社](#)

編集後記

編集長(ダン シロウ)

毎年のことだがマガジン September 号は、八月下旬から九月上旬の編集になる。それは東日本大震災家族応援プロジェクトの実施時期と重なる。

その結果、編集作業を東北の旅先ホテルですることになる。今年も 15 年目の福島遠征最中に、白河市、福島市、大熊町の夜のホテル自室でキーボードを叩いていた。

東日本大震災は 2010 年にマガジン創刊直後の 2011 年 3 月だから、あれからずっと続けてきたのか……と、しみじみ振り返ったりする年齢になった。

長期化すると何であれ、マンネリだ、専有だ、世代交代を！等と一般論を吹聴する人に会う。ところがそういう人に限って、何も長続きさせることのできない人だったりするから苦笑いしかない。

長い時間をかけて定着しているものの中に、継続の秘訣は含まれている。それを共有できる次世代の人たちは皆、知らず知らず学んでいるものだ。全く同じものが続く必要などない。その時代に必然の形で、持続展開するモノの継続力を信じている。

編集員(チバ アキオ)

仕事で神奈川県海老名市へ。地域で活躍する対人援助職の方々向けにお話を。そのためにも地域のことを少しでも知りたいので、はやく現地に行って海老名市立郷土資料館「海老名市温故館」へ。ここではスタッフの方が丁寧に対応してくださった。資料館は国分寺の遺構の前にあった。国分寺と国分尼寺が全国に置かれたことは知っていたけど、よく考えると尼寺もセット。僧侶同士でコンパしましたかね？とか軽口をたたくと、そんな民話もあるんです、と教えてくれた。国分尼寺のある女性僧侶が地元の漁民の若い男性と恋に落ちる。あるとき、その漁民が困っていた

そうで、理由を聞くと、国分寺ができたことで川に影響が出て、魚が捕れなくなったと。それを聞いた尼僧は国分寺に火をつける。そのため尼僧は死刑に。しかしその場所からは水が湧き、尼の泣き水とされ、供養のために碑も立てられた。同業よりも、力強い、生活力のある男に惚れる、ありそうですね〜と話す。

こうした郷土資料館には縄文式土器や弥生式土器がよく展示されている。それも結構大きな土器で、よく考えるとなかなかの技。マガジン連載仲間の見野大介さんのところで陶芸教室に先日はお邪魔。その時に土器の話に。陶芸をしてみるとよくわかる。大作は素人には難しいということ(当たり前)。土器の話をすると窯の話をしてくれた。縄文時代はろくろも便利なものもないのに、大きなものを作る、そして焼くには相当な工夫がいる。なにより大きな窯がいる。大きな土器を焼くには土の中に穴を掘って焼いていたのではないかと。でも入り口が一つだと空気が送れず、温度が上がらず、土器の強度も上がらない。窯の温度を上げるには穴が二つ、できれば煙突が必要になると。後年、登り窯というのがあるのは知っているけど、そうした産地は斜面があり、粘土があり、技術があり、需要がある、そんな場所に焼き物があるよねと。技術は大陸に近く、鎖国中も開かれていた出島がある九州はやはり多くて…と、「焼き物の社会学」のようで楽しい。様々な条件が整ったからこそ、焼き物の名産地に。

同様にマガジン執筆をしている人たちのところにも多くの条件や資源がそろっている。これを読んでいてそろっている方々もぜひ執筆をどうぞ。

編集員(オオタニ タカシ)

今号から、原稿の提出先が従来の編集長宛だけであったところから、私たち編集員も送付先に加わりました。編集長と編集員 2 名の 3 か所に提出してもらう形ですが、メールの CC に加えて頂ければ OK です。これにより、編集作業も少し変わって、これまでは編集長が全ての原稿を受け取り、そこから私たちは編集担当の原稿だけをもらって、各々担当原稿の編集作業…という段取りだったのですが、今回から原稿の受け取り確認も行うようになりました。これが意外と大

変で、これまでの編集長のご苦労がうかがわれました。メール添付で届くものもあれば、クラウドの URL が貼られているもの、大容量ファイルの転送サービスのリンクが届くものなど、送信方法は執筆者によって様々で、届くタイミングも締切のひと月前から、締切日頃までと幅広く、手間はそれなりにあり、ミスが起こるリスクもあちこちに点在しています。

今回の編集作業で感じた一番の変化は、原稿を読む機会が増えたことです。これまでマガジン発刊日の前に、担当原稿については事前に目を通す機会があったのですが、今はすべての原稿が事前に手元に届きます。タイトルの確認のため、ひとまず全部のファイルを一度は開くのですが、そうすると最初の数行で引き込まれて、気づけば最後まで…ということもしばしばです。読者としてはますます捗り、編集者としてはますます時間を要するようになりました。ともかく、直に原稿を頂くとおひとりおひとりが締切を意識して、着実に原稿を送ってくださるからこそ、毎号の定期刊行ができているのだと改めて実感します。執筆者のみなさま、いつもありがとうございます！

対人援助学マガジン

通巻62号

第16巻 第2号

2025年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第63号は2025年12月15日

発刊の予定です。

原稿締切**2025年11月25日！**

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいとい

う方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。**執筆資格は学会員であること。**現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、**対人援助学会への入会**をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

「木陰の物語」第227話の冒頭は、こんなコマで始まる。これは有名な考え方だ。

私はこのフレーズに出会って、実践してみた結果に驚いたことがあった。それまで、こんな風な考え方はあるなあとは思っていた。

だが実際の来談者に、想像以上に刺さるところがあって、その人が実践してみたら、現実が驚異的な変化を作り出した。それを目にして、はじめて「ことば」の持つ実用的な力を実感した。

「分かっている」とはよく言うが、本当に分かっているとはどういうことかを、分かるようになった体験だった。

2025/9/15

対人援助学会第17回大会のお知らせ

★ 2025 年 10 月は、大阪でリアルに対人援助学に浸ってみませんか！？

いつも対人援助学マガジンをお読み下さり、ありがとうございます。この記事は、対人援助学会 17 回大会についてのお知らせです。Web マガジンの読者の皆様、今回は思い切って大阪で対人援助学を巡って集まった仲間と、2 日間みっちり対人援助学に浸ってみませんか。

期日は **2025 年 10 月 11 日（土）・12 日（日）**、場所は**大阪キリスト教短期大学**です。

記念講演に理事会企画、公募ワークショップ、ポスター発表などの学会定番メニューに加え、マガジン編集長の団先生の「木陰の物語」の常設展示やマガジンの執筆者＆読者交流会なども計画しています。

2025 年秋の大阪で、対人援助学を巡ってまた新たな出会いと展開が生まれたらとても嬉しいです。皆さんのご参加、心よりお待ちしております！

（大会事務局）

◆プログラムは[こちら](#)から！

対人援助学会 第17回年次大会
対人援助する・されるを超えて
～地に足付けて、皆と生きる～

2025年10月11日～12日
会 場：大阪キリスト教短期大学（大阪市阿倍野区丸山通1丁目3-61）

1日目/10月11日（土）

10：00～ オプションツアー
「かわりゆく街のかわらないもの、あられるもの、かすかな思ひづかいを、歩く」
案内：上田 真奈代さん

12：00～ 受付
ポスター掲示（会期中常設）
団士郎 木陰の物語 漫画展（会期中常設）

13：00～ 開会式
13：15～ 理事会企画
「可視化する・されるを超えた
LGBTQ+当事者の支援を考える
～「私たちは、ここにいる」の声を集めて～」
登壇者：西田 彩さん / 梨谷 美帆さん
指定討論者：中村正さん
コーディネーター：荒木 晃子さん

14：55～ ポスターセッション I
15：50～ 企画ワークショップ I
17：20～ 対人援助学マガジン
執筆者＆読者 情報交換会！

2日目/10月12日（日）

9：30～ 記念講演
「援助？いえ、好奇心です」
～釜ヶ崎のこころ／釜ヶ崎芸術大学の 日々人生劇場～
お話し：上田 真奈代さん、聞き手：山口 洋典さん
司 会：村本 邦子さん

11：10～ ポスターセッション II
11：55～ 昼休憩
12：55～ 企画ワークショップ II
14：35～ 全体会

参加費
対人援助学会会員：2,000円
一般：3,000円
学生・院生（※社会人院生をのぞく）：500円
※社会人院生とは、正社員勤務のかたわら大学院に在籍する人を指します。学会員か一般区分での参加をお願いします。
※オプションツアー参加費：2,000円
（当日現地にて現金払い）

今、様々な地域でいろんな背景を持つ人が「この地で、みんなと一緒に、幸せに生きていくために」と、積極的に活動をする者が多く見られます。この人々の力について考えることは、対人援助の専門職とされる人々に、今一度、「地に足付けて、皆と生きる」というあり方、生き方そのものを突き詰めるものになるかと考えます。

今回の会場付近は、あらゆる町が都市化により人々の組織を顕微鏡化させていく中で、強く固く閉がり合う文化を築ってきた歴史があり、そこに新たな活動主体が誕生するという、不思議に充ちあふれる場所。この地で、様々な背景の人々の力に今一度着目する機会をもちませんか。

記念講演

「援助？いえ、好奇心です」
～釜ヶ崎のこころ／釜ヶ崎芸術大学の 日々人生劇場～
お話し：上田 真奈代さん
（NPO法人こえとこばとここのののの（こころ）代表理事 / 詩人 / 作家）
聞き手：山口 洋典さん（対人援助学会会員 / 立命館大学公共教育推進機構教授 / 社会心理学）
司 会：村本 邦子さん（対人援助学会理事 / 立命館大学教員）

「援助する・される」という関係性を豊かに築き、「好奇心」を原動力に人と出会い直す実践とは、「援助」ではなく、「共に在ること」のリアルに迫ります。

理事会企画

「可視化する・されるを超えた LGBTQ+当事者の支援を考える
～「私たちは、ここにいる」の声を集めて～」
登壇者：西田 彩さん（臨床家 大学講師 / GI学会 顧問）
梨谷 美帆さん（臨床心理士 / 公認心理士 / NPO法人QWRIC）
指定討論者：中村正さん（対人援助学会理事 / 立命館大学）
コーディネーター：荒木 晃子さん（立命館大学人間科学研究所 / 内田クリニック）

援助してほしいから抱えたのではなく、仲間が互いに支え合うことから始まった、LGBTQ+当事者による支援、その最前線のお話を伺うことで「援助」という言葉の意味を、改めて考えます。

実行委員会企画

「木陰の物語」団士郎 漫画展
家族を待つ、家族を想う漫画展。読んでいて、様々な思いが胸にあふれます。今回は掛け軸作品を展示します。

「対人援助学マガジン」執筆者＆読者 情報交換会！
本学会の特徴の一つである「対人援助学マガジン」大会1日目の終わりに、お茶を飲みながら、普段交流できない執筆者と読者とお話ししましょう。どなたもどうぞご参加ください。

オプションツアー

「かわりゆく街のかわらないもの、あられるもの、かすかな思ひづかいを、歩く」
2日目の午前中に記念講演をされる上田真奈代さんによる、こころと地のあるきツアー。人々の生活がくつきり上げてきた、この地の歴史と今のエネルギーを感じるツアーです。
日時：10月11日午前10時 集合場所：こころ ココロハウスとカフェと庭 釜ヶ崎芸術大学
※集合時、参加費2,000円を現金でご利用ください
※このツアーの申し込みは、大会申し込みとは別の申し込みFormとなっております。お気を付けください。

ポスター・WS募集

ポスター発表（20程度）と企画ワークショップ（2～4）を募集します。
詳細は対人援助学会ホームページ「大会のご案内」をご参照ください。
ワークショップ応募締切日：2025年8月20日
ポスター応募締切日：2025年9月10日

申込みFormを入力の上、参加費を下記口座に入金ください。締切日は9月30日です。
（ゆうちょ銀行 〇九九（ゼロキューキュー）店
当座：0311452 名義：対人援助学会）
※お振込の際、必ず参加申込フォームに書かれた氏名をお願いいたします。
対人援助学会HP 第17回年次大会HP 申込みForm ツアー申込みForm

お申し込みお問い合わせ